

佐久市

KITAHATA
北畑遺跡群

NISOKUMOCHI
仁束餅遺跡

KITaura
北裏遺跡群

NISHIHIGASHIYAMA
西東山遺跡

HIGASHIYAMA
東山遺跡

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6

— 佐久市内6 —

2020. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



北裏遺跡群 方形周溝墓 SM15



北裏遺跡群 木棺墓 SM18 遺物出土状況



北裏遺跡群 竪穴建物跡 SBI7・25（中央奥）出土弥生時代後期土器



北裏遺跡群 本棺墓 SM18 出土弥生時代後期土器

例 言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する下記5遺跡の発掘調査報告書である。
北畑遺跡群 長野県佐久市大字桜井字西北谷585-1ほか
仁東餅遺跡 長野県佐久市伴野字大仁田1311ほか
北裏遺跡群 長野県佐久市大字伴野字新子1014ほか
西東山遺跡 長野県佐久市大字伴野字西東山574ほか
東山遺跡 長野県佐久市大字伴野120ほか
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』25～35ほかで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅱ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関に業務委託した。（敬称略）
放射性炭素年代測定・珪藻・花粉・植物珪酸体・灰像分析
：バリノ・サーヴェイ㈱（平成15年度：北畑遺跡群）
放射性炭素年代測定
：㈱加速器分析研究所（平成22年度：北裏遺跡群）
リン・カルシウム分析
：㈱古環境研究所（平成22年度：北裏遺跡群）
火山灰分析・種実同定・樹種同定：バリノ・サーヴェイ㈱（平成22年度：北裏遺跡群）
遺物実測・トレース
：㈱アルケアリサーチ（平成30年度：北裏遺跡群）
遺物写真撮影
：信毎書籍印刷㈱（令和元年度：北畑遺跡群、北裏遺跡群、西東山遺跡、東山遺跡）
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力いただいた。お名前を記して感謝の意を表する。（敬称略）
石川日出志、小山岳夫、櫻井秀雄、茂原信生、寺尾真純、富沢一明、襦宜田佳男、羽毛田卓也、橋本裕行、本郷一美、宮本長二郎、佐久市教育委員会、佐久考古学会、長野県立歴史館
長野県遺跡調査指導委員会
（戸沢光則・会田 進・小野 昭・桐原 健・工業善通・笹沢 浩・高橋龍三郎・丸山敏一郎）
長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会
（会田 進・市澤英利・小野 昭・笹澤 浩・高橋龍三郎）

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第1節4に記載した。
- 9 本書全体の編集は上田真が行い、綿田弘実・岡村秀雄が校閲し、平林彰が総括した。
執筆分担は下記のとおりである。
平林 彰：第1章
岡村秀雄：第2章、第9章第1節・第2節
上田 真：第3章、第4章（第2節4（2）を除く）、第6章（第3節1・2・4、第4節を除く）、
第7章（第2節5（2）、第3節を除く）
賛田 明：第4章第2節4（2）、第5章、第6章第3節4、第7章第2節5（2）、第8章
綿田弘実：第6章第3節1・2・第4節、第7章第3節、第10章
なお、第9章第3節は、茂原信生氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏より玉稿を賜った。
- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を取録した。
本文PDF（写真はカラーデータ）、自然科学分析報告書、遺物観察表、その他。

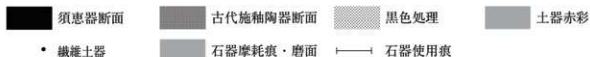
凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、主に材質に基づく分類による遺物種ごと、図版ごとに付番してある。遺物番号は、本報告の本文・図表・写真に共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図
堅穴建物跡、掘立柱建物跡 1:80 土坑、被熱部 1:40、1:60
溝跡 1:40、1:80 遺構内部施設・遺物微細 1:40
 - (2) 遺物実測図
土器・土器拓影・陶磁器 1:3、1:4、1:6 土製品 2:3、1:4
石鏃等小形石器・装身具 2:3 石斧・磨石・敲石・凹石・砥石など 1:3
石皿 1:4 金属製品 2:3、1:2
 - (3) 遺物写真
原則として遺物実測図とおおよそ共通であるが、任意縮尺にしているものがある。
- 4 遺物の器種名については細分せず、過去の埋文センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。
- 5 遺物観察表の法量は、特に記載のない場合、() が復元値、括弧なしが完存値を示している。
- 6 基本層序および遺構埋土の色調は「新版 標準土色帖2007年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）」による。
- 7 実測図中のスクリーントーン等の凡例は以下のとおりである。これら以外の場合は図中に例示した。

(1) 遺構図



(2) 遺物図



目 次

口 絵
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
挿表目次
写真目次

第1章 発掘調査の経過	1～8
第1節 調査に至る経過	1
1 事業計画の概要	1
2 分布・試掘調査と保護措置の調整	1
3 行政手続の経過	5
4 発掘作業と整理等作業の体制	11
第2節 発掘調査の経過	13
1 発掘作業	13
2 整理等作業	15
3 普及啓発活動	15
4 作業日誌抄録	16
第2章 遺跡の位置と環境	19～25
第1節 地理的環境	19
第2節 歴史的環境	19
第3章 発掘調査の方法	26～30
第1節 発掘作業の経過	26
第2節 整理等作業の方法	29
第4章 北畑遺跡群	31～63
第1節 遺跡の概観と調査の概要	31
1 遺跡の概観	31
2 調査の経過	31
3 基本土層	31
第2節 遺構と遺物	37
1 水田跡	37
2 溝・流路跡	39
3 土 坑	51

4 遺物	53
第3節 小 結	63
第5章 仁東餅遺跡	64~66
第1節 遺跡の概観と調査の概要	64
1 遺跡の概観	64
2 調査の概要と経過	64
第2節 小 結	64
第6章 北裏遺跡群	67~184
第1節 遺跡の概観と調査の概要	67
1 遺跡の概観	67
2 調査の経過	67
3 基本土層	73
第2節 遺 構	74
1 弥生・古墳時代	74
2 古 代	112
3 中世ほか	123
第3節 遺 物	134
1 縄文時代の土器・土製品	134
2 弥生・古墳時代の土器	141
3 古代の土器・土製品・金属製品	159
4 石器・石製品	165
5 玉 類	180
第4節 小 結	181
第7章 西東山遺跡	185~205
第1節 遺跡の概観と調査の概要	185
1 遺跡の概観	185
2 調査の経過	185
3 基本土層	185
第2節 遺構と遺物	190
1 竪穴建物跡	190
2 掘立柱建物跡	196
3 焼土跡	198
4 溝 跡	199
5 遺 物	199
第3節 小 結	205
第8章 東山遺跡	206~223

第1節	遺跡の概観と調査の概要	206
1	遺跡の概観	206
2	調査の概要と経過	206
3	基本層序	209
第2節	遺構	209
1	溝跡	209
2	土坑	211
第3節	遺物	217
1	土器・陶磁器・製鉄関連遺物	217
2	石器	218
第4節	小結	223
第9章	自然科学分析	224~233
第1節	北畑遺跡群の自然科学分析	224
1	放射性炭素年代測定	224
2	珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・灰像分析	224
3	樹種同定	225
第2節	北裏遺跡群の自然科学分析	225
1	放射性炭素年代測定	225
2	火山灰分析	226
3	種実同定	226
4	樹種同定	226
5	リン・カルシウム分析	226
第3節	北裏遺跡群出土の人骨と動物骨	227
1	北裏遺跡群出土の焼人骨	227
2	北裏遺跡群出土の動物骨	230
第10章	総括	234

写真図版
抄録

挿図目次

第1図	中部横断自動車道と調査対象遺跡	第39図	3区遺構全体図
第2図	北畑遺跡群の試掘トレンチと遺跡群の範囲	第40図	土坑 位置図1
第3図	中部横断自動車道と本書所収遺跡	第41図	土坑 位置図2
第4図	周辺遺跡分布図1	第42図	5区遺構全体図
第5図	周辺遺跡分布図2	第43図	SB02 遺構図
第6図	周辺遺跡分布図3	第44図	SB06 遺構図
第7図	調査グリッドの設定と呼称	第45図	SB07 遺構図
第8図	遺跡範囲・調査位置図	第46図	SB09 遺構図
第9図	トレンチ・調査区配置図	第47図	SB11 遺構図
第10図	遺構全体図	第48図	SB16 遺構図
第11図	土層柱状図1	第49図	SB17 遺構図
第12図	土層柱状図2	第50図	SB20 遺構図
第13図	SL01 水田第1面	第51図	SB22 遺構図
第14図	SL02 水田第2面	第52図	SB23 遺構図
第15図	SD01・02 遺構図	第53図	SB24 遺構図
第16図	SD03・04 遺構図1	第54図	SB25 遺構図
第17図	SD03・04 遺構図2	第55図	SB26 遺構図
第18図	SD03・04 遺構図3	第56図	SB34・35 遺構図
第19図	SD03・04 遺構図4	第57図	SB36 遺構図
第20図	SD05 遺構図	第58図	SB37 遺構図
第21図	SD06 遺構図	第59図	SB38 遺構図
第22図	NR01 遺構図1	第60図	SB39 遺構図
第23図	NR01 遺構図2	第61図	SB41 遺構図
第24図	NR02 遺構図1	第62図	SB42 遺構図
第25図	NR02 遺構図2	第63図	SB47 遺構図
第26図	SK01～12 遺構図	第64図	SB49 遺構図
第27図	土器(1)、土製品	第65図	ST01 遺構図
第28図	土器(2)	第66図	SM01 遺構図
第29図	土器(3)	第67図	SM02 遺構図
第30図	石器(1)	第68図	SM03 遺構図
第31図	石器(2)	第69図	SM04 遺構図
第32図	石器(3)	第70図	SM06 遺構図
第33図	石器(4)	第71図	SM07 遺構図
第34図	石器(5)、石製品	第72図	SM08 遺構図
第35図	遺跡範囲・調査位置・土層柱状図	第73図	SM09 遺構図
第36図	トレンチ配置図	第74図	SM10 遺構図
第37図	遺跡範囲・調査区位置図	第75図	SM11 遺構図
第38図	トレンチ・調査区配置図、土層柱状図	第76図	SM12 遺構図

- 第77図 SM13 遺構図
- 第78図 SM14 遺構図
- 第79図 SM15 遺構図
- 第80図 SM18 遺構図
- 第81図 SB04 遺構図
- 第82図 SB05 遺構図
- 第83図 SB08 遺構図
- 第84図 SB12 遺構図
- 第85図 SB19 遺構図
- 第86図 SB21 遺構図
- 第87図 SB29 遺構図
- 第88図 SB30 遺構図
- 第89図 SB31 遺構図
- 第90図 SB32 遺構図
- 第91図 SB33 遺構図
- 第92図 SB40 遺構図
- 第93図 SB44 遺構図
- 第94図 SB46 遺構図
- 第95図 SB48 遺構図
- 第96図 SB50 遺構図
- 第97図 SB51 遺構図
- 第98図 SM16・ST02 遺構図
- 第99図 SM17・SD18 遺構図
- 第100図 SM05 遺構図
- 第101図 SH02・03 遺構図
- 第102図 SH04 遺構図
- 第103図 SH05 遺構図
- 第104図 SK163・323 遺構図
- 第105図 縄文土器 (1)
- 第106図 縄文土器 (2)
- 第107図 縄文土器 (3)
- 第108図 縄文土器 (4)
- 第109図 弥生・古墳時代土器 (1)
- 第110図 弥生・古墳時代土器 (2)
- 第111図 弥生・古墳時代土器 (3)
- 第112図 弥生・古墳時代土器 (4)
- 第113図 弥生・古墳時代土器 (5)
- 第114図 弥生・古墳時代土器 (6)
- 第115図 弥生・古墳時代土器 (7)
- 第116図 弥生・古墳時代土器 (8)
- 第117図 弥生・古墳時代土器 (9)
- 第118図 弥生・古墳時代土器 (10)
- 第119図 弥生・古墳時代土器 (11)
- 第120図 弥生・古墳時代土器 (12)
- 第121図 古代土器 (1)
- 第122図 古代土器 (2)
- 第123図 古代土器 (3)・土製品・金属製品
- 第124図 石器 (1)
- 第125図 石器 (2)
- 第126図 石器 (3)
- 第127図 石器 (4)
- 第128図 石器 (5)
- 第129図 石器 (6)
- 第130図 石器 (7)
- 第131図 石器 (8)
- 第132図 石器 (9)
- 第133図 石器 (10)
- 第134図 玉類
- 第135図 遺跡範囲・調査位置図
- 第136図 トレンチ・調査区配置図
- 第137図 遺構全体図
- 第138図 土層柱状図
- 第139図 SB201 遺構図
- 第140図 SB202 遺構図
- 第141図 SB203 遺構図
- 第142図 SB204 遺構図
- 第143図 SB205 遺構図
- 第144図 SB206 遺構図
- 第145図 SB207 遺構図
- 第146図 SB208 遺構図
- 第147図 SB209 遺構図
- 第148図 ST201 遺構図
- 第149図 ST202 遺構図
- 第150図 ST203 遺構図
- 第151図 SF202~205 遺構図
- 第152図 SD02 遺構図
- 第153図 土器・土製品
- 第154図 石器 (1)
- 第155図 石器 (2)・金属製品
- 第156図 遺跡範囲・調査位置図

第157図	トレンチ・調査区配置図	第165図	石器（1）
第158図	土層柱状図	第166図	石器（2）
第159図	遺構分布全体図	第167図	石器（3）
第160図	SD01 遺構図	第168図	石器（4）
第161図	SD03・04・05 遺構図	第169図	北裏遺跡群出土人骨
第162図	SK02・21・27・28・33・34・49 遺構図	第170図	歯冠高の計測法
第163図	SK37・191・199・242 遺構図	第171図	北裏遺跡群出土動物骨
第164図	土器・土製品		

挿表目次

第1表	土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係等）	第5表	受委託契約の経過
第2表	調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）	第6表	周辺遺跡一覧
第3表	埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）	第7表	玉類計測表
第4表	協定の経過	第8表	北裏遺跡群出土の人骨一覧
		第9表	北裏遺跡群出土の動物骨一覧
		第10表	北裏遺跡群SM05出土の馬歯計測値

写真目次

PL 1	北畑遺跡群	PL15	北裏遺跡群
PL 2	北畑遺跡群	PL16	北裏遺跡群
PL 3	北畑遺跡群	PL17	北裏遺跡群
PL 4	北畑遺跡群	PL18	北裏遺跡群
PL 5	仁東餅遺跡	PL19	北裏遺跡群
PL 6	北裏遺跡群	PL20	北裏遺跡群
PL 7	北裏遺跡群	PL21	北裏遺跡群
PL 8	北裏遺跡群	PL22	北裏遺跡群
PL 9	北裏遺跡群	PL23	北裏遺跡群
PL10	北裏遺跡群	PL24	西東山遺跡
PL11	北裏遺跡群	PL25	西東山遺跡
PL12	北裏遺跡群	PL26	西東山遺跡
PL13	北裏遺跡群	PL27	東山遺跡
PL14	北裏遺跡群	PL28	東山遺跡

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

中部横断自動車道（以下「中部横断道」という。）は、静岡県清水市の新東名道新清水ジャンクション（以下「JCT」という。）を起点に、山梨県甲斐市の双葉JCTと北杜市の長坂JCTの間で中央自動車道に合流し、長坂JCTより分岐北上したのち小諸市で上信越道佐久小諸JCTに連絡する、総延長約132kmの高規格幹線道路である。

この道路は、太平洋側と日本海側を結ぶ広域的な高速ネットワークを形成するとともに、佐久地域においては国道141号を補完して地域間交流や地域開発を促進させ、救急医療体制への支援や物流の効率化を図る目的で、1991（平成3）年に佐久小諸JCTと八千穂高原インターチェンジ（以下「IC」という。）間を基本計画路線として決定した。1998年4月、日本道路公団に施工命令が下され、佐久小諸JCTと佐久南IC間の工事を進めてきたが、2003年12月には、中部横断道佐久南ICと八千穂高原ICの延長14.6km区間について国土交通省の新直轄方式による事業化が決定し、佐久白田トンネルの掘削を皮切りに本体工事が本格化した。その後、本線脇13か所に調整池の設置、佐久白田ICと佐久穂ICの設置等が追加され、2018年4月28日に供用を開始した。

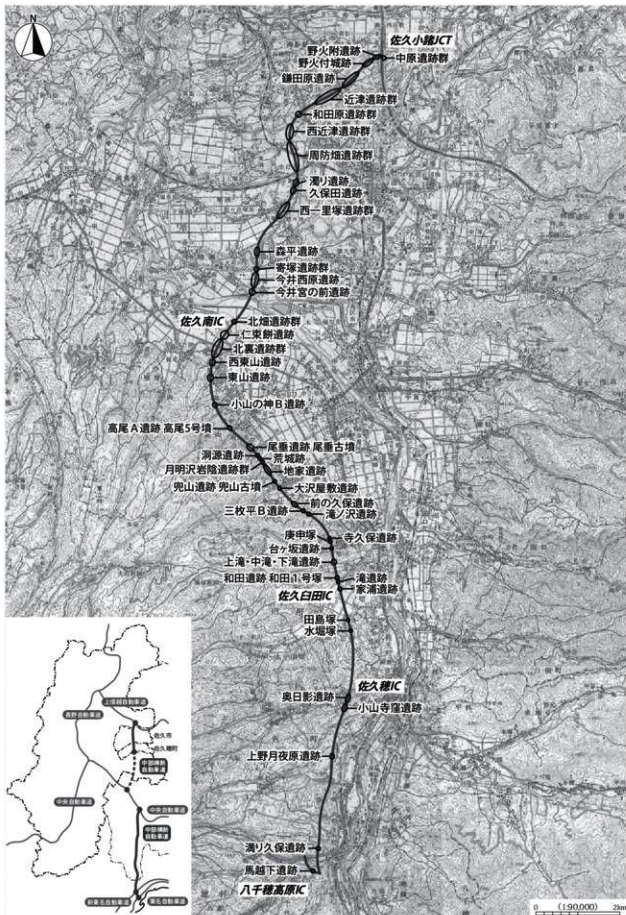
2 分布・試掘調査と保護措置の調整

1991（平成3）年の基本計画路線決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、当該区間の南北予想ルートの幅1kmに所在する埋蔵文化財包蔵地の存否等を確認するため、1994年度に地元教育委員会の協力を得て踏査を実施した（県教委1997）。その後、事業計画が進行し、佐久南ICと八千穂高原IC間のルートがほぼ確定したことを受けて、1998～2000年度に分布調査を実施し、保護措置を講ずべき埋蔵文化財包蔵地や試掘調査の対象とすべき箇所を選定を行った（県教委2000・2003）。佐久南IC以南については、2004年度に改めて対象地の現況調査を実施するとともに、2012年度にかけて順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容の確認を行った（県教委2007・2010・2013）。

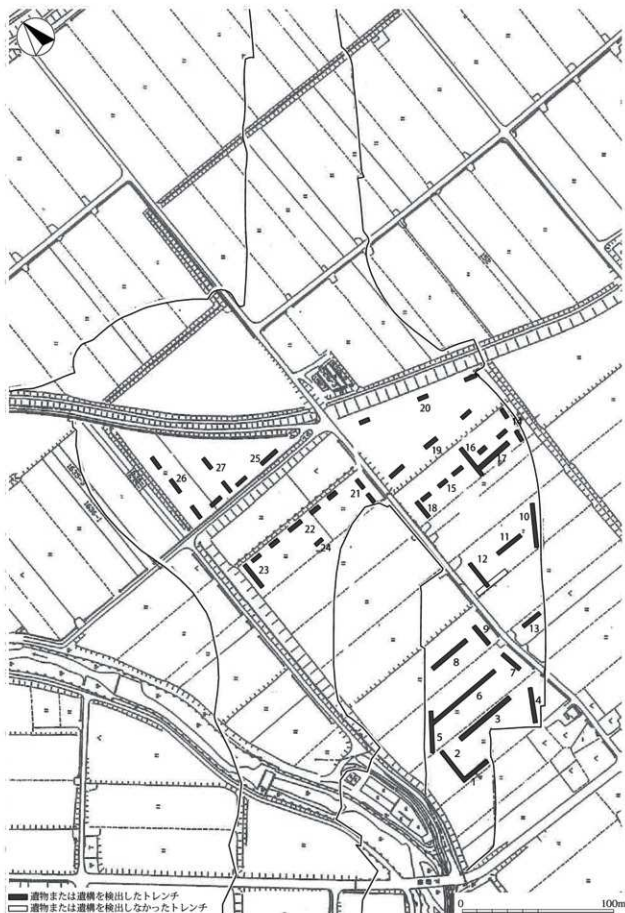
本報告書にかかわる佐久市桜井・伴野地区の本線ルート上は、1998年度と2000年度の分布調査で佐久南IC周辺の仁東餅道跡や北畑道跡群と、北裏道跡群、西東山道跡、東山道跡の5か所および道跡の隣接地を確認し、北畑道跡群に隣接する佐久南IC部分、国道142号と北裏道跡群の間の低地部および東山道跡と小宮山地区小山の神B道跡の間は、試掘調査による道跡の存否確認が必要となった。

2003年3月県教委は、第2図のとおり北畑道跡群に隣接する佐久南IC部分を対象に27本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、居住域として登録されてきた北畑道跡群の範囲が、生産域を伴って北側と東側に広がることが判明した（県教委2003）。

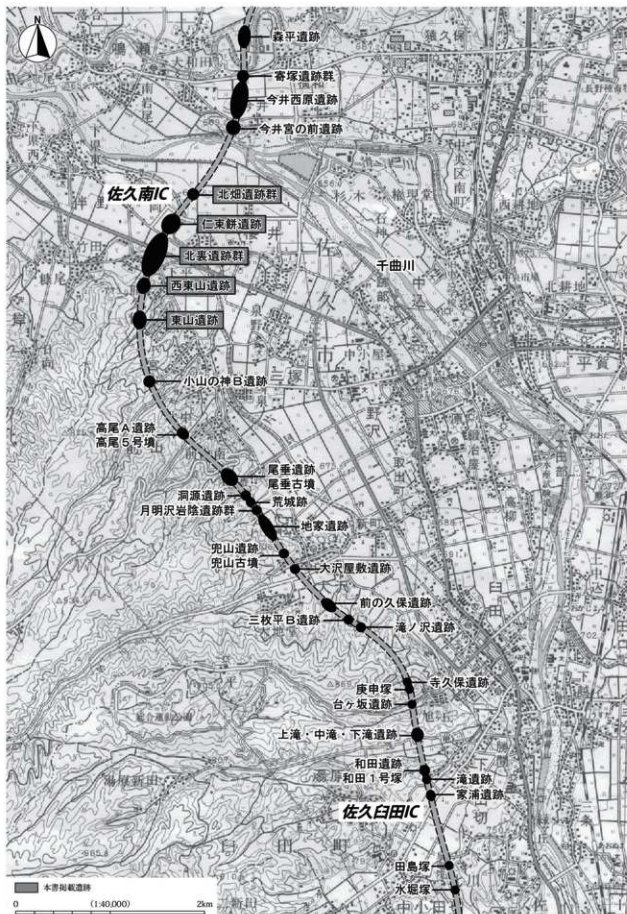
これを受けて県教委は、当時、中部横断道建設の事業主体であった日本道路公団佐久工事事務所および佐久市教育委員会（以下「市教委」という。）と協議し、北畑道跡群を対象に記録保存調査を実施すること、発掘調査事業は長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が行うこととした。



第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡



第2図 北畑遺跡群の試掘トレンチと遺跡群の範囲



第3図 中部横断自動車道と本書所収遺跡

続いて、2006年度に行った対象地の現況調査では、台地上の北裏遺跡群に北接する低地部も、北畑遺跡群同様、居住域に伴う生産域が広がる可能性が高いことから、北裏遺跡群の範囲を北へ拡大する必要が生じた（県教委2007）。一方、東山遺跡の南隣接地や、佐久市小宮山地区の小山の神B遺跡との間については、県教委が2010年度に試掘調査を実施し、新たな埋蔵文化財は存在しないことを確認している。

以上の状況を受けて、県教委は、新直轄方式により2004年度から新たな事業主体となった国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）や市教委と調整会議を重ね、本報告書に掲載した仁東併遺跡、北裏遺跡群、西東山遺跡および東山遺跡について、本線の工事等によって破壊される恐れがあるため、本発掘調査による記録保存を図ることを決定した。（第3図）

なお、発掘調査事業の実施中、2012年度には東山遺跡および西東山遺跡の付帯工事箇所について、2013年度には北裏遺跡群の付帯工事箇所について、それぞれ、県教委、市教委、長野国道および埋文センターの四者で保護協議が行われ、本発掘調査の結果や工事内容から判断して、いずれも埋文センターが工事立会を行うことで合意している。

3 行政手続の経過

本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については第1表から第3表のとおりである。

中部横断道の建設に伴う発掘調査は、当初「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（1967年9月30日付け）により、日本道路公団が県教委に委託し、県教委が長野県文化振興事業団に再委託してきた。2003年度に実施した北畑遺跡群の発掘作業は、この方式にしたがって、長野県文化振興事業団は県教委と契約し、発掘調査事業を実施した。

第1-1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係等）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
1999.12.13	東建用管第462号	日本道路公団 東京建設局	埋蔵文化財発掘の通知 について（協議）（高速自動車国道間越自動車道上越線〔佐久南インターチェンジ（仮称）〕）	文化庁	「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」第1項(3)の規定による協議
2000.2.7	委保第45の2号	文化庁	高速自動車国道間越自動車道上越線〔佐久南インターチェンジ（仮称）〕建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて	日本道路公団 東京建設局	北畑遺跡群ほか12遺跡の発掘調査を実施するように回答
2006.4.5	18長国調第14号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	北畑遺跡群・北裏遺跡群・西東山遺跡・東山遺跡での土木工事を通知
2006.6.8	18教文第18-33号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012.6.15	24国調整長国工第47号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	西東山遺跡での付帯工事を通知
2012.6.28	24教文第8-65号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の工事立会を実施するよう通知
2012.6.15	24国調整長国工第48号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	東山遺跡での付帯工事を通知

第1-2表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係等）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2012. 6. 28	24教文第8-66号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の工事立会を実施するよう通知
2013. 7. 18	25国岡整長国工第68号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	北裏遺跡群での付帯工事を通知
2013. 8. 1	24教文第8-107号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の工事立会を実施するよう通知
2014. 3. 6	25国岡整長国工第199号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	北裏遺跡群での付帯工事を通知
2014. 3. 17	25教文第8-376号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の工事立会を実施するよう通知

第2-1表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2003. 4. 1	15長埋第11-3号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北畑遺跡群
2003. 4. 14	15教文第8-3号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2004. 2. 2	15長埋第 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北畑遺跡群 4,340㎡
2007. 3. 15	18長埋第1-24号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北畑遺跡群
2007. 3. 26	18教文第4-35号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2007. 6. 8	19長埋第11-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北畑遺跡群 5,030㎡
2007. 3. 15	18長埋第1-25号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	仁東餅遺跡
2007. 3. 26	18教文第4-36号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2007. 7. 13	19長埋第11-6号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	仁東餅遺跡 21,530㎡
2007. 3. 15	18長埋第1-26号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北裏遺跡群
2007. 3. 26	18教文第4-37号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2007. 9. 25	19長埋第11-9号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北裏遺跡群 9,840㎡
2008. 8. 22	20長埋第1-6号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	東山遺跡
2008. 8. 27	20教文第6-8号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示

第2-2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008.11.20	20長埋第4-11号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	東山遺跡 7,000㎡
2009.3.2	20長埋第1-13号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北裏遺跡群
2009.3.5	20教文第6-18号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.5.11	21長埋第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北裏遺跡群 300㎡
2009.3.2	20長埋第1-14号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	東山遺跡
2009.3.5	20教文第6-19号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.10.5	21長埋第4-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	東山遺跡 12,730㎡
2010.2.1	21長埋第1-8号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北裏遺跡群
2010.2.16	21教文第6-16号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.12.27	22長埋第4-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北裏遺跡群 8,245㎡
2010.6.28	22長埋第1-3号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	西東山遺跡
2010.7.20	22教文第6-4号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.1.4	22長埋第4-8号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	西東山遺跡 7,040㎡
2011.4.12	23長埋第3-1号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北裏遺跡群
2011.4.26	22教文第6-2号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.2.26	23長埋第6-5号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北裏遺跡群 2,870㎡
2012.9.21	24長埋第1-7号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	東山遺跡
2012.10.19	24教文第6-13号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.11.6	24長埋第4-6号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	東山遺跡 2,440㎡
2013.3.1	24長埋第1-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	東山遺跡
2013.3.26	24教文第6-19号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示

第2-3表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2013. 8. 26	25長埋第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	東山遺跡 640㎡
2015. 5. 19	27長埋第1-2号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	北裏遺跡群
2015. 6. 2	27教文第6-2号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015. 7. 22	27長埋第4-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	北裏遺跡群 35㎡

第3-1表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2004. 2. 2	15長埋第 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	北畑遺跡群 土器・石器18箱
2004. 2. 18	15教文第10-130号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北畑遺跡群
2007. 6. 8	19長埋第9-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	北畑遺跡群 土器1箱
2007. 6. 19	19教文第6-33号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北畑遺跡群
2007. 7. 13	19長埋第9-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	仁東餅遺跡 土器1箱
2007. 7. 31	19教文第6-47号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	仁東餅遺跡
2007. 9. 25	19長埋第9-9号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	北裏遺跡群 土器・石器5箱
2007. 10. 18	19教文第6-70号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北裏遺跡群
2008. 11. 20	20長埋第2-8号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	東山遺跡 土器・陶磁器・石器3箱
2008. 12. 2	20教文第26-98号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	東山遺跡
2009. 5. 11	21長埋第2-1号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	北裏遺跡群 土器・石器3箱
2009. 5. 28	21教文第20-18号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北裏遺跡群
2009. 10. 5	21長埋第2-7号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	東山遺跡 土器・石器30箱他
2009. 10. 19	21教文第20-81号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	東山遺跡
2010. 12. 27	22長埋第2-9号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	北裏遺跡群 土器・石器207箱他
2011. 1. 14	22教文第10-129号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北裏遺跡群
2010. 12. 24	22長埋第2-8号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	西東山遺跡 土器・石器33箱
2011. 1. 14	22教文第20-128号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	西東山遺跡

第3-2表 埋藏物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2011. 8.29	23長埋第4-5号	埋文センター	埋藏物発見届	県教委	北裏遺跡群 土器・石器1箱他
2011. 9.21	23教文第20-73号	県教委	埋藏物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北裏遺跡群
2012.11. 6	24長埋第2-6号	埋文センター	埋藏物発見届	県教委	東山遺跡 土器1袋
2012.11.19	24教文第20-74号	県教委	埋藏物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	東山遺跡
2013. 4.30	25長埋第2-1号	埋文センター	埋藏物発見届	県教委	東山遺跡 土器・石器1箱
2013. 5.14	25教文第20-13号	県教委	埋藏物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	東山遺跡
2015. 7.22	27長埋第2-2号	埋文センター	埋藏物発見届	県教委	北裏遺跡群 土器1袋
2015. 8.13	27教文第20-41号	県教委	埋藏物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	北裏遺跡群

2003年12月に、佐久JCTから八千穂高原ICまでの区間について新直轄方式による事業化が決定したため、県教委は、長野国道と改めて協議し、中部横断道の建設に伴う発掘調査は、引続き、長野県文化振興事業団が実施することとした。その際、長野県文化振興事業団は国土交通省関東地方整備局（以下「関東地整」という。）と直接契約を締結するが、調査が複数年度にまたがるとともに調査経費も相当要することから、事業を円滑に推進するため協定書を締結することとした。内容は次のとおりである。

中部横断自動車道（佐久JCT～八千穂JCT）建設事業に伴う埋藏文化財発掘調査の実施に関する協定書

中部横断自動車道（佐久JCT～八千穂JCT）建設事業における埋藏文化財包藏地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、国土交通省関東地方整備局長（以下「甲」という。）と長野県教育委員会教育長（以下「乙」という。）と財団法人長野県文化振興事業団理事長（以下「丙」という。）とは、次のとおり協定を締結する。

（適用区間）

第1条 この協定を締結する区間は、長野県佐久市長土呂本宮から長野県南佐久郡久穂町畑までの別添図に示す区間とする。

（調査区間）

第2条 丙は、この協定に基づく発掘調査を平成18年4月18日から開始し、平成26年3月31日までに完了させるものとする。

ただし、やむを得ない理由により前項の期間を延長する場合には、甲乙丙協議して変更するものとする。

2 前条の発掘調査の着手順序及び範囲は、甲乙丙協議して定めるものとする。

（実施場所及び対象面積）

第3条 発掘調査の実施場所及び対象面積は実施計画書のとおりとする。

2 前項に予定する発掘調査の実施場所及び対象面積に変動ある場合、甲乙丙協議するものとする。

（発掘調査の体制）

第4条 甲は、前条に定める箇所の発掘調査を丙に依頼するものとする。

2 丙は、実施計画書に基づき、発掘調査を実施するものとする。

（発掘調査の指導）

第5条 乙は、丙が行う発掘調査に対し、指導、監督にあたるものとする。

（調査費用）

第6条 この調査に要する費用は、別添のとおり概算総額1,773,700,000円とし、甲が負担するものとする。

2 前項の費用は、工事区間内で新たに埋藏文化財を発見した場合及び価値金の変動等により増減が生じた場合には、甲乙丙協議して変更するものとする。

(発掘調査の契約及び経費の支払方法)

第7条 発掘調査は、別途甲と丙が年度毎に発掘調査受委託契約を締結の上、実施するものとする。

2 前条第1項の費用は、前項の契約に基づき各年度毎に作業の進捗に応じて支払うものとする。

(調査報告書の提出)

第8条 丙は、業務が完了したときは、調査報告書を甲と乙に提出するものとする。

2 丙は、各年度の発掘調査に係る業務実績報告書を各年度に、甲乙に提出するものとする。

(出土品の取り扱い)

第9条 発掘された出土品の処置については、乙が甲に代わって法令の定めるところにより保存などの措置を講ずるものとする。

2 甲は、出土品について権利を放棄するものとする。

(協定の変更)

第10条 この協定を変更する必要があるときは、甲乙丙協議して定めるものとする。

(協定の有効期限)

第11条 この協定の有効期間は、協定の締結の日から第2条の発掘調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。

(その他)

第12条 この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲乙丙協議して処理するものとする。

この協定の証として本書3通を作成し、甲乙押印の上、各自その1通を保有する。

平成18年4月18日

甲 国土交通省関東地方整備局長

氏名 印

乙 長野県教育委員会教育長

氏名 印

丙 財団法人長野県文化振興事業団理事長

氏名 印

なお、本協定書は、発掘調査事業の進捗に伴って、2010年3月、2016年2月、2018年4月、2019年1月の都合4回変更を行っている。

長野県文化振興事業団は、協定書の第7条第1項の規定により、年度毎に関東地整と契約を締結し、年度末には第8条第2項の規定により、業務実績報告書を提出してきた。本報告書に掲載した遺跡にかかわる2006年度以降の協定および受委託契約等の経過は第4・5表のとおりである。

第4表 協定の経過

締結日	文書名	備考
2006. 4. 18	中部横断自動車道（佐久JCT～八千穂IC）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下「中部横断道埋文発掘」という。）の実施に関する協定の締結について	調査期間：2006. 4. 18～2014. 3. 31 調査費用：1,773,700,000円 実施場所：30か所 対象面積：285,500㎡
2010. 3. 31	中部横断道埋文発掘の実施に関する協定（第1回変更）の締結について	調査期間：2006. 4. 18～2016. 3. 31 調査費用：3,147,895,000円 実施場所：43か所 対象面積：514,330㎡
2016. 2. 23	中部横断道埋文発掘の実施に関する協定（第2回変更）の締結について	調査期間：2006. 4. 18～2019. 3. 31 調査費用：3,198,390,000円 実施場所：変更なし 対象面積：515,710㎡
2018. 4. 2	中部横断道埋文発掘の実施に関する協定（第3回変更）の締結について	調査費用：3,266,865,000円 その他：変更なし
2019. 1. 23	中部横断道埋文発掘の実施に関する協定（第4回変更）の締結について	調査期間：2006. 4. 18～2019. 9. 30 その他：変更なし

第5表 受委託契約の経過

年度	予算	調査遺跡	備考
2003	112,000,000円	北畑遺跡群他1遺跡	発掘作業
2007	374,095,000円	北畑遺跡群、仁東餅遺跡、北裏遺跡群他7遺跡	発掘作業

年度	予 算	調査遺跡	備 考
2008	346,738,000円	東山遺跡他12遺跡	発掘作業 整理作業（佐久南IC以北）
2009	381,700,120円	北裏遺跡群、東山遺跡他18遺跡	発掘作業63,800㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2010	408,924,000円	北裏遺跡群、西東山遺跡他16遺跡	発掘作業62,947㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2011	367,330,000円	北裏遺跡群他25遺跡	発掘作業25,688㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2012	327,803,000円	東山遺跡他17遺跡	発掘作業12,022㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2013	233,268,000円	東山遺跡他31遺跡	発掘作業33,870㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2015	112,850,000円	北裏遺跡群他13遺跡	発掘作業6,565㎡
2017	38,964,000円	北裏遺跡群他30遺跡	整理作業
2018	126,991,800円 うち51,977,800円を 2019年度に繰越	北裏遺跡群他30遺跡	整理作業

4 発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2003（平成15）年度 発掘作業（北畑遺跡群ほか）

所 長：	深瀬弘夫	副 所 長：	原 聖	調査部長：	市澤美利	担当課長：	廣瀬昭弘
調査担当：	寺内隆夫	上田 真	宇賀神誠司	小林秀行			
作 業 員：	青木弘子	浅川智剛	上原理恵	遠藤静子	大池小市	大池永春	太田史夫
	大原はるゑ	金井伸夫	掛川雪子	川上淳子	木内隆男	木内美代子	古越信成
	小林育雄	小林健人	小林敏隆	小林 稔	小林ひろみ	五味陽一	小山澄江
	佐藤昭子	佐藤明美	佐藤君子	佐藤 務	佐藤ひさよ	佐野忠治	清水せつ
	白鳥澄江	鷹野 晃	高橋梅子	高橋徹雄	高橋 仁	高橋陽一	手塚 勲
	伝田名正	土屋詔子	土屋裕之	徳富信義	中込登志子	中澤啓子	中野二郎
	中村輝夫	花岡一雄	花岡眞二	廣岡祐一	弘中三志郎	細谷明美	松尾袈袋夫
	松本征太郎	三浦綾子	水谷治夫	宮崎 等	宮原啓助	向井修一	森山幸男
	諸星さやか	森泉国吉	柳沢千良	山浦直美	吉野安子	依田純子	渡辺袈袋登

2007年度 発掘作業（北畑遺跡群、仁東併遺跡、北裏遺跡群）

所 長：	仁科松男	副 所 長：	根岸誠司	調査部長：	平林 彰	担当課長：	寺内隆夫
調査担当：	廣瀬昭弘	櫻井秀雄	藤松慎一郎				
作 業 員：	青木 昭	浅川高義	浅川拓雄	浅川みつ江	稲垣 豊	井上 清	植松和則
	掛川信市	柏木貞夫	金井ちとせ	木内節雄	黒沢俊男	小宮山登志幸	佐々木記代
	佐々木 正	佐々木久子	佐藤 剛	白井雅代	鈴木春彦	高橋弓子	田中章雄
	西藤富士男	秦 茂夫	秦 正信	日向武夫	廣岡祐一	細堂和美	本田 智
	山越常夫	柳沢茂夫	柳沢敏春	山口茂弥	横山道子	渡辺稔秋	

2008年度 発掘作業（東山遺跡）

所 長：	仁科松男	副 所 長：	丑山修一	調査部長：	平林 彰	担当課長：	寺内隆夫
------	------	--------	------	-------	------	-------	------

調査担当： 櫻井秀雄 藤松慎一郎
 作業員： 稲垣 豊 今井章子 櫻井マキ子 佐藤春美 田中章雄 塚田真砂子 山浦豊子
 山根知子

2009年度 発掘作業（北裏道跡群、東山道跡）

所 長： 仁科松男 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 平林 彰 担当課長： 大竹憲昭
 調査担当： 上田 真 賛田 明 藤松慎一郎（東山道跡）
 藤原直人 中野亮一（北裏道跡群）
 作業員： 赤尾香苗 市川あつ子 上原幸子 上原勇三郎 大橋国三 篠原宗次 高橋梅子
 高橋幸造 高橋徹雄 高橋たか子 田原和之 中村勝子 中村 寛 丸山好子
 三浦綾子 山浦豊子 山根知子 依田純子

2010年度 発掘作業（北裏道跡群、西東山道跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 谷 和隆 白沢勝彦 寺澤政俊 曳地隆元 鈴木時夫
 上田 真 清水梨代 寺澤政俊 藤原直人（西東山道跡）
 作業員： 青木睦子 市川あつ子 大橋国三 川上淳子 木内福次 工藤 厚 小林まさ子
 佐藤明美 鷹野 晃 高橋節子 高橋たか子 高橋徹雄 高橋三好 竹鼻恵子
 高見澤千代 高見澤泰明 東城辰男 徳富信義 中澤啓子 中村勝子 中村 寛
 平林文樹 三浦綾子 緑川うめ子 柳沢博史 山田和子 渡辺忠男（北裏道跡群）
 井澤政子 植松和則 柏木貞夫 加藤紀子 鈴木春彦 鈴木佳明 須田杉男
 中野幸吉 秦 茂夫 秦 正信 原 廣子 原 綾 平林明子 本田 智
 山口茂弥 依田純子（西東山道跡）

2011年度 発掘作業（北裏道跡群）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 藤原直人 曳地隆元
 作業員： 上原美千代 小倉栄子 木内伸子 熊谷大輔 清水正人 高岡清子 高岡義敏
 徳富信義 秦 正信 日向武夫 丸山好子 山浦豊子 横山道子 依田純子

2012年度 発掘作業（東山道跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 会津敏男 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 藤原直人 伊藤友久 栗林幸治 曳地隆元
 作業員： 川上淳子 木内正幸 熊谷大輔 鈴木佳明 高岡清子 高岡義敏 緑川うめ子
 山越常夫

2013年度 発掘作業（東山道跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 会津敏男 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 伊藤友久 栗林幸治 宮村誠二
 作業員： 川上淳子 木内正幸 鈴木佳明 高岡清子 高岡義敏 緑川うめ子 山越常夫
 （東山道跡）

2015年度 発掘・整理等作業（北裏道跡群他4道跡）

所 長： 会津敏男 副 所 長： 多城 哲 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 上田 真 伊藤友久
 作業員： 赤尾香苗 植松和則 小倉栄子 川上淳子 熊谷大輔 佐藤明美 鈴木春彦

鈴木佳明	高岡清子	高岡義敏	高橋弓子	日向武夫	緑川うめ子	宮崎未枝子
山口茂弥	(発掘作業)					
猪股万里子	柄澤登紀子	窪田 順	窪田 翔	塩野入奈美	島田由美	清水栄子
清水玲子	高橋康子	日向富美子	待井 聖	松本眞行	柳原澄子	(整理作業)

2017年度 整理等作業 (北畑遺跡群他4遺跡)

所 長 :	会津敏男	副 所 長 :	関崎修二	調査部長 :	平林 彰	担当課長 :	岡村秀雄
調査担当 :	若林 卓		水澤教子				
作 業 員 :	赤川雅俊	阿部高子	荒井君江	石田和子	猪俣万里子	岩原英治	大澤正明
	窪田 順	塩野入奈美	祖山克彦	田中富子	中村恵美	西村はるみ	平林昌子
	堀内慎一	待井 聖	柳原澄子				

2018年度 整理等作業 (北裏遺跡群他4遺跡)

所 長 :	会津敏男	副 所 長 :	関崎修二	調査部長 :	平林 彰	担当課長 :	岡村秀雄
調査担当 :	若林 卓	上田 真	藤原直人	賛田 明			
作 業 員 :	赤川雅俊	荒井君江	石田和子	岩原英治	大澤正明	窪田 順	小池美香
	清水秋子	清水栄子	清水正夫	祖山克彦	田中富子	西村はるみ	平林昌子
	堀内慎一	吉田 稔					

2019年度 整理等作業 (北裏遺跡群他4遺跡)

所 長 :	原田秀一	副 所 長 :	関崎修二	調査部長 :	平林 彰	担当課長 :	岡村秀雄
調査担当 :	綿田弘実 (課長補佐)	若林 卓	上田 真	賛田 明			
作 業 員 :	石田和子	西村はるみ					

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

(1) 北畑遺跡群

北畑遺跡群は、もともと弥生時代や平安時代の土器片が採集されており、市教委によって同時代の集落遺跡として登録されてきた。2003年3月に行われた県教委による試掘調査の結果、古代以前と考えられる水田土壌が多くの試掘トレンチで確認され、調査対象地が当該期の生産域に相当することが判明した(県教委2003)。これを受けて埋文センターでは、堆積土上層の暗褐色砂質土上面で水田遺構の検出を試み、続いて、下層の砂層上面で弥生時代から古墳時代の生活面を捉える計画を立てた。

2003年度の本発掘調査では、調査範囲のほぼ半分にあたる4,340㎡を対象とし、ほ場整備によって改変された起伏のある旧地形を確認した。微高地は削平されていたため、遺構・遺物を検出することはできなかったが、低地では、弥生時代から平安時代に比定できる水田跡を2面検出したほか、縄文時代以降の土坑や溝、流路も検出した。

2007年度は、残り5,030㎡を対象に調査を行ったが、遺構はなく、弥生から平安時代にかけての土器類が少量出土したのみである。

(2) 仁東餅遺跡

仁東餅遺跡は、市教委によって、縄文・奈良・平安時代の散布地として登録されてきた。1960年代後半

のは場整備時に旧地形は改変され、当時、弥生時代の土器が出土したとの情報があるものの調査歴はなく、遺跡の詳細は不明であった。

2007年度の調査では、21,530㎡を対象に、遺跡の状況を確認することを目的としてトレンチを掘削し、遺構・遺物の有無確認と土層の確認作業を行った。調査の結果、遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかったため、面的な調査を行わずに終了した。

(3) 北裏遺跡群

北裏遺跡群は、以前から縄文時代から平安時代に至る各時代の遺物が採集されており、市教委によって同時代の集落遺跡として周知されている。2006（平成18）年度、国道142号バイパスの北側（中部横断道用地の東側低地部）で市教委が実施した発掘調査では、弥生時代中期の溝等を検出し、石戈も出土している（市教委2008）。また、国道142号バイパスより南側の段丘上では、以前から相当量の遺物が採集されており、市教委は大規模な集落になる可能性を指摘してきた。

埋文センターの調査対象地は、国道142号バイパス北側低地部の1区、同バイパスと南側段丘に挟まれた低地部の2区、段丘上の北から3・4・5区である。

2007年度は1区9,840㎡、2009年度は2区300㎡を対象としてトレンチ調査を行ったところ、縄文土器を主体として近世までの遺物を包含する砂層・黒色土が面的に広がる自然流路状の窪みを確認したが、明確な遺構はなかった。

2010年度は段丘上の3～5区8,245㎡を対象として面調査を実施した。特に3区は、弥生時代後期や平安時代、中世の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、遺物集中区、弥生時代中期から古墳時代前期の樺床木棺墓、方形周溝墓、円形周溝墓などの墓群を多数検出した。また、5区は南半部の面調査を実施し、弥生時代の木棺墓を検出した。4区は確認調査を実施した。

2011年度は4区1,900㎡を対象に調査を実施し、溝跡を1条検出した。また、2015年度には3区の残件35㎡の調査を行い、土坑等を検出した。

(4) 西東山遺跡

西東山遺跡は、市教委によって、縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物散布地として周知され、その範囲は台地平坦部を中心に、南側斜面部に及んでいる。また、遺跡範囲内の東側には西東山古墳が存在する。

2010年度、7,040㎡を対象に面調査を行ったところ、台地上から、弥生時代後期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑を中心とする集落跡が見つかった。一方、北側斜面部や南側谷部では、弥生時代後期の遺物包含層を確認したが、遺構はほとんどなかった。

(5) 東山遺跡

東山遺跡は、市教委によって、縄文時代、古墳時代から平安時代の遺物散布地として登録されている。

遺跡内容に不明な点が多いため、埋文センターは、2008年度は7,000㎡、2009年度は12,730㎡を対象に確認調査を行ったところ、縄文土器や古代から中世の土器片とともに、溝状遺構を検出した。2012・13年度は遺構を確認した箇所3,080㎡の面調査を行い、旧石器時代の槍先形尖頭器や縄文・弥生時代の土器・石器、中近世の陶磁器が出土したものの、遺構は中世の溝と時期不明の土坑を検出したにとどまった。

(6) 基礎整理作業

基礎整理作業は、発掘作業を行った遺跡を対象にして主として12月から3月の冬期間に実施した。

記録類には、調査時に記述した所見をはじめ、図面、写真等が含まれる。基礎整理作業では、まずこれらの汚染や脱漏を点検・修正し、次に記録相互の点検と矛盾点の解消を行った。図面については、平面図と断面図や部分図等との照合点検を行い、原因コピーに朱書訂正を行って、第二原図の下図とした。ネガ写真は、撮影順にアルバムへ収納し、撮影記録簿との照合点検を行い、ポジ写真は、撮影内容別に整理し

て後の本格整理に備えた。また、現場で記載した所見は、図面や写真等と照合しながら、所見整理カードにまとめた。

遺物類は、脆弱遺物を選別したのち、土器・石器類は洗浄・注記を行い遺物台帳を作成した。脆弱遺物は性質ごとに台帳を作成し、金属類はシリカゲルを封入して保管、木質や種実類は水漬けで保管、骨類は土砂を除去して乾燥保管した。応急保存処理が必要な脆弱遺物については保存処理カードを作成している。

その他、必要に応じて、出土品の科学分析や鑑定等を実施した。

2 整理等作業

佐久南ICから八千穂高原IC間の発掘調査遺跡31か所を5地区に区分し、佐久市桜井・伴野地区は、北畑遺跡群、仁東餅遺跡、北裏遺跡群、西東山遺跡、東山遺跡の5遺跡をまとめて報告書1冊に掲載する方針を固めた。

伴野・桜井地区の本格整理作業は2015（平成27）年度に着手したが、対象となる5遺跡の発掘期間が長期間となり、担当者の交代もあったため、記録類と遺物類等の整備と基礎整理作業結果を確認を行った。2016年度は、報告書刊行を2018年度末に設定し、先に刊行を予定している地区の整理作業を優先するため、桜井・伴野地区の整理作業は一時中断した。ところが、2017年度になって事業予算が減額されたことから、本報告書掲載遺跡に関していえば、北畑遺跡群の遺物整理を行なえたのみで、本格的な整理は2018年度に延期せざるを得なくなった。2018年度は、編集会議で報告書作成にかかる統一的な方針を固め、遺物について報告書掲載資料の抽出、土器の接合と復元、石器の器種分類と計測、写真撮影、遺構については図面修正とデジタルトレース、仮版組を行い、一部、遺物観察表等の作成を行った。2019年度は、遺物図や写真の版組を行い、原稿を仕上げて発掘調査報告書を印刷・製本し、記録類と遺物の収納を行った。

3 普及啓発活動

(1) 遺跡説明会および発掘体験等

2010. 6.19 北裏遺跡群現地説明会 151名

(2) 展示会および講演会等

2011. 3.12～ 5.15 北裏遺跡群 西東山遺跡 速報展「長野県の遺跡 長野県立歴史館 10,138名
発掘2011」

2011. 3.19 報告会「北裏遺跡群」 長野県立歴史館 62名

2011. 7. 7～ 7.31 北裏遺跡群 西東山遺跡 速報展「長野県の遺跡 長野県伊那文化会館 872名
発掘2011」

2011. 7.10 報告会「北裏遺跡群」 長野県伊那文化会館 45名

(3) 調査情報誌等の発行

2004. 3.22 「2003遺跡紹介 北畑遺跡」『みすずかる』通巻3号

2004. 3.30 「発掘調査及び整理作業の概要 北畑遺跡」『年報』16

2011. 3.31 「発掘調査の概要 北裏遺跡群 西東山遺跡」『年報』27

2012. 3.31 「発掘調査の概要 北裏遺跡群」『年報』28

2013. 3.31 「発掘調査の概要 東山遺跡」『年報』29

2014. 3.31 「発掘調査の概要 東山遺跡」『年報』30

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

2003 (平成15) 年度

4月25日	北畑	東地区の表土掘削開始	6月18日	北畑	東地区で縄文・弥生時代の自然流路検出
5月7日	北畑	東地区の遺構検出開始	7月28日	北畑	東地区で下部水田面(弥生時代か)の検出
5月12日	北畑	東地区から弥生中期土器が出土	9月11日	北畑	東地区の水田面から枕列出土
5月19日	北畑	検出時に「景祐元宝」出土	11月18日	北畑	土壌のサンプリング実施
5月27日	北畑	東D・E地区の古代流路で噴砂らしき痕跡確認	11月28日	北畑	発掘作業終了
6月3日	北畑	西地区の表土掘削開始	12月25日	北畑	基礎整理作業開始
			3月31日	北畑	基礎整理作業終了

2007年度

4月12日	北畑	確認調査開始	7月5日	北裏	1区の遺構検出開始
4月27日	北畑	測量委託契約締結	7月13日	仁東餅	遺構は見つからず確認調査終了
5月16日	仁東餅	確認調査開始	9月21日	北裏	1区は自然流路のみで面調査終了
5月29日	北裏	確認調査開始	12月25日	北裏	基礎整理作業開始
6月8日	北畑	遺構は見つからず、確認調査終了	3月7日	仁東餅、北裏	測量委託成果納品
6月18日	北裏	1区の面調査開始	3月14日	北畑	測量委託成果納品
6月28日	仁東餅、北裏	測量委託契約締結	3月31日	北裏	基礎整理作業終了

2008年度

9月16日	東山	測量委託契約締結	11月19日	東山	確認調査終了
10月6日	東山	確認調査開始	2月20日	東山	測量委託成果納品
10月20日	東山	溝状遺構を検出	3月2日	東山	基礎整理作業開始
11月4日	東山	溝状遺構から青磁片出土	3月31日	東山	基礎整理作業終了

2009年度

4月13日	東山	1区表土掘削開始	6月22日	東山	2区遺構検出および精査
4月15日	北裏	2区発掘作業開始	7月3日	東山	4・5区確認調査開始
4月21日	東山	1区遺構検出および精査	7月14日	東山	4区表土掘削開始
4月22日	北裏、東山	測量委託契約締結	7月17日	東山	4区遺構検出および精査
4月23日	北裏	遺物包含層の掘下げ	10月2日	東山	発掘作業終了
4月27日	北裏	遺構検出作業	11月30日	東山	測量委託成果納品
	東山	3区表土掘削開始	12月7日	北裏	基礎整理作業開始
5月7日	東山	3区遺構検出および精査	12月14日	東山	基礎整理作業開始
5月11日	北裏	遺構は見つからず、2区発掘作業終了	3月12日	北裏	測量委託成果納品
6月12日	東山	2区表土掘削開始	3月31日	北裏	基礎整理作業終了

2010年度

4月12日	北裏	3区の表土掘削開始	10月18日	西東山	竪穴建物跡検出
4月15日	北裏	弥生・平安時代の竪穴建物跡を複数検出	10月20日	北裏	宮本長二郎氏の調査指導
4月20日	北裏	礎床木棺墓を検出	11月12日	西東山	弥生土器のまともりを検出
4月27日	北裏	測量委託契約締結	11月18日	西東山	竪穴建物跡7軒調査
5月19日	北裏	礎床木棺墓の調査方法を検討。方形周溝墓群を確認	11月25日	西東山	掘建柱建物跡の可能性ある土坑群検出
6月7日	北裏	明治大学石川日出志氏の調査指導	12月13日	北裏	5区で弥生時代の木棺墓検出
6月18日	北裏	信濃毎日新聞が現地説明会の報道	12月15日	北裏	市教委の調査指導
6月19日	北裏	現地説明会	12月16日	西東山	発掘作業終了
7月23日	北裏	5区の確認調査開始	12月20日	西東山	基礎整理作業開始
7月27日	北裏	3区の中世木組井戸跡の掘下げ	12月21日	北裏	遺跡を報道公開
8月4日	北裏	長野県遺跡調査指導委の調査指導	12月27日	北裏	発掘作業終了
8月20日	西東山	確認調査開始	1月4日	北裏	基礎整理作業開始
8月23日	西東山	確認調査終了	1月21日	北裏	井戸枠等の樹種同定、土壌のリン酸カルシウム分析委託契約締結
9月2日	北裏	3区で中世竪穴建物跡等の遺構群を検出	1月24日	北裏	放射性年代測定、土壌の火山灰分析委託契約締結
9月8日	北裏	5区で表土掘削開始			
9月13日	北裏	4区で確認調査開始	3月17日	北裏	放射性年代測定委託成果納品
9月14日	西東山	1区から順次表土掘削(面調査)開始	3月18日	北裏	井戸枠等の樹種同定、土壌の火山灰分析、リン酸カルシウム分析委託成果納品
10月4日	西東山	1区から大型蛤刃石斧出土	3月11日	北裏、西東山	測量委託成果納品
10月6日	北裏	5区で弥生時代の遺物集中検出	3月31日	北裏	基礎整理作業終了
10月12日	西東山	測量委託契約締結			

2011年度

7月7日	北裏	4区表土掘削開始	12月20日	北裏	種実同定委託契約締結
7月12日	北裏	遺構検出作業開始、溝跡検出、放射性炭素年代測定・測量委託契約締結	2月21日	寺尾真純氏による障床木棺墓の障の鑑定指導	
8月3日	北裏	溝跡のみで発掘作業終了	3月9日	北裏	種実同定委託成果納品
12月19日		基礎整理作業開始	3月16日	北裏	放射性炭素年代測定・測量委託成果納品
			3月31日		基礎整理作業終了

2012年度

4月1日	北畑	仁東餅	北裏	基礎整理作業開始	11月26日	北裏	遺物注記開始
4月9日	北畑	仁東餅	北裏	遺物・記録類の点検、台帳との照合	11月30日	北裏	放射性炭素年代測定委託契約締結
6月21日	北畑	仁東餅		図面整理	1月11日	北畑	遺物分類・接合 仁東餅 図面トレース
10月22日	東山			表土掘削開始	1月31日	北裏	遺物注記終了
10月24日	東山			土坑状の落込みを検出	3月8日	北裏	放射性炭素年代測定成果納品
10月25日	東山			溝跡を検出	3月29日	東山	基礎整理作業終了
11月6日	東山			土坑10基、溝1本で発掘作業終了	3月31日	北畑	仁東餅 北裏 基礎整理作業終了
11月19日	東山			基礎整理作業開始			

2013年度

4月15日	東山				12月20日		基礎整理作業開始
4月30日	東山				3月31日		基礎整理作業終了

2015年度

4月1日					7月23日	長野市立藤ノ井中学校職場体験	
4月16日					7月27日	長野高専インターンシップ（8月5日も）	
5月27日					9月11日	中部横断関連遺跡分布図作成開始	
5月28日	北裏	東山			9月17日	中部横断関連遺跡分布図作成終了	
6月2日	西東山、東山				10月19日	長野市立軍陵中学校職場体験	
					10月20日	長野市立松代中学校職場体験	
6月22日	北裏				10月27日	長野市立川中島中学校職場体験	
6月29日	北裏				11月24日	北畑、北裏、西東山、東山 ぜい弱遺物台帳整理	
7月3日	長野市埋蔵文化財センター				11月26日	北畑、仁東餅、北裏、西東山、東山 写真アルバム および台帳整理	
7月7日	長野市立藤ノ井中学校職場体験						
7月14日	長野市立飯綱中学校職場体験				12月1日	北畑	石器の注記と台帳作成開始
7月16日	北裏				12月17日	北裏	基礎整理作業開始
7月22日	北裏				12月21日	北畑	石器の注記と台帳作成終了
					3月31日		基礎・本格整理作業終了

2017年度

10月2日	北畑				12月12日	北畑	石器接着・復元終了
10月18日	北畑				2月23日	北畑	石器観察表作成開始
11月28日	北畑				3月5日	北畑	石器観察表作成終了

2018年度

4月16日	北裏				11月5日	西東山	石器分類・抽出開始
8月16日	北裏				11月9日	北裏	石器接着・復元終了
9月3日	西東山				11月26日	北裏	石器実測個体選定開始
					12月11日	北畑、北裏、西東山、東山	実測委託契約締結
9月7日	西東山				1月7日	北裏	石器重量計測開始
					1月18日	北裏	石器重量計測終了
9月10日	北畑				1月21日	北裏	遺構図デジタルトレース開始
9月14日	北畑				2月19日	北裏	石器接合終了
9月25日	西東山				3月4日	東山	石器実測個体選定開始
9月27日	西東山				3月7日	東山	石器実測個体選定終了
10月1日	北裏				3月8日	北畑	石器実測個体選定開始

第1章 発掘調査の経過

3月14日	北畑 土器実測個体選定終了	3月29日	北裏 石器実測個体選定終了
3月22日	北畑、北裏、西東山、東山 実測委託成果納品		

2019年度

4月1日	本格整理作業開始	12月24日	発掘調査報告書印刷・製本契約
5月30日	編集会議	3月19日	発掘調査報告書刊行

引用・参考文献

県教委1997「大規模開発事業地内道跡—道跡詳細分布調査報告書—」
県教委2000「大規模開発事業地内道跡—道跡詳細分布調査報告書2—」
県教委2003「大規模開発事業地内道跡—道跡詳細分布調査報告書3—」
県教委2007「大規模開発事業地内道跡—道跡詳細分布調査報告書4—」
県教委2010「県内道跡発掘調査報告書—道跡詳細分布調査5—」
県教委2013「県内道跡発掘調査報告書—道跡詳細分布調査6—」

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久盆地は長野県の東に位置し、東と南を秩父山地、西を八ヶ岳連峰、北を浅間連山に囲まれている。盆地の中央には秩父山地の甲武信ヶ岳を源流とする千曲川が北流し、左（西）岸域は八ヶ岳連峰から下る小河川が開析谷や扇状地を形成し、河岸段丘や氾濫原を分断して千曲川に注ぐ。

中部横断道は、八千穂高原ICから佐久南ICまでの間、八ヶ岳連峰から東ないし北東方向に延びる開析谷と尾根とを南北方向に横切るため、今回調査した遺跡の多くは、尾根の頂部や斜面部、麓の小河川に面した平坦部に立地している。したがって、規模は小さいが、地理的な環境を活かした個性的な遺跡がある。例えば、尾根の頂部に築かれた田島塚・水堀塚、和田1号塚、傾斜面を利用した奥日影遺跡の窯跡、三方を尾根によって閉塞された空間に中世墓地を営んだ地家遺跡のごとくである。また、佐久南IC周辺は千曲川の段丘と低湿地からなり、段丘上には比較的規模の大きな北裏遺跡群が形成され、低湿地には北畑遺跡群や仁東餅遺跡のように水田域が広がる。

第2節 歴史的環境

今回調査した遺跡では、旧石器時代から中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、各遺跡の所在する佐久市から佐久穂町における周辺の遺跡を、時代別に紹介する。

旧石器時代

遺跡数は少なく、今回調査した佐久市高尾A遺跡（NoA10）、佐久穂町満り久保遺跡（NoB54）、満り久保東遺跡（NoB57）がある。とくに高尾A遺跡で発見した石器群は、佐久市立科F遺跡、八風山遺跡群八風山II遺跡、香坂山遺跡と同様の古い段階と考えている。

縄文時代

調査例は少ないが、遺物は採取されている。今回取り上げた遺跡の半分弱が縄文時代の遺跡である。

草創期は、佐久市井上遺跡（No691）、佐久穂町崎田原遺跡（NoB1）で神子柴型石斧が採取されている。早期は、片貝川周辺の佐久市堂浦遺跡（No640）、大門地遺跡（No641）で押型文・貝殻条痕文系土器、佐久穂町反り峯遺跡（NoB36）で当該期の土器が採取されているが、いずれも遺構は確認されていない。なお、千曲川右岸の佐久穂町後平遺跡では早期後半の竪穴建物跡3軒が調査されている。前期は、佐久穂町上ノ原遺跡（NoA19）、清水上遺跡（NoA59）などで前葉、佐久市後澤遺跡（No400）で中葉の集落跡が調査されている。佐久市井上遺跡（No691）では、遺構外から羽状縄文系土器が出土している。また、佐久穂町細久保遺跡（NoB10）、千ヶ日向遺跡（NoB11）で後葉の土器が採取されている。中期は各所で遺物が採取され、遺跡数も多い。佐久穂町佐久西小学校裏遺跡（NoA10）、崎田原遺跡（NoB1）で集落跡を調査している。

後・晩期の遺跡数は少ない。佐久穂町宮の本遺跡（NoA29）では敷石住居跡が調査され、佐久穂町竹の

下遺跡 (No.B6) では浮線文土器が見つかっている。今回の調査で、佐久市小山の神B遺跡 (No.402) や高尾A遺跡 (No.410)、上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620) で前期の堅穴建物跡を、佐久市北裏遺跡群 (No.318) や地家遺跡 (No.480) ほかで早期から晩期の資料を報告した。

弥生時代

大規模な遺跡は、佐久盆地北部の千曲川沿いにある自然堤防や段丘、比較的平坦な丘陵台地にあり、山間部にはほとんどない。前期から中期前半は、佐久穂町中原遺跡 (No.A18)、佐久市井上遺跡 (No.691)、丸山遺跡 (No.610) で遺物が採取されている。中期後半から後期は、片貝川流域で佐久市勝間原遺跡 (No.611)、丸山遺跡 (No.610) で堅穴建物跡が調査され、一帯となって大規模な集落跡になり、佐久市域における該期の集落跡の南限と推測されている。段丘や丘陵上では、佐久市北裏遺跡群 (No.318)、西裏遺跡群 (No.317)、後澤遺跡 (No.400) などが拠点集落とされる。一方、佐久穂町では宮の本遺跡 (No.A29) で土器の出土例があるが、この地域の遺跡は少ない。今回、佐久市北裏遺跡群 (No.318)、西東山遺跡 (No.319)、和田遺跡 (No.616) などで集落跡を、佐久地域の山間部にある岩陰遺跡として月明沢岩陰遺跡群 (No.1162) を調査した。

古墳時代

佐久地域では前期の遺跡数は減少し、集落の規模も小さいとされ、中期以降、その数が増してくる。周辺には、中期の佐久市離山遺跡 (No.658) や中期から後期の井上遺跡 (No.691) などの集落遺跡がある。一方、古墳は6世紀後半以降に築造された佐久市三河田大塚古墳 (No.244) を除いて、周辺は7世紀から8世紀に築造された後期から終末期の古墳で占められる。7世紀以降の古墳は左岸には少なく、佐久穂町塚畑古墳 (No.A1) が南限と考えられている。今回、佐久市上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620)、和田遺跡 (No.616)、滝遺跡 (No.615) で前期から中期の小規模な集落跡を調査した。また、新発見の古墳として、兜山古墳 (No.1163)、尾垂古墳 (No.1164)、高尾5号墳 (No.556) を報告した。

古代

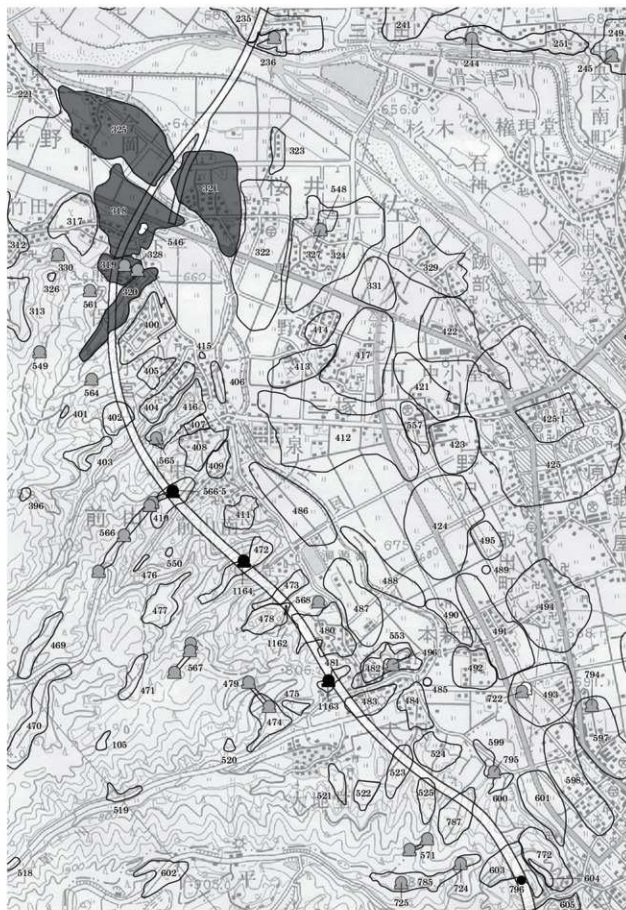
千曲川左岸では、佐久市勝間原遺跡 (No.611)・丸山遺跡 (No.610)・美里在家遺跡 (No.598)・蛇塚遺跡 (No.597) などがある。佐久穂町では佐久西小学校裏遺跡 (No.A10) で集落が調査され、勝見沢遺跡 (No.B13) では八稜鏡が出土している。今回、佐久市小山の神B遺跡 (No.402)、上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620)、地家遺跡 (No.480)、寺久保遺跡 (No.603)、佐久穂町小山寺窪遺跡 (No.A30)、馬越下遺跡 (No.B56) などで集落跡を調査した。こうした古代の集落跡は、水田耕作には不向きな山間(麓)部に分布が広がる。その近隣の佐久市洞源遺跡 (No.473) では製鉄炉を、佐久穂町奥日影遺跡 (No.A60) では須恵器の窯跡を発見しており、山間(麓)部に暮らす人々の生活基盤(生業)を検討するうえで、貴重な調査例となった。

中世以降

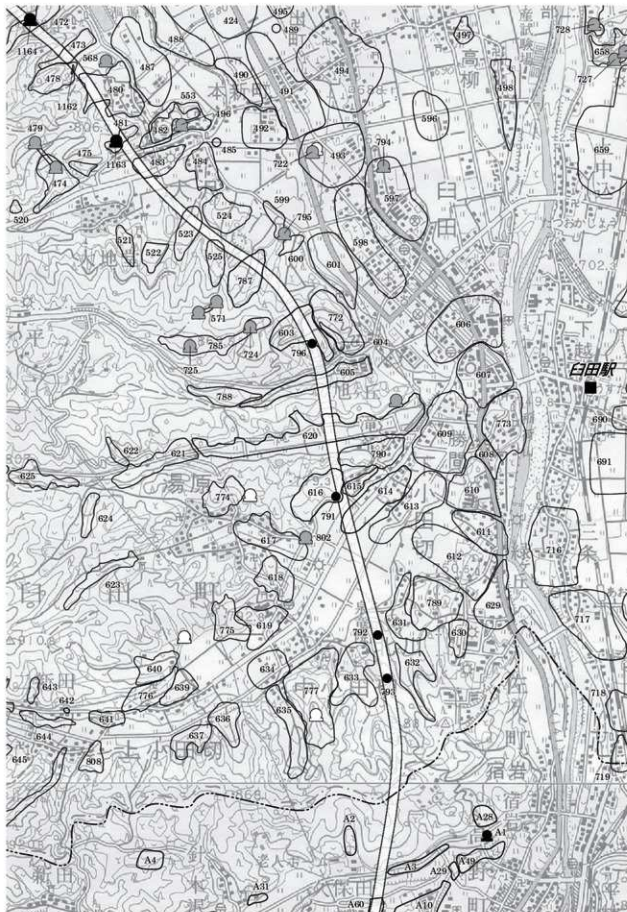
周辺遺跡のうちほぼ半数が城跡・砦・狼火台で、今回調査した荒城跡 (No.478) もその一つである。一方、佐久市地家遺跡 (No.480)・尾垂遺跡 (No.472) は寺院関連遺跡、佐久市北裏遺跡群 (No.318)・佐久穂町奥日影遺跡 (No.A60)・小山寺窪遺跡 (No.A30) などは集落遺跡として報告した。尾根の頂部に築かれた佐久市和田1号塚 (No.791) などは地域史を考える上で、新たな発見といえる。

引用・参考文献

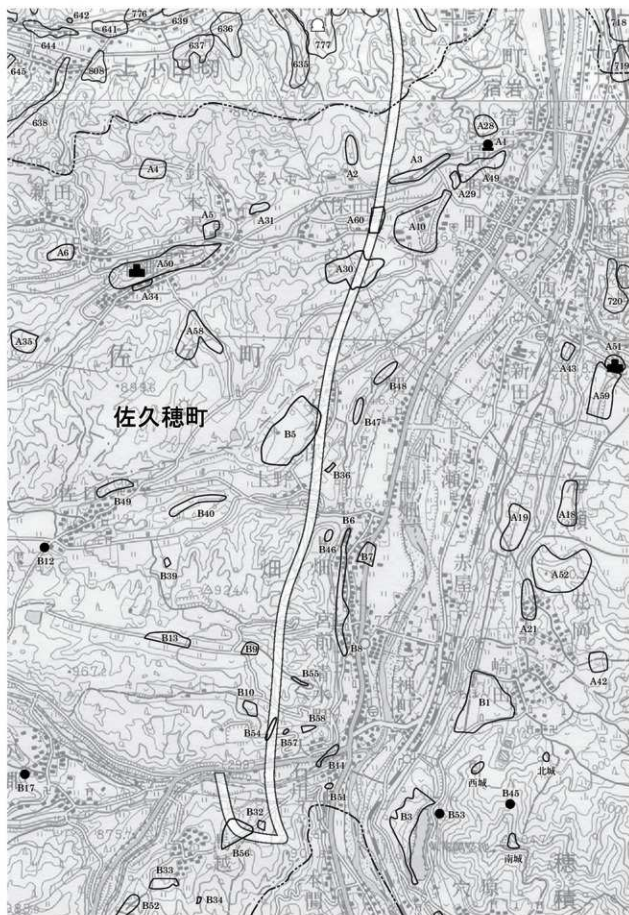
- 佐久市 1995 『佐久市志』 歴史編(一) 原始古代
 佐久市・臼田町誌刊行会 2007 『臼田町誌』 第三巻 考古古代・中世編
 佐久町誌刊行会 2004 『佐久町誌』 歴史編一 原始・古代・中世
 八千穂村誌刊行会 2003 『八千穂村誌』 第四巻 歴史編



第4図 周辺遺跡分布図1



第5図 周辺遺跡分布図2



第6図 周辺遺跡分布図3

第6表 周辺遺跡一覧

遺跡 番号	遺跡名	所在地	時 代							
			旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	中 世	近 世		
105	上野 B 遺跡									
221	下原屋敷遺跡群	伴野		○	○	○				
235	今井宮の前遺跡	今井					○	○		
236	今井城跡	今井							○	
241	中原遺跡群	今井		○	○	○				
244	三河田大塚古墳	三河田				○				
245	蟹ヶ沢古墳	中込					○			
249	大塚遺跡群	中込					○			
251	梨の木遺跡 1	中込							○	
312	西村中遺跡	根岸		○	○	○				
313	水操遺跡群	根岸								
317	西裏遺跡群	伴野		○	○	○				
318	北裏遺跡群	伴野		○	○	○				
319	西裏山遺跡	伴野								
320	東山遺跡	伴野		○	○	○				
321	北壇遺跡群	板井								
322	宮浦遺跡群	板井								
323	上北谷遺跡群	板井								
324	平馬塚遺跡群	板井								
325	仁東遺跡	伴野		○	○	○				
326	虚空藏山狼火台	根岸							○	
327	平馬塚古墳	板井								
328	西東山古墳群	伴野								
328	1号墳	伴野								
328	2号墳	伴野								
329	跡部徳田遺跡群	跡部								
330	高日影古墳	根岸								
331	町田遺跡群	三塚								
396	遊石遺跡	小宮山		○	○	○				
400	後澤遺跡	小宮山		○	○	○				
401	小山の神 A 遺跡	小宮山								
402	小山の神 B 遺跡	小宮山								
403	長ヶ窪遺跡	小宮山								
404	西の弘遺跡	小宮山								
405	上の山遺跡	小宮山		○						
406	町後遺跡	前山							○	
407	居屋敷遺跡	前山								
408	灘の下遺跡	前山		○	○					
409	象ヶ岡遺跡	前山								
410	高尾 A 遺跡	前山		○	○	○				
411	倉澤遺跡	前山								
412	中道遺跡群	前山			○					
413	宅町田遺跡	三塚								
414	三塚鶴田遺跡	三塚								
415	小宮山砦	小宮山								
416	前山城跡	小宮山							○	
417	三千東遺跡群	三塚								
421	長明塚遺跡	野沢								
422	金山遺跡	跡部								
423	東五里田遺跡	野沢								
424	徳田遺跡	野沢								
425	野沢城跡	野沢							○	
469	蛭原遺跡	小宮山		○	○	○				
470	免ヶつ原遺跡	前山								
471	上野遺跡	前山								
472	尾重遺跡	前山		○	○	○				
473	洞源遺跡	前山								
474	一丁田遺跡	大沢								
475	大榎遺跡	大沢								
476	高尾 B 遺跡	前山								
477	前山古城跡	前山							○	
478	荒城跡	前山								
479	一丁田古墳群	大沢								
479	1号墳	大沢							○	
479	2号墳	大沢								
480	地家遺跡	大沢								
481	兜山遺跡	大沢		○	○	○				
482	城山遺跡	大沢		○	○	○				
483	大沢原敷遺跡	大沢								
484	大中沢遺跡	大沢								
485	蔵下遺跡	大沢								
486	大門下遺跡	前山							○	
487	大畑遺跡	前山								
488	御嶽遺跡	大沢								
489	高畑遺跡	本新町								
490	大沢前田遺跡	本新町								
491	西裏遺跡群	本新町		○						
492	下町屋遺跡	大沢								○
493	原遺跡	大沢							○	
494	白帽子遺跡群	取手								
495	伊勢道遺跡	取手								
496	城山古墳	大沢								
497	向畑遺跡	鍛冶屋								
498	前畑遺跡	高柳								
518	日向小坂遺跡	大沢							○	
519	日向崩岩遺跡	大沢								
520	山田遺跡	大沢								○
521	金山久保 A 遺跡	大沢							○	
522	金山久保 B 遺跡	大沢								
523	前の久保遺跡	大沢							○	
524	三枚平 A 遺跡	大沢								
525	三枚平 B 遺跡	大沢								○
546	宝生寺山砦	伴野								
548	泉屋敷跡	板井								○
549	水操古墳	根岸								
550	川越石京址	前山								○
553	荒山城跡	大沢								
557	勸澤遺跡	野沢								○
561	山の神古墳	伴野								
564	清来寺古墳	小宮山								
565	鱗溪古墳	前山								
566	高尾古墳群	前山								
566	1号墳									
566	2号墳									
566	3号墳									
566	4号墳									
566	5号墳									
567	洞源古墳群	前山								
567	1号墳									
567	2号墳									
567	3号墳									
568	豊林古墳	前山								
571	三枚平古墳群	大沢								
571	1号墳									
571	2号墳									
596	原田遺跡	白田							○	
597	蛇塚遺跡	白田								
598	美里在家遺跡	白田								
599	滝ノ沢人口遺跡	白田								
600	荒谷遺跡	白田								
601	七曲り下遺跡	白田								○
602	平遺跡	白田								
603	寺久保遺跡	白田								
604	下ノ城遺跡	白田								
605	台ヶ坂遺跡	白田								
606	反田遺跡	白田								

遺跡 番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古墳	奈・平	中世	近世
607	城下遺跡	白田	○					
608	城山遺跡	白田	○					
609	小山崎遺跡群	白田	○	○	○	○		
610	丸山遺跡	下小田切	○	○	○	○		
611	勝間原遺跡	下小田切	○	○	○	○		
612	栗ノ木遺跡	下小田切	○	○	○	○		
613	日影遺跡	下小田切	○	○	○	○		
614	家浦遺跡	下小田切	○	○	○	○	○	
615	滝遺跡	湯原		○	○	○		
616	和田遺跡	湯原		○	○	○		
617	北側遺跡	湯原	○	○	○	○		
618	中島遺跡	湯原		○	○	○		
619	向城遺跡	中小田切	○	○	○	○		
620	上流・中流・下流遺跡	湯原	○	○	○	○		
621	児玉・大平遺跡	湯原		○	○	○		
622	ジンジロ遺跡	湯原		○	○	○		
623	山の神遺跡	湯原		○	○	○		
624	梨子久保遺跡	湯原		○	○	○		
625	五里久保遺跡	湯原		○	○	○		
629	北川勝間遺跡	北川		○	○	○		
630	千曲台団地遺跡	北川		○	○	○		
631	広沢遺跡	北川	○	○	○	○		
632	田島久保遺跡	北川	○	○	○	○		
633	城影遺跡	中小田切	○	○	○	○		
634	札幌吉原遺跡	中小田切	○	○	○	○		
635	南久保・尾科遺跡	中小田切	○	○	○	○		
636	前久保遺跡	上小田切	○	○	○	○		
637	広久保・純の久保遺跡	上小田切	○	○	○	○		
639	家裏遺跡	上小田切	○	○	○	○		
640	堂浦遺跡	上小田切	○	○	○	○		
641	大門地遺跡	十二新田	○	○	○	○		
642	岩下洞窟遺跡	十二新田	○	○	○	○		
643	日向遺跡	十二新田	○	○	○	○		
644	岩下遺跡	十二新田	○	○	○	○		
645	十二新田寺久保遺跡	十二新田	○	○	○	○		
658	難山遺跡	上中込	○	○	○	○		
659	中反田遺跡群	大奈良	○	○	○	○		
690	戸井口遺跡	三分	○	○	○	○		
691	井上遺跡	三分	○	○	○	○		
716	観正田遺跡	三条		○	○	○		
717	南裏遺跡	三条		○	○	○		
718	東荒谷遺跡	十日町	○	○	○	○		
719	十日町遺跡	十日町	○	○	○	○		
720	唐松A遺跡	岩水	○	○	○	○		
722	埴塚古墳	白田			○	○		
724	滝ノ沢古墳	白田			○	○		
725	滝ノ沢野塚古墳	白田			○	○		
727	難山2号古墳	上中込			○	○		
728	難山3号古墳	上中込			○	○		
772	医王寺城跡	白田			○	○		
773	稲荷山城跡	白田			○	○		
774	湯原城跡	湯原			○	○		
775	向城跡	中小田切			○	○		
776	上小田切城跡	上小田切			○	○		
777	鹿峰城跡	中小田切			○	○		
785	上ノ城跡	白田			○	○		
787	滝ノ沢遺跡	白田	○	○	○	○		
788	山神久保遺跡	白田	○	○	○	○		
789	田島遺跡	白田	○	○	○	○		
790	下流遺跡	白田			○	○		
791	和田1号塚	湯原			○	○		
792	田島塚	北川			○	○		
793	水廻塚	小田切			○	○		

遺跡 番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古墳	奈・平	中世	近世
794	法印塚古墳	法印塚			○			
795	荒谷古墳	荒谷			○			
796	庚申塚	庚申			○			○
802	北側1号墳	北側			○			
808	冷久保遺跡	冷久保			○			
1162	月明沢岩陰遺跡群	前山		○				
1163	兜山古墳	大沢		○				
1164	尾垂古墳	前山		○				
A1	塚畑古墳	高野町			○	○		
A2	雁明遺跡	高野町			○	○		
A3	北沢遺跡	高野町			○	○		
A4	たつま久保遺跡	上			○	○		
A5	下影遺跡	上			○	○		
A6	影遺跡	上			○	○		
A10	佐久西小学校裏遺跡	高野町			○	○		
A18	中原遺跡	海潮		○	○	○		
A19	上ノ原遺跡	海潮		○	○	○		
A21	中山遺跡	海潮			○	○		
A28	粟窪遺跡	高野町			○	○		
A29	宮の本道跡	高野町			○	○		
A30	小山寺遺跡	高野町			○	○		
A31	施願鬼遺跡	上			○	○		
A34	本郷遺跡	上			○	○		
A35	寺久保遺跡	上			○	○		
A42	家山遺跡	海潮			○	○		
A43	下原遺跡	海潮			○	○		
A49	高野城跡	高野町			○	○		
A50	福田城跡	上			○	○		
A51	海潮城跡	海潮			○	○		
A52	花岡城跡	海潮			○	○		
A58	舟ノ窪遺跡	上			○	○		
A59	清水上遺跡	海潮			○	○		
A60	奥日影遺跡	高野町			○	○		
B1	崎田原遺跡	穂積			○	○		
B3	関谷遺跡	穂積	○	○	○	○		
B5	上野月夜原遺跡	畑			○	○		
B6	竹の下遺跡	畑			○	○		
B7	封地遺跡	畑			○	○		
B8	ムジナ沢遺跡	畑			○	○		
B9	宮の人遺跡	畑			○	○		
B10	細久保遺跡	畑			○	○		
B11	千ヶ日向遺跡	畑			○	○		
B12	佐口遺跡	畑			○	○		
B13	勝見沢遺跡	畑			○	○		
B32	中原遺跡	千代里			○	○		
B33	古屋敷遺跡	千代里			○	○		
B34	向窪遺跡	千代里			○	○		
B36	反り家遺跡	畑			○	○		
B39	南平遺跡	畑			○	○		
B40	馬込遺跡	畑			○	○		
B45	糠城跡	穂積			○	○		
B46	権現山岩跡	畑			○	○		
B47	下畑城跡	畑			○	○		
B48	下畑下の城跡	畑			○	○		
B49	佐口城跡	畑			○	○		
B51	大石川烽火台跡	千代里			○	○		
B52	馬越城跡	千代里			○	○		
B53	関谷東遺跡	穂積			○	○		
B54	満り久保遺跡	畑	○	○	○	○		
B55	畑寺久保遺跡	畑			○	○		
B56	馬越下遺跡	畑			○	○		
B57	満り久保東遺跡	畑	○	○	○	○		
B58	千ヶ日向団地上遺跡	畑			○	○		

第3章 発掘調査の方法

第1節 発掘作業の経過

当センターでは、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して発掘調査を実施している。

1 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺跡記号は調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表した記号である。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、北佐久郡・南佐久郡・小諸市・佐久市を示す「D」、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記から2文字を選択したものである。各種記録類や遺物注記に遺跡記号を利用している。

北畑遺跡群 (KITAHATA)	: DKB
仁東餅遺跡 (NISOKUYMOCHI)	: DST
北裏遺跡群 (KITAURA)	: DKU
西東山遺跡 (NISHIHIGASHIYAMA)	: DNY
東山遺跡 (HIGASHIYAMA)	: DHS

2 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付したものは原則として変更していない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては、整理段階で新たに付与した。

今回の調査で用いた遺跡記号には、以下の種類がある。

- SB : 概ね一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み【堅穴建物跡、堅穴状遺構】
- SK : 単独もしくは他の掘込みとの関係がないSBよりも小さな掘込み【土坑、井戸】
- ST : SBよりも小さな掘込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配置しているもの【掘立柱建物跡、平地式建物跡】
- SD : 溝状の掘込み【溝跡、自然流路跡】
- SF : 単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるものおよび炭化物の集中範囲
- SM : 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛上がり【古墳、墳墓、周溝墓、土坑墓、木棺墓もここに含める】
- SQ : 遺物が集中する箇所
- SX : その他、性格不明遺構

なお、SB内の柱穴・貯蔵穴などや、STを構成する個々の掘込みにはピット（記述・図を問わず個別に番号を付す場合「P」）を付した。

3 調査区（グリッド）の設定と略称

すべての遺跡で、以下の方法で調査区を設定した。

国土地理院の平面直角座標系第Ⅲ系の原点（ $X=0.0000$ 、 $Y=0.0000$ ）を基準に、200の倍数値を選んで東西南北・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した（第6図）。

大々地区は、 200×200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を 40×40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を 8×8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、中地区を 2×2 mの16区画に分割したもので、北西から南東方向へ01～16の算用数字番号を与えた。中地区番号との間にはハイフンを挿入した。

グリッド名の実際の表記においては、読取りやすさを考え、大々～中地区番号の間にも適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。グリッド杭の設定は、表土掘削が終了し、遺構検出をほぼ終えた段階で業務委託により実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、上記の調査グリッドとは別に、地形や土地区画の状況、調査の進ちょく状況に合わせて調査範囲を任意に分割し、「1区、2区……」等と呼称した遺跡がある。

4 表土掘削と遺構の検出

西東山遺跡群を除く4遺跡では、本格的調査に入る前段階に遺跡の性格を把握するための確認調査として重機によるトレンチ掘削を実施し、仁東餅遺跡以外の3遺跡は遺構が検出された地点を主体に調査区を拡張した。

トレンチの掘削は重機を使用し、トレンチ調査の所見に基づき、範囲や遺構検出面などを決定した。面的調査を実施した。表土を含む遺構検出面までの堆積層は重機により掘削し、表土掘削が終了した部分から、手作業で掘削面の清掃を行い、遺構を検出した。遺物は上記の地区・グリッド名、出土層位、遺構に関連するものは帰属遺構名をポリ袋に記入して取り上げた。

仁東餅遺跡は、本格的調査に入る前段階の確認調査で本調査不要と判断されたので、本調査は実施していない。

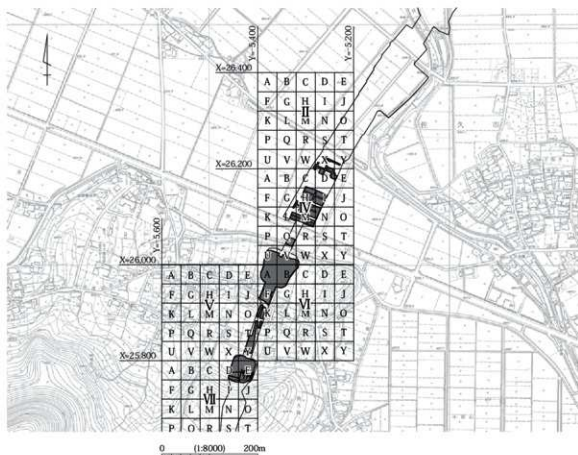
5 遺構の発掘

竪穴建物跡は、埋土観察用のベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、埋土の堆積状況を把握・記録して、層位ごとに埋土を床面まで掘り下げ、柱穴、竈、カマド、周溝などの建物内施設の精査・記録を行った。建物内施設を完掘した後は、完掘状態を記録し、その後に床面下（掘方）の状況を確認した。

土坑は埋土を半載し、埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。埋土から出土する遺物の状況によっては、埋土上位を段下げ、出土状況を記録してから埋土下位の掘下げへと進んだ。

掘立柱建物跡の柱穴は、掘方全体を掘り下げ、柱痕跡を確認し、柱痕跡が断面にかかるように埋土を半載した。埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。

基準線と地区(グリッド)の設定



大々地区(200×200mグリッド)：Ⅰ・Ⅱ…Ⅶ ■ 北東遺跡 調査対象地

例：ⅡM08-13グリッドの座標位置

A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

200m

40m

大地区(40×40mグリッド)：ⅡA…ⅡY

ⅡM08-01	ⅡM08-02	ⅡM08-03	ⅡM08-04
ⅡM08-05	ⅡM08-06	ⅡM08-07	ⅡM08-08
ⅡM08-09	ⅡM08-10	ⅡM08-11	ⅡM08-12
ⅡM08-13	ⅡM08-14	ⅡM08-15	ⅡM08-16

8m

2m

小地区(2×2mグリッド)：
ⅡM08-01…ⅡM08-13…ⅡM08-16

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

40m

8m

中地区(8×8mグリッド)：ⅡM01・ⅡM02…ⅡM08…ⅡM25

第7図 調査グリッドの設定と呼称

溝跡および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数か所設定し、それぞれの埋土堆積状況を観察しながら掘り下げた。

出土遺物については、出土状況に特徴のあるものなどは、付番して出土状況図の作成、写真撮影を行い取り上げた。

6 記録作成

遺構図・土層図は、センター職員およびその指導のもとに発掘作業員が作成した。測量基準杭を基準とする簡易遺方測量を基本としたが、遺構実測支援システム（ソフトウェア遺構くんCubic）を用いた測量も一部実施した。遺構図は中地区（8m×8m）単位に区切った割付図や、建物跡などの個別図を作成した。縮尺は1：20を基本とし、必要に応じて1：10図、1：40図を作成した。調査区・トレンチ配置図、地形図の作成は、業務委託を基本としたが、一部、遺構実測支援システムを用いてセンター職員および発掘作業員が行った。

写真撮影は、6×7フィルムカメラ（マミヤRB/ペンタックス）、35mmフィルムカメラ（ニコンFM2）または35mm相当の一眼レフデジタルカメラ（ペンタックスK-7）を併用して行った。フィルムは、モノクロネガフィルム（フジネオパン100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100）を使用した。撮影はすべてセンター職員が行い、現像と焼付けは業務委託とした。

7 自然科学分析

北畑遺跡群と北裏遺跡群で業務委託により放射性炭素年代測定、珪藻、花粉、植物珪酸体・灰像分析、樹種同定、火山灰分析、種実同定、リン・カルシウム分析を実施した。

北畑遺跡群では、放射性炭素年代測定、樹種同定を検出された水田の上限年代と当時の環境を知るため、珪藻、花粉、植物珪酸体・灰像分析を稲ほかの栽培植物の有無、周辺の植生、旧流路内の乾湿、水域環境を知るために実施した。

北裏遺跡群では、放射性炭素年代測定と火山灰分析を方形周溝墓の埋没年代を知るため、リン・カルシウム分析を木棺墓内の骨の有無と位置を探るため、放射性炭素年代測定と種実同定を中世の井戸の年代を知るため、樹種同定を中世の井戸枠の材質を知るために実施した。

第2節 整理等作業の方法

1 遺物の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品・陶磁器、石器・石製品、金属製品に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品・陶磁器は接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器・石製品は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。金属製品は観察・計測を行って、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は遺跡ごと、材質ごとに管理番号を付して遺物管理台帳に登録した。報告書掲載遺物については観察表を作成した。

実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器や須恵

器、銭貨は拓本を行った。トレースは、石器・石製品と金属製品は埋文センターにおいて製図ペンをを用いた手トレースを行ったが、土器・土製品・陶磁器については描画ソフトIllustratorを用いたデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustratorを用いてデジタル図版データを作成した。

2 記録類の整理

(1) 遺構図類の整理

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、堅穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原図を作成した。修正図や2次原図をもとに、Illustratorを用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、土層図、遺構分布図(全体図)などのデジタル図版データを作成した。

(2) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、遺跡別に写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。フィルム写真は遺跡別ごと、撮影順にアルバムに収納した。モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムは、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納した。デジタル写真はJPEGおよびLAWデータを遺跡ごと、撮影順にハードディスクに記録した。

遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラを使用した。DVD収録の遺物写真は極力カラーデータを用いている。

3 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、2018(平成30)年度に着手した。第1章から第3章に5遺跡全体を通した調査経緯、地理的・歴史的環境、基本的調査方法についてまとめ、第4章から第8章で各遺跡の報告を行い、第10章に総括を掲載した。第4章から第9章は、遺跡の特徴を理解しやすい工夫し、章末に小結を設けた。

(2) 資料の収納

遺物は遺跡ごと、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・グリッド等の地点別にテンパコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号(図面番号)を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分け、写真収納台帳に登録し、アルバム(ファイル)に収納した。

デジタルデータについては、センターで作成したデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは納入時点でCDないしDVDに記録済みである。

第4章 北畑遺跡群

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

北畑遺跡群は、佐久平西部の佐久市桜井地籍に所在し、遺跡北方を西流する千曲川左岸の河岸段丘上で、千曲川に向かって緩やかに傾斜する平坦地に立地する(第8図)。北側を千曲川の段丘崖、西側を片貝川に画された段丘縁辺部で、千曲川現河床との比高は10mである。

近隣には、東側に宮浦遺跡群や上北谷遺跡群があり、その東方には時期不明の堅穴状遺構や中世の土坑が検出された平馬塚遺跡群や未調査の平馬塚古墳がある。西側には今回調査された仁東餅遺跡、北裏遺跡群、西東山遺跡があり、その西方には弥生時代中・後期の堅穴建物跡や弥生時代後期の壺棺墓が検出された西裏遺跡群がある。

2 調査の経過

北畑遺跡群では以前から弥生土器や古代の土器が採集されていたが、平成15年の県教委による試掘調査で水田跡と考えられる黒色土層や古代の土器片が出土し、12,000㎡余を調査することになった。

平成15年は層位の確認と残地への水路の確保のために調査区を調査前の筆ごとにA～O区に分けて、筆境を残して調査を行った(第9図)。調査区中央を南北に貫く市道の東側(A～I区)で、砂礫層を基盤とした起伏のある地形が確認され、高まり部分では遺物包含層が削平されて遺構は検出されなかったが、窪地部分では水田面を2面検出した。水田跡の西側(C・E～I区)の微高地を挟んだ低地では溝や自然流路が検出され、縄文時代中期後葉の土器片、弥生時代中期の土器片、弥生時代の打製石斧が多量に出土する部分もあった。市道の西側(J～O区)は比較的平坦な地形であったが、黒褐色土の遺物包含層で主に縄文土器が採集されるにとどまった(第10図)。

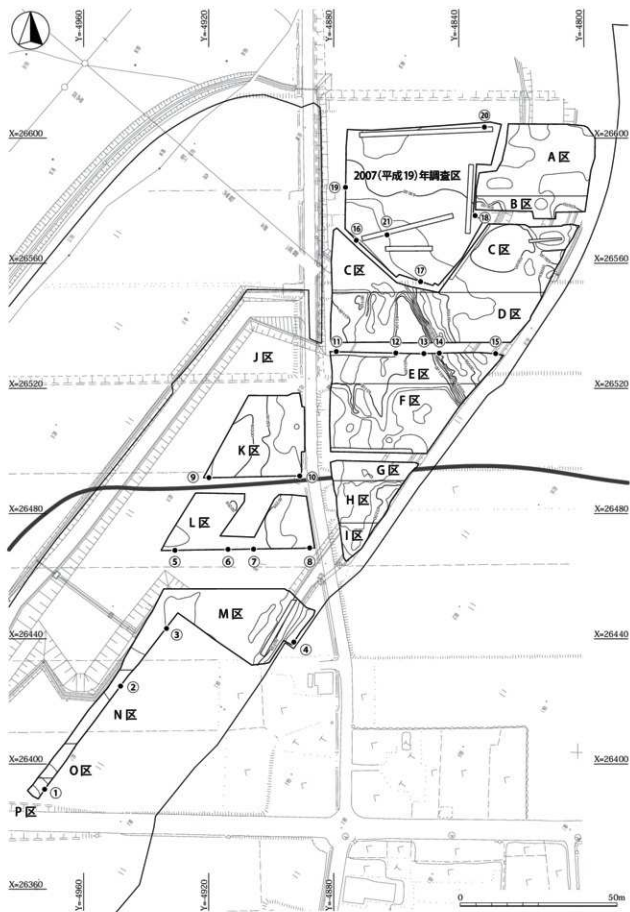
平成19年には平成15年の調査で残った部分2,200㎡(19年度調査区)について調査したが、圃場整備時に基盤の砂礫層まで削平されており、C区からつながる自然流路2条が検出されただけで、遺構は検出されなかった。

3 基本土層

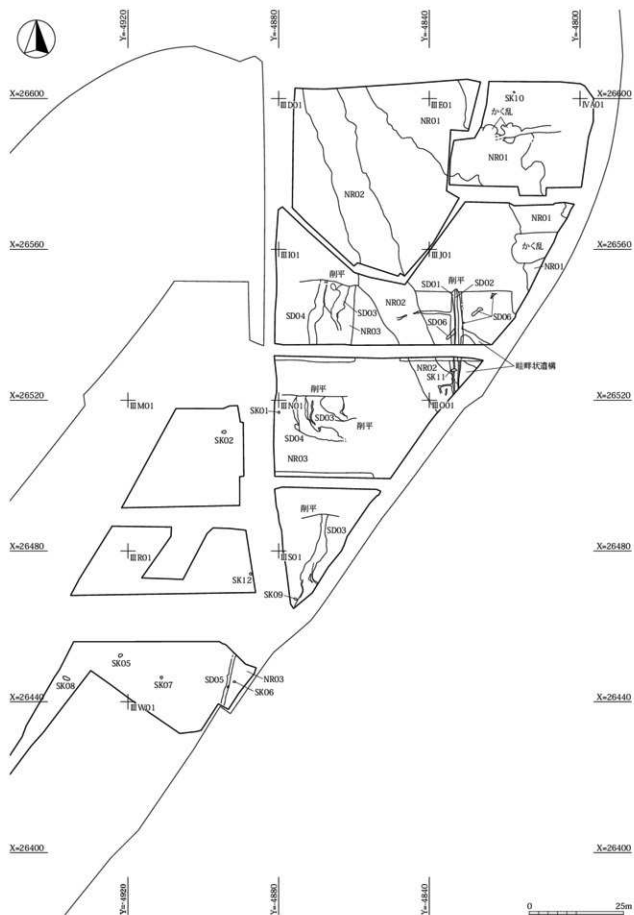
調査区内は、基盤となるX層の礫層の上を片貝川によって上流からもたらされたと考えられるV～IX層の砂層・砂礫層が覆っている。これらの層は片貝川の氾濫が繰り返されたことにより、幾層にも分かれる複雑な堆積状況を示している。また旧流路の移動による浸食も繰り返されて起伏に富んだ地形となり、窪地となった市道の東側部分にはⅢ・Ⅳ層の黒色～黒褐色の粘質土が堆積する。この黒色土層の堆積した窪地は水田として利用され、その上をⅡ層の旧耕作土が覆っている。その後圃場整備が行われ、標高の高い市道西側や、市道東側でも小高い部分は削平され、その上を圃場整備の埋設土や現耕作土のⅠ層が覆って、全体に緩傾斜の現地形となっている(第11・12図)。



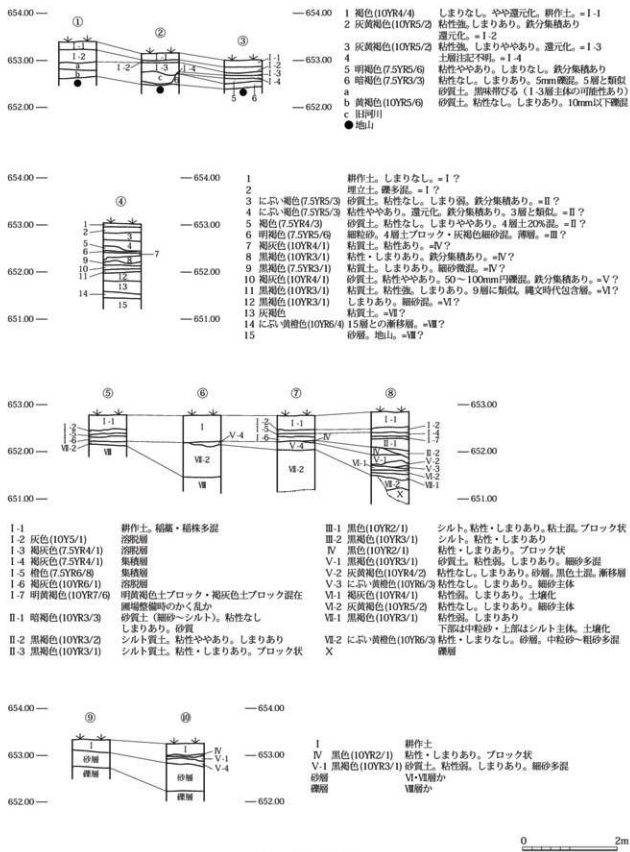
第8図 遺跡範囲・調査位置図



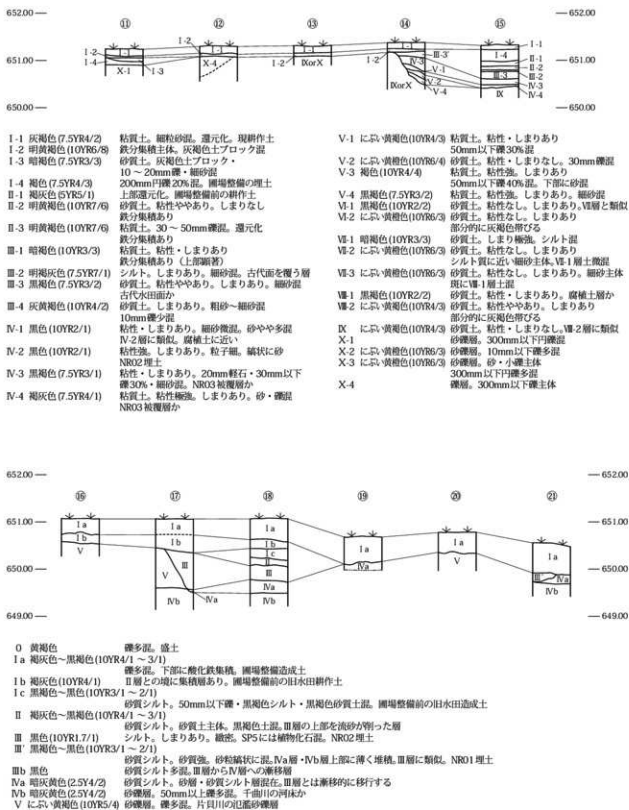
第9図 トレンチ・調査区配置図



第10図 遺構全体図



第11図 土層柱状図 1



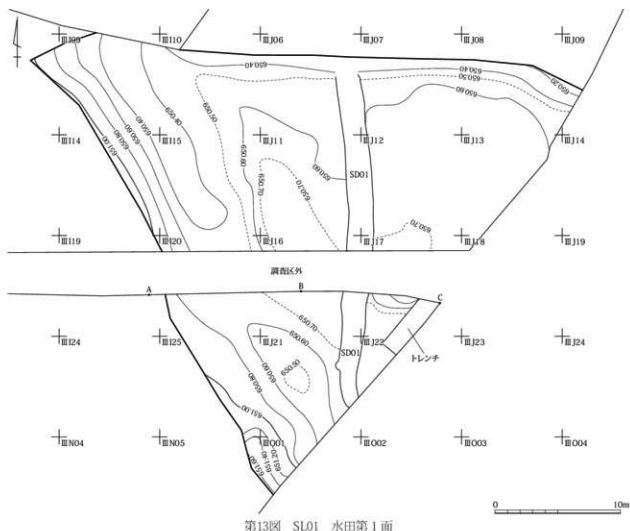
第12図 土層柱状図2

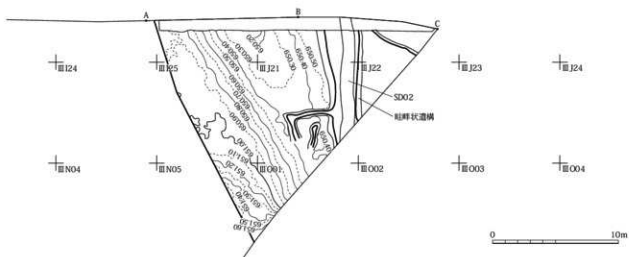
第2節 遺構と遺物

1 水田跡

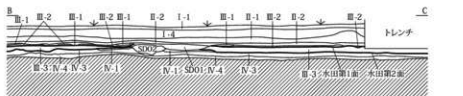
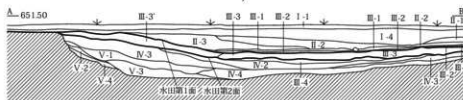
第1水田面 (第13図、PL.2)

位置：D・E区東部ⅢI08～25、J06～22 検出：Ⅲ-3層黒褐色土層上面で検出した。形状・規模：東側は調査区外で、北側はⅢ-3層が削平されて検出されず、西側は自然流路のNR02に切られ、その西側は基盤層のX層の高まりとなっている。したがって、検出された水田面は3方をこの調査区域、削平面、基盤層の高まりによって画された三角形の部分約800㎡である。遺構の重複：SD01に切られるが、SD01自体が第1水田面の畦畔の基部を誤認したもので同時存在したと考える。堆積状況：Ⅱ-2～Ⅲ-1層の鉄分が集積した砂質土で埋没し、Ⅲ-2層の灰白色シルト質土にまだらに覆われる。西側X層礫層の高まりとの間には約4m幅の自然流路NR02があり、礫混じりのⅣ-2層で埋没している。施設：畦畔や溝などの施設は検出されていないがSD01が第1水田面に伴う大畔であったと考える。遺物：埋土のⅡ-2～Ⅲ-1層中から黒色土器や須恵器の小片、北宋銭が、散発的に出土している。時期：水田面の埋土出土遺物が9世紀以降のものであることから9世紀以前に埋没しており、SD01が第1水田面に伴う大畔であったとすると8世紀中葉のものとなる。所見など：西側のNR02との境に畦畔がないことから水田





0 10m



0 4m

- | | |
|---|---|
| <p>I-1 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土。細粒砂混。還元化。現耕作土</p> <p>I-4 褐色(7.5YR4/3) 200mm厚層20%混。圃場整備の埋土</p> <p>II-1 褐灰色(5YR5/1) 上部還元化。圃場整備時の耕作土</p> <p>II-2 明黄褐色(10YR7/6) 砂質土。粘性ややあり。しまりなし。鉄分集積あり</p> <p>II-3 明黄褐色(10YR7/6) 砂質土。30~50mm礫混。還元化。鉄分集積あり</p> <p>III-1 暗褐色(10YR3/3) 粘質土。粘性・しまりあり。鉄分集積あり(上部顕著)</p> <p>III-2 明褐色(7.5YR7/1) シルト。しまりあり。細砂混。古代面を覆う層</p> <p>III-3 黒褐色(7.5YR3/2) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり。細砂混。古代水田面か</p> <p>III-4 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土。しまりあり。粗砂~細砂混。10mm礫少混。NRO2埋土か</p> | <p>IV-1 黒色(10YR2/1) 粘性・しまりあり。細砂微混。砂やや多混</p> <p>IV-2 黒色(10YR2/1) IV-2層に類似。腐植土に近い</p> <p>IV-3 黒褐色(7.5YR3/1) 粘性強。しまりあり。粒子細</p> <p>IV-4 褐灰色(7.5YR4/1) 粘状に均混。NRO2埋土</p> <p>V-1 にい黄褐色(10YR4/3) 粘性・しまりあり</p> <p>V-2 にい黄褐色(10YR6/4) 20mm軽石・30mm以下礫30%・細砂混</p> <p>V-3 褐色(10YR4/4) 粘質土。粘性強。しまりあり</p> <p>V-4 黒褐色(7.5YR3/2) 粘質土。粘性強。しまりあり。細砂混</p> |
|---|---|

第14図 SLO2 水田第2畝

面として機能するが疑問で、検出時にはⅢ-3層黒褐色土層の上面を水田面としてよいかどうか判断がつかねた。その後、この層を掘り下げてⅣ層黒色土の上面まで掘り下げたところ、直径10cm程度の楕円形の窪みが無数に見られ、上層からの圧力によるものと考えられた。その成因を耕作時の踏みしめや鎌等での掘り起しと考え、Ⅲ-3層上面を水田面と判断した。中央を南北に走るSD01は、水田面をまだらに覆うⅢ-2層シルト質土中でプランが確認されたが、トレンチ等で断面が確認しづらく、水田面に伴う大畔の基部であったと考える。

第2水田面 (第14図、PL2)

位置：D・E区東部ⅢI8～25、J06～22 検出：第1水田面調査後のⅢ-3層を手作業で掘り下げ中にⅣ-1またはⅣ-3層黒色土層の上面で検出した。形状・規模：東側は調査区外で、北側は削平されて検出されず、西側はNR02とその西側の基盤層X層の高まりによって画される。したがって、検出された水田面は第1水田面と同じ3方を調査区域、削平面、基盤層の高まりによって画された三角形の部分約800㎡である。遺構の重複：SD02に切られるが、SD02が第2水田面に伴う水路で、同時存在したと考える。堆積状況：第1水田面を形成するⅢ-3層で埋没する。西側のNR02は礫混じりのⅣ-3層で埋没する。施設：中央を南北に走るSD02は溝を伴った大畔と考えられ、そこから西側に2条と南東方向に1条小畔が伸びる。西側に伸びる小畔のうち北側のものは、西寄りに水口を持ち、南側のものは西から南に鉤形に曲がる。遺物：水田層のⅣ-1・3層から弥生時代中期の土器片が出土している。時期：出土遺物から弥生時代中期以降で8世紀までの間に埋没したと考えられるが、第1水田面のSD01と第2水田面のSD02の位置が、わずかにずれるもののほぼ重なることから、第2水田面の溝SD02を埋めて第1水田面の畦畔が作られ、連続して耕作されたと考える。したがって、第1水田面の帰属時期にあたる8世紀以前でも8世紀に近い時期のものと考えられる。

2 溝・流路跡

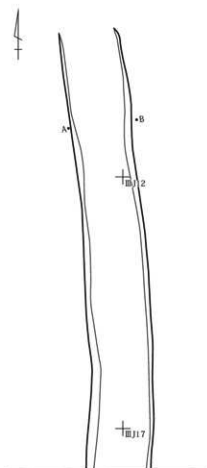
SD01 (第15図、PL1)

位置：D・E区ⅢJ06・07～21・22 検出：第1水田面をまだらに覆うⅢ-2層シルト層上面でプランが検出された。形状・規模：北部を削平されて、南部は調査区外で全長は不明であるが、確認された長さ25m、幅2m、深さ約30cmの南北に延びる直線的な溝としたが、SD02と重なる部分以外は底面の識別が困難である。遺構の重複：下層のSD02を切る。堆積状況：砂の混入が少ない以外は第1水田面のⅢ-3層と類似した黒色土の単層である。施設：検出されていない。遺物：図示した須恵器環(第27図1)ほか須恵器環4点が出土している。時期：出土遺物から、8世紀中葉頃と推測する。所見など：Ⅲ-2層シルト質土を切るプランが明確であったが、断面で埋土と水田土壌との区別が困難であり、第1水田面に伴う畦畔の基部を溝と誤認したものと考えられる。

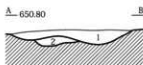
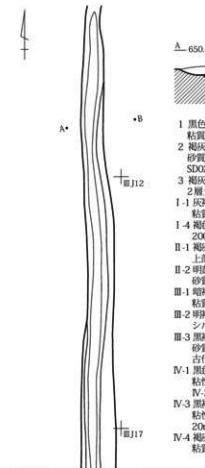
SD02 (第15図、PL1)

位置：D・E区ⅢJ06～21 検出：SD01調査時のサブトレンチ断面で、粗砂の堆積が確認された。当初SD01の下層として掘り進めたが、SD01とほぼ重なるものプランにずれが見られ、第1水田面を形成するⅢ-3層を掘り下げ後、SD01とは別遺構として調査した。形状・規模：北部を削平されて、南部は調査区外で全長は不明であるが、確認された長さ25m、幅50～70m、深さ約40cmの南北に延びる直線的な溝である。両岸にはわずかにあるが、畦畔上の高まりがあり、第2水田面に伴う大畦畔中の溝と考える。遺構の重複：上層のSD01に切られる。第2水田面を切るのではなく、第2水田面に伴うものと考えられる。堆積状況：シルトが層状に混じる粗砂単層である。施設：検出されていない。遺物：出土していない。時期：第2水田面と同時期の8世紀に近い時期と考える。

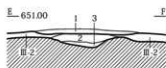
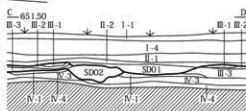
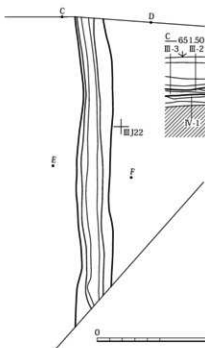
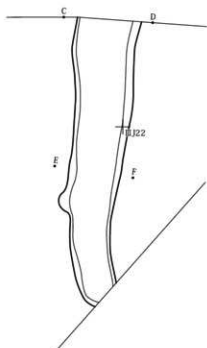
SD01



SD02



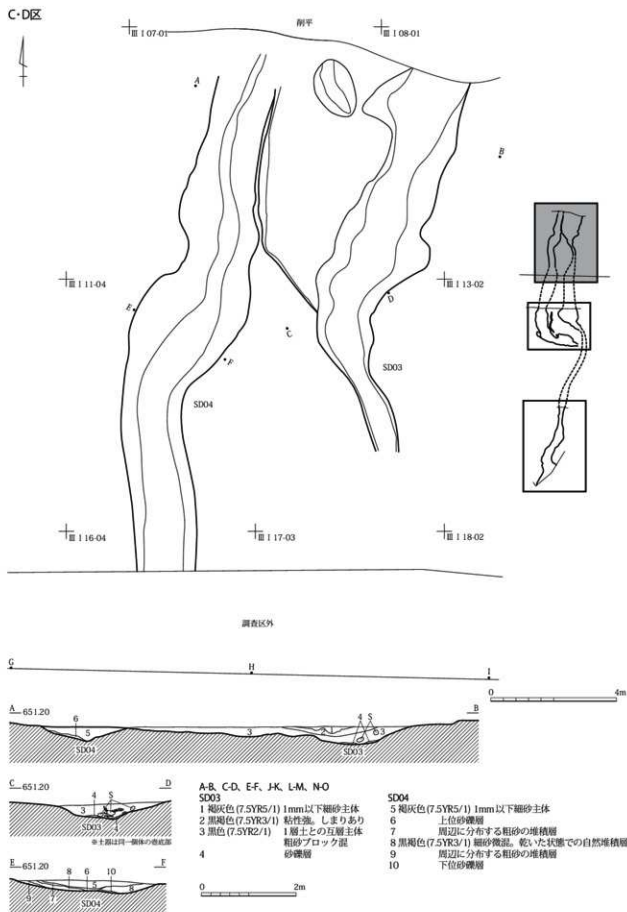
- 1 黒色 (5YR1.7/1)
粘質土。粘性強。しまりあり。SD01埋土
- 2 褐灰色 (5YR5/1)
砂質土。粘性弱。しまり普通。黒色粘質土10%混
SD02埋土
- 3 褐灰色 (5YR5/1)
2層土主体。黒褐色粘質土10%混。SD02埋土
- I-1 灰褐色 (7.5YR4/2)
粘質土。細粒砂混。還元化。現耕作土
- I-4 褐色 (7.5YR4/3)
200mm厚層20%混。圃場整備の埋土
- II-1 褐灰色 (5YR5/1)
上部還元化。圃場整備前の耕作土
- II-2 明黄褐色 (10YR7/6)
砂質土。粘性ややあり。しまりなし。鉄分集積あり
- III-1 暗褐色 (10YR3/3)
粘質土。粘性・しまりあり。鉄分集積あり(上部顕著)
- III-2 明褐灰色 (7.5YR7/1)
シルト。しまりあり。細砂混。古代面を覆う層
- III-3 黒褐色 (7.5YR3/2)
砂質土。粘性ややあり。しまりあり。細砂混
古代水田面か
- IV-1 黒色 (10YR2/1)
粘性・しまりあり。細砂微混。砂や多混
- IV-2 細に顆粒。腐植土に近い
- IV-3 黒褐色 (7.5YR3/1)
粘性・しまりあり
- IV-4 褐灰色 (7.5YR4/1)
20mm軽石・30mm以下礫30%・細砂混
粘質土。粘性極強。しまりあり。砂・礫混



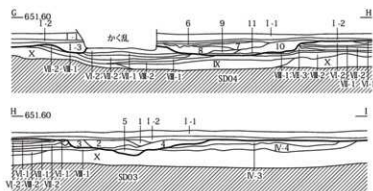
0 2m

0 4m

第15図 SD01・02 遺構図



第16図 SD03・04 遺構図1



G-H, H4

SD03

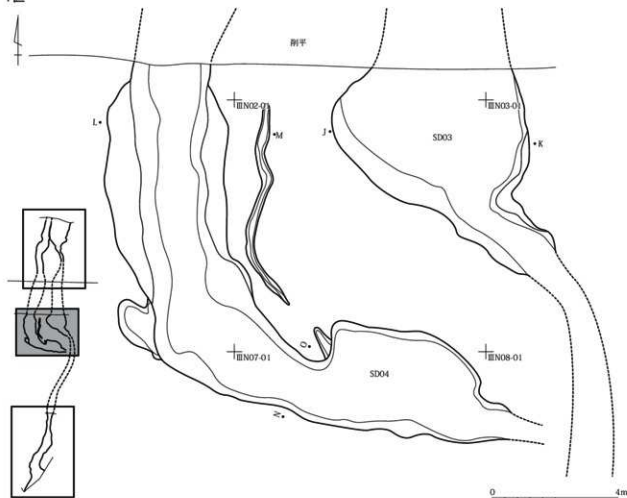
- 1 黒褐色(10YR3/2) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり
- 2 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土。粘性なし。しまりあり。10mm以下礫30%混
- 3 暗褐色(10YR3/4) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり
- 4 暗褐色(10YR3/3) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり。細砂混
- 5 暗褐色(10YR3/3) 砂質土。粘性・しまりなし。細砂多混。30mm以下礫混

SD04

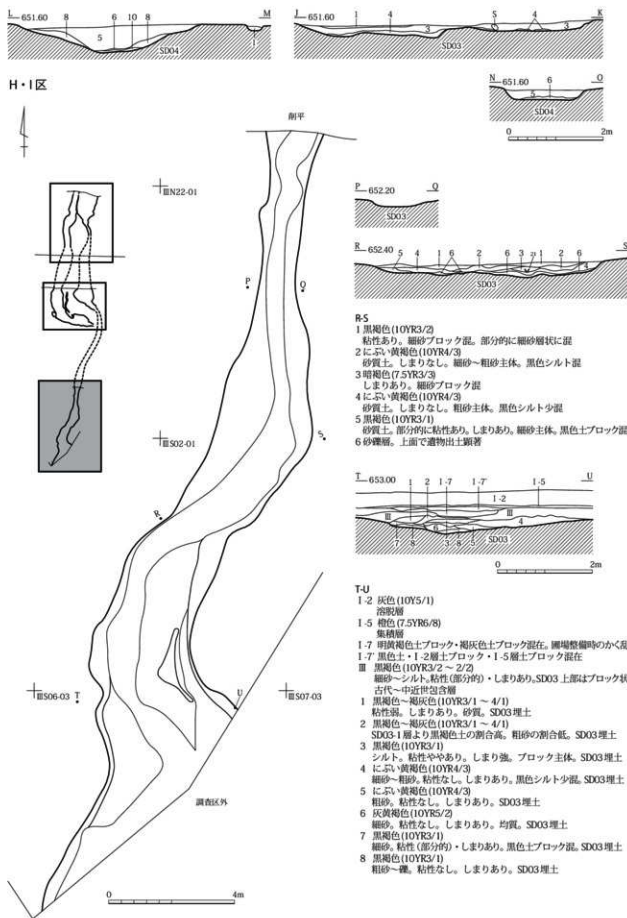
- 6 褐色(7.5YR4/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。粗砂主体
- 7 暗褐色(7.5YR3/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。細砂主体。灰白色細砂混
- 8 暗褐色(10YR3/3) 砂質土。粘性あり。しまり強
- 9 灰褐色(7.5YR4/2) 砂質土。粘性なし。しまりあり。細砂主体。粗砂混
- 10 にぶい黄褐色(10YR4/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。粗砂主体。灰白色細砂50%混
- 11 灰褐色(7.5YR4/2) 砂質土。5mm礫40%混。砂礫顯著

- 1-1 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土。細粒砂混。還元化。現耕作土
- 1-2 明黄褐色(10YR6/8) 鉄分集積主体。灰褐色土ブロック混
- 1-3 暗褐色(7.5YR3/3) 砂質土。灰褐色土ブロック・10~20mm礫・細砂混
- N-3 黒褐色(7.5YR3/1) 粘質土。しまりあり。20mm軽石・30mm以下礫30%・細砂混
- N-4 黒灰色(10YR2/1) 粘質土。粘性極強。しまりあり。砂・礫混
- VI-1 黒褐色(10YR2/2) 砂質土。粘性なし。しまりあり。薄層と類似
- VI-2 にぶい黄褐色(10YR5/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。部分的に灰褐色帯びる
- VI-1 暗褐色(10YR3/3) 砂質土。しまり極強。シルト混
- VI-2 にぶい黄褐色(10YR5/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。シルト質に近い。細砂主体。薄1層土微混
- VI-3 にぶい黄褐色(10YR5/3) 砂質土。粘性なし。しまりあり。粗砂主体。既に薄1層土混
- VI-1 黒褐色(10YR2/2) 砂質土。粘性・しまりあり。腐植土層か
- VI-2 にぶい黄褐色(10YR4/3) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり。部分的に灰褐色帯びる
- IX にぶい黄褐色(10YR4/3) 砂質土。粘性・しまりなし。VI-2層に類似
- X 砂礫層。砂・小礫主体。10mm以下礫・300mm以下礫多混

F区

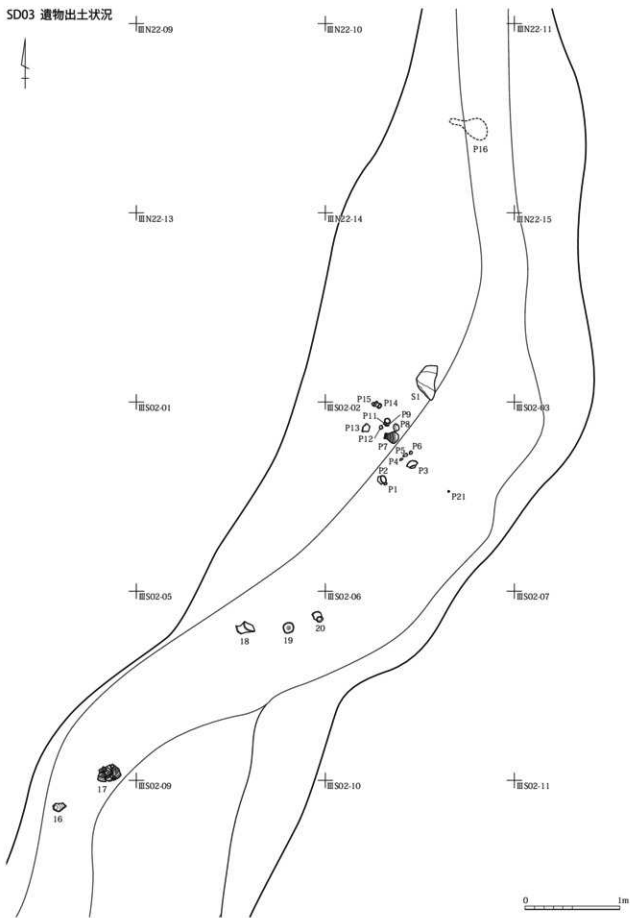


第17図 SD03・04 遺構図2



第18図 SD03・04 遺構図3

SD03 遺物出土状況



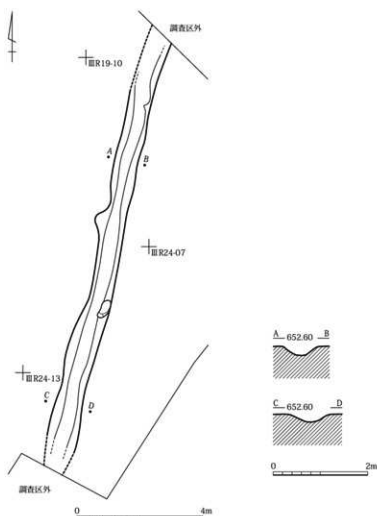
第19図 SD03・04 遺構図4

SD03 (第16~19図, PL1)

位置：D・E・F・G・I区ⅢI07~23, N01~22, S01~06 検出：Ⅱ層までを重機で掘り下げ後、Ⅸ層黄褐色砂質土、Ⅹ層砂礫層の上面で黒褐色砂質土のプランが確認された。形状・規模：北部を削平されて、南部は調査区外で全長は不明であるが、確認長86m、幅0.7~6.5m、深さ約40cmの幅を変えながら南北に蛇行して走る溝である。遺構の重複：北端でSD04をわずかに切る。堆積状況：細砂と黒褐色の互層が主体で、最下層には直径10mm以下の礫を含む砂礫層が厚いところで10cmたまっており、水流があったことが窺える。施設：検出されていない。遺物：最下層の砂礫層やその直上から弥生時代中期の土器片が多量に出土している(第27図)。いずれも摩滅し上流から流下したもので、2の縄文土器は切りあうSD04からの混入と考えられる。時期：出土土器から、弥生時代中期に存在した旧流路と考える。

SD04 (第16~19図, PL1)

位置：D・E・F・G・I区ⅢI07~21, N01~08 検出：Ⅱ層までを重機で掘り下げ後、Ⅸ層黄褐色砂質土、Ⅹ層砂礫層の上面で褐色砂質土のプランが確認された。形状・規模：北部と南部を削平されて、全長は不明であるが、確認長52m、幅2.0~4.5m、深さ約25cmの幅を変えながら南北にやや蛇行して走り、確認長南端で東側のSD03方向に90°曲がる溝である。遺構の重複：北端でSD03にわずかに切られる。堆積状況：ほぼ純粋な褐灰色細砂で、最下層には直径10mm程度の礫を含む砂礫層が4~10cmの厚さに堆積しており、水流があったことが窺える。施設：検出されていない。遺物：縄文時代中期後葉土器



第20図 SD05 遺構図

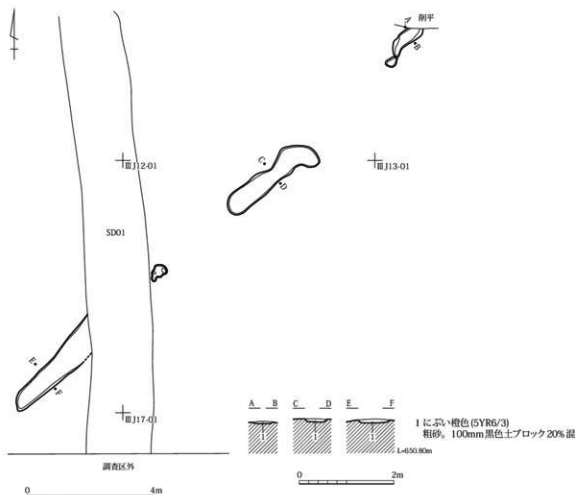
片が、最下層の砂礫層やその直上から多量に出土している（第28図）。いずれも摩滅し上流から流下したものと考えられる。 **時期**：出土土器から、縄文時代中期後葉に存在した旧流路と考える。

SD05（第20図）

位置：M区3、N01～22、1S01～06 **検出**：Ⅱ層までを重機で掘り下げ後、Ⅳ層黒色土上面で、黒褐色土のプランが確認された。 **形状・規模**：北部と南部は調査区外で全長は不明であるが、確認長14m、幅0.6～1.0m、深さ約20cmのほぼ南北に直線的に走る溝である。 **遺構の重複**：なし **堆積状況**：主体は黒褐色砂質土で底面近くにシルト質土がブロック状に混入する。 **施設**：検出されていない。 **遺物**：縄文時代中期後葉の土器片（36）が出土しているが、混入である。 **時期**：出土土器は混入で、時期は不明である。

SD06（第21図、PL2）

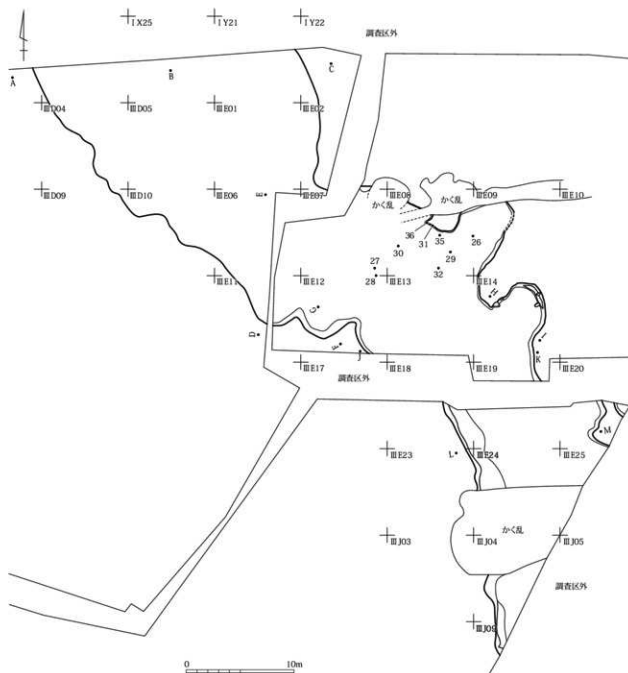
位置：D・E区東部Ⅲ108～25、J06～22 **検出**：第1水田面調査後Ⅲ～3層を手作業で掘り下げ中にⅢ～3層中で検出した。 **形状・規模**：北部を削平されて全長は不明であるが、長さ2.5～0.4m、幅30～60cm、深さ約10cmと極浅い溝またはピットの不連続な並びで、確認長は12mである。1条の溝の上部が削平されて、底部の深い部分だけが残ったものとする。 **遺構の重複**：SD01に切られる。 **堆積状況**：にぶい橙色土の単層である。 **遺物**：出土していない。 **時期**：検出層位から第1水田面と第2水田面の間にある水田面に伴うものであり、8世紀に近い時期のものとする。



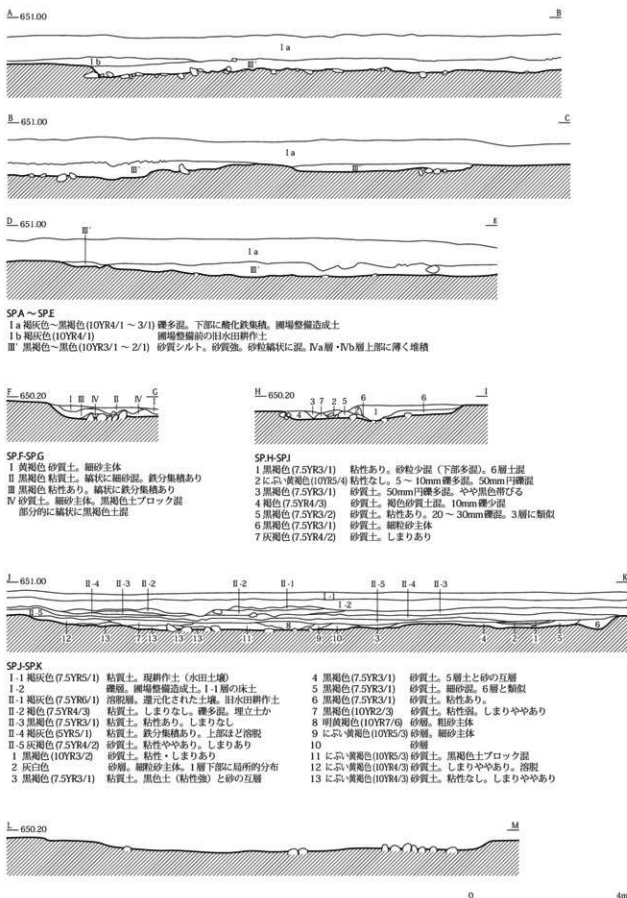
第21図 SD06 遺構図

NR01 (第22・23図, PL.2)

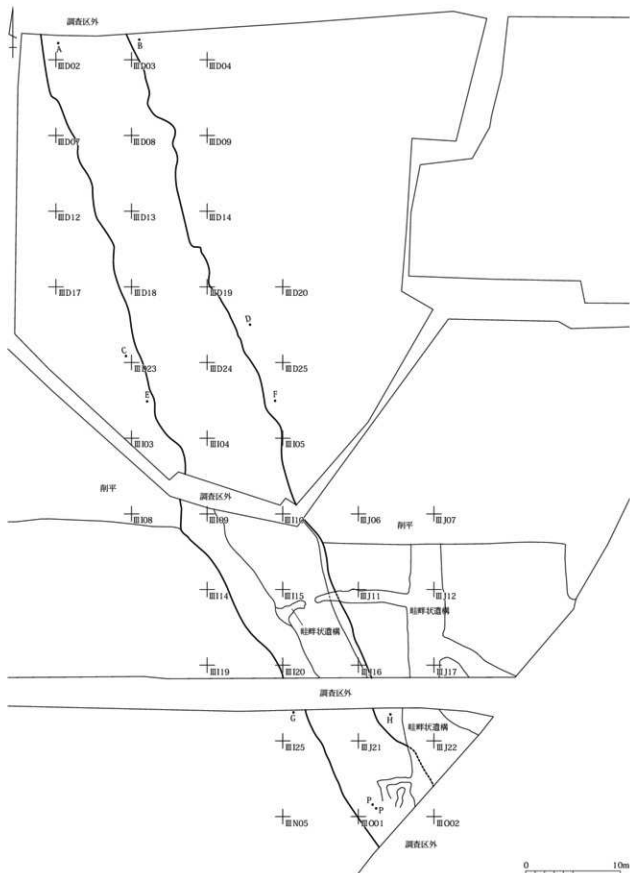
位置：D・E・F・21年度調査区 IX24・25、Y21、ⅢD4～10、E1～25、J4・5 検出：Ⅱ層までを重機で掘り下げた後、Ⅳ層黄褐色砂質土上面で黒褐色砂質土のプランが確認された。形状・規模：北部と南部が調査区外で全長は不明であるが、確認長、70m、幅10～15m、深さ約30cmの兩岸の出入りが激しい北西—南東方向にやや蛇行して流れる流路である。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色砂質土主体で、最下層に砂礫層がある。施設：検出されていない。遺物：埋土中よりや縄文時代中期後葉の土器片が多量に出土しているほか(第28図)、A地区西端のE7・8グリッドの砂礫層～黒褐色土中で直径30cm程度の円礫に混じって、石楾が10数mの範囲に比較的まとまって出土している(第31～33図)。何らかの土木工事中に円礫に挟まって抜けなくなり、遺棄されたことも考えられる。時期：出土遺物から、弥生時代中期に存在した旧流路と考える。



第22図 NR01 遺構図1



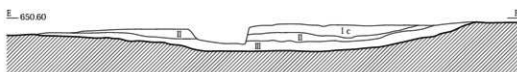
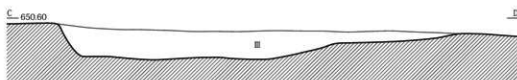
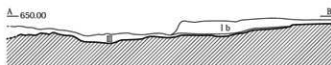
第23図 NR01 遺構図2



第24図 NR02 遺構図1

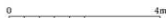
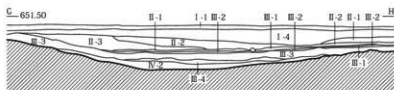
NR02 (第24・25図、PL2)

位置：A・B・C・21年度調査区ⅢD01～24、I03～25、J16～22、O01 検出：第2水田面検出時に第2水田面西端の基盤X層の高まりの間に、IV層黄褐色砂質土上面で帯状に黒褐色砂質土のプランが確認された。形状・規模：北部と南部が調査区外で全長は不明であるが、確認長約90m、幅6～10m、深さ約70cmの直線的に走る流路である。遺構の重複：第2水田面と同時期と考えられる。堆積状況：黒褐色砂質土主体で、最下層に砂礫層がある。施設：第2水田面の東西畦畔の延長部が底部に向かって伸びている。遺物：埋土中より縄文土器から青磁まで幅広い時代の遺物が出土している。時期：西側基盤層の高まりの存在により、流路を変えずに長期間存在したと考えられる。第2水田面の畦畔が、本流路の底部に向かって伸びていることから、8世紀頃に存在したことは確実で、須恵器環や青磁碗の出土から9世紀以降も存在したと考えられる。縄文土器や弥生土器は摩滅具合から上流から流下したものであり、上限の年代は不明である。



SPA～SPF

- I b 褐灰色(10YR4/1) 砂質シルト。50mm以下礫・黒褐色シルト・黒褐色砂質土混。圃場整備前の旧水田耕作土
- I c 黒褐色～黒色(10YR3/1～2/1) 砂質シルト。50mm以下礫・黒褐色シルト・黒褐色砂質土混。圃場整備前の旧水田造成土
- II 褐灰色～黒褐色(10YR4/1～3/1) 砂質シルト。砂質土主体。黒褐色土混。Ⅲ層の上部を流砂が閉じた層
- III 黒色(10YR1.7/1) シルト。しまりあり。緻密。NR02埋土



SPG-SPH

- I-1 灰褐色(7.5YR4/2) 粘質土。細粒砂混。還元化。現耕作土
- I-4 褐色(7.5YR4/3) 200mm円礫20%混。圃場整備の埋土
- II-1 褐灰色(5YR5/1) 上部還元化。圃場整備前の耕作土
- II-2 明黄褐色(10YR7/6) 砂質土。粘性ややあり。しまりなし。鉄分集積あり
- II-3 明黄褐色(10YR7/6) 粘質土。30～50mm礫混。還元化。鉄分集積あり
- II-1 暗褐色(10YR3/3) 粘質土。粘性・しまりあり。鉄分集積あり(上部顕著)
- II-2 明褐灰色(7.5YR7/1) シルト。しまりあり。細砂混。古代面を覆う層
- II-3 黒褐色(7.5YR3/2) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり。細砂混。古代水田面か
- IV-4 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質土。しまりあり。粗砂～細砂混。10mm礫少混。NR02埋土か
- IV-2 黒色(10YR2/1) 粘性強。しまりあり。粒子細。礫状に砂混。NR02埋土

第25図 NR02 遺構図2

3 土坑

各地区で大小の土坑が散発的に検出されているが、出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

SK01 (第26図)

位置：F区ⅢM05 検出：X層砂礫層上面で黒褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：長径60cm、短径50cmの楕円形で深さ10cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色細砂の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK02 (第26図)

位置：K区ⅢM09 検出：X層砂礫層上面で黒褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：長径60cm、短径50cmの楕円形で深さ15cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色粘質土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK04 (第26図)

位置：F区ⅢM05 検出：X層砂礫層上面で褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：長径60cm、短径50cmの楕円形で深さ15cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色細砂の単層黒褐色細砂の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK05 (第26図)

位置：M区ⅢQ20 検出：X層砂礫層上面で褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：長径110cm、短径80cmの不整な楕円形で深さ20cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：褐色砂質土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK06 (第23図)

位置：M区ⅢR24 検出：X層砂礫層上面で黒褐色土のプランが検出された。形状・規模：長径60cm、短径50cmの不整な楕円形で深さ10cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK07 (第26図)

位置：K区ⅢM09 検出：X層砂礫層上面で褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：直径70cmの不整な円形で深さ10cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：褐色砂質土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK08 (第26図)

位置：M区ⅢQ22・23 検出：X層砂礫層上面で褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：長径90cm、短径50cmの楕円形で深さ40cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：褐色砂質土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK09 (第26図)

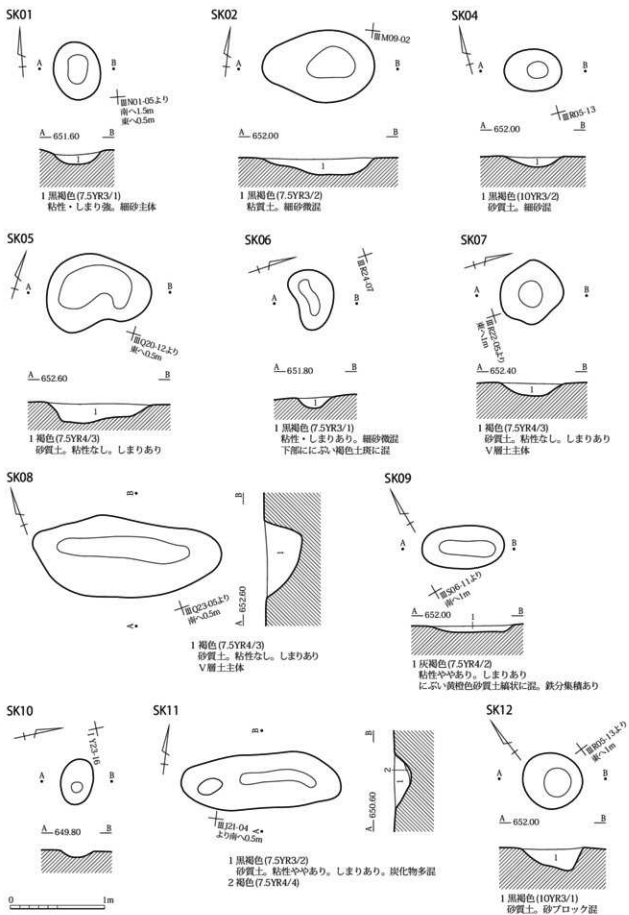
位置：I区ⅢS06 検出：X層砂礫層上面で灰褐色土のプランが検出された。形状・規模：長径110cm、短径80cmの長円形で深さ5cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：灰褐色土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK10 (第26図)

位置：A区ⅠY23 検出：X層砂礫層上面でプランが検出された。形状・規模：長径50cm、短径30cmの楕円形で深さ5cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：不明 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

SK11 (第26図)

位置：E区ⅢJ21 検出：第2水田面の黒色土上面でプランが検出された。形状・規模：長径170cm、短



第26図 SK01～12 遺構図

径60cmの長円形で深さ20cmである。遺構の重複：第2水田面を切る。堆積状況：黒褐色土主体で底面に褐色土の薄い層がある。施設：検出されていない。遺物：なし 時期：8世紀以降

SK12 (第26図)

位置：L区ⅢR05 検出：X層砂礫層上面で黒褐色砂質土のプランが検出された。形状・規模：直径60cmのほぼ円形で深さ25cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色砂質土の単層 施設：検出されていない。遺物：なし 時期：不明

4 遺物

(1) 土器

SD01 (第27図1、PL3)

1は灰黒色を呈する平底の須恵器坏で、体部下端と底部の間に段差があり、板状の底部からはみ出すように体部が巻き上げられたと推測する。底面は放射状にかすかな段差が見られ、回転糸切り痕を放射状にヘラナデして消したものと考えられる。8世紀中葉頃のものとして推測する。

SD03 (第27図2～29、PL3)

弥生時代中期の土器がまとめて出土している。2の縄文土器は切りあうSD04からの混入、27の土師器甕は上層からの混入と考える。3・4は弥生土器高坏の脚部で、外面を縦にヘラミガキした後、赤彩する。5～8は口縁部に刻みが入る甕で、7は頸部に平行沈線、胴部に横羽状文がヘラ描きされ、8は刻みが短沈線になっている。9・10は受口状口縁の甕で、9は口縁に縄文、頸部にヘラ描き横走沈線、10は胴部に櫛描波状文と垂下文が施される。11～14は甕の胴部で、11・14はコの字重ね文、12は櫛描羽状沈線、13は櫛描波状文が施される。15はヘラ描き波状文が施された甕の底部である。16はミニチュア台付甕、17も台付甕で脚部である。18・19は小型壺の頸部～胴部で、18は頸部から胴部上半にかけてヘラ描きの横走文と波状文、19は頸部の平行沈線間に縄文、胴部中位に櫛描横走文と波状文が施される。20～23は壺頸部で、20は小さく外反する口縁の先に突起がありその横に2個一対の小孔が穿たれている。口縁の半周以上が欠損しており、突起や小孔の対の数は不明である。22～23は口縁部に縄文、頸部または肩部を横走沈線で区切り縄文を施すもので、23は口縁に突起があり、頸部縄文の下には舌状垂下文が施される。24～26は壺胴部片で、24・26は舌状垂下文、25は横走沈線の間にヘラ描き波状文や縄文が施される。28は赤彩される匙形土製品で、摩滅しているが匙部外面は縦にヘラ削りされ、柄もヘラ削りされて断面が方形気味となっている。29は人面付鳥形土器の注口部で、貼付されたときか状の部分には2個の貫通孔の上下と間に刺突が見られる。ときか状部分の裏側には人面の表現があり、貼付された鼻状の隆帯の横に目のような円形の沈線と耳のような小突起があり、耳の下と後ろには縦横の沈線と刺突が施され、髪のみまたは髯面の表現となっている。(第28図30～35)

SD04 (第28図30～35)

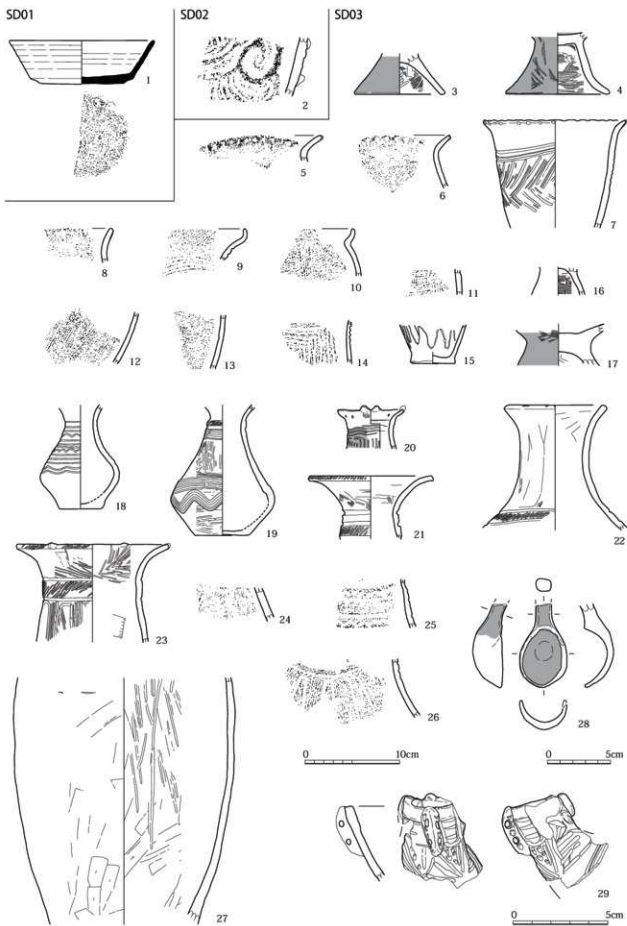
縄文時代中期後葉の土器が主体であるが、縄文時代晩期の土器も混入している。30～32は口縁部で、30は押引文、31は楕円区画と渦巻文の見られる加曾利E式、32は唐草文系土器の口縁部である。33・34は胴部で、雨垂刺突文が施される。35は、器面が細密条痕で調整される晩期水式のもので、椗のような圧痕も見られる。

SD05 (第28図36)

逆U字の沈線区画と縄文の付された縄文時代後期の土器である。

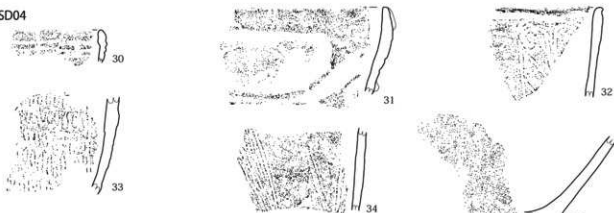
NR01 (第28図37～46)

弥生時代中期の土器が主体であるが縄文時代後期の土器が混入している。37は縄文時代後期掘之内式の



第27图 土器(1)、土製品

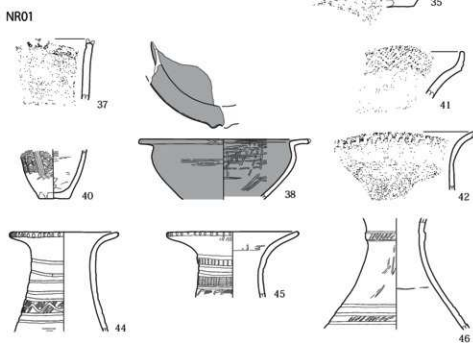
SD04



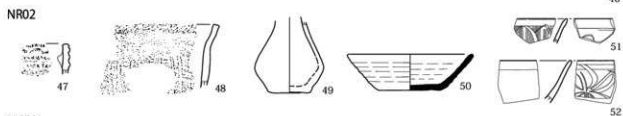
SD05



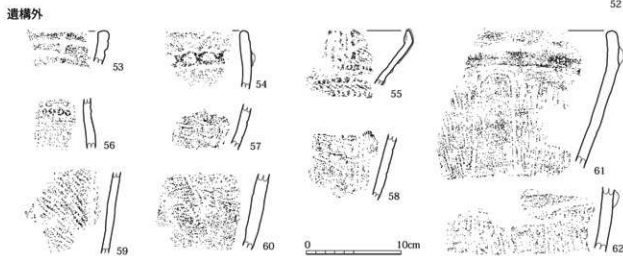
NR01



NR02



遺構外



第28図 土器(2)

鉢口縁部で、内面に沈線が巡り、口縁に刺突による8の字状の小突起がつく。38は赤彩の弥生土器鉢で、台付のものと考えられる。39-42は甕で、39は口縁に縄文、胴部に櫛描波状文、41は口縁部に山形文と縄文、42は口縁に刻み、胴部に櫛描波状文と垂下文が施される。40はミニチュアの甕であるが、胴部に櫛描波状文と垂下文が施される。

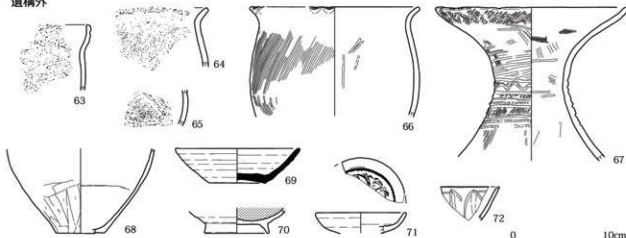
NR02 (第28図47-52, PL.3)

縄文土器から青磁碗まで幅広い時期の遺物が出土している。47は結節浮文や波状隆線が施される縄文時代前期末葉の深鉢の口縁部である。48は口縁に縄文、胴部にヘラ描きの羽状沈線と垂下文が施される弥生土器甕である。49は小形の弥生土器壺であるが、摩滅が著しく文様はほとんど残っていない。50は底面が回転糸切りのままの須恵器環で、底径も小さくSD01出土のものとは比べて明らかに後出である。51・52は各蓮弁文、割花文が施された青磁碗で、平安時代末の12世紀頃のものである。

遺構外 (第28図53-62・29図63-72, PL.3)

遺構出土のものと同じく、縄文時代から古代末までのものが出土しているが、縄文土器には前期末～中期初頭の遺構出土のものより幅広い時期のものが出土している。結節浮文の付される55、半截竹管と凹形浮文の付される56は縄文時代前期末、雨垂刺突文の付される57・58・61・62は中期後葉、圧痕隆帯文の付される54、縄文地文で沈線が付される59・60は後期のものである。63-66は弥生時代中期の甕で、63は口縁部にヘラ描きの波状沈線と縄文、胴部に羽状沈線が施され、64は口縁に縄文が付され胴部ハケ調整、65は胴部ハケ調整の後、ヘラ描き羽状沈線、66は口縁が押捺され胴部はハケ調整の後、最大径付近に列点文が巡る。67は弥生土器壺で、口縁部に縄文とヘラ描き波状沈線が付され、頸部は沈線で4段に区画された中を上からヘラ描き波状沈線+縄文、縄文+2段の押引文、縄文、2段の押引文で充填している。68は土器甕で、胴部を縦ヘラ削りするが、一部横に削っている部分があり、69は底面が回転糸切りのままの須恵器環、70は黒色土器の高台付碗で9世紀前半頃のものである。71は内面に割花文の付く青磁皿、72は蓮弁文の付く青磁碗で12世紀頃のものである。

遺構外



第29図 土器(3)

(2) 石器・石製品

遺構から164点、遺構外から491点、合計655点が出土した(第30-34図, PL.3・4)。時期は、出土した土器の多くの時期が弥生時代中期であるため、その時期の石器と推測するが、縄文時代後期の土器も出土しているので弥生時代中期以外の石器も含む可能性が高い。石製品については硯が存在するが、時期は不明

である。

出土した石器の器種は、石鎌・石鎌未製品、石錐、スクレイパー、横刃形石器、二次加工がある剥片、両極石器、打製石斧、石鎌、磨石、敲石、石皿、石核、剥片、硯、管玉である。

本稿では、石器・石製品を器種ごとに一括して報告する。実測図や写真の掲載については、各器種の完形品や特徴を良好に備えているものを抽出した。器種によっては、実測図と写真を掲載していないものも存在する。

石鎌・石鎌未製品 (第30図1～10, PL.3)

石鎌は出土した11点中、6点を掲載した。1・3～6は基部に抉りが入る凹基有茎鎌、2は基部が直線的な平基有茎鎌で、石材は非掲載のものを含めて全て黒曜石である。

石鎌未製品は出土した5点中、4点を掲載した。7～10は製品よりも厚く、重さも製品としたものが1.0g以下であるのに対して、未製品は1.0gを超える。全体的に粗い加工剝離を施し、おおよその形状を整えている段階の石鎌未製品と考える。9は不明確だが、基部が突出することから、有茎鎌の未製品であろう。石材は、非掲載のものを含めて全て黒曜石である。

石錐 (第30図11・12, PL.3)

出土した2点を掲載した。11は、縦長のつまみ部下端に錐部を作出する。12は欠損のため不明だが、残存部からすれば明確なつまみ部をもたず、上端部から徐々に幅を狭くしながら錐部を作出すると考える。石材はともに黒曜石である。

スクレイパー (第30図13・14, PL.3)

出土した2点を掲載した。13・14は表裏両面に加工を施す剥片を素材とし、搔器的な刃部を作出する。石材は黒曜石である。

横刃形石器 (第30図15～18, PL.3)

出土した4点を掲載した。15～18は小形もしくは大形の剥片を素材とし、長軸に対して平行方向の縁辺部に、使用痕の可能性が高い微細な剝離が連続する。15・18には、微細な剝離とともに摩擦痕が認められる。15は右側縁部に、16・18は上端部と片面に、17は上端部にそれぞれ自然面を残す。石材は全て粘板岩である。

打製石斧 (第31図19～23, PL.3)

出土した13点中、5点を掲載した。欠損品もあるが、平面形状は19・20が短冊形、21～23が撥形を呈する。20は、片面の広い範囲に自然面を残す。19・21・22は、刃部や側縁部などに使用痕の可能性が高い摩擦痕が認められる。石材は19・22・23が粘板岩、20・21が泥岩である。

石鎌 (第31～33図24～37, PL.3・4)

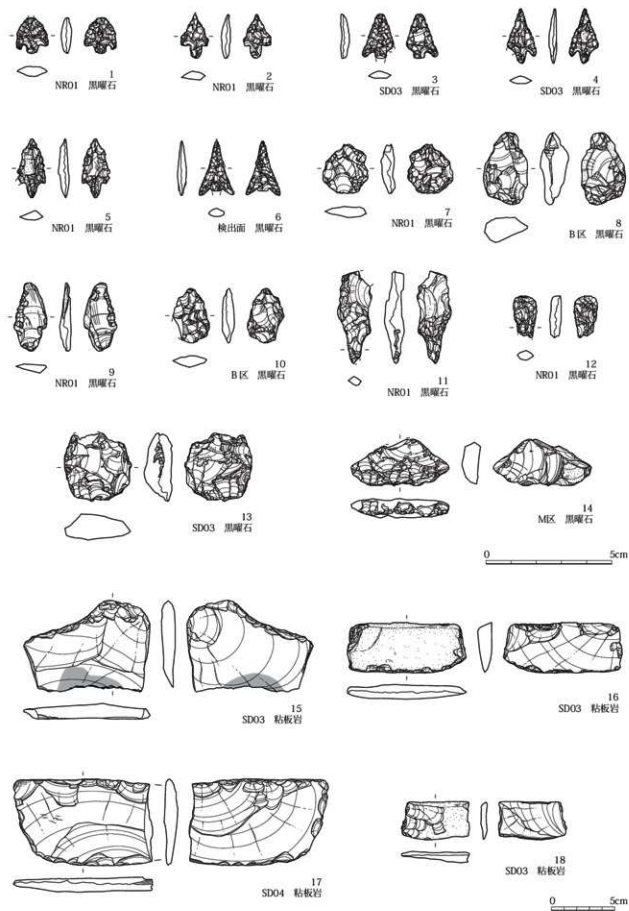
出土した30点中、14点を掲載した。側縁部に打製石斧と同様の連続的な階段状剝離を施すが、打製石斧よりも大形な点特徴で、本遺跡では出土点数が最も多い。平面形状は24・26・27などの短冊形や、31・33～36などの撥形が存在する。25・27・31・33～36は、刃部を中心に使用痕の可能性が高い摩擦痕が認められる。石材は全て黒色安山岩である。

磨石 (第34図38・39)

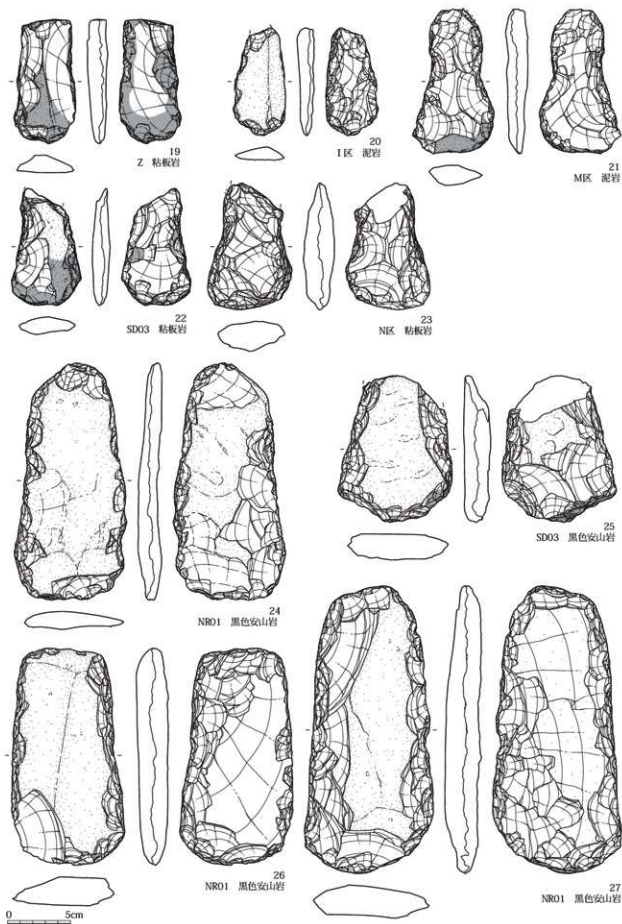
出土した4点中、2点を掲載した。38は円形礫の片面に磨面をもち、下端部付近には敲打痕が認められる。39は欠損範囲が広く不明確だが、38よりも小形で片面に磨面をもつ。石材は全て安山岩である。

敲石 (第34図40)

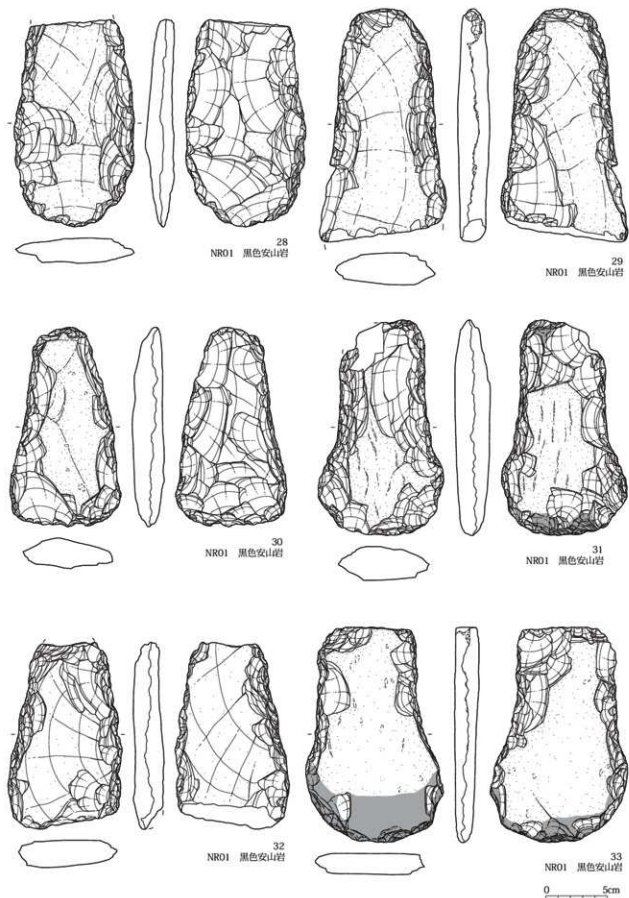
出土した1点を掲載した。40は長楕円形の礫の下端部に、敲打痕が残る。石材は安山岩である。



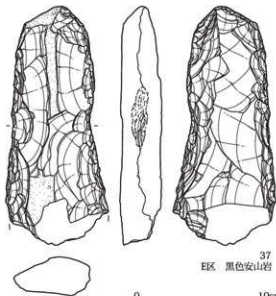
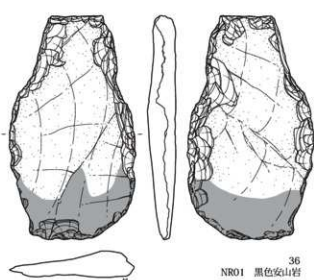
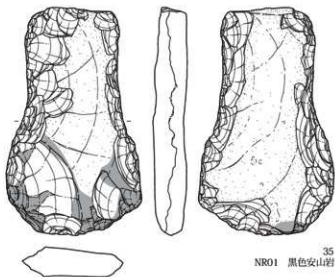
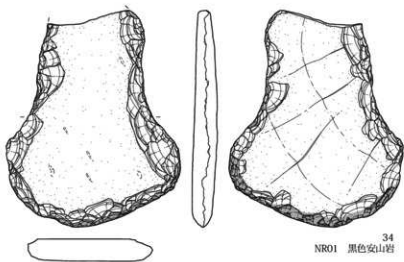
第30圖 石器(1)



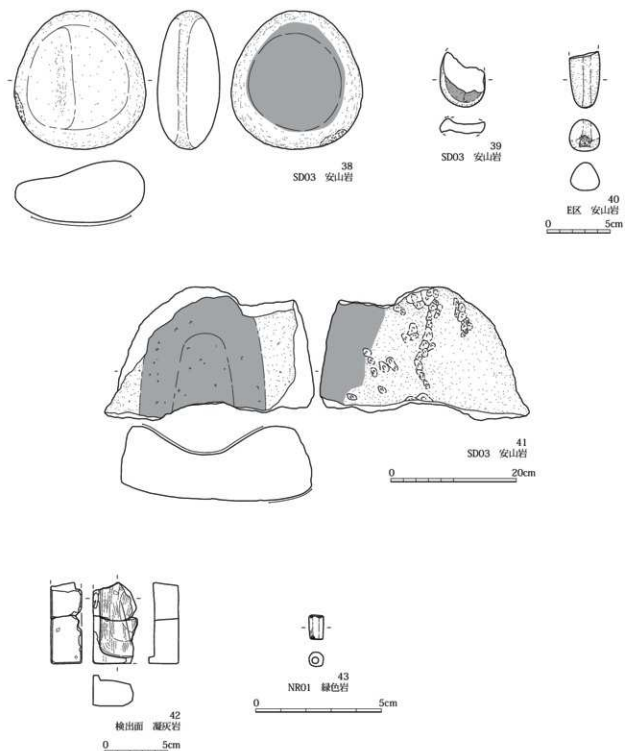
第31图 石器(2)



第32図 石器(3)



第33図 石器(4)



第34図 石器(5)、石製品

石皿 (第34図41, PL 4)

出土した1点を掲載した。41は欠損のため全体形状は不明だが、表面に機能面の摩擦部が深く窪む。裏面は一部に摩擦部があり、そのほか多数の凹痕が残る。石材は安山岩である。

硯 (第34図42)

出土した1点を掲載した。42は硯縁の一部で、表面に墨痕が広く残る。

管玉 (第34図43, PL 4)

出土した1点を掲載した。43は管玉の完形品で、表面は平滑に仕上げているが、製作時の削り痕(縦方向)がわずかに残る。石材は緑色岩である。

第3節 小 結

今回の調査では、水田面2面と溝跡6条、自然流路跡2条、土坑11基などを検出した。後世の耕作と圃場整備で削平されて、水田面が残っていたのはD・E区の東側の約800㎡と調査区内の一部にとどまったが、直線的な溝跡SD05を検出したM区など他の地区にも広がっていたことは十分考えられる。2面のうち、第1水田面では須恵器環などの古代の土器が出土し、第2水田面では弥生時代中期の土器が出土しているが、第1水田面の大畦畔と考えられるSD01と、第2水田面の大畦畔中の溝と考えられるSD02がほぼ同じ位置で重なっていることから、第1水田面と第2水田面は継続して耕作されたもので、第2水田面が弥生時代に遡ることはない。第1水田面のSD01から8世紀中葉の須恵器環が出土していることから第1水田面は8世紀頃、第2水田面もそれを大きく遡らない時期のものと考えられる。第2水田面の開田の時期が7世紀に遡るとすると乙巳の政変後の班田取授の開始に伴うもの、8世紀に下るとすると班田の不足による墾田政策に伴うものと考えられるが、隣接する北裏遺跡をはじめとする千曲川左岸の古代集落の多くが8世紀以降に開始することから後者であろう。

SD(溝状遺構)として調査したものの、幅が一定でなく蛇行するSD03・04は旧自然流路と考える。SD03からは弥生時代中期、SD04からは縄文時代中期の土器がまとまって出土しており、それぞれの時代の集落が調査区脇を北流する片貝川の上流にあるものと考えられる。

NR01・02も自然流路であるが、SD03と同様に弥生時代中期の土器と石鍬がまとまって出土するNR01に対して、NR02は12世紀頃まで幅広い時期の遺物が出土する。これは、NR02の流路が東側の基盤層の高まりによって固定されていたこともあるが、西側水田面への取水路としてある程度維持されていたことも考えられる。第2水田面で出土する弥生土器はこうした自然流路によって上流からもたらされたものであろう。

以上のように、本遺跡が水田耕作を行った生産域であったことは明らかになったが、検出された水田面は古代のもので、弥生時代までは遡りえない。ただ、NR01から石鍬がまとまって出土することは、弥生時代に何らかの土木工事が行われたことを示唆する。北裏遺跡群や西東山遺跡などの弥生時代集落遺跡の生産域が本遺跡の周辺にあったかどうかは今後の課題である。

第5章 仁東餅遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

仁東餅遺跡は佐久市街西部の伴野地区に所在し、千曲川と支流の片貝川合流地点に近い低位段丘面に立地する(第35図)。片貝川は蓼科山麓を源とし、佐久市臼田から千曲川沖積面を北西に向かい、遺跡の東側で大きく蛇行した後、再び流れを変え、遺跡の北西側で千曲川と合流する。仁東餅遺跡は、この蛇行部の左岸に形成された段丘縁に位置する。遺跡の地形は、圃場整備により改変されているが、北側の千曲川に向かって緩やかに傾斜し、標高は646~653mを測る。昭和40年代の圃場整備では、弥生土器が出土したようだが、これまでに調査履歴はなく遺跡の詳細は不明である。

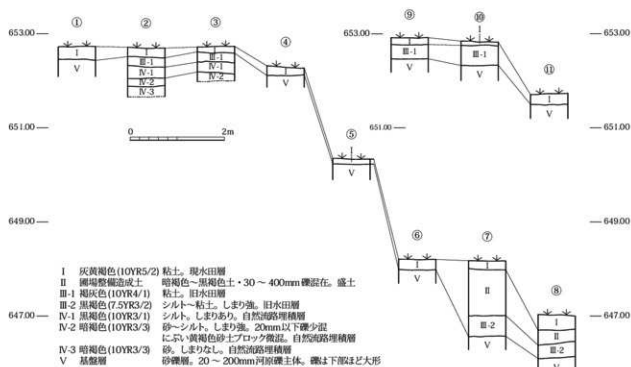
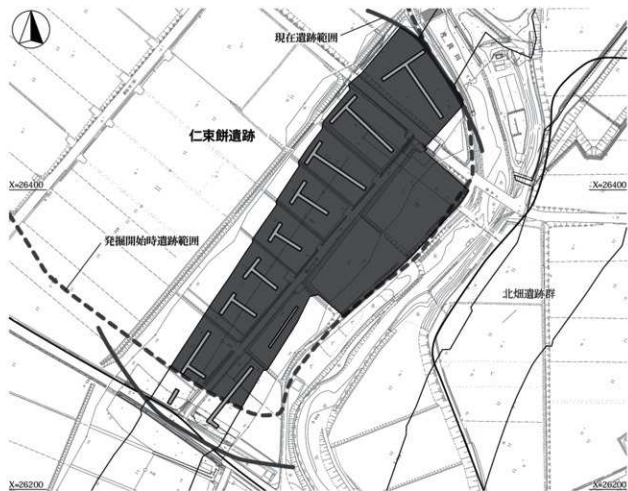
周辺遺跡の状況は、仁東餅遺跡の対岸に北畑遺跡群が、市道をはさんで南側には北裏遺跡群が位置している。この2遺跡は、埋文センターが中部横断道建設に伴い発掘調査を実施しており、本書第4・6章に調査成果を掲載した。

2 調査の概要と経過

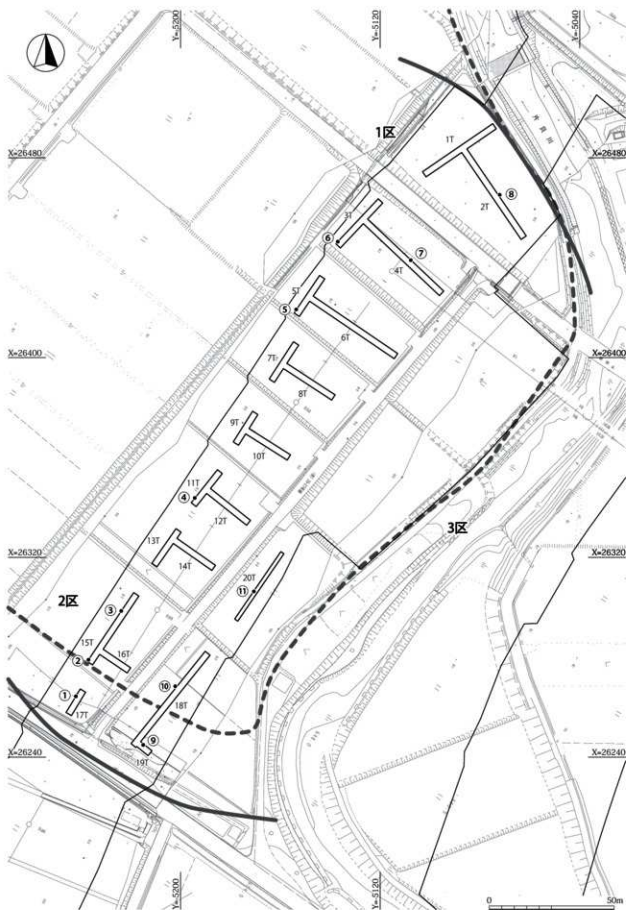
仁東餅遺跡の調査は、2007(平成19)年度に実施した。調査にあたっては、遺構・遺物の有無や土層堆積状況などを確認するため、調査範囲の水田に対して合計20本のトレンチを重機で掘削した(第36図)。その結果、水田耕土直下で片貝川の氾濫による砂礫層が露出し、遺構は確認できず、遺物もトレンチ周辺で中世以降の陶磁器破片4点が採集されたのみであったことから、本遺跡の調査を終了した。

第2節 小 結

以上の結果、仁東餅遺跡における今回の調査範囲は、昭和40年代の圃場整備などにより削平され、遺跡は残存していないものと判断した。なお、地元関係者からの聞き取りを実施したところ、圃場整備以前は片貝川の直前まで段丘面が続き、その段丘崖をカットして工事を行ったとのことで、その付近で土器が採集されていたようである。



第35図 遺跡範囲・調査位置・土層柱状図



第36図 トレンチ配置図

第6章 北裏遺跡群

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

北裏遺跡群は、佐久市南西部、千曲川左岸の伴野地区に所在する。片貝川が形成した沖積低地とハヶ岳から連なる山地・丘陵の北東縁辺に位置する台地が接するところで、北裏遺跡群はその低地部から台地部の両方にまたがって立地する。北側には遺跡西端を確認調査したものの遺構が確認できなかった仁東餅遺跡、西側には古代の水田面を検出した北畑遺跡群、南側の丘陵上には弥生時代後期の集落跡を検出した西東山遺跡、その南側の谷部には中世の溝跡と炭窯を検出した東山遺跡と、いずれも今回調査された遺跡がある。東山遺跡のさらに南方の丘陵上には後澤遺跡、北裏遺跡群の西方には西裏遺跡群と、弥生時代後期の集落跡と墓域が検出された遺跡が存在する（第37図）。

北裏遺跡群でも、以前から縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代の各時期の遺物が採集され、国道142号バイパスより北側の佐久市による調査では東西に走る溝が検出され、石戈が出土している。国道142号バイパスより北側の台地上では、さらに多くの遺物が採集されており大規模な集落跡の存在が予想されていた。

2 調査の経過

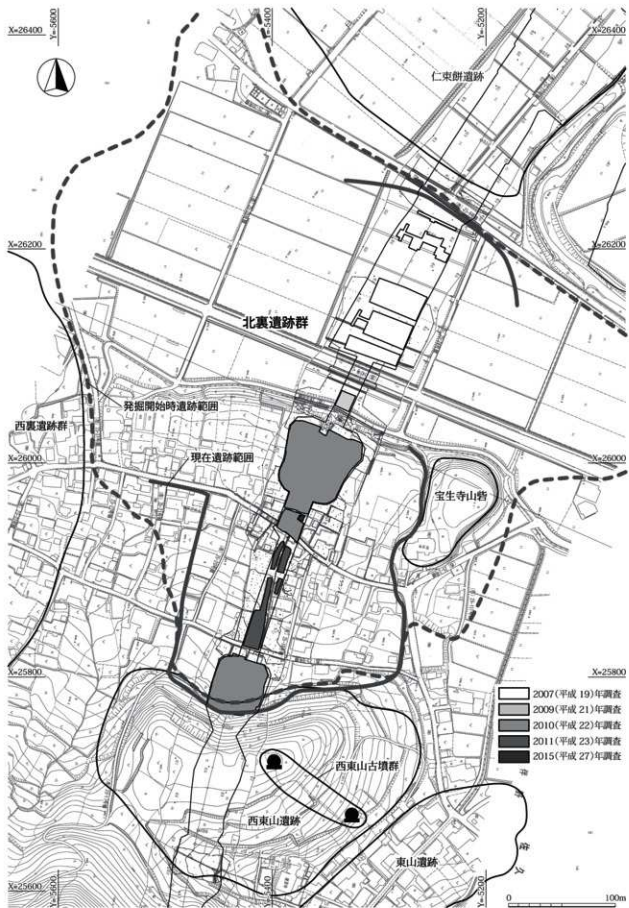
調査対象地は南北に500mの長さがあり、仁東餅遺跡との境となる市道25-9号線から国道142号バイパスまでの1区、国道142号線バイパスから段丘崖裾の市道25-8号線までの2区、市道25-8号線から県道45号線（相浜町線）までの3区、県道45号線から市道25-16号線までの4区、市道25-16号線から西東山遺跡との境までとなる5区に区分した。1・2区が低地部、3～5区が台地部である（第38図）。

調査は平成19・21・22・23・27年度の5回にわたって行った。平成19年度は、1区のトレンチ調査を行った。南半部で、遺物を包含する黒色土や砂層が確認されたために面的に広げて調査し、自然流路跡を確認したが、遺構は確認できなかった。

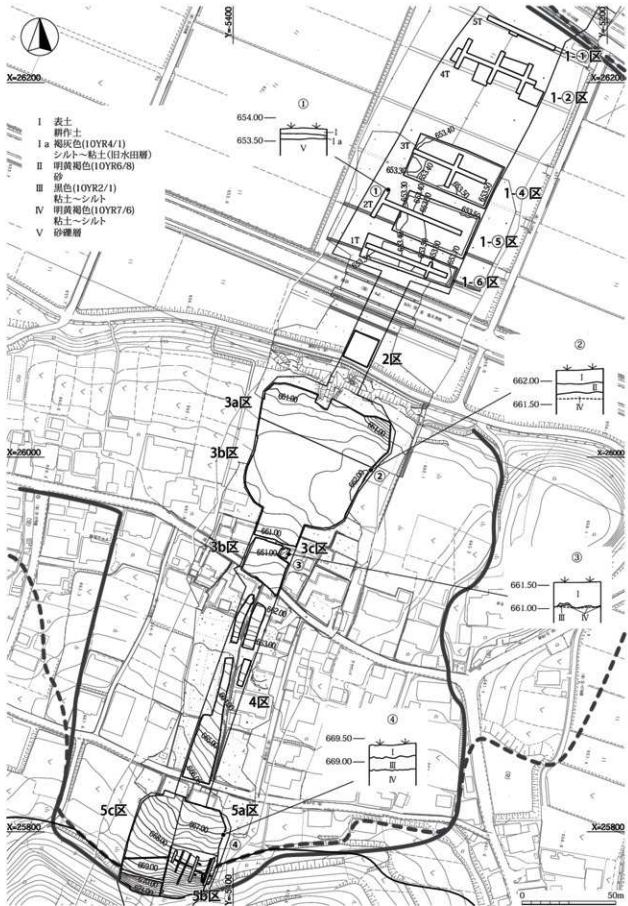
平成21年度は2区のトレンチ調査を行った。南側の台地寄りの地点で、縄文時代前期、弥生時代中・後期の土器・古墳時代～古代の遺物を包含する黒色土層を検出し、面的に広げて調査したが、遺構は確認できなかった。遺物は台地上からの転落と考えられる。

平成22年度は、3・5区の全面調査を行い、多数の遺構・遺物を検出した。検出した遺構は弥生時代中期と推測される礫床木棺墓2基、弥生時代後期の竪穴建物跡25軒、円形周溝墓1基、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓8基、平安時代の竪穴建物跡13軒、中世の竪穴建物跡4軒、井戸跡3基、土坑約500基などである（第39～41図）。5区では、弥生時代後期の木棺墓1基とその周辺で土器集中4基を検出した（第42図）。

平成23年度は、4区のトレンチ調査を行い、一部面的に拡張したが、古代の溝1条を検出しただけであった。平成27年度は、最後に残った3区南部の35㎡の調査を行い、時期不明の溝2条と土坑1基、小ピット11基を検出したが、建物跡と認定できるような並び方ではなかった。



第37図 遺跡範囲・調査区位置図



第38図 トレンチ・調査区配置図、土層柱状図



X-26040



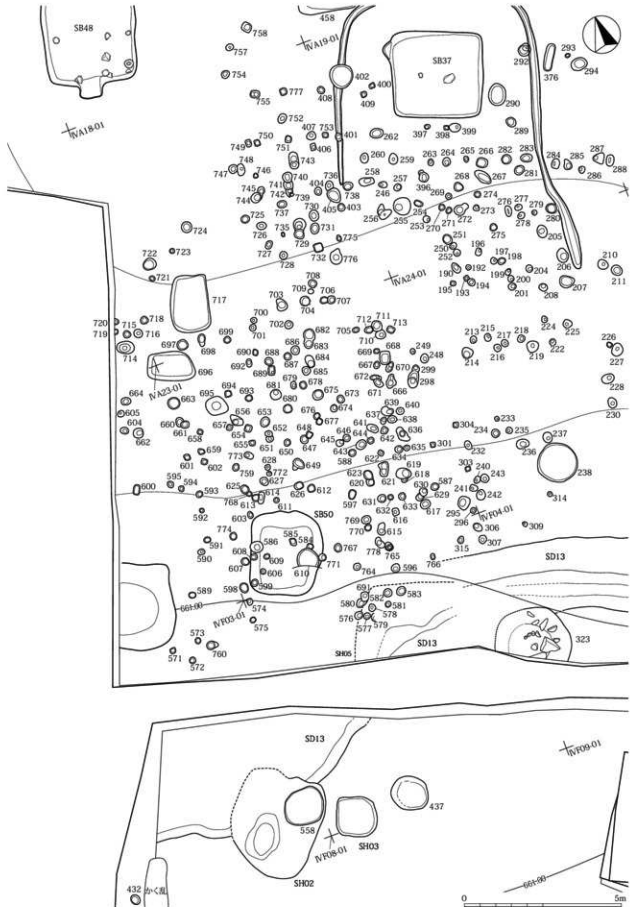
YV01



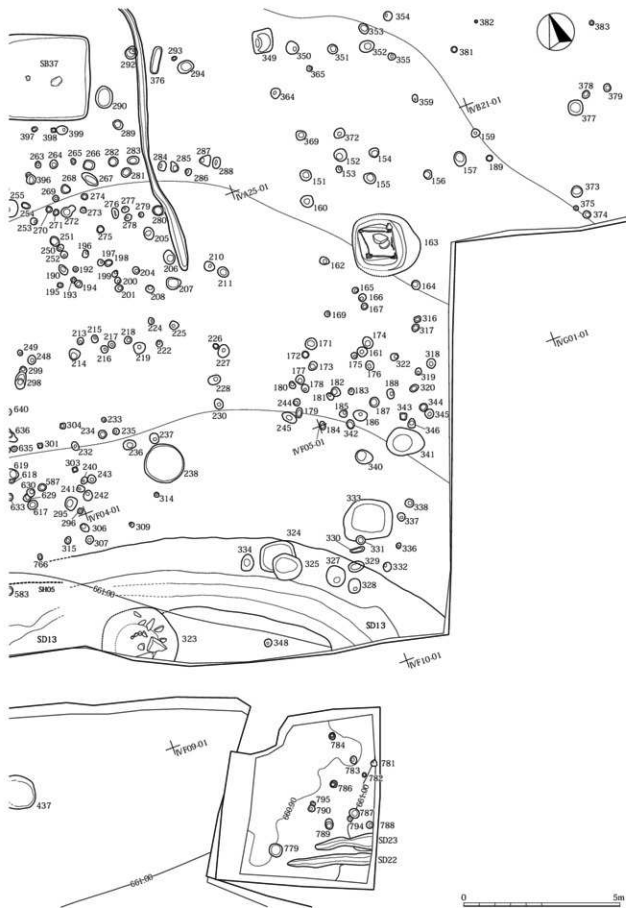
X-26040
YV01



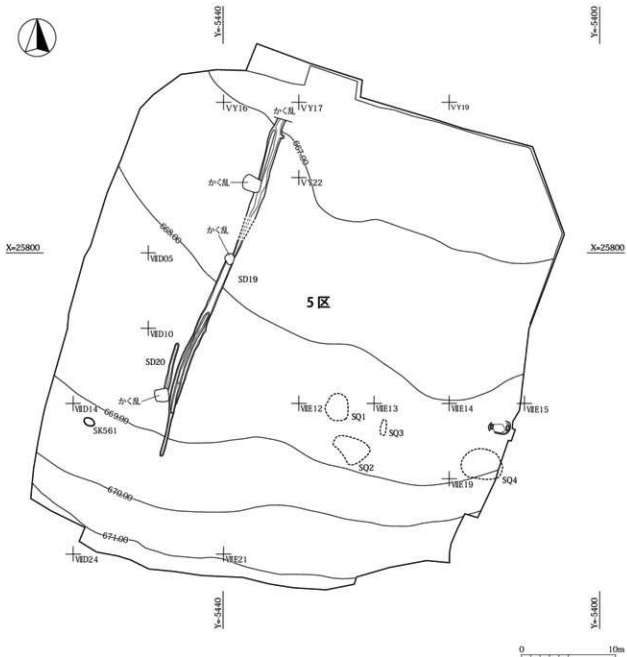
第39図 3区遺構全体図



第40図 土坑 位置図1



第41圖 土坑 位置圖2



第42図 5区遺構分布全体図

3 基本土層

今回の調査区は北側の低地部から南側の台地部まで約500mの長さがあり、間に段丘崖もあって、調査区の北から南までに通じる統一な層位の把握は困難であった。基本的には、1・2区ではI層水田耕作土の下に遺物包含層の砂層や黒色土がある地点とない地点があり、その下は旧流路とみられるV層砂礫層が厚く堆積している。3～5区では基盤の、IV層明黄褐色シルト～粘土層の上に遺物包含層のⅢ層黒色土層やⅡ層明黄褐色砂層があり、I層の畑の耕作土や住宅地造成土の表土が覆っている(第38図)。3～5区の遺構検出はIV層上面で行ったが、礫木棺墓や遺物集中など、礫や土器の出土からⅢ層中で止めて、検出した遺構もある。

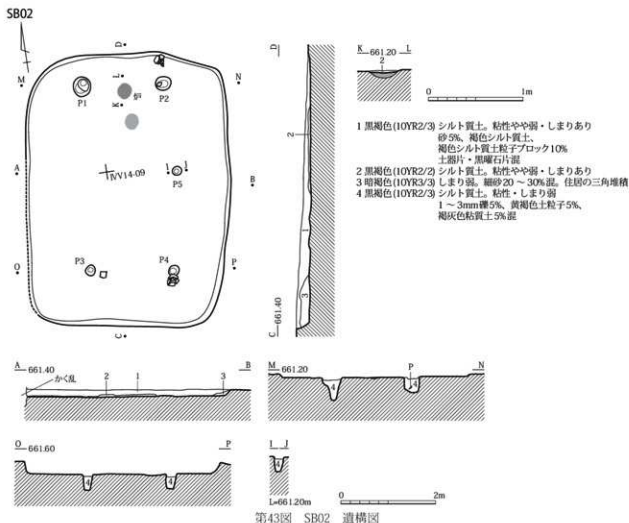
第2節 遺構

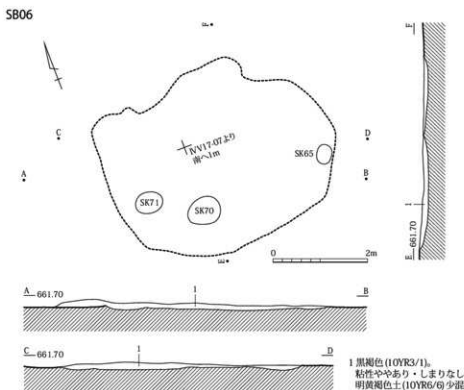
1 弥生・古墳時代

(1) 竪穴建物跡

2号竪穴建物跡 (SB02) (第43図、PL.9)

位置：IV V13・14 検出：IV層上面でシルト質黒褐色土の落込みを検出した。形状：隅丸長方形 規模：東西4.3m、南北5.8m。検出面から床面までの深さは、北側で4cm、南側で30cm 主軸方位：N-8°-E 遺構の重複：なし 堆積状況：壁際に暗褐色土の三角堆土があるほかは、ほぼ1層である。自然堆積であろう。施設：P1~4は主柱穴である。P1の底部に柱痕が残るが、埋土はいずれもしまりのない黒褐色土で柱痕はない。P2とP4の間にあるP5は、P2-P4間を結ぶ線から約20cm外側にずれているため、東側の桁を支える間柱であったかどうか不明である。北側P1とP2の間で地床炉を検出したほか、その南側でも、床面が直径30cmほど焼けて赤色化している箇所がある。遺物出土状況：床面から図示した甕(第109図1)ほか壺・甕等が出土している。時期：床面から出土した土器から、弥生時代後期である。





第44図 SB06 遺構図

6号竪穴建物跡 (SB06) (第44図)

位置：IV V17 検出：IV層上面で明黄褐色土がわずかに混じる黒褐色土を検出した。形状：不整形で、底面に凹凸がある。規模：東西4.9m、南北3.2m、検出面から深さは3～16cm、遺構の重複：65・70・71号土坑に切られる。施設：なし 遺物出土状況：なし 時期：不明 所見：発掘時の所見では、1層を床下の掘方と考え、竪穴建物跡と認定していたため、ここでもそれを踏襲しているが、床と見立てた面は凸凹で、柱穴等の施設もないため、竪穴建物跡とするのは難しいかもしれない。

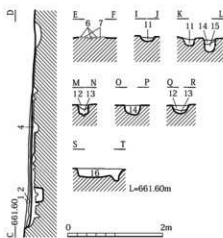
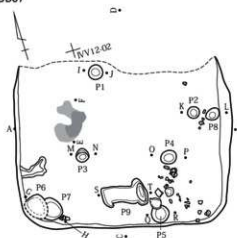
7号竪穴建物跡 (SB07) (第45図)

位置：IV V07・12 検出：IV層上面で灰褐色砂質土の落込みを検出した。形状：北側はかく乱されて全形は不明だが、南部に主柱穴と考えられるP3とP4があり、これに対応する主柱穴が竪穴建物跡残存部内がないことから、南北に長い隅丸長方形と推定する。規模：東西4.6m、南北3.6m以上、検出面から床面までは深いところで15cm 主軸方位：N-O-W 遺構の重複：124号土坑を切る。堆積状況：床面を粘性が乏しい黒褐色砂質土が覆い、その上に灰黄褐色砂質土が被る。自然堆積であろう。施設：ピットは9基検出した。南北の中軸線に対称な位置に並ぶP3とP4は主柱穴だが柱痕はない。その他のピットは性格不明である。P3の北側床面で灰や炭が混じった焼土を検出した。遺物出土状況：南東隅の床面上やP6・7内から図示した壺(2・3)甕(4)等がまとまって出土しているほか、埋土から黒曜石製の石錐(第125図32)や敲き石(第130図87)が出土している。時期：床面から出土した土器から弥生時代後期である。

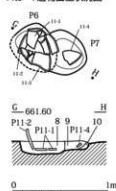
9号竪穴建物跡 (SB09) (第46図、PL9)

位置：IV V06 検出：IV層上面で黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：中央部を6号方形周溝墓に切られているため、全形は不明である。残存部分からは、東壁は直線的、西壁は曲線的で尖り気味の不整形になる。規模：東西2.2m、南北2.0m、検出面から床面までは深さところどころで14cmである。主軸方

SB07



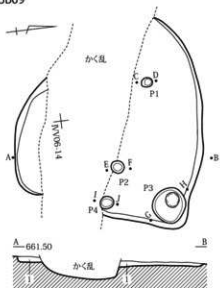
Pl16・7遺物出土状況図



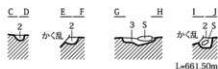
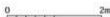
- 1 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質。粘性弱・しまりあり
- 2 黒褐色(10YR3/1) 砂質。粘性なし・しまり弱
- 3 明黄褐色(10YR6/6)、ブロック状に硬る地中の土。粘性・しまりなし
- 4 黒褐色(10YR3/1)と明黄褐色(10YR6/6)のシルト質土と砂質土混。粘性・しまりなし
- 5 明黄褐色(10YR7/6)と橙(7.5YR6/6)砂質土混。粘性弱・しまりなし
- 6 暗赤褐色(2.5YR3/6) 焼土。粘性・しまりなし
- 7 黒褐色(10YR3/2) シルト質土。粘性・しまりなし
- 8 黒色(10YR2/1) シルト。粘性・しまりなし
- 9 黒褐色(10YR3/1)とぶい・黄褐色(10YR5/4)のシルト質土混。粘性・しまりなし
- 10 ぶい・黄褐色(10YR5/4) 砂質土。粘性・しまりなし
- 11 黒褐色(10YR3/2)と黄褐色(10YR5/6)シルト質土混。粘性なし・しまりあり
- 12 黒褐色(10YR3/1) シルト質土。粘性なし・しまり弱
- 13 ぶい・黄褐色(10YR6/4) 砂質土。粘性・しまりなし
- 14 黒褐色(10YR3/1) シルト質土。粘性・しまりなし
- 15 ぶい・黄褐色(10YR4/3) 砂質土。粘性・しまりなし
- 16 暗赤褐色(2.5YR3/2)とオリーブ黄色(5Y6/3・30%)粘質土混。粘性あり・しまりやや強

第45図 SB07 遺構図

SB09



- 1 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性・しまりなし
黒褐色(10YR2/3)シルト土(耕作土)
褐色(10YR4/6)砂質土
- 2 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)砂質土
- 3 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)砂質土



第46図 SB09 遺構図

位：N-6°-E 遺構の重複：6号方形周溝墓に切られる。堆積状況：埋土は黒褐色シルト質土の単層である。自然堆積であろう。施設：ピットは4基検出した。北東隅で、埋土上面に台石が載っていたP3は貯蔵穴と推測する。その他のピットは位置的に柱穴とは考えられないため、性格は不明である。炉はない。遺物出土状況：P4周辺の床面から甕(7)・蓋(8)等がの土器片が出土している。時期：床面から出土した土器から判断して、弥生時代後期である。

11号竪穴建物跡 (SB11) (第47図)

位置：IVU15・V11 検出：11号方形周溝墓の主体部を精査中に、ピット群や土器集中を伴う火床を検出し、竪穴建物跡の痕跡ではないかと想定した。形状：壁が削平されているため不明ながら、P1~4を本建物跡の主柱穴とすると、隅丸長方形と考えられる。規模：不明 主軸方位：N-15°-E 遺構の重複：11号方形周溝墓に切られる。堆積状況：埋土は削平されて残っていない。施設：長方形に並ぶP1~4が主柱穴と想定する。いずれも底面に、直径15~20mmの礫を含む灰黄褐色シルト質土を埋土とした柱痕がある。P6は出入口施設と考えられるが、P5は不明、P8~10はP1~4から離れているため、本建物跡とは無関係であろう。P1・2間に土器集中があり、直下の土が焼けていたことから、土器敷炉であったと考えられる。また、北東のSD12は、本建物跡の周溝の残骸である可能性がある。遺物出土状況：炉内のほか、P4の柱痕周囲から土器片が集中して出土している(第109図9~11)。時期：炉に敷かれていた土器は表面の剥落が著しかったため図化できなかったが、P4出土遺物から判断して、弥生時代後期である。

16号竪穴建物跡 (SB16) (第48図)

位置：IVU04 検出：IV層上面で黄褐色粒子を含む暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：壁と床面が削平されているため不明。規模：不明 主軸方位：主柱穴をP3・5・8・10と考へ、主軸線をP3-10とP5-8の中点でとった場合は、N-21°-E 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色シルト質土の単層である。施設：ピットを10基検出した。方形に並ぶP3・5・8・10が主柱穴と考へた。その内側で大きめのP4は貯蔵穴と推測するが、そのほかのピットは性格不明または本建物跡とは無関係である。竪穴建物跡南部にふい赤褐色の焼土が広がる。遺物出土状況：P8と10の中間に土器集中箇所がある。時期：遺物集中箇所の出土土器(第109図12)から判断して、弥生時代後期である。

17号竪穴建物跡 (SB17) (第49図、PL9)

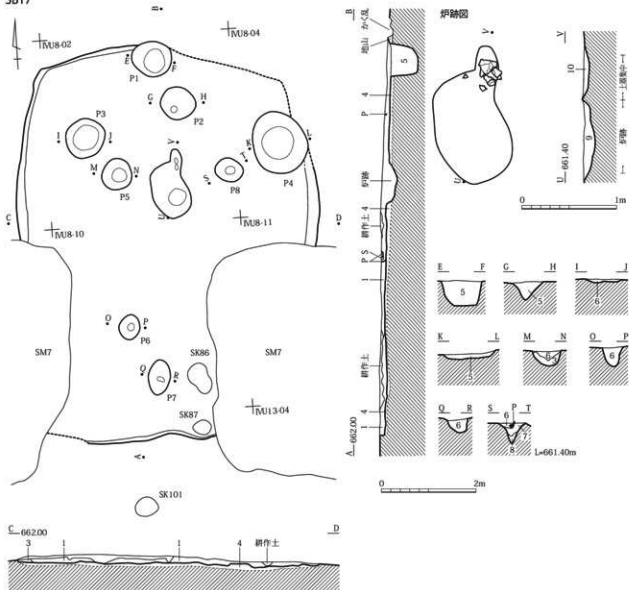
位置：IVU08 検出：IV層上面で褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：南東部と南西部を7号方形周溝墓に壊され、北東部は削平されて全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形である。規模：東西6.4m、南北8.4mで、検出面から床面までは、深いところで16cmである。主軸方位：N-4°-E 遺構の重複：7号方形周溝墓に切られる。堆積状況：褐色シルト質土の単層である。自然堆積であろう。施設：P5・6・8が主柱穴である。P8の底部には柱痕跡が残り、黒褐色土がブロック状に混じるにふい黄褐色土の上面に土器片が載っている。P7とSK86は位置的に入口施設とみられるが、そのほかのピットは性格不明である。主柱穴P5・8間よりわずかに南に位置するヒョウタン形の落込みは、北半に土器が集中し、南半の黒褐色シルト質土の上面に炭化物や焼土があった。炉と考えてよいであろう。遺物出土状況：炉の北側に土器が集中していたほか、床面から磨製石斧(第129図75)や多量の土器が出土している。また、検出面から石錐(第125図29)、埋土中からミニチュア土器(第111図38)、P2から土器片加工板(第111図40)が出土した。時期：炉から出土した土器(第110図15・20)をはじめ、遺構一括土器(第110・111図13・14・16~19・21~37・39)から判断して、弥生時代後期である。

20号竪穴建物跡 (SB20) (第50図)

位置：IVU14・15・19・20 検出：IV層上面で炭と褐色粗砂ブロックが混入した黒褐色シルト質土の落込

にローム粒の混入が多い黒褐色シルト質土の三角堆土があるが、概ね黒褐色シルト質土の単層である。自然堆積であろう。22Aは黒褐色シルト質土と黄褐色砂質土の混合土の単層で、上面を黒褐色シルト質土で貼り22Bの床面としている。施設：22B床面でピットを5基、22A床面で3基検出した。埋土1層とはほぼ同質の黒褐色シルト質土で埋まるP1～3は22Bの支柱穴で、南壁際中央のP5は22Aの入口施設と推

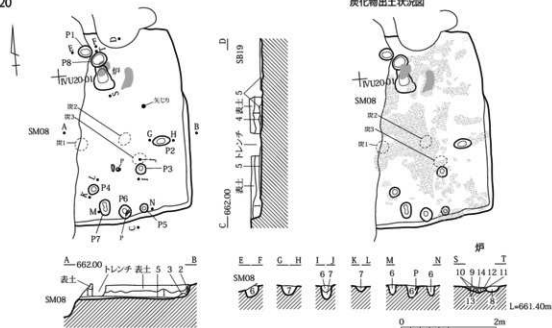
SB17



- 1 褐色(10YR4/4) シルト、粘性なし・しまりあり。地山で砂っぽい層。2～4mm白色・赤色粒子20%含
 耕作の影響で所々に表土と炭化粒子1～3mm混
- 2 黒褐色(10YR3/2) シルト、粘性なし・しまり強。砂っぽい層。3～6mm白色粒子30%、1～3mm赤色粒子10%含
- 3 灰黄褐色(10YR4/2) シルト、粘性弱・しまり強。1層と地山が混入した層。明るく見える事から地山の混入量の方が多いと思われる
- 4 にい黄褐色(10YR6/4) シルト。粘性なし・しまり強。砂っぽい層。30～70mm白色粒子(軽石)60%、10～20mm黒色土ブロック10%含
 SB17の掘り方覆土
- 5 にい黄褐色(10YR4/3) 粘性・しまり弱。砂っぽい。20～40mm白色粒子30%、10～20mm赤色粒子20%含
- 6 暗褐色(10YR3/3) 粘性なし・しまりあり。1層より砂っぽい。1層と同様の層。1～3mm炭化粒子20%含
- 7 にい黄褐色(10YR5/4) 粘性なし・しまりあり。地山である砂層に2層がブロック状(10～50mm)に混
- 8 灰黄褐色(10YR6/2) 粘性なし・しまり弱
- 9 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりあり。1～3mm粘土白色粒子10%、1～2mm赤色粒子5%含
 層上面に炭化物(サンダル漆)30～200mmあり。炭化物・粒子・焼土は検出面に見られ、覆土中には見られない
- 10 にい黄褐色(10YR5/4) シルト。粘性なし・しまり強。地山の砂層とSB17ピット1層の混入層。上面に土器集中あり

第49図 SB17 遺構図

SB20



SB20

表土 黒褐色(10YR2/2) シルト質(耕作土)。粘性・しまりなし

20mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/2)シルト、粘性・しまりなし10%混

30mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし10%混。50mm以下の軽石1%混

シルト。粘性・しまりなし。20mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし3%混。10mm以下の炭3%混

1 黒褐色(10YR2/2) シルト質(焼土)。粘性なし・しまりあり

2 赤褐色(5YR4/8) シルト質(焼土)。粘性・しまりなし。10mm以下の炭25%混。20mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし2%混

3 黒色(10YR2/1) シルト質(焼土)。粘性・しまりなし

4 暗赤褐色(5YR3/4) シルト。粘性・しまりなし。20mm以下の炭10%混

5 黒褐色(10YR2/2) 40mm以下のブロックで赤褐色(5YR4/6)シルト質(焼土)、粘性・しまりなし5%混

6 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混

7 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし。20mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)シルト、粘性・しまりなし15%混

8 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし。20mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし15%混

50mm以下の焼土1%混。50mm以下の炭1%混

9†

9 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし。50mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粘土、粘性・しまりなし15%混

10 炭層

11 焼土層。赤褐色(5YR4/6)シルト。粘性・しまりなし

12 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりなし

10mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし25%混

13 褐色(10YR4/6)粗砂。粘性・しまりなし。20mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/2)シルト、粘性・しまりなし10%混

14 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし10%混

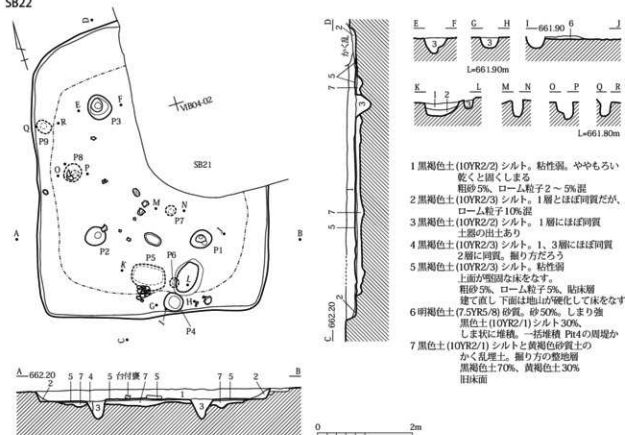
第50図 SB20 遺構図

測するが、そのほかのピットは性格不明である。P 2には掘方の埋土が残る。22Aの床面は凹凸があり対応する柱穴が見つからないため、22Bの掘方かもしれない。22Bは22Aの埋土を貼って堅固な床面を作った上で、外側に40～50cm拡張している。炉は21号竪穴建物跡に壊された部分にあったと考えられる。遺物出土状況：22Bの南壁際から壺(第111図44)と鉢(同46)が出土したほか、埋土から兩極石器(第128図65)、P 8から石鍬(第129図73)、掘方から管玉1点(第134図1)が出土している。時期：床面出土土器から判断して、弥生時代後期である。

23号竪穴建物跡 (SB23) (第52図)

位置：IV B08 検出：IV層上面で黄褐色ロームブロックが混入した黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸長方形 規模：東西4.6m、南北6.4m、検出面から床面までは、深いところで16cmある。主軸方位：N-12°-E 遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色シルト質土の単層である。自然堆積であろう。施設：ピット9基と炉を検出した。砂粒や黄褐色砂質ローム粒を含む黒色土が埋土のP 1～4が

SB22



第51図 SB22 遺構図

主柱穴、P5が棟持柱、かなり東に偏るもののP9が入口施設と推測する。P3には掘方の埋土が残る。そのほかのピットは性格不明である。炉はP1・2間にある。50×30cmの楕円形の火床があり、上部に土器が集中していた。遺物出土状況：炉を中心として床面から土器片が多数出土している。また、検出面から石匙(第126図42)、床下から磨製石鏃の未成品(第125図26)や石匙(第126図43)が出土した。時期：床面出土遺物(第127図49~52)から判断して、弥生時代後期である。

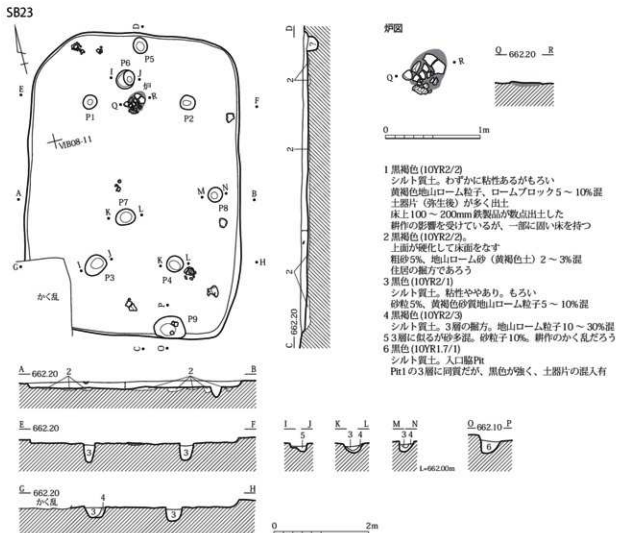
24号竪穴建物跡 (SB24) (第53図、PL10)

位置：IV22 検出：IV層上面で粗砂、小礫、ローム粒を含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：9号方形周溝墓に南西部を切られて全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形である。規模：東西5.1m、南北5.8m、検出面から床面までは深いところで24cmある。主軸方位：N-15°-E 遺構の重複：9号方形周溝墓に切られる。堆積状況：壁際にロームブロックを含む黒褐色シルト質土の三角堆土があり、床面上を粗砂やローム粒を含む粘性が高い黒褐色土が覆い、その上に1層の黒褐色シルト質土が被る。自然堆積であろう。施設：床面上でピット10基と炉を検出した。細砂を含む黒褐色シルト質土が埋土のP1~3と、粗砂やローム粒を含む暗褐色シルト質土が埋土のP4は主柱穴、P10は間柱、P1~3と同じ埋土のP11とローム粒や炭片が混じる黒褐色シルト質土が埋土のP6は位置的に棟持柱と考えられる。P5とP8は古い棟持柱かもしれない。P4と同じ埋土のP7は入口施設であろう。炉は主柱穴P1・2間にある。径約60cmの浅い掘込みがあり、埋土に焼土や炭化物を少量含む。遺物出土状況：床面南部で土器が多量に出土するほか、炭化材や骨片が出土している。また、P3の南東床面直上から石皿(第133図110)が出土した。時期：床面出土土器(第112図53~58)から判断して、弥生時代

後期である。

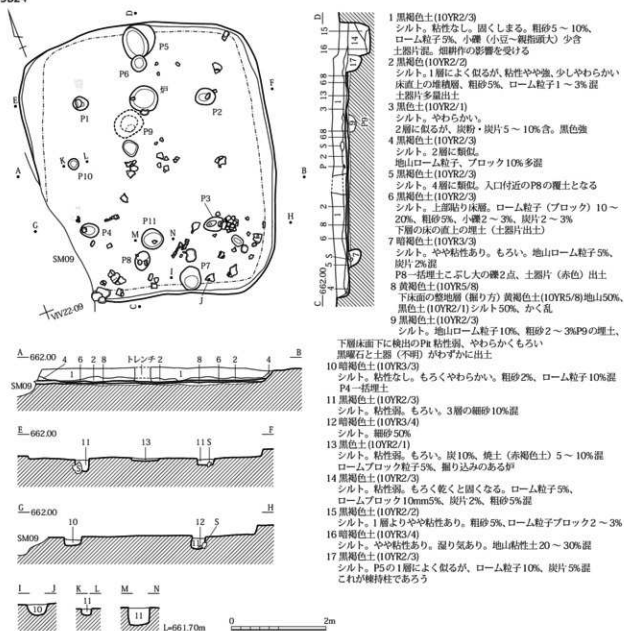
25号竪穴建物跡 (SB25) (第54図、PL10)

位置: IV V16 **検出:** IV層上面で黒褐色土が混在する橙色シルト質土の落込みを検出し、9号方形周溝墓の壁面で本建物跡の落込みを確認した。**形状:** 北側を9号方形周溝墓に切られて全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形である。**規模:** 東西5.0m、南北6.6m、検出面から床面までは深いところで41cmある。**主軸方位:** N-6°-E **遺構の重複:** 北側を9号方形周溝墓に切られる。**堆積状況:** 床面全体に大量の焼土と炭化物が広がり、その上に炭化物をわずかに含む暗褐色シルト質土またはにぶい黄褐色シルト質土の三角堆土が載り、7層を挟んで3層の橙色シルト質土および2層がほぼ水平堆積している。**施設:** ピットを7基検出した。黒褐色シルト質土が埋土のP3とP4が主柱穴で、P3は南側底面に一段深い柱痕跡がある。黒褐色シルト質土と褐色シルト質土が混じるP5・6は位置的に入口施設とみられる。P1・2は主柱穴間の間柱とするにはやや外側にずれているが、P1には掘方の埋土が残り、南東側底面に一段深い柱痕跡がある。P4は北側の主柱穴とともに、9号方形周溝墓に切られた部分にあったものと考えられる。**遺物出土状況:** 南西隅から壺や鉢(第113図49・63)、北壁際から壺と甕(同60・66)をはじめ、床上から多量の土器が出土した(第113図61・62・64・65)。石器は南西隅に集中する傾向が



第52図 SB23 遺構図

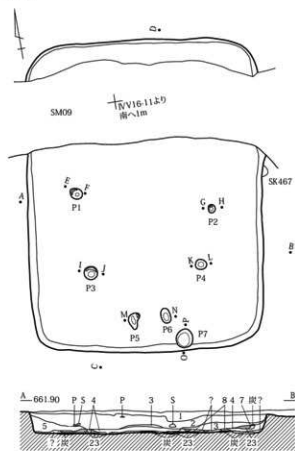
SB24



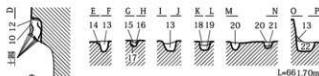
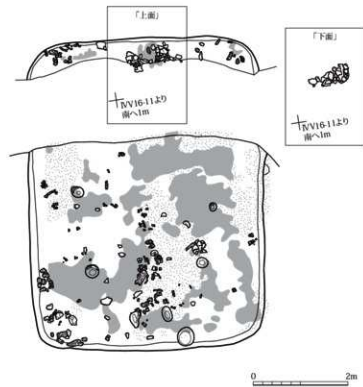
第53図 SB24 遺構図

あり磨製石鎌(第124図19)、磨製石斧(第129図77)、砥石(第132図106・第133図109)が床面から出土しているほか、埋土中から磨製石鎌(第124図20)、二次加工がある剝片(第127図58)、両極石器(第128図63)が出土した。さらに、東壁際から切痕が多数みられるシカ角(第171図9)が出土している。時期：床面直上の出土土器から判断して、弥生時代後期である。所見：本建物跡は20号堅穴建物跡と同様に焼却したものと推測する。ただ、主柱穴、間柱穴、出入口柱穴にあたるP1～P6には柱痕が残らず、埋土に炭化物や焼土がほとんど混入していないため、柱と上屋を撤去し、柱穴を埋めた後で焼却したのであろう。床に広がる炭化材や焼土の由来は不明である。なお、炭化物をわずかに含む三重堆土(4・5層)の上面にも炭化物をのせた層(7層)があるし、母材は焼土と考えられる橙色シルト質土が水平堆積している(2・3層)ため、堅穴周辺を含めてかなり大がかりに焼却したのであろう。

SB25



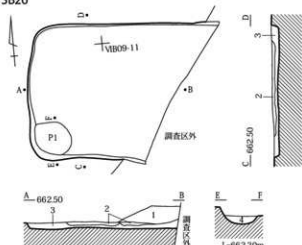
遺物・礫・炭化物・焼土出土状況図



- 1 上部 褐色(5YR6/6)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
下部 赤褐色(2.5YR4/8)、明赤褐色(2.5YR5/8)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
 - 2 上部 褐色(5YR6/6)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
下部 赤褐色(2.5YR4/8)、明赤褐色(2.5YR5/8)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
 - 3 上部 褐色(5YR6/6)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
下部 赤褐色(2.5YR4/8)、明赤褐色(2.5YR5/8)に黒褐色(10YR3/2)10%混シルト。粘性なし・しまり強
 - 4 におい・黄褐色(10YR4/3)シルトに明黄褐色(10YR7/6)10%混。粘性弱・しまり強炭化物少含(5%未満)
 - 5 暗褐色(10YR3/3)と黄褐色(10YR5/6)混砂をわずかに含むシルト。粘性なし・しまり強炭化物少含(5%未満)
 - 6 赤褐色(2.5YR4/8)シルト。粘性なし・しまり強(焼土)
 - 7 暗褐色(10YR3/3)シルトに5mm赤褐色粒子(2.5YR4/6)2%混粘性弱・しまり強(炭化物をのせた層)
 - 8 におい・赤褐色(5YR5/4)に2~3mm褐色灰粒子(10YR4/1)と赤褐色粒子(2.5YR4/6)10%混。粘性弱・しまり強(焼土と炭化物の混)
 - 9 暗褐色(10YR3/3)に明黄褐色(10YR6/6)20%混砂質。粘性なし・しまり強。耕作土含
 - 10 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性弱・しまり強2~10mm大黄~白色粒子30%含
 - 11 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまり弱2~10mm大黄~白色粒子20%含
 - 12 褐色(10YR4/4)シルト。粘性なし・しまりありわずかに砂含む(北壁土器の間)
 - 13 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性あり・しまり弱
 - 14 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまり弱
 - 15 黒褐色(10YR2/2)シルト質。粘性あり・しまり弱
 - 16 褐色(10YR4/6)と明黄褐色(10YR6/6)に褐色(7.5YR4/6)3~5mm混粘質。粘性あり・しまり強
 - 17 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性・しまり弱
 - 18 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性・しまりあり
 - 19 褐色(10YR4/6)と明黄褐色(10YR6/6)混粘質。粘性あり・しまり強
 - 20 黒褐色(10YR2/3)と褐色(10YR4/6)混シルト。粘性・しまりあり
 - 21 褐色(10YR4/6)と明黄褐色(10YR6/6)混粘質。粘性あり・しまり強
 - 22 黒褐色(10YR2/3)に灰黄褐色(10YR4/2)と明黄褐色(10YR6/6)混。シルト。粘性あり・しまり強
 - 23 赤褐色(2.5YR4/6)焼土。シルト。粘性なし・しまり強
- 焼土範囲：赤褐色(2.5YR4/6)に褐色(5YR6/6)10%混シルト。粘性なし・しまり強。炭化物範囲：黒色(10YR1.7/1)に灰黄褐色(10YR4/2)30%混シルト。粘性・しまり弱炭化物のみの箇所には灰質土を含めた範囲

第54図 SB25 遺構図

SB26

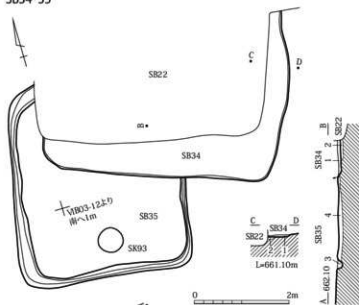


- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性・しまりややあり。耕作地
 - 2 黒褐色(10YR2/2)50%、黄褐色(10YR5/6)地山ローム砂50%
 - 1層と3層に似るが黄褐色の地山ローム50%が帯状に混
 - 3 黒色(10YR2/1)シルト。粘性・しまりややあり。わずかにローム粒子1~3%混
 - 4 黒色(10YR2/1)粘性・しまりややあり。炭片1%、地山ローム粒子1%、砂2~3%混
- SB26住居を切る後世のSKであろう。土器片出土

0 2m

第55図 SB26 遺構図

SB34・35



- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性弱・乾くと固くしまる
砂粒子2~3%、ローム粒子5~10%
土器含む
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質土。粘性弱・もろいゆえ乾くとしまる
1層にはぼた河質。ローム粒子20~30%混
SB34掘り方層
- 3 黒色(10YR2/1)シルト質土。粘性弱・もろい
粗砂5%以下、ローム粒子5%以下混
壁溝の埋土であろう
- 4 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。4層に似るが、
ローム粒子・ロームブロック20~30%混
SB35の掘り方埋土か
- 5 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性なし・やわらかくもろい
粗砂5%以下、ローム粒子1~2%混
用途不明の床下検出Pit。柱痕か
- 6 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。1層にはぼた河質
ローム粒子10%混。掘り方

第56図 SB34・35 遺構図

26号堅穴建物跡 (SB26) (第55図、PL10)

位置：IV B08・09 検出：IV層上面で黒色シルト質土の落込みを検出した。形状：東部が調査区外で全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形である。規模：東西4.0m以上、南北3.0m、検出面から床面までは深いところでは17cmある。主軸方位：W-7-N 遺構の重複：11号溝を切る。堆積状況：黒色シルト質土が堆積し、窪みに黒褐色シルト質土が入り込んでいる。自然堆積であろう。施設：南西隅でピットを検出した。径70~80cmの大きさから判断して、貯蔵穴の可能性が有る。遺物出土状況：弥生土器と黒色土器、灰軸陶器等古代の土器が混在している。時期：長方形の建物プランから弥生時代と判断する。

34号堅穴建物跡 (SB34) (第56図、PL11)

位置：IV B03 検出：IV層上面で砂粒とローム粒を含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：

大半を22号竪穴建物跡に切られて全形は不明だが、方形であろう。規模：東西4.8m、検出面から床面までの深さは6cmである。遺構の重複：22号竪穴建物跡に切れ、35号竪穴建物跡を切る。堆積状況：黒褐色シルト質土の単層である。施設：なし 遺物出土状況：東壁際の床面直上から壺（第113図67）が出土している。時期：出土土器から判断して、弥生時代中期後半である。

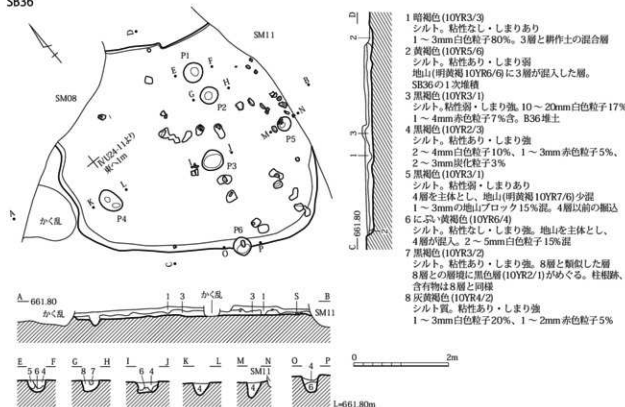
35号竪穴建物跡 (SB35) (第56図, PL11)

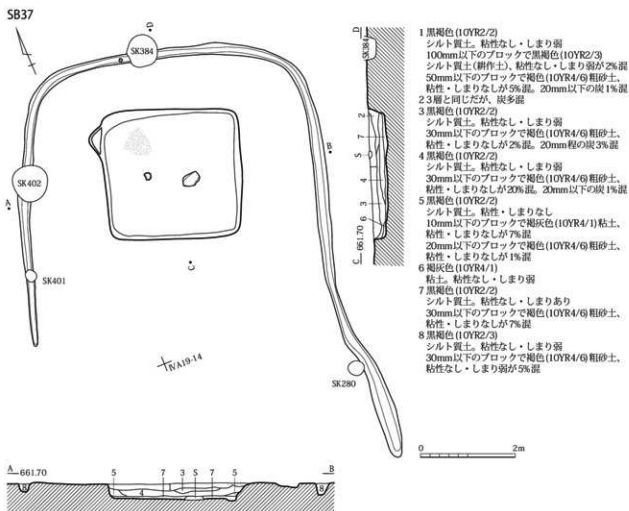
位置：IVB3 検出：IV層上面で34号竪穴建物跡に切られ、粗砂とローム粒を含んだ黒色シルト質を埋土にもつ周溝を検出した。形状：北東部を22・34号竪穴建物跡に切られて全形は不明であるが、周溝から判断して隅丸長方形である。周溝に囲まれた範囲はロームブロックが混在する黒褐色シルト質土が敲き締められている。規模：東西5.4m、南北4.8mである。主軸方位：N-10°-E 遺構の重複：22・34号竪穴建物跡に切られる。施設：ピットを1基検出した。残存する範囲で周溝が全周する。遺物出土状況：床下から土器が出土している（第113図68）。時期：弥生中期後半の34号竪穴建物跡に切られ、床下から同時代の壺が出土しているため、弥生時代中期後半である。

36号竪穴建物跡 (SB36) (第57図)

位置：IVU24 検出：IV層上面で白色粒子を含む暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：北西部を8号方形周溝墓、東部を11号方形周溝墓に切られて全形は不明であるが、残存箇所から判断して隅丸方形である。規模：東西5.4m、南北4.8m、検出面から床面までは深いところで14cmある。主軸方位：N-15°-E 遺構の重複：8・11号周溝墓に切られる。堆積状況：壁際に明褐色土が混在した黄褐色シルト質土の三角堆土（2層）があり、床上を白色・赤色粒子を含む黒褐色シルト質土（3層）が覆い、その上に暗褐色シルト質土（1層）が破る。自然堆積であろう。施設：ピットを6基検出した。炭化粒を含む黒褐

SB36





第58図 SB37 遺構図

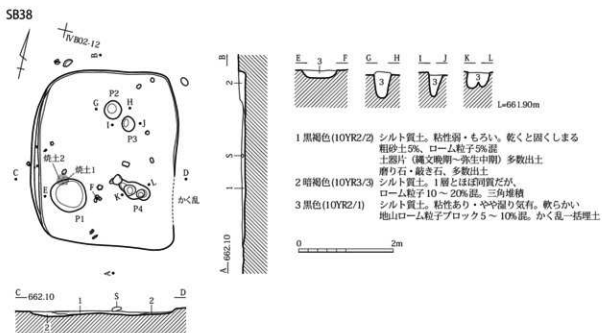
色シルト質土の埋土をもつP4を除き、いずれも位置的に柱穴とは考えにくく、性格不明である。遺物出土状況：ほぼ中央部の埋土から甕(第113図70・71)や敲き石(第130図86・88)が出土した。時期：埋土から出土した土器から判断して、弥生時代後期である。

37号堅穴建物跡 (SB37) (第58図、PL11)

位置：VIA19 検出：IV層上面で褐色粗砂ブロックや炭が混入した黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：方形である。北・東・西の外周に溝跡が取り巻くが、堅穴建物跡の施設である確証はない。規模：堅穴は東西2.9m、南北2.7m、検出面から床面までの深さ27cmである。外周溝は、幅15～40cm、東西6.6m、南北9.4m、検出面から底面までは深いところで25cmある。主軸方位：N-12°-E 遺構の重複：なし。堆積状況：堅穴は床面上を褐色粗砂ブロックを含む黒褐色シルト質土(7層)に覆われ、炭を含む黒褐色シルト質土(2～4層)の水平堆積の後、1層が被る。施設：西壁の北寄りに張出しがあるほか、床面北西部に直径約60cm程度炭が広がっている。遺物出土状況：検出面で弥生土器甕が出土しているほかは、ほとんど遺物がない。時期：弥生土器の出土はあるが時期不明。中世の可能性が高い。所見：狭小で内部施設がない点から住居跡とは考えにくい。外周を取巻く溝跡が本建物跡に伴うとすれば、湿気を嫌う工房跡や結果を伴う祭祀跡などの可能性が考えられるか。

38号堅穴建物跡 (SB38) (第59図、PL11)

位置：IVB02 検出：IV層上面でローム粒を含む暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：やや隅



第59図 SB38 遺構図

丸の長方形である。規模：東西3.0m、南北3.7m、検出面から床面までの深さは9cmである。主軸方位：N-14°-W 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色シルト質土の三角堆土に黒褐色シルト質土が被る。自然堆積であろう。施設：ピットを4基検出した。黒色シルト質土を埋土にもつP2やP3は柱穴かもしれないが、P1・4の性格は不明である。遺物出土状況：床面直上から土器片加工板（第114図78）が出土したほか、凹石（第131図91・93）や石皿（第133図113）が出土している。時期：床面直上から出土した弥生土器片（第129図74~77）から判断して、弥生時代中期後半である。

39号竪穴建物跡 (SB39) (第60図、PL11)

位置：IV A05 検出：IV層上面で黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：北部を143号土坑、北東隅を33号竪穴建物跡に切られて全形は不明であるが、残存箇所から判断して隅丸長方形である。規模：東西4.8m、南北5.8m、検出面から床面までは深いところで16cmある。主軸方位：N-25°-E 遺構の重複：33号竪穴建物跡と143号土坑に切られる。堆積状況：床面上を明褐色砂質土（3層）が覆い、暗褐色シルト質土（2層）と黒褐色シルト質土（1層）が水平堆積している。自然堆積であろう。施設：ピットを7基検出した。明褐色シルト質土が多量に混入した黒褐色土を埋土にもつP2・3・5と、位置的にP6が主柱穴である。P3は掘方埋土が残る。土器や礫が出土したP1は、本建物跡を切る土坑である。遺物出土状況：竪穴中央やや南寄りの埋土中から大型の甕（第114図80）、P1の埋土から3個体の土器（第114図79・81・83）が出土している。また、埋土中から砥石が2点（第132図102・104）、P7の直上から石皿（第133図112）が、P1・2・7周辺の埋土中から骨片が多量に出土した。時期：出土遺物から、弥生時代後期である。

41号竪穴建物跡 (SB41) (第61図)

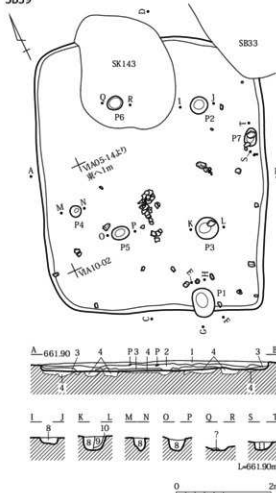
位置：IV U19 検出：IV層上面で白色・赤色粒子を含む褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸方形である。規模：東西4.0m、南北4.2m、検出面から床面までは深いところで15cmある。主軸方位：N-11°-E 遺構の重複：8号方形周溝墓に切られる。堆積状況：炭化粒を含む黒褐色シルト質土（2層）と褐色シルト質土が水平堆積している。自然堆積であろう。施設：ピット9基と炉穴を検出し

た。やや壁に近いが四隅にあり、床面からの深さが40cm前後と深く、共通する埋土をもつP1・2・3・6を主柱穴と考えた。同じ埋土をもつP7は位置的に出入口施設の可能性ある。床面中央やや北寄りで見出した炉穴の上面には焼土がある。遺物出土状況：床面から約10cm浮いた状態で土器が比較的多量に出土した。また、埋土から擦切具（第127図52）、P4から台石（第133図114）が出土している。時期：埋土中から出土した土器（第114図84～88）から判断して、弥生時代後期である。

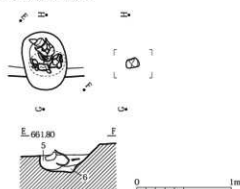
42号竪穴建物跡 (SB42) (第62図)

位置：IVU14 検出：IV層上面で暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：北側を8号方形周溝溝に切れ、南西部をかく乱に壊されて全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形または隅丸方形であろう。規模：東西4.8m以上、南北1.9m以上、検出面から床面までは深いところで11cmある。主軸方位：不明 遺構の重複：8号方形周溝溝に切られる。堆積状況：壁際に明褐色ブロックを含む灰黄褐色シルト質の三角堆土があり、炭化粒を含む黒褐色シルト質土（2層）と暗褐色シルト質土（1層）が推定堆積している。施設：ピットを5基検出した。炭化粒を含む黒褐色シルト質土を埋土にもつ南西隅のP5は深さの点でも主柱穴と考えられる。また、南壁際中央のP2とP3は位置的に出入口施設と考えられるが、そのほかのピットは性格不明である。遺物出土状況：床面直上から出土した甕（第114図89）は、埋土中の破片と接合した。時期：出土遺物から判断して、弥生時代後期である。

SB39



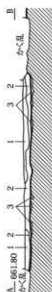
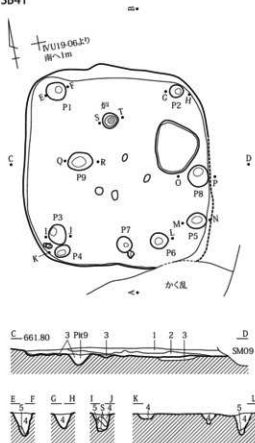
Pit1内遺物出土状況図



- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト質土。粘性なし・しまりあり
餅作土ブロック状に30%含。SK143の1層と同じ
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質土。粘性なし・しまりややあり
2～20mm明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト20%混
- 3 明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト。粘性なし・しまりややあり
暗褐色(10YR3/4)シルト質土10%混
- 4 黒褐色(10YR3/1)シルト質土に明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト30%混。粘性・しまりなし。床下
- 5 黒褐色(10YR2/2)に黒褐色(10YR5/6)シルト質土10%混
粘性弱・しまりあり
- 6 黒褐色(10YR2/3)と黒褐色(10YR5/6)シルト質土50%混
粘性あり・しまり弱
- 7 黒褐色(10YR2/2)に黒褐色(10YR5/6)シルト質土(若干砂質)30%混。粘性なし・しまりあり
- 8 黒褐色(10YR2/3)に、明黄褐色(10YR6/6)シルト質土が20～50%混。粘性弱・しまりあり
- 9 暗褐色(10YR3/3)に、明黄褐色(10YR6/6)シルト質土20%混
粘性弱・しまりあり
- 10 黄褐色(10YR5/6)に、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土30%混
粘性・しまり弱
- 11 黒褐色(10YR3/2)に、黄褐色(10YR5/6)シルト質土30%混
粘性なし・しまり弱

第60図 SB39 遺構図

SB41

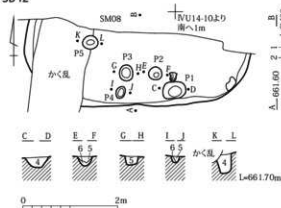


- 1 褐色(10YR4/4)
シルト。粘性なし・しまり強
1～5mm白色粒子20%、1～2mm赤色粒子5%含
2層と耕作土が混合した層。場所により肉層の混入率が異なる
- 2 黒褐色(10Y3/1)
シルト。粘性弱・しまり強
2～4mm白色粒子8%、20～30mm赤色粒子3%、
2～5mm炭化粒子10%含
10～100mmの地山、明黄褐色(10YR6/6)ブロック10%含
埋土
- 3 黒色(10YR2/1)
シルト。粘性・しまりあり
1～2mm赤色粒子5%、10～30mmの地山
明黄褐色(10YR6/6)ブロック30%含。掘り方
- 4 黒褐色(10YR3/2)
シルト。粘性なし・しまり強。1～10mm白色粒子10%、
10～50mmの地山、黄褐色(10YR7/8)混
- 5 灰白色(10YR7/1)
シルト。粘性弱・しまりあり。砂っぽい
1～2mmの鉄分集積が斑点状に全体的に見られる
- 6 暗褐色(10YR3/4)
シルト。粘性なし・しまり強。2～4mm白色粒子5%含
層下部にいくほど地山の混入が見られ、色調が明るくなる
Pn5のみに見られる土で他のPn覆土とはかなり異なる
- 7 にぶい赤褐色(2.5YR4/4)
砂。粘性なし・しまりあり。5層が焼けている
- 8 黄褐色(10Y5/6)
シルト。粘性なし・しまり強。1～2mm赤色粒子3%を含む層

0 2m

第61図 SB41 遺構図

SB42



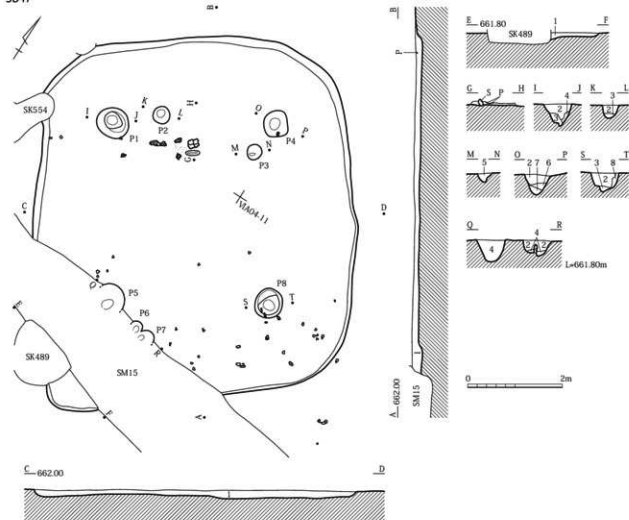
- 1 暗褐色(10YR3/4)
シルト。粘性なし・しまりかなり強。1～2mm白色粒子30%、
2～5mm赤色粒子10%含。木根10%含。耕作土
- 2 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性あり・しまり強。1～2mm白色粒子5%、
2～6mm炭化粒子15%含。2～3mm赤色粒子3%、
10～30mmの地山(明黄褐 10YR7/6)ブロック20%含。SB42堆土
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)
シルト質。粘性弱・しまり強いが2層より若干弱い。1層を主体とし、
地山(明黄褐 10YR7/6)ブロック10～20mmが30%混入した層
SB42一次堆積
- 4 黒褐色(10YR3/2)
シルト。粘性弱・しまり強。2～3mm白色粒子5%、
1～2mmの赤色粒子3%、2～4mm炭化粒子1%含
10～40mmの地山ブロック(にぶい黄褐 10YR7/4)7%含
- 5 にぶい黄褐色(10Y5/4)
シルト。粘性弱・しまり強。1～2mm白色粒子5%、2～3mm
赤色粒子7%、地山(明黄褐 10YR7/6)30%含
- 6 にぶい黄褐色(10Y5/3)
砂。粘性なし・しまり強。地山に5層が混入した層
5層は1～4mmブロック状の混入

第62図 SB42 遺構図

47号竪穴建物跡 (SB47) (第63図)

位置：IVA04 検出：IV層上面で炭化粒を含み黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：やや不整な隅丸長方形である。規模：東西6.4m、南北7.6m、検出面から床面までの深さは14cmである。主軸方位：N-33°-W 遺構の重複：15号方形周溝墓や489・554号土坑に切られる。堆積状況：黒褐色シルト質土の単層である。施設：ピットを9基検出した。P1・4・5・8は主柱穴であるが、そのほかのピットは性格不明である。P1とP4の間から礫や炭が出土しているため、ここが火床であった可能性がある。遺物出土状況：火床から甕の大破片(第114図92)が出土したほか、埋土中から磨製石斧(第114図

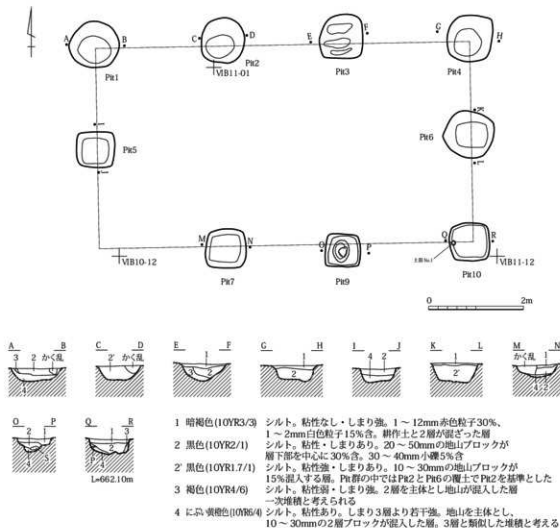
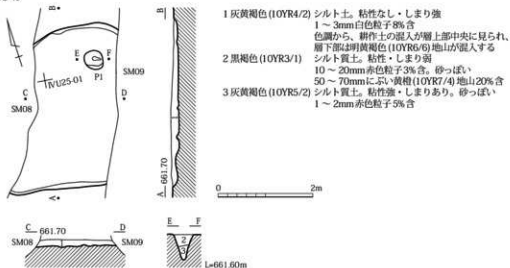
SB47



- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。粘性弱・しまりあり。1~3mm白色粒子5%、1~2mm赤色粒子5%、1~2mm炭化粒子3%混
検出面では炭化物(サンプリング有)が見られたが、床面、検出面下で炭化物と呼べるもの出土なし
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。粘性あり・しまり強。10~30mm白色粒子10%、1~3mm赤色粒子5%混
10~50mm明黄褐色(10YR7/6)地山ブロック20%、層下部に明黄褐色(10YR7/6)地山混
- 3 褐灰色 (10YR4/1)
- 4 黒褐色 (10YR3/2)
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性あり・しまり弱。10~20mm白色粒子3%、1~3mm赤色粒子5%混
- 6 黒褐色 (10YR3/1) 粘性強・しまり弱
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性かなり強・しまりかなり弱。10~30mm白色粒子5%、1~3mm赤色粒子3%混
1層を主体とし、浅黄褐色(10YR8/3)地山が混入した層
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱・しまりあり。10~30mm白色粒子5%、1~3mm赤色粒子3%混
1層を主体とし、浅黄褐色(10YR8/3)地山が混入した層
- 9 黒褐色 (10YR3/1) 粘性強・しまりやや弱。1~3mm白色粒子3%混
- 10 暗褐色 (10YR3/3) 粘性あり・しまりやや弱程度で9層より弱。8層を主体とし、明黄褐色(10YR6/6)地山が混入した層
1~3mm白色粒子8%混

第63図 SB47 遺構図

SB49



76) が出土している。時期：火床から出土した土器から判断して、古墳時代前期である。

49号建物跡 (SB49) (第64図)

位置：IV-U19・20・24・25 検出：IV層上面で灰褐色シルト層の落込みを検出した。形状：東西をSM08とSM09に切られて全形は不明である。規模：南北3.3m東西は不明、検出面からの深さは10cmである。主軸方位：不明 遺構の重複：SM08とSM09に切られる。堆積状況：灰黄褐色シルトの単層である。施設：ピットを1基検出した。性格は不明である。遺物出土状況：床面から浮いた状態で土器が出土している。時期：埋土中から出土した土器(第114図94)は混入で、弥生時代後期である。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (ST01) (第65図)

位置：3b区ⅥA10・15、B6・11 検出：IV層上面で暗褐色または黒色土の落ち込みを確認した。形状：南西角の柱穴は確認できなかったが、桁行3間、梁間2間の掘立柱建物である。規模：南北7.5m、東西5.2m 長軸方位：N-1°-W 遺構の重複：なし 柱穴：直径90~110cmの円形、または1辺70~90cmの方形で、確認面からの深さは23~39cmである。埋土は、2~3層に分かれ、柱痕は確認できなかった。遺物出土状況：P5・8・9・10に縄文土器が混入している。時期：発掘担当者は弥生時代とする。

(3) 墓跡

1号礫床木棺墓 (SM01) (第66図、PL13)

位置：3b区ⅥB2 検出：表土掘削時に礫の集中を検出した。形状：掘方がすべて削平されて全形は不明 礫が長方形に分布し、礫の下東西に長方形とオタマジャクシ形の木口痕(P1・P2)がある。規模：礫は南北75cm、東西220cmの範囲に分布する。木口痕は西側(P1)が135×75cmで深さ18cm、東側(P2)が100×50cmで深さ16cmである。遺構の重複：P1の南端から出土した壺(第114図97)は、本遺構を切る土器棺墓の可能性がある。堆積状況：礫層の下、埋土の黒色土(2層)の上に表土(1層)が入り込む。遺物出土状況：P1内から甕の破片が出土した(第114図98)ほか、礫床下2層で弥生時代中期の土器片が多く出土している。また、spDの東から磨製石斧(第129図79)が、フルイにかけた土から管玉が4点(第134図6~9)出土している。時期：弥生時代中期後半である。

2号礫床木棺墓 (SM02) (第67図、PL13)

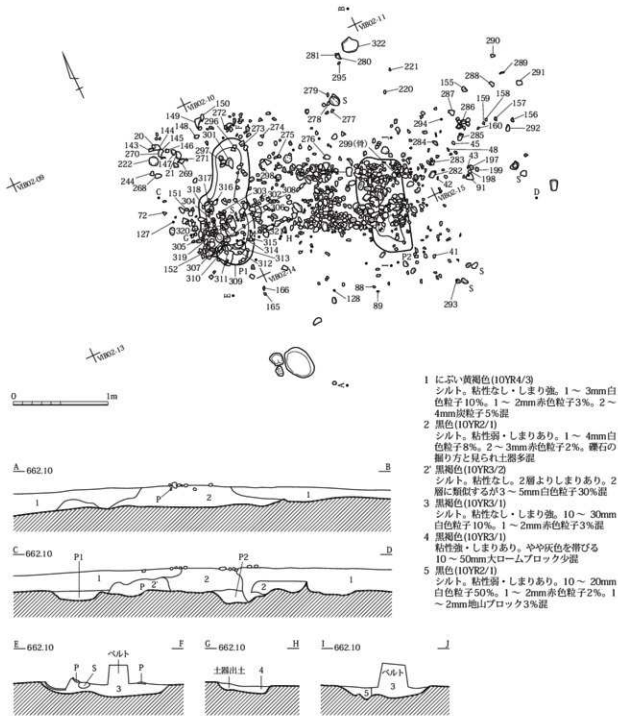
位置：3b区ⅥB1・2 検出：表土掘削時に礫の集中を検出した。形状：掘方がすべて削平されて全形は不明。礫床が長方形に分布し、礫の下に長方形とオタマジャクシ形の木口痕がある。規模：礫は南北215cm、東西80cmの範囲に分布する。木口痕は、北側が85×50cmで深さ15cm、南側が80×30cmで深さ20cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：礫層の下の埋土が2層に分かれ、上に表土(1層)が入り込む。自然堆積と推測する。遺物：埋土から土器片、P1の西側から人面付土器の破片(第120図244)が出土している。また、礫床の西から打製石斧(第128図70)、フルイにかけた土から管玉2点(第134図10・11)が出土した。時期：礫床の西側から出土した土器(第115図99・100)から、弥生時代中期後半と推測する。

3号礫床木棺墓 (SM03) (第68図)

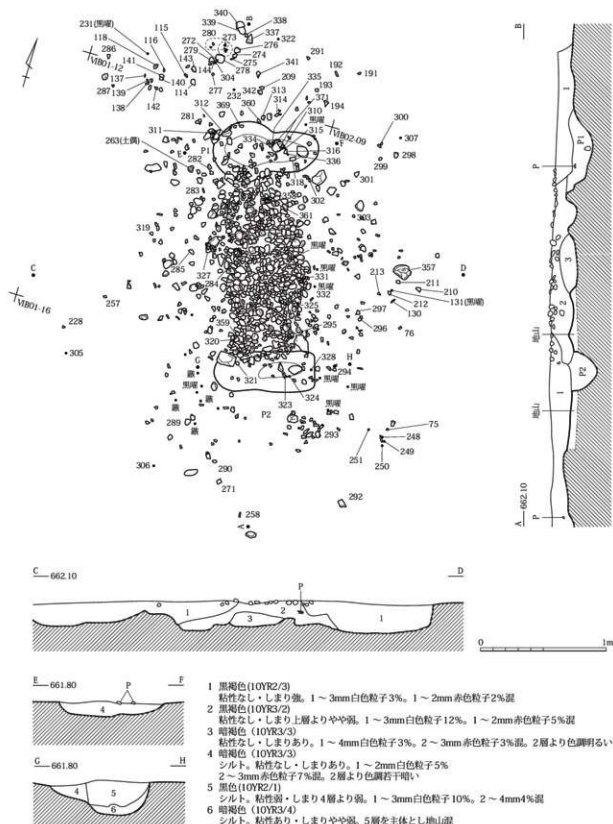
位置：3b区ⅣV22 検出：表土掘削時に礫の集中を検出した。形状：中・西部をSM09に切られて全形は不明であるが、残存部分から長方形と推測する。規模：東西は不明だが1.2m以上、南北1.1m、確認面からの深さは6~13cmである。木口痕は検出できなかった。遺構の重複：SM09に切られる。堆積状況：2層に分かれる。遺物：埋土から縄文土器と弥生土器の小片が少量出土しているが、小片で図示できなかった。時期：弥生時代であるが、時期は不明。

4号土坑墓 (SM04) (第69図、PL13)

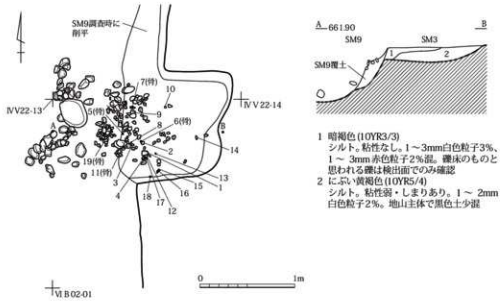
位置：ⅣV23、ⅥB3 検出：IV層上面で礫の集中により検出した。形状：平面楕円形で、底は平らで



第66図 SM01 遺構図

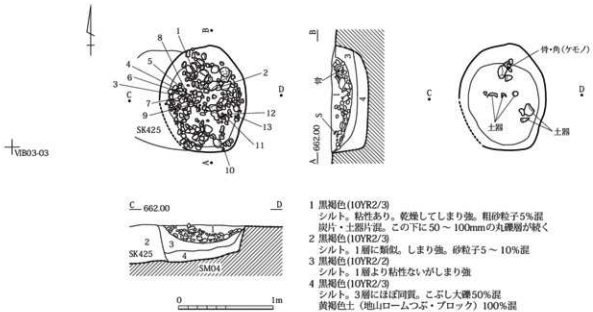


第67図 SM02 遺構図



N/V 23-15

N/V 23-16

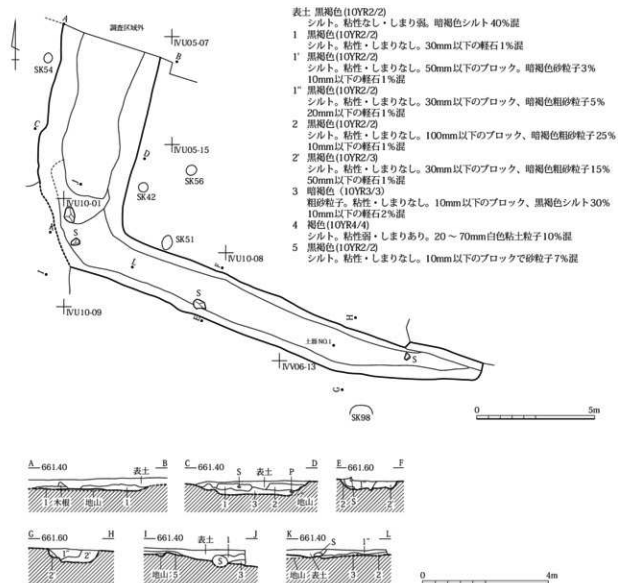


ある。規模：115cm×85cm、確認面からの深さは40cmである。遺構の重複：SK425を切る。堆積状況：4層に分かれ、上部に礫が載っている。遺物：縄文土器から近世陶磁器までと打製石斧片のほか、焼骨片が微量混在して出土している。フルイにかけた土から管玉（第134図2）が出土した。時期：不明

6号方形周溝墓（SM06）（第70図、PL13）

位置：IVU4・5・9・10 検出：IV層上面で黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状：北・東部が調査区外のため全形は不明であるが、方形に巡る溝の一部と推測する。規模：東西18.4m、南北不明だが、9.4m以上、周溝の幅1.1～56cm、深さ6～53cm。遺構の重複：SK09を切る。堆積状況：3層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部：検出できなかったが、調査区外に存在すると推測する。遺物：溝の埋土から鉢や高坏が出土している（第115図102～104）。時期：遺物は複数時期にまたがり、詳細な時期を決めたいが、弥生時代後期後半から古墳時代前期と推測する。

SM06



7号方形周溝墓 (SM07) (第71図, PL13)

位置: IV U04・07・08・09・12・13・14 検出: IV層上面で黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状: 北部と西部が調査区外のため全形は不明であるが、南辺中央に開口部を持つ方形に巡る溝と考える。規模: 現長東西7.9m、南北6.8m、周溝の幅40~78cm、深さ18~39cm。遺構の重複: 17号竪穴建物跡と96号土坑を切る。堆積状況: 3層に分かれ、最下層は水流によると思われる砂層である。自然堆積と推測する。主体部: 検出できなかったが、調査区外に存在すると推測する。遺物: U08から壺(第115図105)、甕(同107)、高坏(同109)、U09から高坏(同108)、溝内から壺の口縁部(同106)が出土している。ただし、壺は本方形周溝墓に伴わないかもしれない。また、平安時代の転用硯(第123図75)が埋土1層から、スクレイパー(第126図39)がU09から出土しているが、混入である。時期: 遺物は複数時期にまたがり、詳細な時期を決めたいが、形状から弥生時代後期後半から古墳時代前期と推測する。

8号方形周溝墓 (SM08) (第72図, PL13)

位置: IV U13・14・18・19・23・24 検出: IV層上面で黒色シルトの落ち込みを検出した。形状: 南辺中央に開口部を持つ方形に巡る溝である。規模: 東西19.0m、南北18.0m、周溝の幅140~400cm、深さ33~70cm 遺構の重複: 19・20・36・41・42・49号竪穴建物跡を切る。堆積状況: 3層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部: 検出できなかった。遺物: 周溝埋土から弥生時代中期後半~後期の壺、甕、高坏が出土している(第115図110~122)。開口部西側の周溝埋土中から砥石(第115図108)が、その他周溝上層から石錐(第125図28)、磨石(第130図89)、砥石(第132図99)が出土した。時期: 遺物は複数時期にまたがり、詳細な時期を決めたいが、形状から弥生時代後期後半から古墳時代前期と推測する。

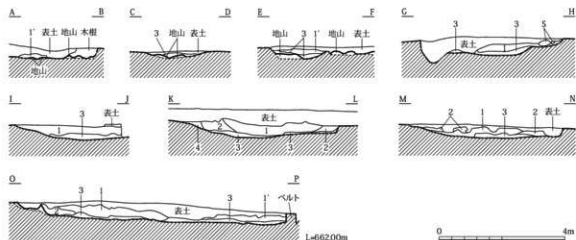
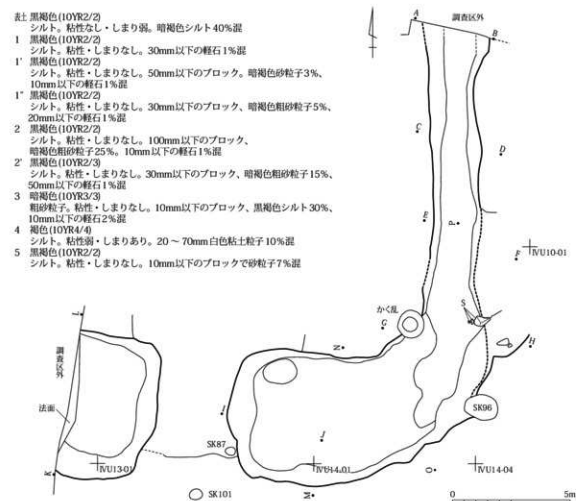
9号方形周溝墓 (SM09) (第73図, PL14)

位置: IV U20・25、V16・17・21・22、VIA5、B1・2 検出: IV層上面で耕作土や黒色シルトの落ち込みを検出した。形状: 南辺中央に開口部を持ち方形に巡る溝である。規模: 東西16.2m、南北16.4m、周溝の幅1.4~3.0m、深さ32~60cm。遺構の重複: 24・25号竪穴建物跡、3号礎床木棺墓SM03、138・416号土坑を切り、33号竪穴建物跡に切られる。堆積状況: 3層に分かれ、自然堆積と推測する。遺物出土状況: 埋土から弥生時代中期後半~古墳時代前期の土器が出土している。開口部西側の周溝内に土器集中が2か所、開口部の東側周溝内と東側周溝内にそれぞれ1か所の礫集中箇所があり、土器集中1で土師器球胴甕(第116図131)、土器集中3で土師器球胴甕(同132)、礫集中2で擦切具(第127図53)が出土している。また、周溝内から磨製石鏃(第124図16)、石錐(第125図33)、スクレイパー(同34・35)、両極石器(第128図62)、砥石(第132図99)が出土した。時期: 遺物は複数時期にまたがり、詳細な時期を決めたいが、土器集中箇所から出土した遺存率の高い土師器球胴甕と、南側周溝から出土した小型丸底壺(同133)から判断して、古墳時代前期に下ると推測する。

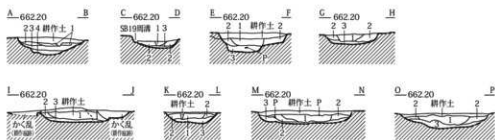
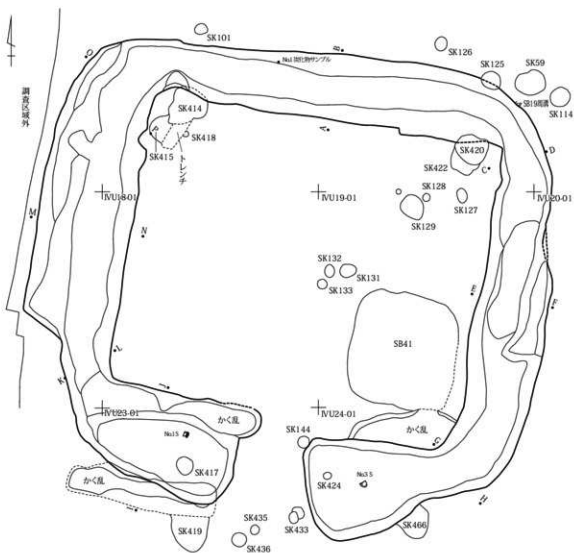
10号方形周溝墓 (SM10) (第74図, PL14)

位置: VI B12・13・18 検出: IV層上面で黒色シルトの落ち込みを検出した。形状: かく乱や22・29・30号竪穴建物跡に切られて全形は不明であるが、残存部分からは四隅が切れる方形周溝墓である。規模: 東西9.3m、南北9.6mで、周溝の長さ・幅・確認面からの深さは、東側が各6.3m・0.7~0.8m・28~45cm、南側が各[4.2m]・1.0~1.4m・13~41cm、西側が各4.8m・1.1~1.3m・18~28cm、北側が[4.5m]・1.0m・23~43cm([]内は残存長)である。遺構の重複: 22・29・30号竪穴建物跡に切られる。堆積状況: 2~3層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部: 検出できなかった。遺物: 北周溝上層から壺(第116図140)、東周溝中層からも壺(同141)が出土したほか、周溝内から土器が多量に出土している。時期: 出土遺物や、四隅が切れる周溝の形状から弥生時代後期中葉と推測する。

- 表土 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性なし・しまり弱。暗褐色シルト40%混
- 1 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下の軽石1%混
- 1' 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。50mm以下のブロック。暗褐色砂粒子3%、
10mm以下の軽石1%混
- 1'' 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下のブロック、暗褐色粗砂粒子5%、
20mm以下の軽石1%混
- 2 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。100mm以下のブロック、
暗褐色粗砂粒子25%。10mm以下の軽石1%混
- 2' 黒褐色(10YR2/3)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下のブロック、暗褐色粗砂粒子15%、
50mm以下の軽石1%混
- 3 暗褐色(10YR3/3)
粗砂粒子。粘性・しまりなし。10mm以下のブロック、黒褐色シルト30%、
10mm以下の軽石2%混
- 4 褐色(10YR4/4)
シルト。粘性弱・しまりあり。20~70mm白色粘土粒子10%混
- 5 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで砂粒子7%混

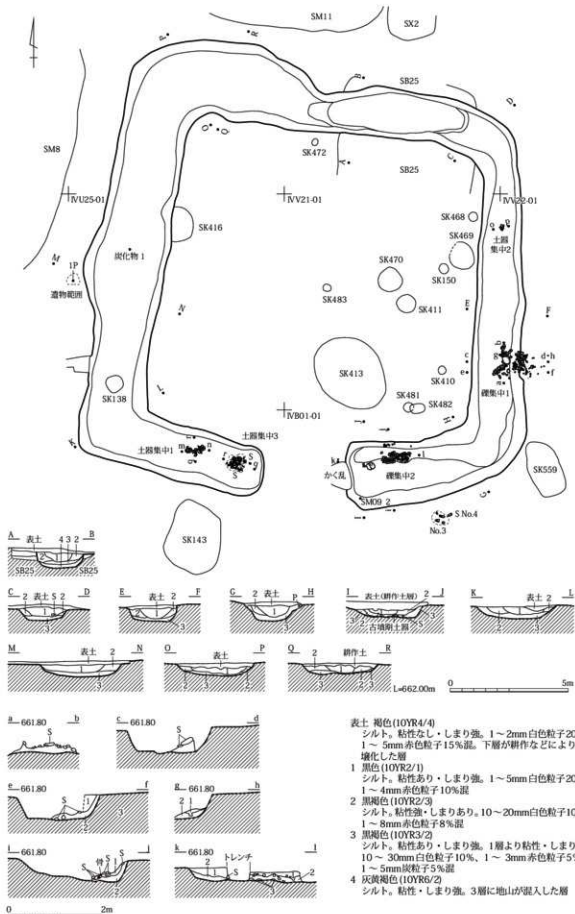


第71図 SM07 遺構図

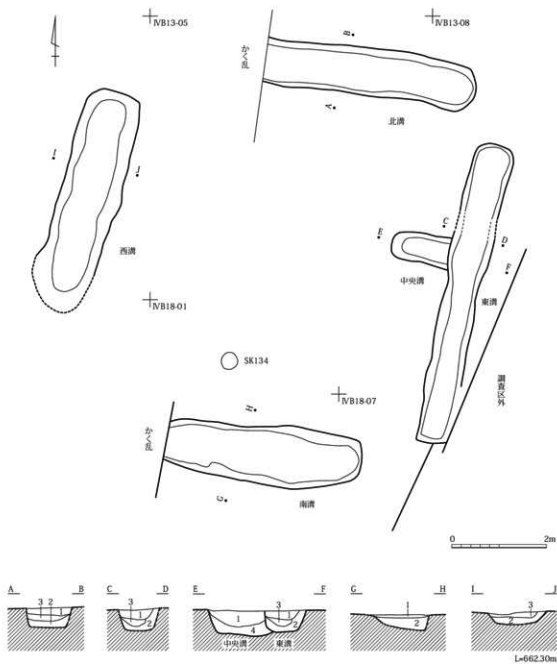


- 耕作土 褐灰色(10YR4/1)
シルト、粘性・しまり強。耕作土主体、1層が層下部を中心に混。1~2mm白色粒子15%、1~3mm赤色粒子含。木根5%含
- 1 黒色(10YR2/1)
シルト、粘性強・しまり弱。1~3mm白色・赤色粒子5%含
- 2 黒褐色(10YR2/2)
シルト、粘性強・しまり弱。1~5mm白色粒子10%、1~3mm赤色粒子5%含
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)
シルト、粘性なし・しまりあり。1~3mm白色・赤色粒子5%含。砂っぽい
- 4 ぶい黄褐色(10YR5/3)
シルト、粘性・しまり強。層下部を中心に1~5mm白色粒子30%、1~3mm赤色粒子15%、1~2mm炭粒子5%含

第72図 SM08 遺構図

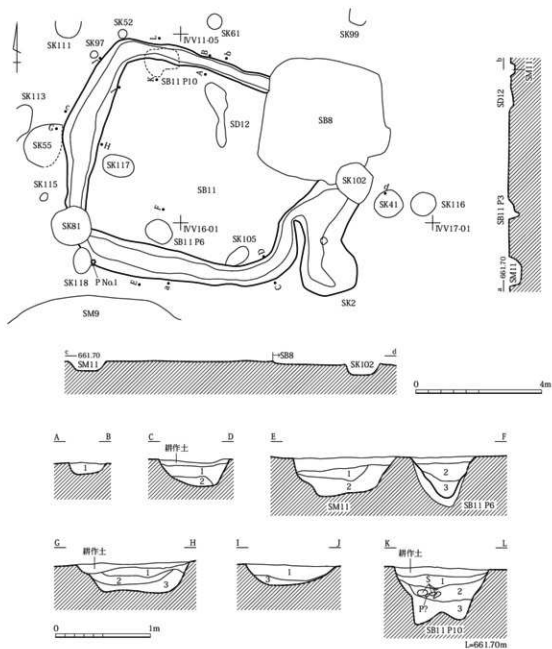


第73図 SM09 遺構図1



- 1 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱・しまりあり。2mm粗砂粒子2～3%。耕作土混
 2 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱。1層に似る。黄褐色地山アブロック・2～3mm粒子5%混
 3 黒色(10YR2/1)シルト。粘性・しまり弱。1・2層とほぼ同質
 4 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性弱・しまりなし。50mmロームアブロック。ローム粒子20～40%混。1層に似るが一括埋没層

第74図 SM10 遺構図



表土 濃い黄褐色(10YR4/3)

シルト。粘性なし・しまり強。1~2mm白色粒子40%。1~2mm赤色粒子5%混

1 黒褐色(10YR2/2)

シルト。粘性弱・しまり強。1~25mm白色粒子10%。10~20mm赤色粒子5%混。SD9の堆土

2 黒褐色(10YR2/3)

シルト。粘性なし・しまりあり。10~30mm白色粒子(軽石)5%混。SD9の堆土

SD9の段階的な堆設か

3 黄褐色(10YR5/8)

シルト。粘性弱・しまり強。地山主体2層が混入した層。10~60mm白色粒子5%混

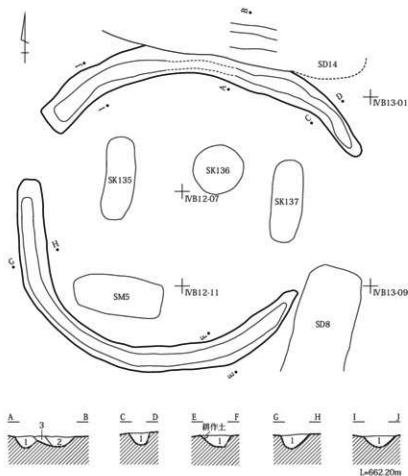
第75図 SM11 遺構図

11号方形周溝墓 (SM11) (第75図)

位置：IVU15・20、V11・16 検出：IV層上面で黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状：北東部を8号堅穴建物跡に、西南部を81号土坑等に切られて全形は不明だが、方形に巡る溝である。西南部は隅に向かって溝が幅狭で浅くなっている。8・118号土坑と重複するため判然としないが、南西隅は切れていたものと推測する。規模：東西7.8m、南北7.3m、周溝の幅0.4～1.2m、確認面からの深さ11～40cmである。遺構の重複：11号堅穴建物跡、55・105号土坑を切り、8号堅穴建物跡や81・118号土坑に切られる。2号土坑との重複関係は判然としない。堆積状況：2～3層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部：検出できなかった。遺物出土状況：器台(第116図144)は東周溝と2号土坑の間から、糞2点(第116図142・143)は本方形周溝墓を切る81号土坑埋土上・中層から出土している。時期：埋土に中期後半の土器が混在する81号土坑に切られているが、弥生後期の11号堅穴建物跡を切ることは确实だから、弥生時代後期後半から古墳時代前期と推測する。

12号円形周溝墓 (SM12) (第76図、PL14)

位置：VB7・12 検出：IV層上面で黒色シルトの落ち込みを検出した。形状：南北2条の弧状の溝が



- 1 黒色(10YR1.7/1)シルト。粘性なし・しまり弱。地山・明黄褐色。30～50mm砂ブロック1%混
 2 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまり弱。粗砂粒子5%。ローム粒子1～2%混。1層とほとんど同質
 3 黒褐色(10YR2/3)シルト。地山ローム粒子20～30%混。2層と同質。SD14の掘方および崩落の堆積層

第76図 SM12 遺構図

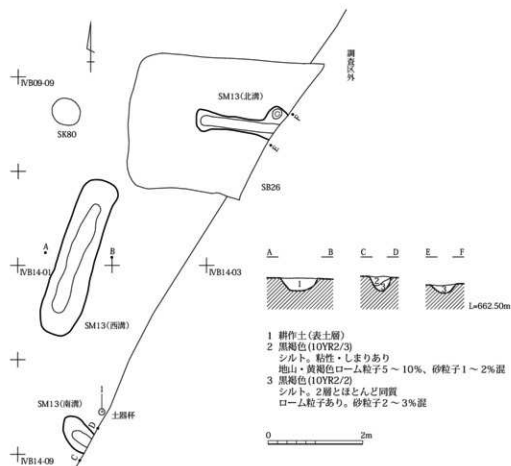
南北向い合せに並ぶ円形周溝墓である。規模：北部を14号溝跡に切られて全体の規模は不明であるが、現状で東西7.4m、南北6.8m、周溝の幅40～60cm、確認面からの深さは12～30cmである。遺構の重複：14号溝跡に切られる。堆積状況：黒色シルトの単層である。主体部：周溝内南西部に5号木棺墓があるが、端に偏るうえ馬歯が出土していることから、本円形周溝墓には伴わない、北西部の135号土坑、北東部の137号土坑を主体部と考えたとバランスが良い。遺物出土状況：図示した甕（第116図145）が周溝西部の埋土から出土しているが、遺物の出土量は極めて少ない。時期：出土遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期後半と推測する。

13号方形周溝墓 (SM13) (第77図、PL14)

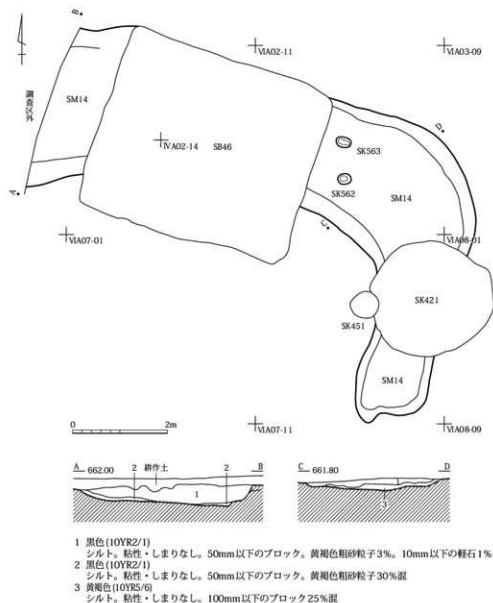
位置：VIB09・14 検出：IV層上面の黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状：北溝と南溝の東側および東溝が調査区外のため全形は不明であるが、残存部分からは4隅が切れる方形周溝墓であると推測する。規模：東側を除く3方の周溝の長さ・幅・確認面からの深さは、南側が各 [0.8m]・50cm・29～32cm、西側が各3.4m・70～90cm・18～30cm、北側が各 [1.8m]・30～40cm・12～20cmである。遺構の重複：26号竪穴建物跡の床下で本方形周溝墓を検出した。堆積状況：南溝は上下2層に分かれるが、ほぼ同質の埋土であった。主体部：検出できなかった。遺物：ほとんどない。時期：遺物がほとんどなく不明だが、四隅が切れる周溝の形状からは10号方形周溝墓と同じ弥生時代後期中葉か。

14号方形周溝墓 (SM14) (第78図)

位置：VIA01・02・07 検出：IV層上面で黒色シルトの落ち込みを検出した。形状：西側が調査区外、



第77図 SM13 遺構図

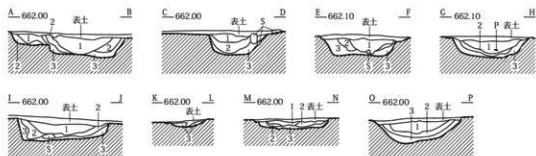
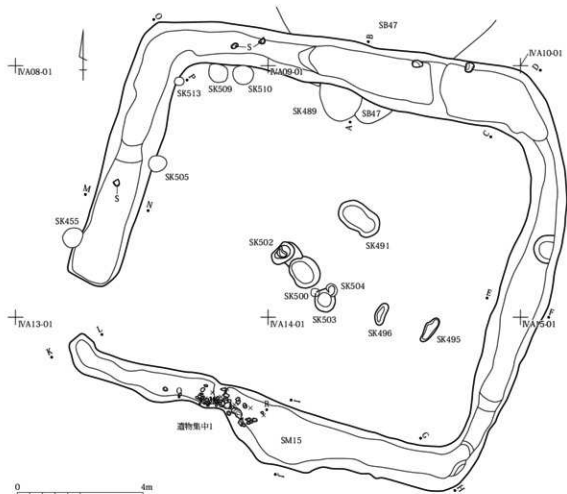


第78図 SM14 遺構図

南側は削平されているため全形は不明であるが、東側から北側を巡るL字状の溝である。図では東側に開口部があるように見えるが、削平されているため不明である。規模：現状で東西9.4m、南北6.4m、溝の幅1.4～3.1m、確認面からの深さ10～34cmである。遺構の重複：562・563号土坑を切り、46号竪穴建物跡および421号土坑に切られる。堆積状況：上下2層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部：検出できなかった。遺物出土状況：周溝埋土から弥生中期後半の壺片が出土しているが、小片のため図示できなかった。時期：東隣の15号方形周溝墓と軸が揃うため、同時期の古墳時代前期と考える。

15号方形周溝墓 (SM15) (第79図)

位置：区VIA04・09 検出：IV層上面で黒色シルトの落ち込みを検出した。形状：周溝は、南西隅が切れ方形に巡る。規模：東西7.5m、南北6.8mで、周溝の幅40～100cm、確認面からの深さは10～51cmである。遺構の重複：47号竪穴建物跡および455・489・505・513号土坑を切る。堆積状況：3層に分かれ、自然堆積と推測する。主体部：発掘作業では土坑と認識していたSK491とSK502・503は南北一対の木口痕、SK456と496も東西一対の木口痕である。前者を主体部A、後者を主体部Bとすると、Aの木口幅は



- 表土 黒色(10YR2/1)
 シルト、粘性・しまりなし。100mm以下のブロック
 耕作土30%。10mm以下のブロック。粗砂粒子2%混
- 1 黒色(10YR2/1)
 シルト、粘性・しまりなし。20mm以下のブロック。粗砂粒子3%
 10mm以下の軽石1%混
- 2 黒褐色(10YR2/2)
 シルト、粘性・しまりなし。30mm以下のブロック。粗砂粒子7%混
- 3 褐色(10YR4/6)
 粗砂粒子、粘性・しまりなし。100mm以下のブロック。シルト25%混
- SB47
 1 黒褐色(10YR2/2)
 シルト、粘性・しまりなし。40mm以下のブロック。粗砂粒子5%混
- 2 褐色(10YR4/6)
 粗砂粒子、粘性・しまりなし。100mm以下のブロック。シルト20%混

第79図 SM15 遺構図

70～85cm、南北木口間の距離は約120cm、Bの木口幅は35～45cm、東西の木口間は約80cmである。遺物：南側周溝の土器集中から古墳前期の壺（第116図152）に混在して、弥生中期後半の壺片（同149）が出土し、北側周溝内から小型甕（同151）が出土している。また、周溝の北東部から有茎の打製石鏃（第124図14）、南側の周溝から打製石包丁（第127図51）、擦切痕がある剥片（第127図55）、石鏃（第128図71）、砥石（第133図108）が出土した。時期：弥生時代中期後半の土器片が混在しているが、南周溝内および北周溝内から出土した略完形の壺と甕から、古墳時代前期と考える。

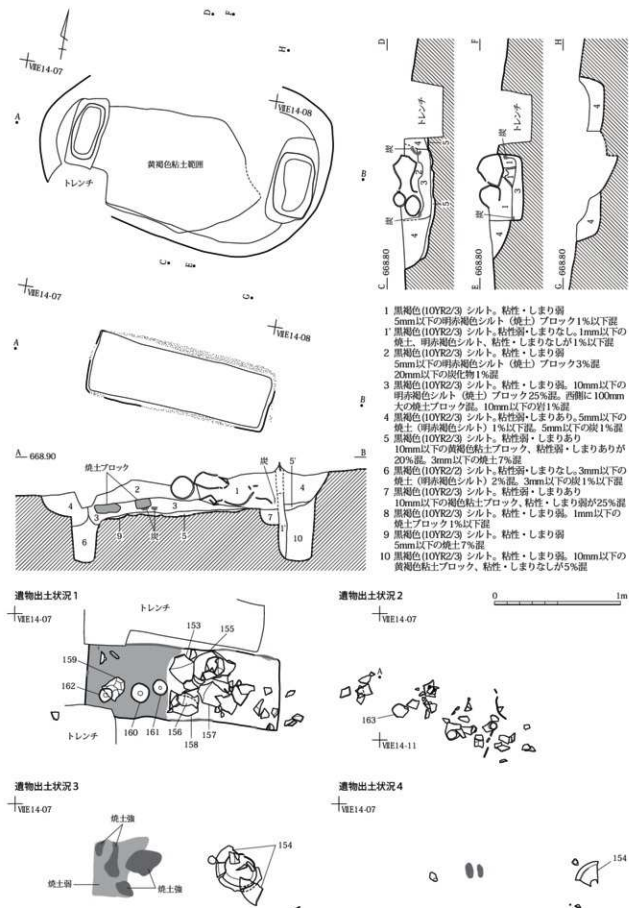
18号木棺墓（SM18）（第80図、PL14）

位置：5 b区ⅥE7 検出および調査経過：基本土層Ⅲ層の黒褐色土を重機で掘り下げ中、遺物が出土するので手掘りに切り換えて検出したが、明確な遺構の範囲は確認できなかった。しかし、やがて全体に焼土が分布していること、東側に土器が集中することを確認した。この土器集中を発掘時にSQ05と登録した。続いて、のちに木棺墓と認識することになる辺りの西側と北側にサブトレンチを設定し、段階的に掘り下げていくと、トレンチの底へ行くほど西側に焼土が広がっていることわかった。また、深さ25cm程度のところで、黄褐色粘土ブロックが混在する黒褐色シルト質土（埋土5層）を薄く貼っているように見えたことから、この遺構が土坑であると認識するに至った。さらに、東側と南側にもサブトレンチを設定して掘り下げ、落込みの中央から西側に焼土ブロックを含む黒褐色シルト土（埋土3層）が堆積し、東側には大きな完形土器が詰まっている様子が明らかになった。焼土や土器の出土状態を記録して全体を掘り下げると、焼土が南北に長い長方形の範囲に収まっていることがわかり、焼土範囲の周りには枠状に炭が遺存している状態を確認した。これによって、本遺構を木棺墓ではないかと推測した。上部の土器を取り上げた後、木棺墓内に十字ベルトを設定して埋土を掘り下げた。この時点で顆粒状の炭化物が出土したが、うまく取り上げることができなかったので、埋土とともに取り上げて土のう袋に入れた。木棺墓の南壁東側からガラス小玉が1点出土したが、埋土をフレイにかけてさらに5点のガラス小玉が見つかった（第134図12～17）。ベルトの断面観察によると、西側により多くの焼土が混入しており、なかには10cm以上の焼土塊もあった。平面で確認した枠状の炭は、北・南・東辺でほぼ垂直に入っている様子がわかり、厚さ4cm程度の炭が板状に残っていた。これらの記録を残し、炭化材を取り上げた後、木棺の掘方部分を掘り下げた。東西に木口痕があり、東側の木口の西端に炭化材が縦に入り、その外側（東側）を焼土や炭が混じる黒褐色シルト質土で埋めている様子を観察できた。また、木口痕の掘削土は、掘方底面の整形に使われ（埋土5層）、側板は整形した底面の上に設置していることもわかった（C-D断面）。規模と形状：木棺は東西150cm、南北55cmの長方形で、検出面からの深さは約25cmである。掘方は東西230cm、南北140cmの楕円形で、検出面からの深さは最大で30cmである。木口痕は東側が70×35cm、西側が55×25cmの隅丸長方形で、底面からの深さは両方とも約40cmである。遺構の重複：なし 遺物出土状況：木棺の東側埋土上層から壺や台付壺、大型高坏、中型甕が出土し（第117図153～158）、西側からは小型甕や鉢（第117図159～163）とともに、10cm以上の焼土塊や大量の焼土が見つかった。なお、遺物図（第117図）の土器番号と遺構図（第78図）下の遺物出土状況に示した遺物番号と対応すると、次のとおりである。

153：Na66 154：Na70・74・75 155：Na68 156：Na61 157：Na64 158：Na65 159：Na63
160：Na59 161：Na69 162：Na58 163：Na18（第117図の土器番号を斜文字にした。）

時期：弥生時代後期である。所見：検出および調査経過で記述した点をもとに、本木棺墓の構築から埋没までの過程を復元してみた結果は、以下のとおりである。木棺墓自体はそれほど珍しくはないが、埋葬に伴って墓上に様々な器種の土器を供献して火を用いたイベントを行うという、極めて特異な葬制の一端を明らかにすることができた。

第1段階：棺より一回り以上大きく掘方の穴を掘る。



第80図 SM18 遺構図

第2段階：東西に木口穴を掘り、木口板を穴の内側に寄せて立て、木口穴を掘削した土で埋める（4層）。

第3段階：木口穴を掘削した土で底面を整形（5層）し、銅板を立て、掘方との間を埋めて（4層）固定する。

第4段階：ガラス小玉を身に着けたと思われる遺体を埋葬して、蓋板を被せる。

第5段階：蓋板の上に土が盛られ（3層）、東半分には壺や台付き壺、大型高坏、中型甕を、西半分には小型甕や鉢を供え、西側を中心に火を用いたイベントが行われる。

第6段階：蓋板が腐朽して、木棺内に盛土（3層）や焼土、土器が落ちる。

第7段階：木棺の窪みに土砂が堆積する（1・2層）。

（4） その他の遺構

遺物集中が4か所、溝跡12本、集石5か所、土坑682基を検出した。ただし、溝跡や集石、土坑は古代以降のものも含んでいる可能性がある。ここでは、特徴的な遺構について記述する。

遺物集中（SQ）はすべて5区で検出した。SQ01はⅦE07からE12にまたがって広がり、小型壺（第118図164・165）や高坏（同166）等が出土した。SQ02はSQ01の南側ⅦE07で、小型壺（同167～169）、中型甕（同170）、高坏（同172・173・177）、鉢（同171・174～176）が出土している。SQ03はSQ01や02の東側ⅦE-13で、壺（同178）、台付甕（同179）、中型甕（同180）、深鉢（同181）、鉢（同182）が出土した。SQ04は18号木棺墓のすぐ南側にあり、鉢（同183）や高坏（同184）、石匙（第126図47）が出土している。SQ01～03は18号木棺墓から西に10m程度離れているとはいえ、5区には木棺墓以外に目立った遺構がなく、しかも、これら遺物集中から出土した土器は、18号木棺墓上から出土した土器群の時期と大きな隔たりがない。したがって、いずれの遺物集中も18号木棺墓と何らかの関わりがあると見ていいのではないかと。

溝跡は3区で9本、4区で1本、5区で2本確認した。3b区の13号溝跡（SD13）はⅣF02～05のⅡ層上面で検出した。南東部と西部が調査区外で全形は不明であるが、東西に蛇行しながら伸びる。残存長は24.0m、幅1.1～3.4m、確認面からの深さ26～41cmである。埋土から弥生時代中期後半の壺の破片（第118図185）が出土したほか、磨製石鎌の未成品（第125図25）、スクレイパー（第126図40）、二次加工がある剝片（第127図56）、打製石斧（第128図66）、凹石（第131図92）が出土している。14号溝跡（SD14）は3b区ⅥB02・06・07のⅡ層上面で検出した。L字状の溝で、規模は差し渡し10.6m、幅70～120cm、確認面からの深さ11～47cmである。埋土から弥生時代の壺（第118図186～191）が出土した。遺構の平面形から方形周溝墓を構成する溝跡と推測するが、北東側からは対応する溝跡が見つかっていない。15号溝跡（SD15）は3b区ⅥA10・B06、17号溝跡（SD17）は3b区ⅥB18で検出した直線的に伸びる溝跡である。15号溝跡は長さ4.9m、幅90～130cm、確認面からの深さ10～21cmであり、北東から南西に向いている。また、17号溝跡は南東から北西を向き、長さ3.0m、幅40～60cm、確認面からの深さ21～32cmである。両者は四隅が切れる方形周溝墓の一部であろう。

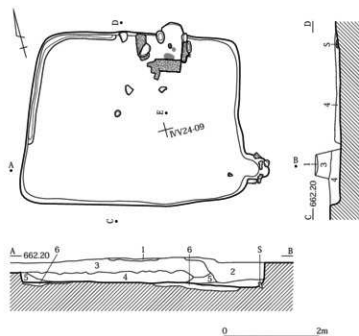
集石はいずれも3区で検出した。1号集石（SH01）は3b区ⅥB18で検出し、5～30cmの礫が幅30cm、長さ135cmにわかって列状に並んでいた。2号集石（SH02）は3b区ⅥF2・3・7・8で検出し、大小の石が方形の範囲に集中していた。礫の中に磨製石斧（第129図78）や掲き臼（第130図90）が混在していた。4号集石（SH04）は3b区ⅥA22・F2で検出した。西部が調査区外のため全形は不明であるが、一辺約120cmの隅丸方形の土坑の中に礫が詰まっていた。南東部から打製石斧（第128図68）や石鎌（同72）が出土している。

2 古代

4号竪穴建物跡 (SB04) (第81図, PL.9)

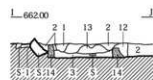
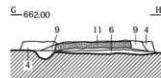
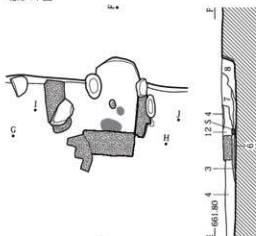
位置: IV V24 検出: IV層上面で、褐灰色粘土ブロックや黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状: 南辺が北辺よりわずかに長い台形気味の長方形である。規模: 東西4.8m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは、北側で4cm、南側で27cmである。主軸方位: N-14°-W

SB04

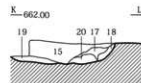
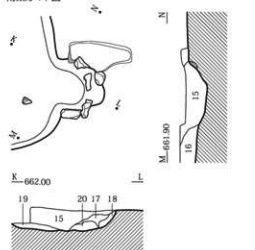


- 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト質土。粘性強・しまりよい。耕作土
- 2 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。粘性やや弱・しまりよい
黄褐色土粒子5~10%。耕作土・石灰混
- 3 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。しまりよい。耕作土・石灰混。2層とほぼ同質
- 4 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性ややあり・しまりよい
褐灰色粘土ブロック1~2%。黄褐色地山粘土ブロック3~5%混
- 5 黒色(10YR2/1) シルト質土。粘性・しまりややあり。4層と同質
- 6 暗褐色(10YR3/3) シルト質土。粘性なし・もろい。地山土ローム粒子10%混
床下腐り方埋土層
- 7 暗赤褐色(5YR3/6) 粘土ブロック混。煙道粘土天井の落下堆積
- 8 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性なし・もろい。焼土粒子1~5%混
煙道の埋土。3層と同質
- 9 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性ややあり・しまりよい。褐灰色粘土粒子
ブロック30~40%混。カマド構築粘土材の崩壊堆積
やわらかくもろい。炭粉・灰が混入した堆積
焼土粒子10%。炭・灰5%混。燃焼部内部堆積
- 12 にぶい黄褐色(10Y5/4) シルト質土。粘性ブロック50%超混
- 13 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。7層粘土ブロック10~30%混
- 14 暗赤褐色(2.5YR2/4) カマド構築粘土混。天井板と同じ
- 15 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。粘性あり・しまりよい。粘土粒子(白色)5%
砂粒子10%。焼土粒子5%混。燃焼部の崩壊堆積層
羽金など古代(平安)土器多数出土
- 16 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。1層に比べてもろい。住居(カマド脇)の第1埋土
- 17 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性ややあり・しまりよい
焼土50%。炭5~10%。灰5%混。煙道天井の落下堆積
- 18 黒褐色(10YR2/3) 粘性ややあり・もろい。煙道出口の腐り方
- 19 黒色(10YR1.7/1) シルト質土。湿りややあり・もろい。地山土ローム粒子5%混
床下整地土
- 20 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。19層と同質
ローム粒子・ブロック粒子20~30%混

北カマド図



南東カマド図



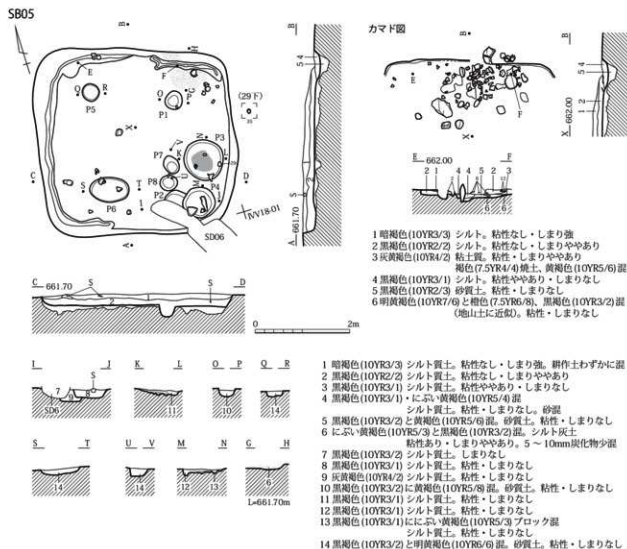
0 1m

第81図 SB04 遺構図

遺構の重複：SB03を切る。堆積状況：東西の壁際に黒色シルト質土の三角堆土があるほかは、ほぼ1層である。自然堆積であろう。施設：ピットはない。北壁東寄りと東壁南端の2か所にカマドがある。併設か移設かは不明であるが、移設だとすると天井崩落土が床面に残る北側のカマドの方が新しい。そのほか、幅約15cm、床面からの深さ4～6cmの周溝が、北壁西部から西壁北部に沿っている。遺物出土状況：北カマド周辺で灰軸陶器碗（第121図5）、黒色土器高台付碗（第121図6）、土師器羽釜（第121図7）、埋土・掘方から黒色土器碗、土師器碗などが出土している。時期：出土遺物から判断して、10世紀前半であろう。

5号竪穴建物跡（SB05）（第82図、PL.9）

位置：IV V12 検出：IV層上面で締りの強い暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸方形規模：東西4.2m、南北4.0m、検出面から床面までの深さは、北側で4cm、南側で22cmである。主軸方位：N-18°-W 遺構の重複：南東隅をSD06に切られる。SK119・120・121を切る。堆積状況：床面上を黒褐色シルト質土が覆い、暗褐色シルト質土が被る。自然堆積であろう。施設：ピットは5基検出している。位置的に円形のP1・5・8は主柱穴と推測するがいずれも浅い。P7はP8の補助柱掘方か。P6は位置がやや東にずれている上に、形状や大きさが他と異なり、主柱穴かどうか不明である。P



第82図 SB05 遺構図

3は浅い底面の中央に焼土が残っている。何らかの作業に使用した炉か。袖や煙道は残存していないが、北壁際中央に袖の構築材とみられる礫が集中しているため、この付近がカマドであったと推測する。カマド付近を除く、北壁から西壁を通り南壁西部まで、幅15~20cm、深さ3~15cmの周溝が巡る。遺物出土状況：カマド付近から須恵器環（第121図8）、土師器高台付塊（第121図9）や土師器甕（第121図12・13）、P3内から黒色土器高台付塊（第121図10）、須恵器甕（第121図14）など土器多数が出土している。時期：出土遺物から判断して、9世紀前半である。

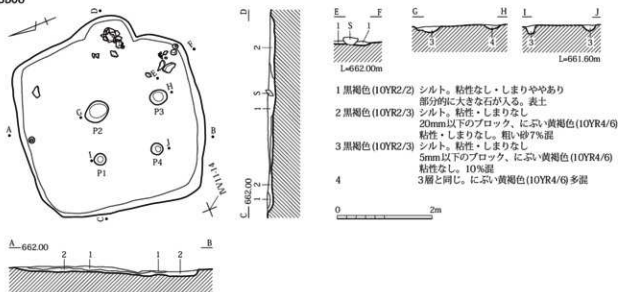
8号竪穴建物跡（SB08）（第83図、PL.9）

位置：IV V11 検出：IV層上面で黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸方形 規模：東西3.7m、南北3.9m、検出面から床面までは深いところで13cmである。主軸方位：E-19°-S 遺構の重複：SM11、SK102、SX02を切る。床面の一部がかく乱によって掘削されている。堆積状況：床面をにぶい黄褐色ブロックを含む黒褐色シルト質土が覆い、その上にやや締りのある黒褐色シルト質土が被る。自然堆積であろう。施設：ピットは4基検出した。P4を除いて、竪穴の隅に位置していないことから柱穴と断定できず、性格は不明である。カマドは確認できなかった。遺物出土状況：北壁際に黒色土器環（第121図17）、南東隅で黒色土器環（第121図18）と土師器環（第121図19）、北東部床面で須恵器甕（第121図21）など多数の土器が出土している。時期：床面から出土した遺物から判断して、9世紀前半である。

12号竪穴建物跡（SB12）（第84図、PL.9）

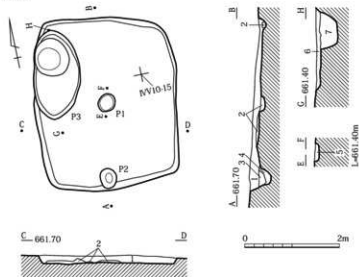
位置：IV U10 検出：IV層上面で褐色粗砂と炭化物、軽石が混じる黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸長方形 規模：東西3.0m、南北3.6m、検出面から床面までは深いところで15cmである。主軸方位：N-12°-E 遺構の重複：111号土坑を切る。堆積状況：埋土は黒褐色シルト質土のほぼ単層である。自然堆積であろう。施設：ピットを3基検出した。P1は床面中央、P2は南壁中央で中軸線上に並ぶ。1.9×1.0mと大きなP3は、底面の北側にさらに一段の掘込みがある。炉やカマドはない。床は掘り抜いた地山のままで、北に向かって約10cm下がっている。遺物出土状況：埋土から黒色土器環・塊が極少量出土しているが、小片で図示できなかった。時期：出土土器から判断して、9世紀代である。所見ほか：竪穴全体が狭小なこと、燃焼施設がないこと、床が傾斜していることなどから、住居

SB08



第83図 SB08 遺構図

SB12



- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)の粗砂。粘性・しまりなしが
10mm以下のブロックで3%混。20mm以下の炭3%混
10mm以下の軽石1%混
- 2 褐色(10YR4/6)砂。粘性なし・しまりややあり
黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなしが
30mm以下のブロックで10%混
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性なし。しまりなし
暗褐色(10YR3/4)の粗砂。粘性・しまりなしが
100mm以下ブロックで25%混
- 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂。粘性・しまりなし
黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなしが
30mm以下のブロックで7%混
- 5 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)粗砂。粘性・しまりなしが20mm以下の
ブロックで25%混。30mm以下の炭1%混
- 6 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)粗砂。粘性・しまりなしが
40mm以下のブロックで2%混
- 7 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし
褐色(10YR4/6)粗砂。粘性・しまりなしが
20mm以下のブロックで15%混
10mm以下の軽石3%混。10mm以下の炭1%混

第84図 SB12 遺構図

とは考えにくい。P3を尿溜めとする概の可能性がある。

19号竪穴建物跡 (SB19) (第85図、PL10)

位置：IVU14・15 検出：IV層上面で、炭と軽石、暗褐色粗砂ブロックが混入した黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸長方形 規模：東西4.9m、南北3.9m、検出面から床面までは深いところで34cmである。主軸方位：E-16°-S 遺構の重複：SB20、SM08、SK55・59・113・114・115を切る。堆積状況：黒褐色シルト質土の単層である。施設：東壁の中央やや南寄りにカマドがある。カマドは石を組んで粘土を貼りつけたもので、壊れてほとんどの粘土は前方に流れていたが、奥壁部分の石材、両袖の粘土の一部と芯材の石の抜き取り跡が残っていた。このカマド部分を除いて周溝が全周する。遺物出土状況：北壁際周溝内から紡錘車(第123図76)、南西隅で土師器杯(第121図26)、南半で須恵器杯(第121図22)と土師器杯(第121図27)が重なって、中央部で灰釉陶器輪花皿(第121図28)と土師器壺(第121図30)、カマド内で黒色土器杯(第121図23)と灰釉陶器壺(第121図29)、カマド前面で土師器甕(第121図31)など、床面で多数の土器が出土している。時期：床面出土土器から判断して、9世紀後半である。

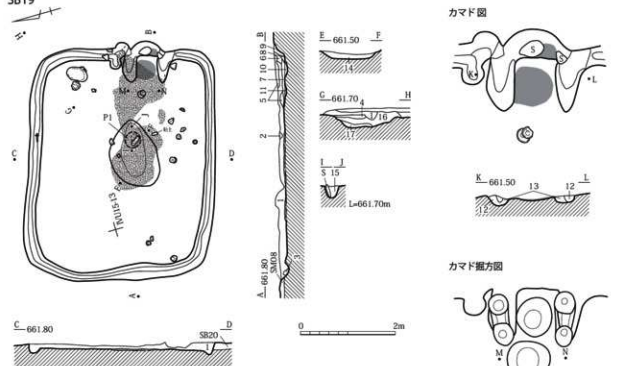
21号竪穴建物跡 (SB21) (第86図、PL10)

位置：VI B04 検出：IV層上面で黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：方形 規模：東西5.0m、南北5.0m、検出面から床面までは深いところで26cmある。主軸方位：N-7°-E 遺構の重複：SB22を切り、SB04竪穴建物跡に切られる。堆積状況：床面上を黄褐色ロームブロックが混入した黒褐色シルト質土が覆い、その上にやや粘性のある黒褐色シルト湿度が堆積している。自然堆積であろう。施設：ピット6基とカマドを検出した。P1～6は、主柱穴とするには位置が悪く、性格不明である。重複するSB22のものである可能性もある。カマドは北壁際中央にあるが、検出時に削平してしまい、火床と両袖がわずかに残る。遺物出土状況：西壁際で須恵器杯(第122図32)、カマド内で土師器甕(第122図34)など土器多数が出土している。時期：出土土器から判断して、9世紀前半と推測する。

29号竪穴建物跡 (SB29) (第87図、PL10)

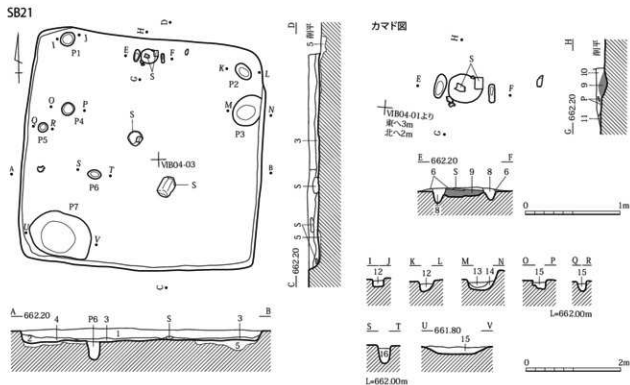
位置：IV B13 検出：IV層上面でローム粒が混入した暗褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：西側が調査区外のため全形不明だが、隅丸方形である。規模：南北2.9m、検出面から床面までの深さは8

SB19



- 表土 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性なし・しまりややあり。50mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/3)シルト質土30%混。50mm以下の軽石2%ほど混
- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし
10mm以下のブロックで暗褐色(10YR3/4)粗砂、粘性・しまりなし7%混
10mm以下の軽石1%混。10mm以下の炭1%以下混
- 2 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。粘性なし。しまりややあり
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし。5mm以下の軽石40%混
- 4 暗赤褐色(5YR3/3)シルト質土。粘性なし・しまりあり。10mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/2)シルト質土、粘性・しまりなし10%混
- 5 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。粘性なし・しまりあり。20mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性なし・しまりややあり15%混
- 6 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。粘性・しまりなし
5mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混
- 7 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし。30mm以下のブロックで灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。粘性なし・しまりありが40%混
10mm以下のブロックで明赤褐色(5YR5/6)焼土が1%混
- 8 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。粘性・しまりなし。5mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混
5mm以下のブロックで明赤褐色(5YR5/6)焼土が1%混
- 9 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。粘性なし・しまりややあり。10mm以下のブロックで明赤褐色(5YR5/6)シルト質土、粘性なし・しまりあり15%混
- 10 明赤褐色(5YR5/6)粗砂(焼土)。粘性・しまりなし。5mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/3)シルト質土、粘性・しまりなし5%混
- 11 黒色(10YR2/1)シルト質土。粘性・しまりなし。10mm以下の炭10%混。5mm以下のブロックで褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混
- 12 褐灰色(10YR5/1)粘質土。粘性ややあり・しまりなし
- 13 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。粘性・しまりなし。5mm以下のブロックで褐灰色(10YR5/1)粘質土、粘性ややあり・しまりなし5%混
5mm以下のブロック焼土5%混。5mm以下のブロックの炭2%混
- 14 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。粘性なし・しまりややあり。20mm以下のブロックで、褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし15%混
20mm以下のブロックで灰黄褐色(10YR6/2)粘質土。粘性・しまりなし2%混。20mm以下の炭2%混
- 15 褐色(10YR4/6)粗砂。粘性・しまりなし。30mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/3)シルト質土、粘性・しまりなし10%混
100mm以下のブロックで灰黄褐色(10YR6/2)粗砂。粘性・しまりなし5%混
- 16 黒色(10YR2/1)シルト質土。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで暗褐色(10YR3/4)粗砂、粘性・しまりなし2%混
20mm以下の軽石1%混
- 17 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。粘性・しまりなし。3mm以下のブロックで暗褐色(10YR3/4)粗砂、粘性・しまりなし30%混
5mm以下の軽石2%混

第85図 SB19 遺構図



- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性・しまり弱。乾くと硬くなる。耕作の影響を受けている土層大量出土(時期 弥生~古代)
- 2 黒色(10YR2/1)シルト。粘性なし。もろい。1層と同じ土層だが、耕作をうけていないせいか(黒化)
- 3 黒褐色(10YR2/3)シルト。1層に同質だが黄褐色のローム粒子・ブロックが1~5%混
- 4 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱。もろい。2層と同質だが、地山ローム粒子20~50%混。SB22(弥生)の床下にもなる
- 5 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性なし。もろい。床下(層り方埋土)砂粒子5%、黒色粒子10%、地山ローム粒子10%(かく乱堆積)
- 6 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性弱。もろい。赤褐色焼土粒子50%混。燃焼部内の埋土
- 7 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性弱・しまりあり。褐灰色(10YR5/1)、褐灰粘土10~30%混(ソデの焼成粘土の混入)
- 8 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性弱。硬い。SB21下層(床上)と同質。ソデ石の抜き痕(後世の耕作中に抜かれた)
- 9 赤褐色(5YR4/8)地山砂質土。しまりあり。硬い。砂粒子(中砂)30~50%、黒色土(シルト)1~5%混
- 10 褐灰色(10YR4/1)シルト。灰と焼土粒子混
- 11 黒褐色(10YR2/3)シルト。自然の下層(3層)に似るが、ローム粒子多(10~20%)。まとまりが悪い
- 12 黒色(10YR2/3)シルト。粘性弱。もろい。砂粒子5%、黄褐色ローム砂粒子30%混
- 13 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱。もろい。砂粒子5%以下混
- 14 暗褐色(10YR3/3)砂。地山ローム粒子とのかく乱、漸移層
- 15 黒褐色(10YR2/2)シルト。P1に似るが、黄褐色ローム砂粒子5%以下混
- 16 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱。きめ細かい。SB22の柱穴か

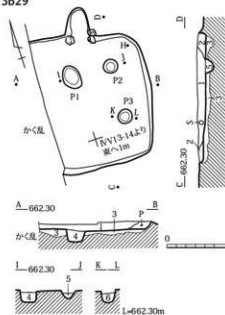
第86図 SB21 遺構図

~15cmである。主軸方位：N-17°-E 遺構の重複：10号方形周溝溝を切る。堆積状況：暗褐色シルト質土の三角堆土上に黒褐色シルト質土が入り込んでいる。自然堆積だろう。施設：ピット3基とカマドを検出した。長胴甕の破片が出土したP2と埋土1層と同質の黒褐色シルト質土を埋土とするP3が主柱穴である。土師器片や黒曜石が出土したP1は性格不明である。カマドは、主柱穴の位置から判断して、北壁のやや東寄りに位置する。袖は流出していたが、芯材とみられる礫がほぼ原位置で残っていた。遺物出土状況：カマド内から須恵器甕(第122図41)、カマド前面から須恵器杯(第122図36)、黒色土器塊(第122図38・39)、P1内から黒色土器皿(第122図37)など土器多数が出土した。時期：出土土器から判断して、9世紀前半である。

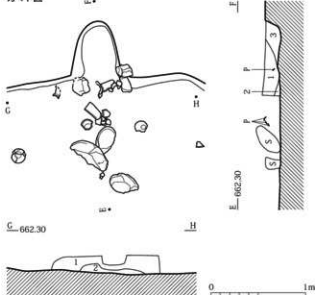
30号竪穴建物跡(SB30)(第88図、PL11)

位置：IVB13 検出：IV層上面で中砂やローム粒を含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：東側が調査区外のため全形は不明であるが、残存部分から判断して隅丸長方形である。規模：東西4.0m以上、南北3.3m、検出面から床面までの深さは7cmである。主軸方位：W-17°-N 遺構の重複：

SB29



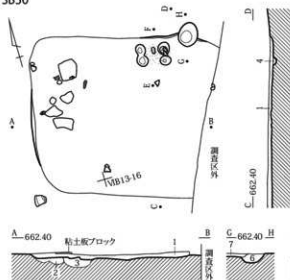
カマド図



- 1 黒褐色土(10YR2/2)シルト。粘性弱。乾燥してしまり強。中砂2~5%混。地山(黄褐色ローム粒子)2~3%混
- 2 暗褐色土(10YR3/4)シルト。1層にほぼ同質だが、地山ローム粒子50%混
- 3 暗褐色土(10YR3/3)シルト。床下整理層。黄褐色地山砂20%。地山ローム20%混。1,2層から須恵器、土師器等の土器片が多数出土
- 4 黒褐色土(10YR2/3)シルト。粘性強。しまりあり。黄褐色土、1mm地山粒子5%混。内風、ハジ、黒曜石片等が出土
- 5 黒褐色土(10YR2/3)シルト。P1の1層にほぼ同質。黄褐色土、1mm地山粒子5~10%混。土器(長筒ガム)出土
- 6 黒色土(10YR2/1)シルト。P1の1層に同質。地山粒子1~2%混

第87図 SB29 遺構図

SB30



- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性弱。乾燥で堅くするがもろい。耕作の影響を受けてぼそびた感じ。中砂5%、地山ローム粒子5%。土器片多数出土
- 2 黒色(10YR2/1)シルト。粘性弱くもろい。地山ローム粒子(黄褐色砂)10~20%混(縦方)縄文晩期~古代土器片出土
- 3 黒色(10YR1.7/1)シルト。2層にほぼ同質。地山ローム粒子5%以下混(縦方)縄文晩期~古代土器片出土
- 4 黒褐色(10YR2/3)シルト。1層にほぼ同し。カマド袖右の抜取跡だろう。1層よりややしまりよい
- 5 黒褐色(10YR2/3)シルト。白色粘土ブロック50%混(住居1層に白色粘土)カマド構築材(崩落土)の混入
- 6 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性なし。もろい。カマドの前跡ほとんどなし。中砂1~5%、ローム粒子1~3%混
- 7 黒褐色(10YR2/3)シルト。住居の1層に同質だが、黄褐色の地山ロームブロック(シルト質)30~50%混

第88図 SB30 遺構図

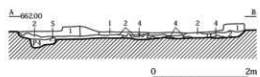
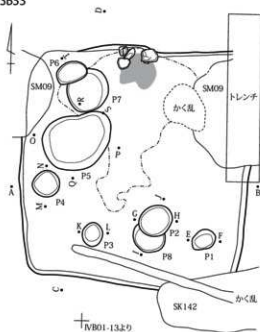
SM10を切る。堆積状況：黒褐色シルト質土の単層である。施設：北壁のほぼ中央と推測する所でカマドを検出した。袖と煙道は残っていないが、両袖とも芯材の抜取り跡が前後に並び、間に火床が広がっていた。遺物出土状況：本建物跡西側の埋土上面から粘土板が大量に出土したほか、西壁際から黒色土器環(第122図42)、北西隅で土師器甕(第122図46)、東部調査区境付近で黒色土器環(第122図43)などが床面で出土した。時期：床面の出土土器から判断して、8世紀末~9世紀初頭である。

器環(第122図49・50)、黒色土器環(第122図51)など残りの良い土器はほとんどが掘方中で出土している。
 時期:掘方の出土土器から判断して、8世紀後葉である。

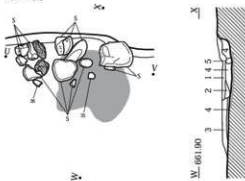
32号竪穴建物跡(SB32)(第90図)

位置:IVB17 検出:IV層上面で締りがいい黒褐色シルト質土の整地面を検出した。竪穴建物跡と考えているが、複数のかく乱によって削平されており、壁を確認することはできなかった。形状:整地面の範

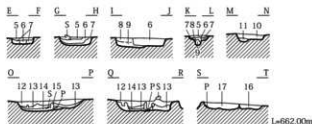
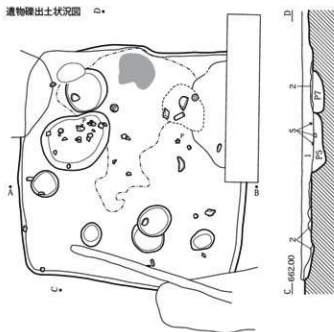
SB33



カマド図



遺物検出土状況図



- 1 黒褐色(10YR3/2)と黒褐色(10YR3/1)シルト質土の混ざりに5~10mm明黄褐色(10YR6/6)粒子
粘性なし・しまりあり。耕作土層
- 2 黒色(10YR2/1)と黒褐色(10YR3/2)シルト質土の混ざりに5~10mm明黄褐色(10YR6/6)粒子散在
粘性弱・しまりなし
- 3 黒褐色(10YR2/2)に褐色(10YR4/4)少混。シルト。粘性弱・しまりなし
- 4 明黄褐色(10YR6/6)に暗褐色(10YR3/3)混。シルト。粘性・しまりなし
- 5 黒褐色(10YR2/2)に褐色(10YR4/4)混。シルト。粘性・しまりなし
- 6 黒褐色(10YR3/2)に褐色(10YR4/4)混。シルト。粘性・しまりなし
- 7 におい・黄褐色(10YR5/4)に黒褐色(10YR3/2)混。砂質土。粘性・しまり弱
- 8 黒褐色(10YR2/2)におい・黄褐色(10YR4/3)混。シルト。粘性・しまりなし
第2層と同一の土が入っていた
- (P14のやや北側に断面をとったため、写真セクション図には表わしていない)
- 10 黒褐色(10YR3/2)におい・黄褐色(10YR5/3)混。シルト。粘性弱・しまりなし
- 11 明黄褐色(10YR6/6)に黒褐色(10YR3/2)混。シルト。粘性弱・しまりなし
- 12 黒褐色(10YR2/2)に褐色(10YR4/4)少混。シルト。粘性・しまりなし
- 13 灰黄褐色(10YR4/2)に褐色(10YR4/4)混。シルト。粘性・しまりなし
- 14 におい・黄褐色(10YR5/4)に黒褐色(10YR3/2)混。砂質土。粘性・しまりなし
- 15 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土の面。粘性・しまりなし
- 16 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性・しまりなし
- 17 暗褐色(10YR3/3)におい・黄褐色(10YR6/6)混。明黄褐色(10YR6/8)ブロック、
5~10mm赤褐色(2.5YR4/6)粒子30%散在。粘性・しまり弱

第91図 SB33 遺構図

間は隅丸方形である。規模：東西3.8m、南北4.0m 主軸方位：不明だが、聖地面を床面とするとN-10°-E 遺構の重複：SM10を切る。施設：ピット2基を検出した。P1は位置的に主柱穴の可能性はあるが、対応する柱穴はない。北壁際中央に土器集中、北東隅に貯蔵穴と想定できるP2があり、カマドがこの辺りにあったと考えられる。遺物出土状況：P2の埋土上から須恵器杯（第122図52）や黒色土器杯（第122図53）、北壁際土器集中で黒色土器碗（第122図54）、その周辺床面上からは土師器杯と黒色土器杯が少量出土している。時期：出土遺物から判断して、9世紀前半である。

33号竪穴建物跡 (SB33) (第91図)

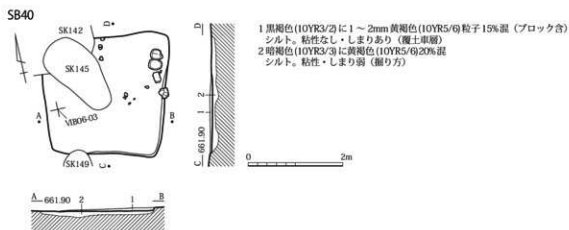
位置：IVA05・B01 検出：IV層上面で明褐色土を含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：SM09とSK142によって壊されているが、残存部分から判断して方形である。規模：東西4.8m、南北5.1m、検出面から床面までは深いところで18cmである。主軸方位：N-3°-E 遺構の重複：SM09とSK142を切る。堆積状況：床上を明褐色シルト質土（4層）と黒色シルト質土（2層）が覆い、その上に黒褐色シルト質土（1層）が被る。自然堆積であろう。施設：ピット8基とカマドを検出した。P1とP3は埋土断面に柱痕跡が残る主柱穴と考えられる。P7も位置的には主柱穴と考えたいが浅い。カマド左わきのP6は貯蔵穴と推測するが、P2・3・5・8の性格は不明である。カマドは削平されているが、北壁際中央に直径約70cmの火床があり、その北側2か所に袖の芯材とみられる礎が倒れていた。遺物出土状況：床面で須恵器杯（第122図55・56）、黒色土器碗（第122図57）、黒色土器杯（第122図59）、灰軸陶器皿（第123図61）、P5内から黒色土器杯（第122図58）、土師器碗（第122図60）、灰軸陶器皿（第122図62）など土器多数が出土している。時期：出土土器から判断して、9世紀後半である。

40号竪穴建物跡 (SB40) (第92図)

位置：IV-B01・06 検出：IV層上面で黄色粒を含む黒褐色シルト質土の広がりを検出した。形状：北から西にかけて壁がないため不明確ながら、やや不整な正方形と考えた。規模：東西・南北とも2.6m、南東側で検出面から床面までの深さが8cmである。主軸方位：N-12°-E 遺構の重複：SK142・145・149に切られる。堆積状況：黄褐色土が混在する暗褐色シルト質土の掘方上面を床とし、黒褐色シルト質土が被る。施設：なし 遺物出土状況：床面で須恵器碗（第123図66）、土師器碗（第123図67）のほか土師器甕など少量が出土している。時期：床面出土土器から判断して、9世紀前半である。

44号竪穴建物跡 (SB44) (第93図)

位置：VU23、IVA03 検出：IV層上面で褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸方形である。

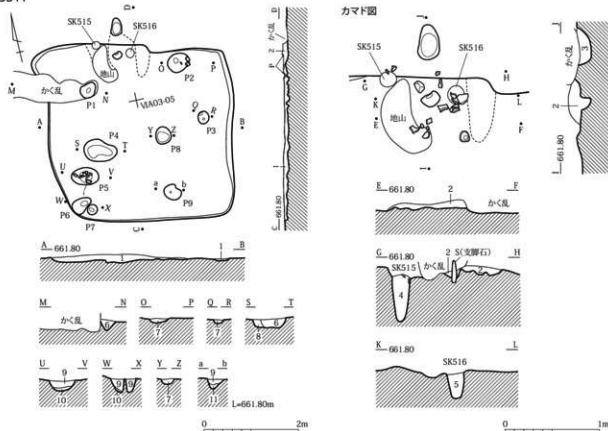


規模：東西3.9m、南北3.8m、検出面から床面までは深いところで10cmある。主軸方位：N-14°-E
 遺構の重複：なし 堆積状況：褐色シルト質土の単層である。施設：ピット9基とカマドを検出した。
 ピットは、並びが不規則で、埋土に斉一性がなく、浅いために性格は不明である。カマドは北壁際中央やや西寄りにある。袖は崩れて残っていないが、地山を掘り残した芯と短い煙道がわずかに残っていた。遺物
 出土状況：カマド前面で黒色土器環（第123969）ほか土師器壺などが少量出土している。時期：出土土器
 から判断して、9世紀前半である。

引用・参考文献

篠崎誠治2006「古代の概念構造について」『土壁』第10号

SB44



- 1 褐色(10YR4/4) シルト質土。粘性なし・しまりかなり強。1～2mm白色粒子5%、1～3mm赤色粒子5%含
SB44本来の土に耕作土が混入している層と考え、上下の分層は不可であった。針金、ビニールの混入も確認
- 2 暗褐色(10YR3/3) シルト質土。粘性かなり弱・しまり1層と同層にかなり強。1～3mm白色粒子5%、1～3mm赤色粒子3%含
- 3 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性弱・しまりあり。1～4mm白色粒子10%、10～20mm黄褐色(10YR7/6)砂の地山ブロックが、
下層を中心に10%混。煙道と思われる場所のみに確認される土
- 4 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性弱・しまり強。1～2mm白色粒子5%、1～2mm赤色粒子5%、2～3mm炭化粒子3%含
- 5 灰黄褐色(10YR5/2) シルト質土。粘性あり・しまり弱。1～2mm白色粒子10%、2～3mm赤色粒子5%含
- 6 にぶい黄褐色(10YR3/2) シルト質土。粘性なし・しまりあり。1～4mm白色粒子10%、1～3mm赤色粒子15%含
- 7 黒褐色(10YR3/2) シルト質土。粘性なし・しまり強。1～2mm白色粒子5%、10～20mm明黄褐色(10YR7/6)地山ブロック15%含
SB44覆土層に類似
- 8 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質土。粘性弱・しまりかなり強。6層を主体とし、にぶい黄褐色(10YR6/3)地山が混入した層
- 9 黒褐色(10YR2/2) シルト質土。粘性・しまり強。1～2mm白色粒子5%、1～3mm赤色粒子5%、
10～40mmにぶい黄褐色(10YR6/3)地山ブロック15%含
- 10 灰黄褐色(10YR5/2) シルト質土。土層より粘性強・しまりあり。9層に地山が混入した層
- 11 にぶい黄褐色(10YR6/4) シルト質土。粘性かなり弱・しまりあり。にぶい黄褐色(10YR6/4)地山を主体とし、10層が混入した層。一次堆積

第93図 SB44 遺構図

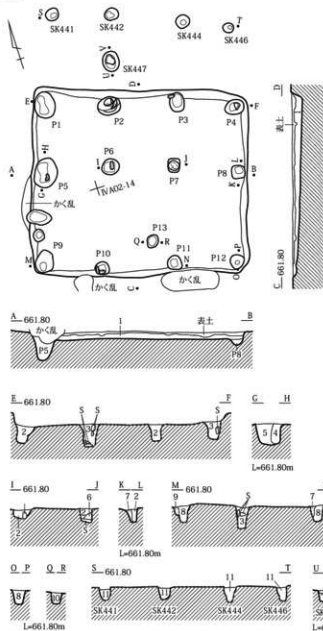
3 中世ほか

(1) 建物跡、竪穴状遺構

46号建物跡 (SB46) (第94図, PL12)

位置: VI-A02-14 検出: IV層上面で褐色シルトブロックを含む黒褐色シルト質土の落込みを検出したため、発掘段階ではこの範囲を竪穴建物跡と認識したが、整理段階で、竪穴外の北側で検出したSK441・442・444・446が位置的に本建物跡にかかわるピットであると考えた。形状: 桁行3間、梁間3間の総柱掘立柱建物跡で、南側の柱穴は方形竪穴の床面にある。規模: 掘立柱建物跡は東西4.2m、南北5.4mで、竪穴部分は東西4.6m、南北3.9m、検出面から床面までの深さは25cmある。主軸方位: N-21°-E 遺構の重複: SM14を切る。堆積状況: 竪穴は黒褐色シルト質土によって埋まっている。建

SB46



表土 黒褐色(10YR3/2)シルト(耕作土)、粘性・しまりなし
20mm以下のブロックで黒褐色(10YR2/2)シルト、
しまりなし7%混。10mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし2%混

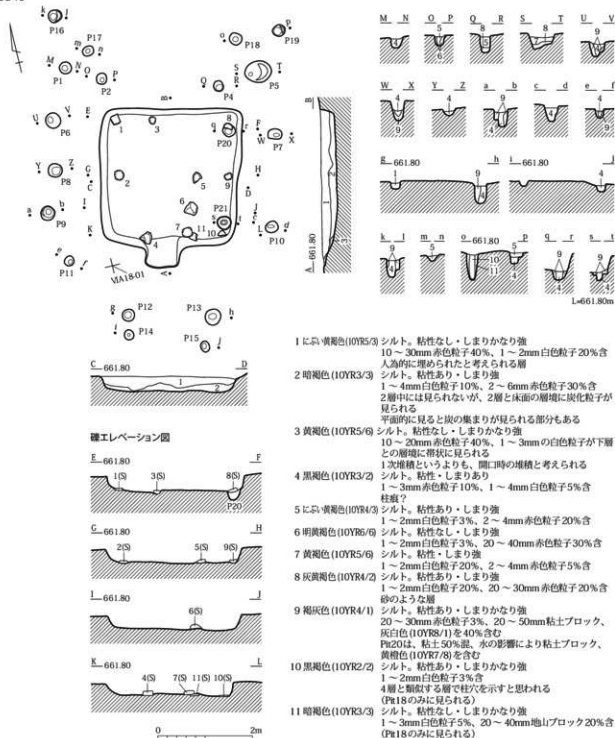
- 1 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)シルト、粘性・しまりなし3%混
- 2 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。50mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし3%混
- 3 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。50mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし7%混
150mm程の礫3%混
- 4 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし(柱痕)
- 5 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし7%混
150mm以下の礫1%混
- 6 褐色(10YR4/6)
粗砂。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで
黒褐色(10YR2/2)シルト、粘性・しまりなし15%混
- 7 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし15%混
- 8 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。50mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし7%混
- 9 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりなし。
20mm以下のブロックで黄褐色(10YR5/6)シルト、
粘性なし・しまりなし20%混
- 10 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。30mm以下のブロックで
黒褐色(10YR2/2)シルト、粘性・しまりなし7%混
- 11 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混

- SK447 1 黒褐色(10YR2/2)
シルト。粘性・しまりなし。10mm以下のブロックで
褐色(10YR4/6)粗砂、粘性・しまりなし5%混
2 褐色(10YR4/6)
粗砂。粘性・しまりなし。50mm以下のブロックで
黒褐色(10YR2/2)・黄褐色(10YR5/6)シルト、
粘性・しまりなし20%混

第94図 SB46 遺構図

物内施設：南部に掘り込みを持つ掘立柱建物なのか、南部が主屋で北部堅穴外が棚状施設なのか、北に庇を持つ壁建ちの堅穴建物なのか不明で、何を施設とすべきか分からない。堅穴西壁の南寄りにある対ピット（P5・P9間）は出入口施設の可能性がある。遺物出土状況：P13から鉄滓が出土した。堅穴埋土から弥生土器壺・甕・高坏片が少量出土しているが、混入と考える。時期：建物跡の構造と出土遺物から判断して、中世の建物跡と推測する。

SB48



第95図 SB48 遺構図

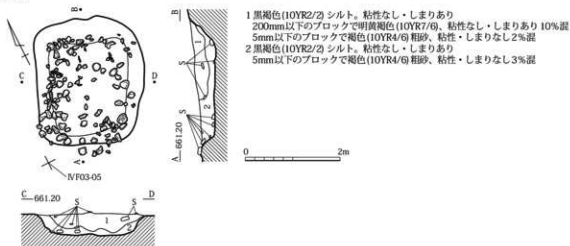
48号建物跡 (SB48) (第95図、PL12)

位置：IVA18 検出：IV層上面でふい黄褐色シルト層の落込みを検出した。形状：竪穴は方形で、南部に方形の張出しをもつ。竪穴の外内に多数のピットが分布し、竪穴の床面には礎石状の礫が残っている。規模：竪穴は東西3.0m、南北3.3m、検出面から床面までは深いところで35cmある。主軸方位：W-15°-N 遺構の重複：なし 堆積状況：竪穴の床面上には炭化粒を含む暗褐色シルト層が覆い、ふい黄褐色シル質土で埋められている。施設：SB47と同じく、竪穴部分が主屋で周囲が棚状施設なのか、掘立柱建物の内部に掘り込みがあるのか不明で、何を施設としてよいか分からない。竪穴南方のP12とP13、P14とP15の対ピットと竪穴の方形張出し部分は、建物跡全体の出入口部のように見える。遺物出土状況：竪穴埋土から弥生土器、土師器、須恵器片少量が出土しているが、混入と考える。時期：建物跡の構造から判断して、中世の建物跡である。所見など：P18・20・21・13が約2m間隔で一直線に並び、それに平行にP7・10が各P20・21から約1m東、P6・9が各P20・21から約4m西、P12がP13から約2m西にある。これらを結んで、竪穴部分を中央～東部に取り込んだ梁間2間、桁行3間で東側の掘立柱建物も想定できる。

50号竪穴状遺構 (SB50) (第96図)

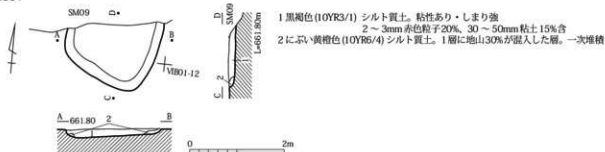
位置：IVF03 検出：IV層上面で明黄褐色ブロックを含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：隅丸長方形で四方の壁はダラダラと底面に向かって落ちている。規模：東西2.3m、南北2.7m、検

SB50



第96図 SB50 遺構図

SB51



第97図 SB51 遺構図

出面から底面までは北側の深いところで54cmある。主軸方位：N-25-W 遺構の重複：なし 堆積状況：床面を覆う黒褐シルト質土（2層）の窪みに1層が入り込んでいる。いずれも礫が多量に出土しており、埋め戻されたものと考えられる。施設：なし 遺物出土状況：底面付近の礫の上層埋土から弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が少量出土している。時期：不明 所見など：礫を入れて埋め戻していることから、耕作に伴う出土物の廃棄土坑と考える。

51号竪穴状遺構 (SB51) (第97図)

位置：VI B01 検出：IV層上面で粘土粒を含む黒褐色シルト質土の落込みを検出した。形状：北部をSM09に切られて全形は不明である。規模：東西2.0m、検出面からの深さは南側で16cmある。主軸方位：不明 遺構の重複：SM09に切られる。堆積状況：にぶい黄橙色シルト質土の三角堆土に黒褐色シルト質土が覆う。施設：なし 遺物出土状況：埋土から縄文土器、弥生土器が極少量出土している。時期：SM09切られるため古墳時代前期以前であるが、伴う遺物が僅少で時期は不明である。所見など：竪穴建物跡 (SB) として調査したが、規模が小さく、施設がなく、遺物が僅少で建物跡とは考えにくい。

(2) 掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡 (SM16・ST02) (第98図)

位置：3 b 区 VI A 7・12 検出：IV層上面でコの字形の黒褐色土の落ち込みを検出し、当初は方形周溝墓と考えて、SM16と命名して調査したが、溝底面でピットが確認され掘立柱建物に変更して調査した。形状：桁行3間、梁間2間の平面はほぼ正方形の総柱建物で、東西の妻柱と北の側柱に溝が伴う。南に接するSM07、SD18に伴う建物と南北の柱筋がほぼ通っており、一体の建物であった可能性もある。規模：桁行3間で3.8m、梁間2間で3.7m、溝の確認面からの深さ15~31cm、ピットは直径または長径30~50cmの円形または楕円形で、溝底面からの深さは20~50cmである。遺構の重複：SD18と重なりを持つが、直接の切り合いがなく、前後関係不明。遺物出土状況：縄文時代~近世の遺物が極少量出土したが小片で図示できなかった。時期：不明

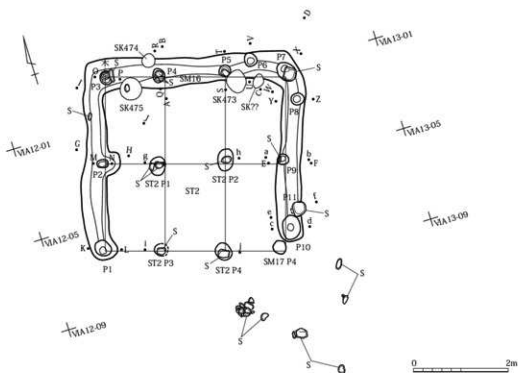
3号掘立柱建物跡 (SM17・SD18) (第99図、PL14)

IV層上面でコの字形の黒褐色土の落ち込みを検出し、当初は方形周溝墓と考えて、SM117と命名して調査したところ、溝底面でピットが確認された。その後これを囲むSD18も検出された。形状：南西部が調査区外で全形は不明である。現状は桁行3間、梁間2間の東西に長い総柱建物であるが、ピットの並びは悪い。調査区外に延びる可能性もある。北側に接するST02と一体の建物である可能性もある。規模：桁行3間で3.9m、梁間2間で3.4m、溝の確認面からの深さ4~31cm、ピットは直径20~30cmの円形で、溝底面からの深さは20~30cmである。遺構の重複：ST02と重なりを持つが、直接の切り合いがなく、前後関係不明。遺物出土状況：出土していない。時期：不明

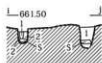
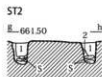
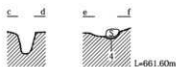
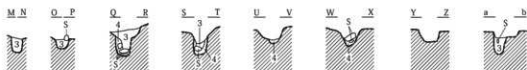
(3) 墓跡

5号木棺墓 (SM05) (第100図、PL13)

位置：VI B12 検出：II層上面で黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状：やや胴張の長方形、底は平ら 規模：現状で東西1.9m、南北0.8m、深さ20~25cm 主軸方位：W-9°-N 遺構の重複：なし 堆積状況：壁際と内側の2層に分かれる。遺物出土状況：西壁際から馬歯とその上層から人頭大の礫3個が東壁際から骨片が出土しているが、ほかに遺物の出土はない。時期：不明であるが、馬歯が出土していることから、古墳時代以降である。



SM16



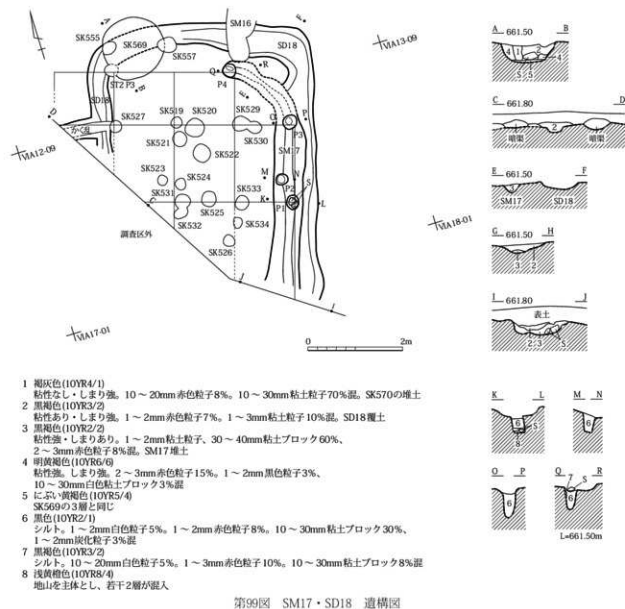
SM16

- 1 黒褐色(10YR3/2)
粘性弱・しまり強。1～2mm白色粒子3%。2～4mm赤色粒子5%混
耕作土と2層の混合層
- 2 黒褐色(10YR2/2)
粘性弱・しまり強。1～3mm白色粒子5%。2～5mm赤色粒子10%
2～5mm炭粒子3%混
- 3 黒褐色(10YR3/1)
粘性・しまりあり。2～3mm赤色粒子20%
30～50mm粘土15%混
- 4 に赤・黄褐色(10YR6/4)
粘性なし・しまり強。10～20mm赤色粒子5%
10～30mm白色粒子3%。地山ブロック混

ST2

- 1 黒褐色(10YR3/1)
シルト。粘性・しまりあり。10～40mm白色粒子20%。層下部
1～3mm赤色粒子7%混。
- 2 褐灰色(10YR4/1)
シルト。粘性・しまり強。10～50mm白色粒子50%。1層主体、地山が混入

第98図 SM16・ST02 遺構図



(4) 集石

2号集石 (SH02) (第101図、PL12)

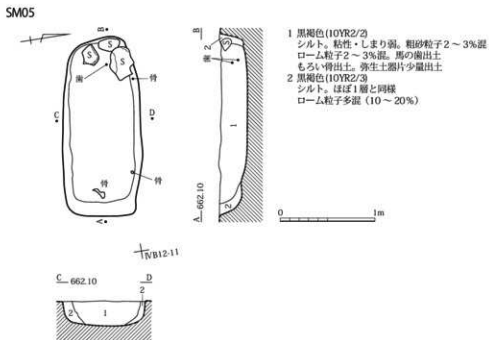
位置：VI F 2・3・7・8 検出：IV層上面で黒褐色土の落ち込みと礫の集中を検出した。形状：大小の石が方形の範囲に集中する。規模：1辺約3mの方形で、掘方の確認面からの深さ25cm 遺構の重複：なし 堆積状況：上下2層に分かれる。埋土中の礫の大きさは、長径5～65cm。遺物：弥生土器片と中世陶器片少量が出土している。時期：不明

3号集石 (SH03) (第101図、PL12)

位置：3b区VI F 7?・8 検出：IV層上面で礫の集中を検出した。形状：方形の土坑の底面に石が敷かれている。規模：南北3.0m、東西不明だが2.0m以上、検出面からの深さは60cmである。遺構の重複：なし 堆積状況：単層 遺物出土状況：弥生土器片と打製石斧片等が出土している。時期：不明

4号集石 (SH04) (第102図)

位置：VI A 22・F 2 検出：IV層上面で黒褐色土の落ち込みと礫の集中を検出した。形状：西部が調査



第100図 SM05 遺構図

区外のため全形は不明であるが、方形の土坑の中に石が詰まっている。規模：西部が調査区外のため不明だが、1辺約120cmの隅丸方形と推測される。検出面からの深さは10～18cmである。遺構の重複：なし。堆積状況：上下2層に分かれる。遺物出土状況：弥生・古代土器片と近世陶磁器片が少量と、検出面で砥石が1点出土している。時期：不明

5号集石 (SH05) (第103図)

位置：VI F 03 検出：IV層上面で黒色土の落ち込みと礫の集中を検出した。形状：南部と東部が調査区外のため全形は不明であるが、東西3.0m、南北2.2mの範囲の方形の落ち込み中に石が詰まっている。規模：西部が調査区外のため不明だが、1辺約120cmの隅丸方形と推測される。検出面からの深さは10～18cmである。遺構の重複：なし。堆積状況：上下2層に分かれる。遺物出土状況：弥生土器壺・甕と須恵器が少量出土している。時期：不明

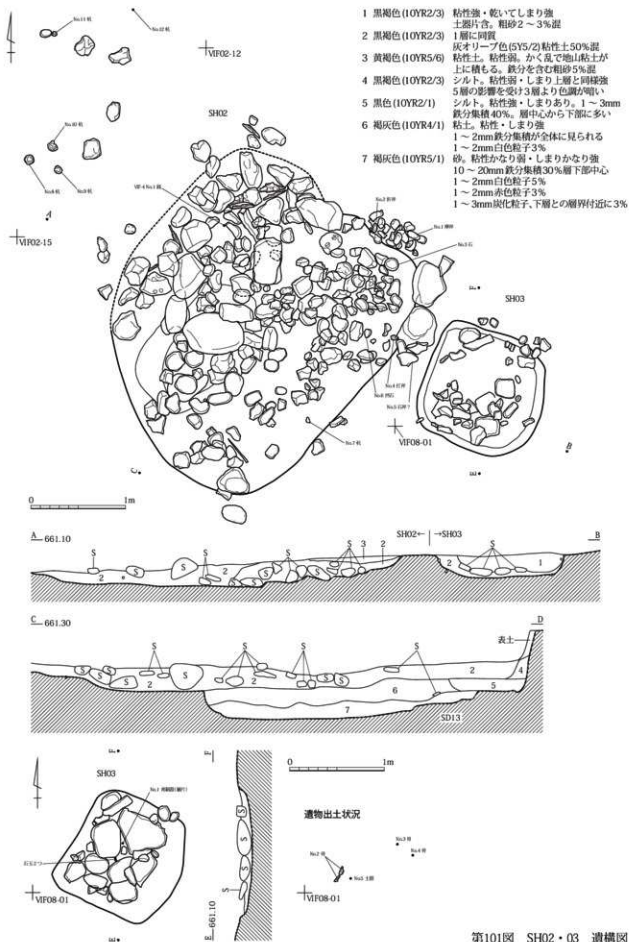
(5) 井戸跡

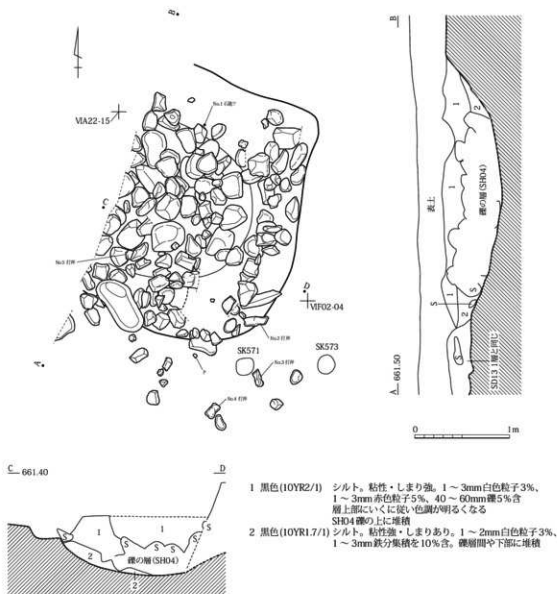
163号土坑 (SK163) (第104図)

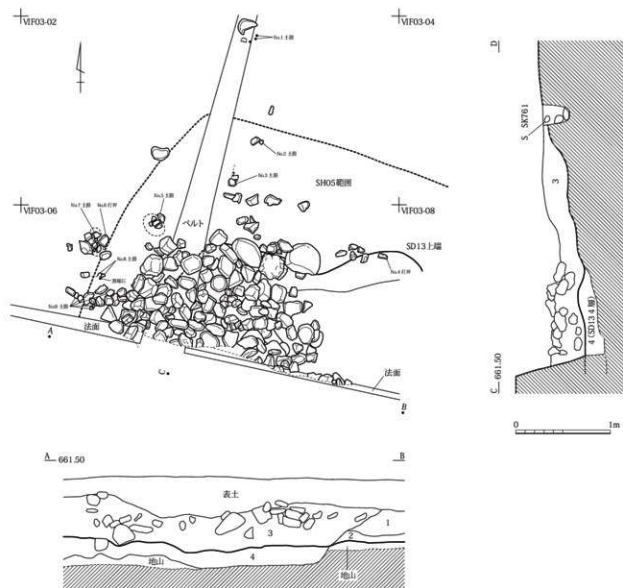
位置：3 b 区VI A 25 検出：IV層上面で黒褐色シルトの落ち込みを検出した。形状：上端円形で下端隅丸方形、壁は垂直で底は平ら。規模：東部をかく乱され南部にトレンチを入れたため全形は不明であるが、直径2.4m程度、検出面からの深さ254cmである。遺構の重複：なし。堆積状況：井戸枠内は黒褐色シルトで、井戸枠外は褐色粗砂や粗砂混じりの黒褐色シルトである。遺物出土状況：弥生土器片、木製品、漆片が出土している。樹種同定の結果、井戸枠の樹種はサワラであることが判明した。時期：井戸枠の放射性炭素年代測定結果が1028～1284年であり、古代末～中世初めのものと考えられる。

323号土坑 (SK421) (第104図、PL12)

位置：3 b 区VI A 7・8 検出：IV層上面で礫と黒色シルトの落ち込みを検出した。形状：円形の石組みの井戸である。規模：直径2.6cm、検出面からの深さ1.9m。遺構の重複：SD13に切られる。堆積状況：石組み内側は黒色シルトで、石組みを含む掘方は黒褐色シルトである。遺物出土状況：出土していない。時期：不明



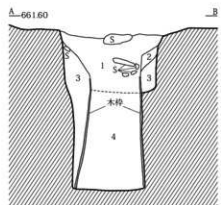
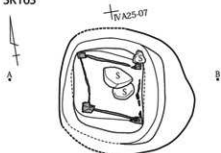




- 表土 にい黄褐色(10YR4/3)シルト。粘性弱・しまりかなり強。耕作土
 1 黒褐色(10YR2/3)粘性弱・しまりかなり強。2層の影響を受け3層より色調が暗い
 2 黒色(10YR2/1)シルト。粘性かなり強・しまりあり。1~3mm鉄分集積40%。層中央から下部に多い
 3 黒褐色(10YR3/1)シルト。1~3mm白色粒子8%。10~20mm赤色粒子3%
 4 靑灰色(10YR5/1)砂。粘性かなり弱・しまりかなり強。10~20mm鉄分集積30%層下部中心。1~2mm白色粒子5%
 1~2mm赤色粒子3%。1~3mm炭化粒子下層との層界付近に3%
 地山 黄色(2.5Y8/6)粘土。粘性・しまりかなり強。1mm白色粒子3%。場所により水の影響を受け、あざやかな緑灰色(10GY6/1)となる

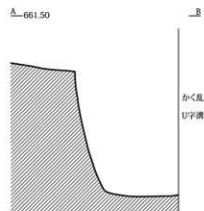
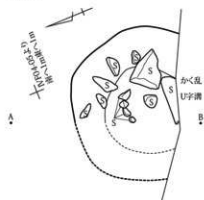
第103図 SH05 遺構図

SK163



- 1 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし
100mm以下褐色(10YR4/6)粗砂ブロック7%・
500mm以下層15%混
- 2 褐色(10YR4/6) 粗砂。粘性・しまりなし
- 3 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性なし。しまりややあり
200mm以下褐色(10YR4/6)粗砂ブロック微量
- 4 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性・しまりなし
木材片混。水分多量

SK323



0 1m

第104図 SK163・323 遺構図

第3節 遺物

1 縄文時代の土器・土製品

(1) 土器

縄文土器は、3区の弥生時代以降の遺構から出土したものや、遺構外出土で比較的大きい破片が抽出されていた。全体的な分布状況の確認を目的に、時間的制約上遺物包含層(グリッド)出土土器約30箱のみ再点検した。その結果、定量的な把握はできないが3区全体から出土し、IVU・V区南半からVIA・B区北半部に多かった。時期は早期から後期にわたり、3分の2以上が前期に属することが判明した。縄文時代の遺構が不明確のため、遺構出土、遺物包含層出土を区別せず、次の分類に沿って説明する。

第I群 早期末葉土器

第II群 前期土器 第1類：初頭の縄文尖底土器と二ツ木式土器、第2類：前葉の関山式・神ノ木式・中越式土器、第3類：中葉の有尾式・黒浜式・釈迦堂Z3式土器、第4類：後葉の諸磯a・b式土器、第5類：末葉の十三菩提式・松原式土器

第III群 中期土器 第1類：初頭の五領ヶ台式期土器、第2類：後葉土器。

第IV群 後期前葉土器

本項では、主として有文土器の文様の特徴を記述するとともに、詳細は添付DVD収録の土器観察表に記載する。

第I群土器 (第105図1・2)：内外面に条痕を施す、早期末葉の繊維土器である。1には縦位の結条体圧痕文がある。

第II群土器 (第105図3～26、第106図27～66、第107図67～106、第108図107、PL15)

第1類 (第105図3・4・6・9・10・13～15・19～21)：3は羽状縄文を施す尖底部で、中道式であろう。その他は二ツ木式である。4は2本揃いの撫系側面圧痕で口縁部を横位区画し、同原体による菱形文間に瘤状貼付文を施す。6・9・10は梯子状沈線と円形竹管文・瘤状貼付文がある。13・19・21は縦い結節回転、20は付加条の縄文である。15は結束の羽状縄文で、内面に条痕がある。

第2類 (第105図5・7・8・11・12・16～18・22～26)：5は口縁部、胴部中・下位に半截竹管状工具(以下「竹管」と略す)による、鋸歯状の平行沈線文を施し、口縁部には縦長の瘤状貼付文、胴部には円形刺突文を加える。11・12も同種である。7・8は6・9・10から変化したものである。16はループ文、18は0段多条原体による、羽状縄文である。これらは関山I式後半に属す。

17は櫛歯状工具(以下「櫛」と略す)で連続刺突文を施す、神ノ木式である。22～25は中越式である。22は波状口縁に高い隆帯が付く。23・24は細い単沈線で縦位・斜位の文様を描き、22とともに胎土に繊維を含む在地化したものである。25は無文で、内面に凹凸を残す。26は胎土に繊維を含む小形の鉢である。新潟県の新谷式に例がある。

第1・2類土器は、大部分が弥生時代整穴建物跡S B38と、その周辺のV B区から出土している。図化資料では、4・5・11・12・15・16・25・26がS B38出土である。多少時間幅は有するが、前期前葉のまとまりが認められる。

第3類 (第106図27～66、第107図67～77)：有尾式土器から記述する。全般に胎土に含む繊維は少量である。27～31は、大形菱形文などの主文様を、櫛による列点状刺突文で描く。27には割付線が見える。32～39は主文様を竹管による垂直刺突の爪形文、または沈線で描く。33は刺突文を併用する。35は波頂部が丸みを帯びて内湾し、新しい傾向を持つ。41～44は、主文様を平行沈線で描く。40は羽状縄文施文後に平行沈線

を描く、群馬県に散見されるものである。56は竹管の角で刺突する、少数例である。

次に黒浜式を記述する。胎土の繊維は有尾式より多い。45～48は、竹管によるコンパス文を主文様とする。49～52は対角線文系である。羽状縄文施文後、条の間に爪形文で米字状意匠を描くもので、49には磨消部が入る。53・55は平行沈線で文様を描くもので、53の端部は丸く閉じている。58～60は横位に刺突文を施すもので、前期中葉に散見される。沈線で鋸歯文を描く無繊維の54、波状文を描く57も、コンパス文などの変形と推定する。

61～72は本類に伴う、意匠文様がない縄文施文土器である。69・71は有尾式程度の繊維量、その他は黒浜式に近い量である。単節の異原体による羽状縄文と斜縄文がある。61・65・68・72は、原体が太く長い。73～76は、釈迦堂Z3式である。胎土に金色に光る雲母を多量に含み、内面に指頭圧痕による凹凸を残す。73は無節の斜縄文、その他は単節原体の羽状縄文である。

第4類(第107図78～85)：円形竹管文を施す78・79は、諸磯a式である。78は釈迦堂Z3式と共通の胎土である。81は同時期の鉢形土器である。77・82・84・85は胎土に繊維を含まず、本類に伴う縄文施文土器であろう。83は圧痕を施す隆帯が巡り、複列の爪形文が沿う。類例が見い出せないが、諸磯b式頃と推定する。

第5類(第107図86～106、第108図107)：86～91は十三菩提式である。86は縦位の粘土紐貼付文、87は円環状貼付文と三角陰刻、88～91は鋸歯状・平行の結節浮線文がある。93は大麦田式の可能性がある。

94～107は松原式である。大部分はキャリパー形深鉢であろう。口縁部の横位区画に、竹管内面で施した斜位・矢羽状の半隆起線(集合沈線)を充填し、貼付文(97・100)、突起(101・104・107)がある。95の口端部には、精巧なソーマン状浮線文がある。92の胴部格子目文も同種である。102・103は、三角陰刻を施す。96は胴部に雲形文を描くが、陰刻はない。105・106は横位・縦位に区画する胴部である。

第Ⅲ群土器(第108図108～124・127)

第1類(第108図108～122・127)：108は外反する口縁部に、竹管で斜位の集合沈線を施す。内傾の平坦面をなす口端部に半円状の突起をつけ、竹管で爪形文列と横位羽状沈線を施す。111は同種で、角状の突起が立つ。109はキャリパー形で、口縁部、頸部、胴部3分帯を、上から交互に斜位・縦位沈線で充填し、頸部と胴最下段に縄文を施す。112～116は同器形で、短く外反する口端部には爪形文(112)・懸糸文(113・114・116)・竹管による刻み(115)を施す。110は横位平行沈線から竹管によるY字状文が垂下して縦位区画し、縄文を施す。第Ⅱ群第5類の可能性もある。117は和泉A式系である。118～120は五領ヶ台Ia式であろう。121・122・127は同Ⅱ式である。126は波状口縁に付く、外向きの獸面把手である。文様には刺突列を多用する。

第2類(第108図123・124)：123は曾利Ⅱ式の褶曲文土器である。124は郷土式であろう。本類は少量である。

第Ⅳ群土器(第108図125・126)：125は大ぶりの刺突を施す縦・横の隆帯区画間に、沈線文を描き縄文を施す。堀之内I式期の碗形浅鉢と推定する。126は堀之内2式期の鉢形土器である。本群は少量である。

(2) 土製品(第108図128)

土偶頭部と推定する土製品である。棒状粘土塊を芯に粘土を巻き、上面形を菱形あるいは台形に作り、沈線で渦巻文を描く。縁に刻みを施す。遺存部が多い部分を正面としたが、2個一対の円形刺突を挟んで、三叉文を伴う平行沈線が巡る。胎土は五領ヶ台Ⅱ式に通ずる。土偶としては、類例を確認できない。

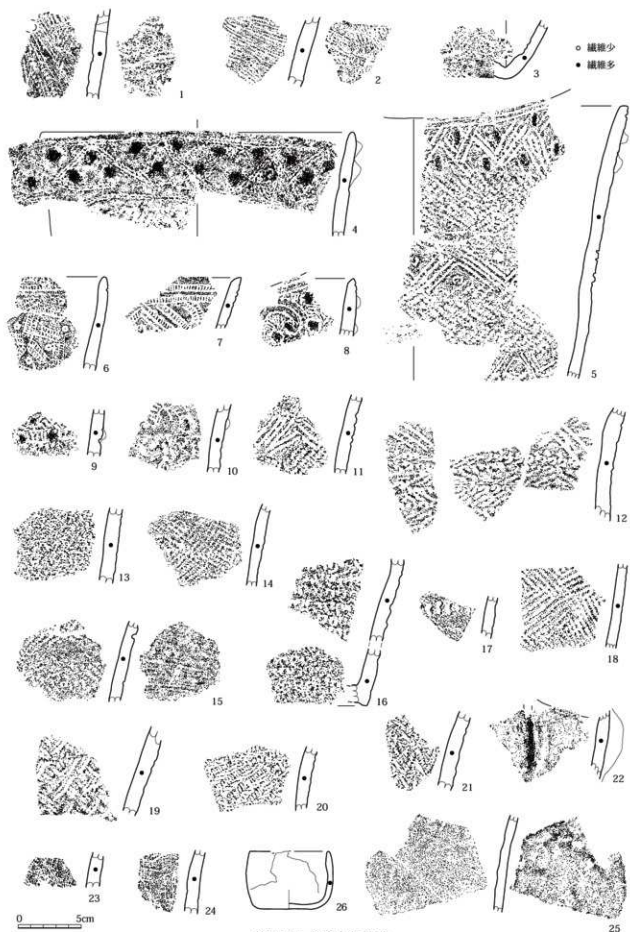
(3) まとめ

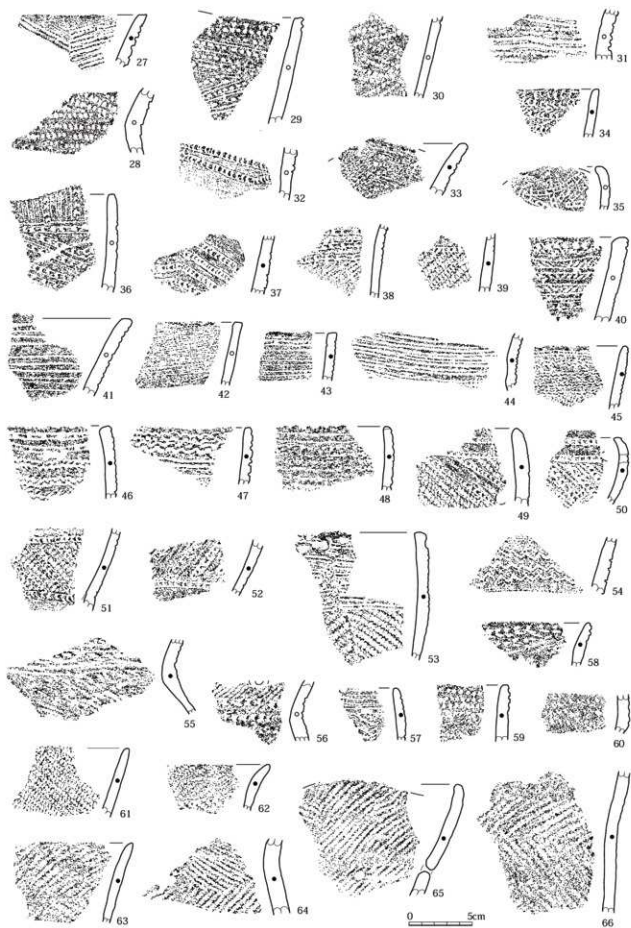
ここに報告した土器群のうち、多数を占めるのは、第Ⅱ群第3類を筆頭に、同第1・2・5類、第Ⅲ群第1類であった。縄文前期には花積下層式、関山Ⅱ式、諸磯c式は見い出せなかったものの、概ね継続的

な生活の場が広がっていたものと推定できる。いずれの時期も、長野県で主体的な型式と、関東地方に分布の中心がある型式が併存するあり方を示す。有尾式・黒浜式は記述の順に変遷したことが明らかになっており、本遺跡ほど黒浜式が多数出土した遺跡はまれである。釈迦堂Z3式は山梨県側からの搬入品と見てよく、黒浜式から諸磯a式期に数%は混じっているものと推定する。千曲川最上流域が当時の重要な甲信交流路であったことが、初めて確認された。第I群、第III群第2類、第IV群は極めて少量であるが、これを含めると、遺跡の継続時期は相当の長期間となる。

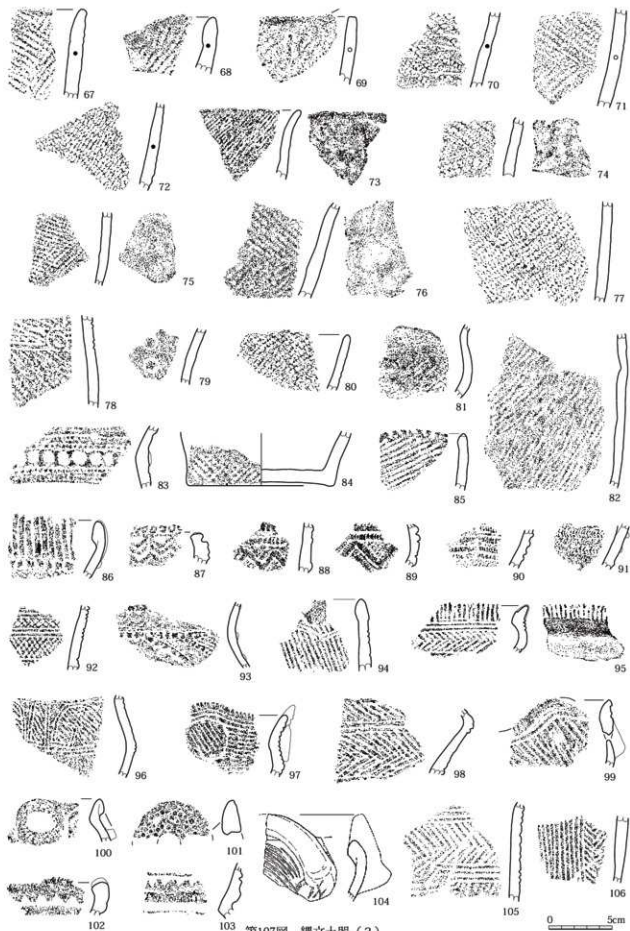
引用・参考文献

- 下平博行・賛田 明1997「長野県における縄文前期中葉の土器群について」『第10回縄文セミナー前期中葉の諸様相』・『同記録集』縄文セミナーの会
- 賛田 明2006「長野県における縄文前期前葉土器群」『第19回縄文セミナー前期前葉の再検討』・『同記録集』縄文セミナーの会
- 綿田弘実2009「中部高地における縄文中期初頭土器群」『第22回縄文セミナー中期初頭の再検討』・『同記録集』縄文セミナーの会
- 綿田弘実2017「阿久Ⅲ期及び釈迦堂Z3式土器」『第30回縄文セミナー縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会

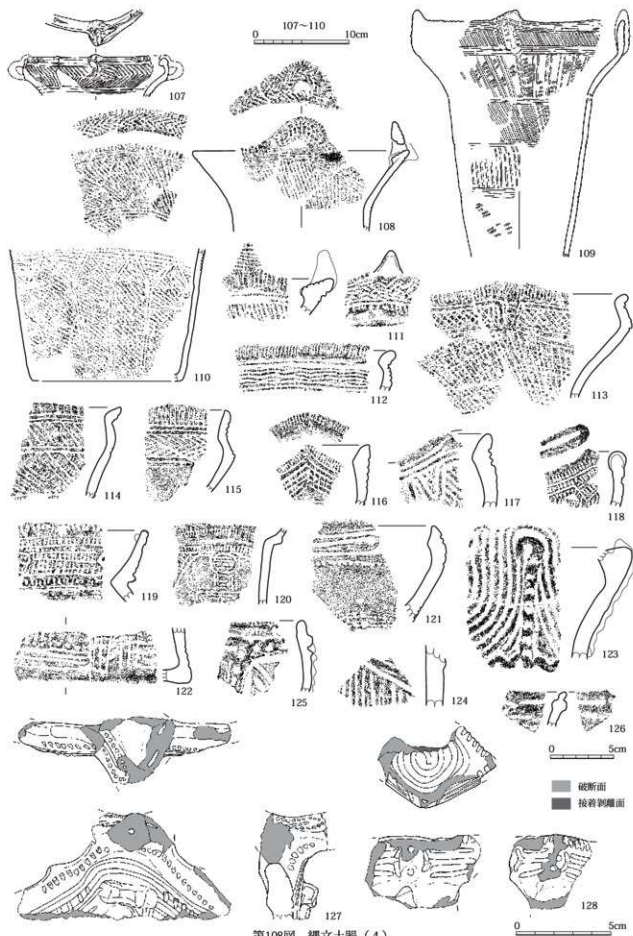




第106図 繩文土器(2)



第107圖 繩文土器 (3)



第108図 繩文土器(4)

2 弥生・古墳時代の土器

(1) 概要

本遺跡出土土器の主体を占めるのは、弥生土器である。遺構の多さを反映して、3区・5区とも弥生時代後期土器が多量に出土し、復元個体も多数に上る。時期的には後期中葉箱清水式に限られ、前後に継続していない¹。これに続くのが、中期後半の栗林式である。破片は相当量出土しているが、弥生時代後期以降の遺構の影響により、他時期の遺構や遺物包含層から出土し、復元可能な資料は少ない。栗林式前半段階が多く、中期中葉土器も少量見られる。本項では、弥生時代中期土器の図化資料が極端に少なくなることを避けるため、遺物包含層のほか、後世の遺構出土として抽出された資料も、必要と考えるものは掲載に努めた。

弥生時代後期以降、古墳時代前期には墳墓と少数の堅穴建物跡が検出され、土器も少量出土している。弥生時代後期とは断絶があり、古墳時代前期以降に継続していない。本項では、造墓活動の継続性と遺物量の少なさから、弥生時代中・後期土器と古墳時代前期土器をまとめて扱う。記述は遺物時期の新旧より遺構出土土器を優先し、遺構の報告順とし、主に弥生時代中期に属する遺物包含層出土土器を最後とした。少数の土製品も含める。

本項では、土器の器種と文様の特徴を記述するにとどめる。上記のとおり集落の時期幅が短いため、時期の記載は「(弥生時代) 中期後半」と記す場合は栗林式期、「(弥生時代) 後期」は箱清水式期を指す。

(2) 遺構出土土器

堅穴建物跡出土土器

SB02 (第109図1)

1は弥生時代後期の中型甕である。口縁部の外反は弱く、等間隔止めの籬状文が巡る²。

SB07 (第109図2～6)

3は弥生時代後期の大型壺である。胴下部が強く張る湾曲が乏しい器形で、櫛描直線文に幅狭いT字文を加える。2・4は小・中型の甕である。2は下膨れの器形で、籬状文の間隔が広い。5は台付甕、6は鉢である。

SB09 (第109図7・8)

7は弥生時代後期の甕、8は赤彩された蓋で、天井部に1孔が通ずる。

SB11 (第109図9～11)

9は弥生時代後期の中型壺である。口縁部は直線的に開き、頸部には櫛描直線文下に籬状文が巡る。10・11は中・大型の甕である。何れも等間隔止めの籬状文が巡る。

SB16 (第109図12)

弥生時代後期の大型壺の底部である。

SB17 (第110図13～24、第111図25～40、口絵、PL16)

弥生時代後期の全堅穴建物跡で、最大量の遺物を出土した。13～15は中・大型の壺である。13は赤彩される。何れも等間隔止めの籬状文下に櫛描波状文が巡る。14は無彩であるが、向かって左側に斜位の赤彩が3条付着し、記号文と通ずるものかと推定する。16～27は、大・中・小型の甕である。口縁部形態には、単純に外反する18・23、わずかに受口状となる16・20・22がある。中型で最大径がやや高く、細身に見える16・20・23と、胴下部に最大径がある比較的大型の22・24～26など、器形に多少の変化がある。21

1 本節の土器型式、時期区分等は、指導を依頼した小山岳夫氏の御教示による。

2 弥生時代後期土器の文様呼称は小山2016、中期土器の文様呼称は馬場2006に従った。

のみ簾状文が2連続止めで、23とともに櫛描波状文を胴上部のみに施す。ほかは等間隔止めで波状文を広く施文する。28～30は台付甕である。31は文様がない小型の甕である。33は罎状口縁部、34は椀状坏部の高坏である。32・35は大・小の脚部である。37は内外面、36は内面赤彩の鉢、39は甌である。38はミニチュア土器、40は無文の土器片加工板である。

SB20 (第111図41～43)

41は弥生時代中期後半のコの字重ね文台付甕であろう。42は弥生時代後期の赤彩鉢、43は無彩の鉢である。

SB22 (第111図44～47、第112図48、PL16)

45は、弥生時代中期後半の小型甕である。口端を押捺して加飾し、胴上部に波状文を描く。44は弥生時代後期の赤彩甕である。頸部の櫛描直線文にヘラ描T字文を加える。48はやや大型の甕で、口縁部はほぼ直立する。等間隔止めの簾状文が巡る。46は甌である。口縁部に櫛描波状文が巡る。47は赤彩の高坏である。

SB23 (第112図49～52)

45は弥生時代後期の大型の無彩甕である。口端部付近のハケメをきっちりとナデ消している。頸部の幅広い直線文に、5単位程度幅狭いT字文を加える。50は赤彩の甕で、強く外反する口縁端部に突起が付く。51は甕で、等間隔止めの簾状文が巡る。52は赤彩の椀状高坏である。

SB24 (第112図53～58、PL16)

53・54は弥生時代後期の大型無彩甕である。口縁部53は口端に縄文、外面に櫛描波状文が巡る。胴部54は下部が強く張る。55～57は、大・中・小型の甕である。いずれも簾状文は等間隔止めである。58は高坏である。

SB25 (第113図59～66、PL16・17)

59は弥生時代後期中型の赤彩甕、60・61は大型の無彩甕である。61は口縁部の外面と簾状文下に櫛描波状文を施す。60は胴下部同一箇所内外面に、縦長の瘤状に粘土を貼り付ける。62・64・66は小・中・大型の甕である。66は大型甕としては唯一の完形品で、胴中位に最大径がある。63は外反口縁下に簾状文が巡る赤彩鉢、65は鉢である。

SB34 (第113図67)

67は弥生時代中期後半の壺胴部である。横走る沈線間に、櫛歯による直線と連続刺突文を施す。

SB35 (第113図68)

68は弥生時代中期後半の壺頸部である。横走る沈線間に、ヘラによる刻みと、縄文、波状沈線を施す。

SB36 (第113図69～72、PL17)

70・71は、弥生時代後期の小・中型甕である。等間隔止めの簾状文が巡る。72はやや大きい無彩の鉢である。69は中期後半の甕で、ヘラによる列点と縄文を施す。

SB38 (第114図74～78)

いずれも弥生時代中期後半の土器片である。76は片口付きの壺口縁部と推定する。74は口縁部を指頭で押捺し、端部に縄文を施した甕、77は縦羽状文の甕胴部である。75は口縁部を押捺し、ヘラ描直線文と波状文を描く鉢である。78は櫛描垂下文・波状文の甕破片を素材にした、土器片加工板である。

SB39 (第114図79～83、PL17)

79～81は、弥生時代後期中・大型甕である。等間隔止めの簾状文が巡る。82は赤彩の椀状坏部高坏の脚部である。83は大型の無彩鉢である。

SB41 (第114図84~88, PL17)

84・85は、弥生時代後期中・小型甕である。85は2連続止めの簾状文が巡る。86は無彩鉢、87・88は赤彩鉢である。

SB42 (第114図89, PL17)

89は柳描直線文を5段ほど巡らせ、3条一組のヘラ描垂下文を7・8単位描く。頸部の直線文だけ振れがなくしっかりと施されているため、甕の頸部装飾を意識し、垂下文はT字文の変形と考えられる。類例はないが、弥生時代後期の小型甕と推定する。

SB47 (第114図91~93)

91・92は、古墳時代前期のハケ甕である。91は口縁部が強く外反する。92は球形胴を呈し、斜めのハケメ調整後、最大径部分に横ヘラミガキを施す。93は赤彩高坏の椀状坏部である。

SB49 (第114図94)

94は弥生時代中期後半の壺胴部である。懸垂舌状文と横走沈線間に波状文が見える。

墓跡出土土器**SM01** (第114図97, 第115図98)

97は弥生土器壺の胴部である。最大径が比較的高い位置にあり、輪積痕を残して上半はヘラミガキ、下半はハケメを施す。弥生時代中期後半と推定する。98は中期後半の甕である。屈折が強い受口状口縁に、縄文とヘラ描波状文が巡り、胴部には3条以上の縦位・横位柳描波状文を施す。

SM02 (第115図99~101)

99・100は弥生時代中期後半の壺である。99は横位沈線、刺突と縄文を施した頸部である。100は胴部で、連弧文間に刺突を施す。101は口縁部が強く外反する、ハケメ調整の壺と推定する。口端部を刻み、内面には柳菌を短い間隔で引いた文様を施し、2個一組の瘤を付す。類例は確認していないが、長野県に分布する型式ではない。

SM06 (第115図102~104)

102は大型の赤彩鉢であろう。103は赤彩高坏の小型の脚部である。104は古墳時代前期の小型高坏脚部である。

SM07 (第115図105~109)

105は弥生時代中期後半の赤彩壺で、短い等間隔止めの簾状文間に、柳描波状文を施す。106は無彩壺の外反する口縁部である。107は古墳時代前期の甕であろう。108・109は赤彩の高坏脚部であろう。

SM08 (第115図110~122, PL17)

110・112・115~119は、弥生時代中期後半の壺である。110は短い等間隔止めの簾状文間に、ヘラ描波状文を施す。112は頸部にヘラ描波状文が見える。117・119は緩い受口状口縁部に、117はヘラ描波状文、119は柳描波状文を施す。115は胴上部に縄文を施し、多段の長方形区画文と刺突、波状文などを描く。118は胴最大径部分に連弧文を描く。116はオオバコの穂先で施文している。120~122は甕である。120は斜走文、121は簾状文下に縦羽状文、122は柳描垂下文と波状文を施す。113は弥生時代後期の甕、114は同時期の赤彩高坏であろう。

SM09 (第115図123~130, 第116図131~139, PL18)

123・124は弥生時代中期後半の壺で、受口状口縁に縄文とヘラ描波状文を施す。123には2孔がある。125・126は瘤や刺突文を施し、やや古いものであろう。127~130・136は、弥生時代中期後半の甕である。127は口端部を押捺・縄文施文、128・129は縄文施文、136は柳菌による刻みを施す。130は受口状口縁に柳描波状文と貼付文がある。胴部文様は、127は縦羽状文、136は横羽状文、128は柳描垂下文と波状

文である。137は中期後半の、内湾口縁の赤彩鉢である。134・135は中期後半、139は後期の高坏脚部と推定する。138は複雑な作りの鉢であろうが、帰属時期は不詳である。131～133は古墳時代前期に属す。132は完成された球形胴、131は最大径が胴下部にある、単純口縁の球形胴である。133は小形丸底土器である。

SM10 (第116図140・141)

いずれも弥生時代中期後半の壺で、140は胴部に大ぶりの鋸歯状文、141は連弧文を描く。

SM11 (第116図142～144)

142は口端部を刻む弥生時代中期後半の甕、143は後期の受口状口縁の甕である。144は古墳時代前期の器台である。

SM12 (第116図145)

145は磨減が著しいが、弥生時代後期の甕である。

SM15 (第116図146～152)

146・147・149は弥生時代中期後半の壺である。146は袋状口縁に側線を加えた波状文を描き、縄文を施す。本遺跡では稀である。147は沈線を重ねて複雑な意匠を描くようで、波状文と先割れの刺突が伴う。149は多段区画に波状文と連弧文が見える。148・150は、弥生時代中期後半の甕である。148は受口状口縁に細かい櫛描波状文を施す。150は口端部縄文、胴部は櫛描垂下文と波状文である。151・152は古墳時代前期に属す。152は131と近似した器形の球形胴、151は薄手の小型甕である。

SM18 (第117図153～163、口絵、PL18)

弥生時代後期の木棺墓上に置かれ、棺内に落下した状態で出土した一群である。復元できた全点を図示した。153・156・157は赤彩壺である。153・157は同サイズの中形で、頸部の直線文に幅広い櫛描T字文が入る。小型の156は直線文がなく、胴部上半のみ赤彩される。155は大型の台付壺である。脚部まで赤彩され、T字文は4単位らしい。158・159は、中・小型の甕である。158は2連続止めの簾状文が巡り、159にはこれが欠落し、櫛描波状文のみである。図化後に、壺153と甕158の口縁部には、意図的と推定できる打ち欠きが確認されたため、写真で示した(PL18)。154は大型高坏である。口端に4単位突起が付く。161～163は赤彩の鉢である。161～163には2個一対の孔がある³。

遺物集中出土土器

SQ01 (第118図164～166、PL18)

164・165は弥生時代後期の小型の赤彩壺である。165には頸部に2連続止めの簾状文が巡る。より小さい164はこれが欠落する。166は高坏脚部である。

SQ02 (第118図167～177、PL19)

167～169は弥生時代後期の小型の赤彩壺である。169には頸部に2連続止めの簾状文が巡る。より小さい167は欠落する。170は中型甕である。頸部に2連続止めの簾状文が巡る。172・173は、碗状坏部の赤彩高坏である。174～176は赤彩の鉢、171は3連続止めの簾状文が巡る口縁外反の赤彩鉢である。177は脚部に三角形透しがある、高坏脚部である。

SQ03 (第118図178～182、PL19)

178は弥生時代後期の、中型の赤彩壺である。頸部は直線文のみである。179は台付甕、180は中型の甕で、ともに3連続止めの簾状文が巡る。182はやや大きめの赤彩鉢である。181は無文の小型深鉢である。中期後半の可能性はあるが、時期は不詳である。

3 指導を依頼した瀬川田佳男氏の御教示

SQ04 (第118図183・184)

183は弥生時代後期の赤彩鉢である。2孔がある。184は高坏脚部である。

溝跡出土土器**SD13** (第118図185)

185は弥生時代中期後半の壺頸部である。太い沈線で多段に区画し、櫛歯による直線を充填する。

SD14 (第118図186～191、PL19)

187は弥生時代中期中葉の小型壺である。頸部は多段区画し、沈線で鋸歯状の意匠を描き、刺突を充填する。胴部は重四角沈線間に隆帯を貼り付け、胴下部に疎らな縄文を施す。186・188～190は中期後半の壺である。186は細い頸部に、刺突が沿う突帯が巡る。188は頸部にヘラ描波状文、190は突帯と縄文、189は沈線で多段区画し、縄文と短斜線で埋める。191はボタン状貼付文が連なり、櫛描波状文を施すらしい。長野県では見かけない土器である。

土坑出土土器**SK89** (第119図192)

192は中期時代後半の甕胴部である。横羽状文を施すものと推定する。

SK93 (第119図193)

193は弥生時代中期後半の壺胴部である。沈線で多段区画し、縄文と櫛歯により直線を交互に充填する。

SK142 (第119図194)

194は弥生時代中期後半の甕である。口端に縄文を施し、胴部は櫛描波状文と垂下文である。

SK143 (第119図195～197)

195・196は弥生時代後期の甕である。いずれも口端に縄文を施す。197は注口付土器で、中期後半に事例がある。

SK256 (第119図198)

198は弥生時代中期後半の甕である。受口状口縁にヘラ描波状文、胴部に櫛描直線文と垂下文、波状文を描く。

SK414 (第119図199)

17は弥生時代中期後半の、コの字重ね文を描く台付甕である。ボタン状貼付文がある。

(3) 遺構外出土土器 (第114図73・90・95・96、第119図200～217、第120図218～243)

弥生時代中期土器を、壺・甕に区分して記述し、最後に少数の古墳時代土器と土製品を説明する。

弥生時代中期土器 (第114図73・95、第119図200～206・209～217、第120図218～243、PL19)

200は中期中葉の壺である。長い頸部を、刻みを施す隆帯で区画し、この中の重四角沈線に刺突を充填する。201は胴部がソロバン玉状の小型壺である。口縁から口端に縄文を施す。一見して搬入品と疑われる白色の胎土である。静岡県の有東式に似るが、型式を判定できない⁴。

73・95・202・203・209～226は、中期後半の壺である。203は口端部に縄文を施し、頸部に鋸歯文を描く。95は壺の頸部に、刻みを施した多段の隆帯が巡る。202は横位の櫛描波状文と直線文とを交互に配する。北陸地方の小松式土器の模倣品と見られる⁵。204は櫛歯に横位区画間に斜線を施す短頸の壺、210はヘラ描沈線で多段区画に鋸歯文を描く。211～217は、ヘラ描沈線と櫛描直線文・波状文に、刺突文を多用する一群である。73はヘラ描横羽状文と凹点、連弧文風の沈線が見える。218～220・224・226は沈線区画

4 小山岳夫氏の御教示。

5 小山岳夫氏、下濱貴子氏の御教示。

に縄文を充填する。219は懸垂舌状文と楕円文、220は×字状の磨消縄文を描く。225は胴下部に波状文、226は連弧文を描く。221は懸垂舌状文、222は連弧文に櫛歯刺突文を充填する。

227～241は甕である。227は押捺した口端部に縄文を施し、胴部に短間隔の縦羽状文を施す。228は口端に小突起が付き、口縁部に縦位条痕を施す。233は振幅が大きい櫛歯曲線文である。いずれも栗林式以前であろう。204・205・229～232・234～241は、中期後半の甕である。204は受口状口縁に櫛歯波状文を施し、胴部に同種文様と垂下文、胴中位に刺突列が巡る。櫛歯波状文は振幅が小さく繊細である。205は肥厚する口端を押捺し、胴部に横羽状文を描く。229・232・237は口端に押捺、230・236は縄文施文、234・238は刻みを施す。胴部文様は、229は櫛歯の垂下直線文と波状文、230・232・237・240は縦羽状文、231・236は・239は横羽状文である。238は波状文と羽状文を併用する。口端部に加飾がない239・241は、胴部文様がハケメ状である。242・243はコの字重ね文台付甕である。223は鉢であろうか。206は赤彩された高坏の脚部である。

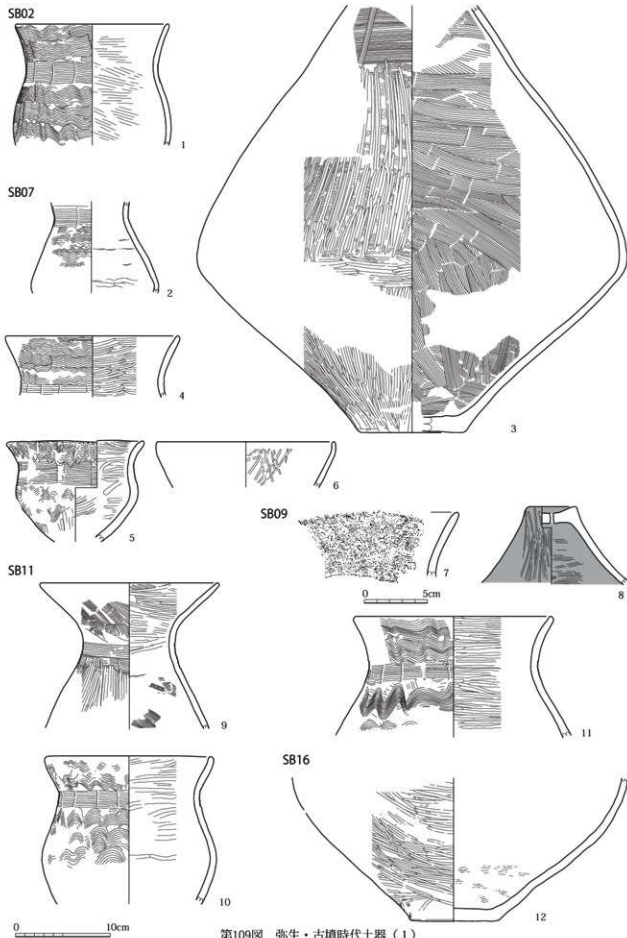
古墳時代前期土器 (第114図90・96、第119図207・208)

90は小型高坏の脚部、96は壺の胴部である。比較的小型で胴下部に最大径があり、ヘラミガキを施す。207は赤彩された直口壺である。208はS字状口縁台付甕C類である(原H2002)。いずれも前期後半に位置する。

(4) 土製品 (第120図244～247、PL19)

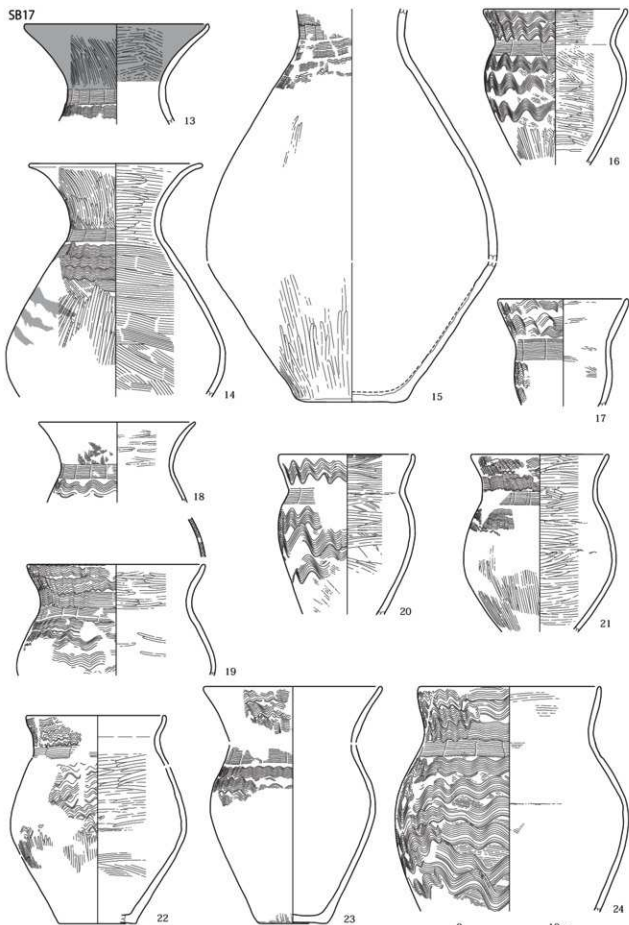
244は磯床木棺墓SM02出土の人面付土器である。人面部は、結節沈線に沿う隆帯で丸い輪郭と高い鼻を表現し、鼻腔を刻む。目は沈線で八字状に描き、頬に縦位沈線で顴面状の表現を施す。頭部背面は欠損するが、左右に耳状に広がっているらしい。背面の中央は帯状に肥厚して破断面となり、左右にはナデを施した面が残る。壺形土器の頸部の器面に密着していたとは考えにくく、石川県八日市地方遺跡例のように、土器の上部に人面意匠が立ち上がるか(小松市教委2003)、帯状部で接着した人面意匠が、土器の器壁より前方にせり出すような形状を推定する。

245・246は土器片加工版である。245は土器片の無文部分を素材とし、穿孔している。246は沈線文がある土器片の周囲を研磨した、小形の土器片加工版である。247は管状土錘である。両端を欠損している。



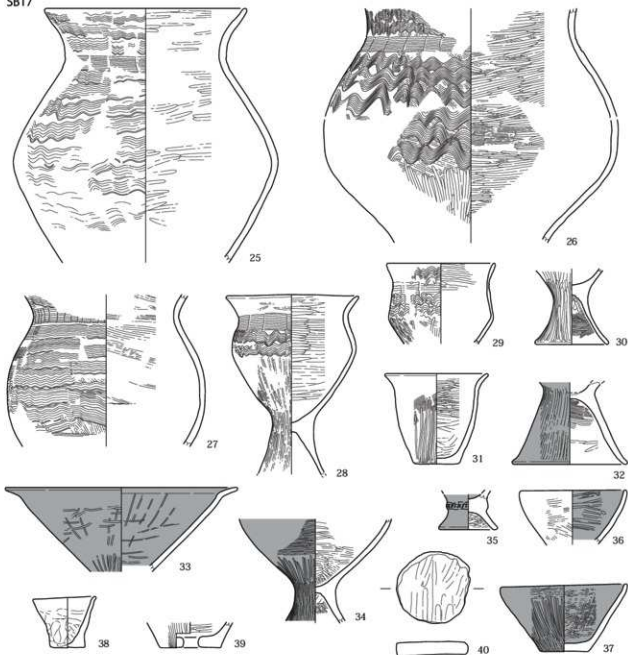
第109図 弥生・古墳時代土器(1)

SB17



第110圖 弥生・古墳時代土器（2）

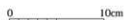
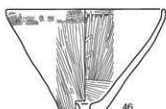
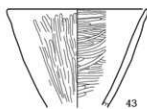
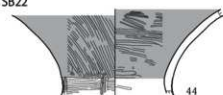
SB17



SB20

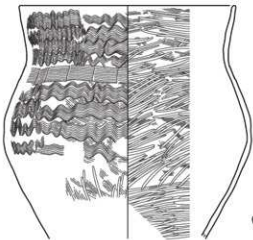


SB22



第111図 弥生・古墳時代土器(3)

SB22

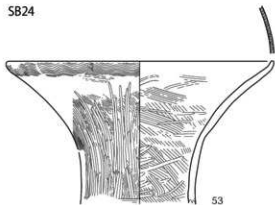


48

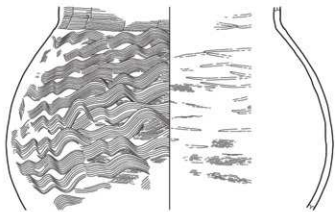


50

SB24



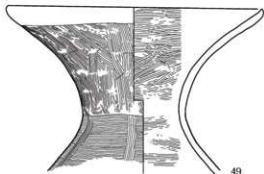
53



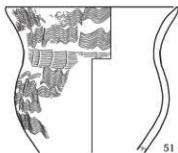
55

0 10cm

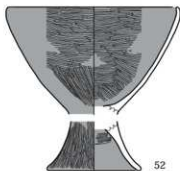
SB23



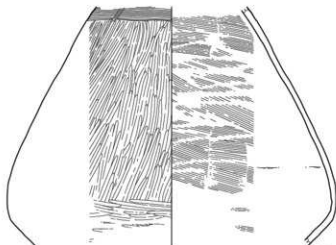
49



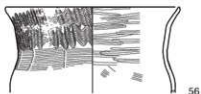
51



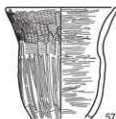
52



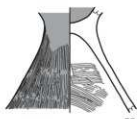
54



56



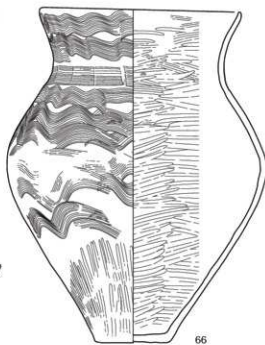
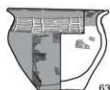
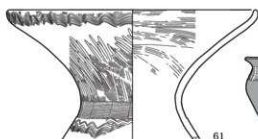
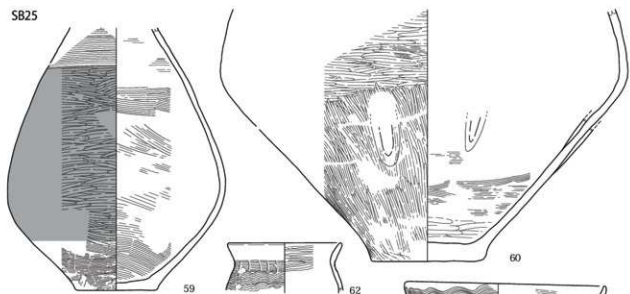
57



58

第112图 弥生・古墳時代土器(4)

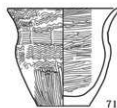
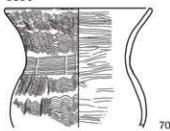
SB25



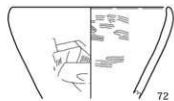
SB34



SB36



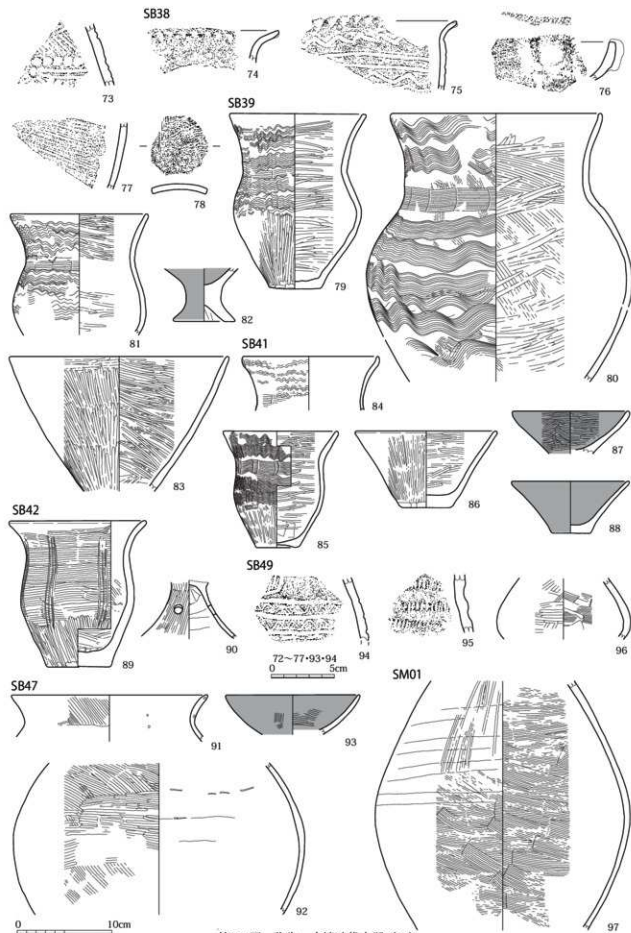
SB35



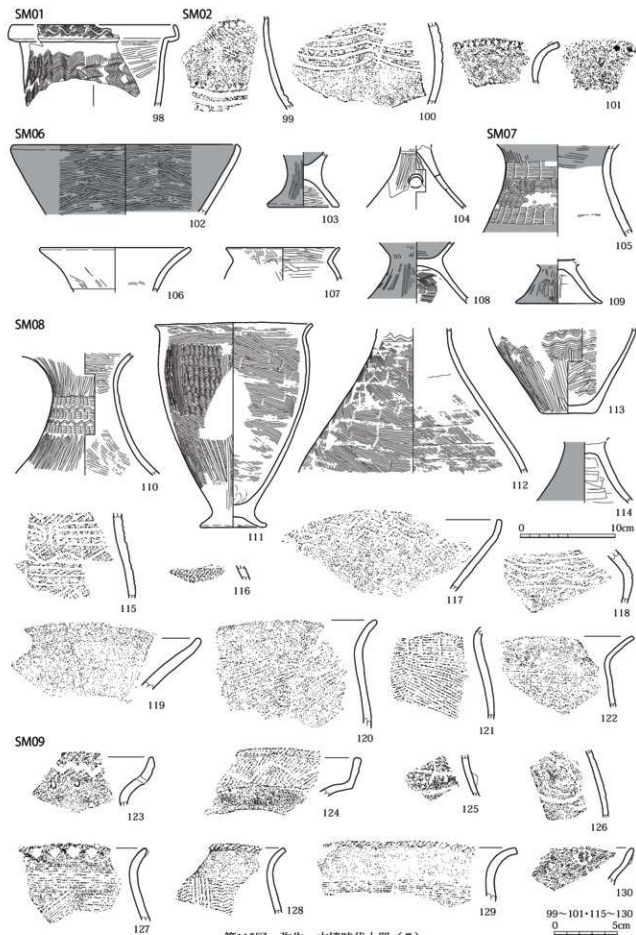
0 10cm

0 69 5cm

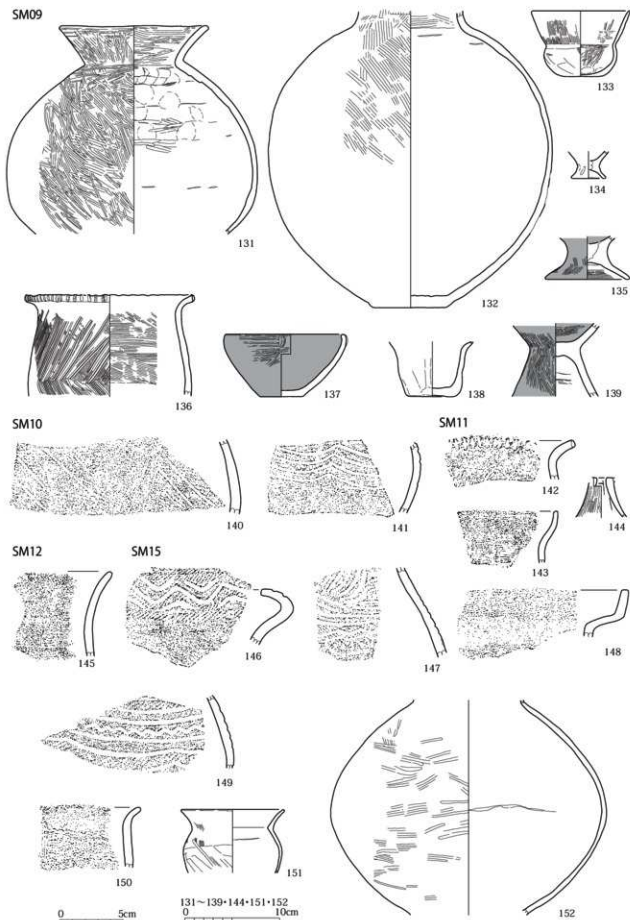
第113図 弥生・古墳時代土器(5)



第114图 弥生·古墳時代土器(6)

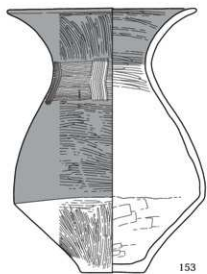


第115図 弥生・古墳時代土器(7)

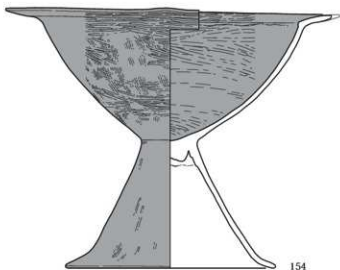


第116图 弥生・古墳時代土器(8)

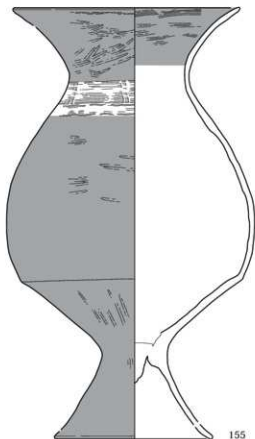
SM18



153



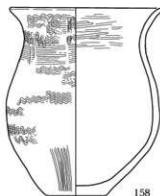
154



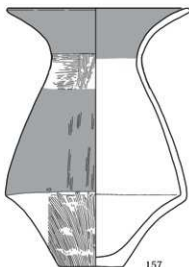
155



156



158



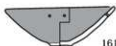
157



159



160



161



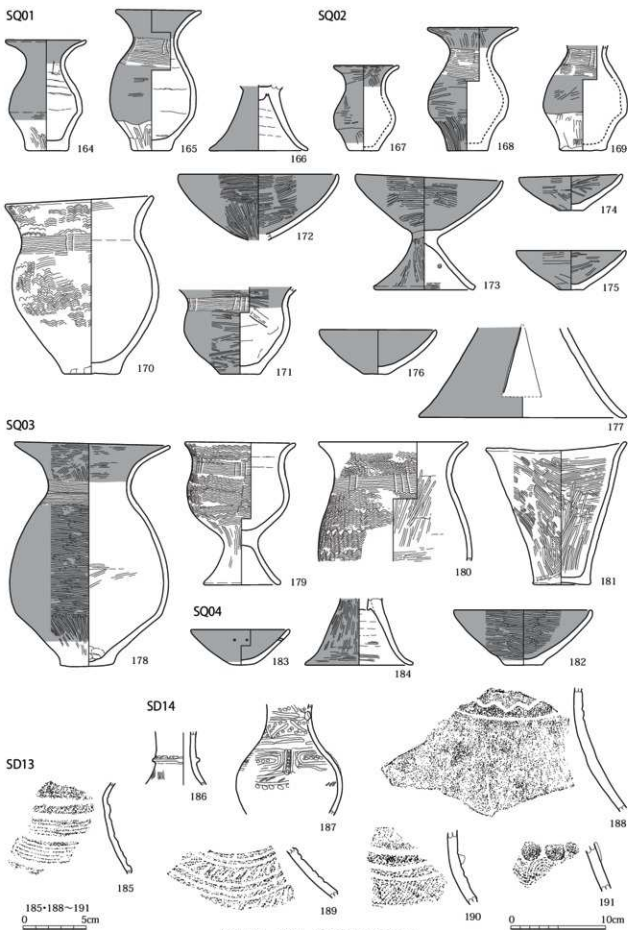
162



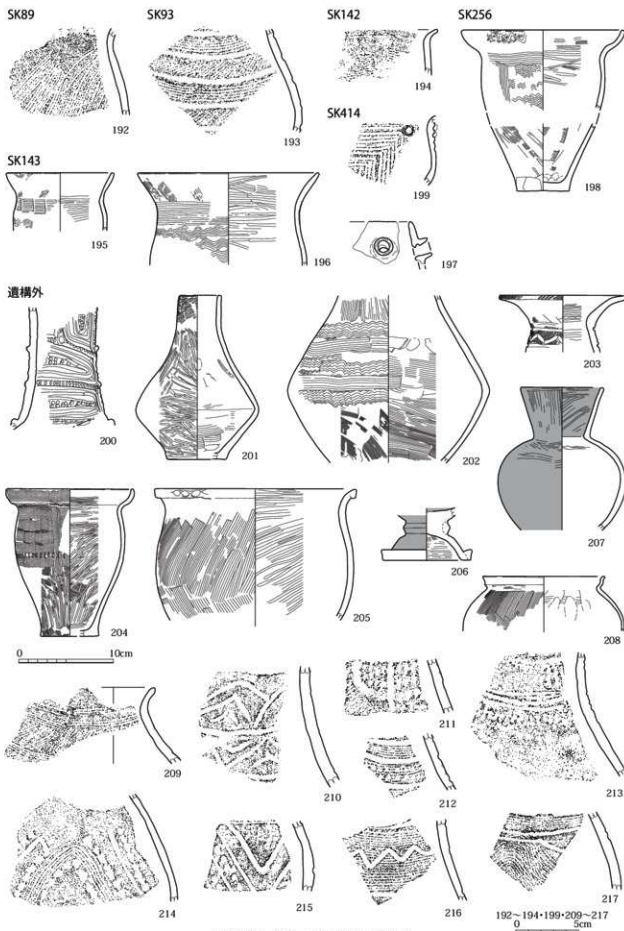
163

0 10cm

第117図 弥生・古墳時代土器(9)

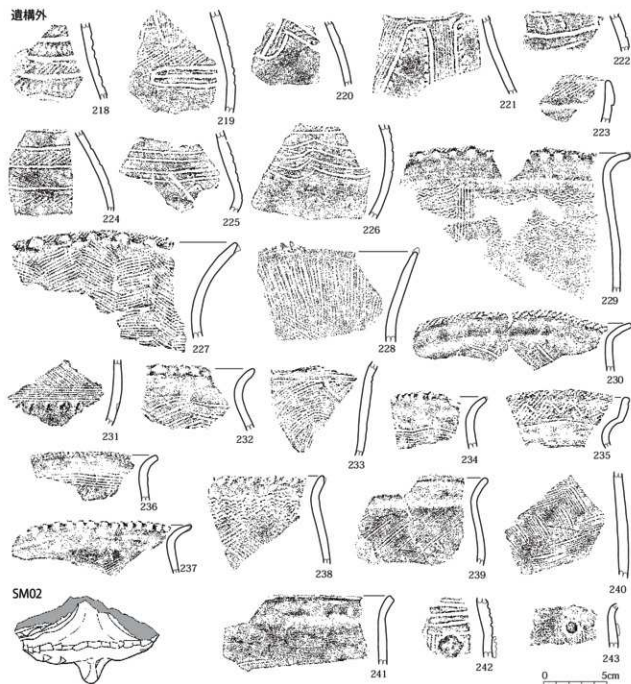


第118図 弥生・古墳時代土器 (10)

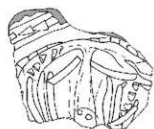


第119図 弥生・古墳時代土器(11)

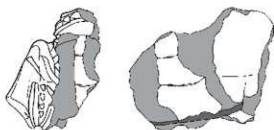
遺構外



SM02



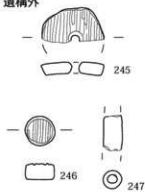
244



■ 破断面
■ 接合剥離面

0 5cm

遺構外



0 5cm

第120圖 弥生・古墳時代土器 (12)

3 古代の土器・土製品・金属製品

(1) 土器・土製品

古代の土器・土製品は、集落跡を検出した3区を中心に2区の包含層でも多量に出土している。1区の包含層は少量が出土しているが、4・5区ではほとんど出土していない。供膳形態は黒色土器が多く、続いて土師器、須恵器の順である。煮炊形態はほとんどが土師器甕で、羽釜はほとんど出土していない。したがって、3区の古代の集落跡は9世紀を中心とする時期のものである。

SB02 (第121図1)

1は、コの字形口縁で頸部下を横ヘラ削り、胴部を縦ヘラ削りする武蔵型甕で、9世紀のものとして推測する。

SB03 (第121図2・3)

2は、底径が小さく底面が右回転糸切りのままの須恵器環で、焼きが軟らかく淡桃色を呈する軟質須恵器である。3は、体部に丸みを持つ黒色土器高台付埴である。9世紀前半頃のものとして推測する。

SB04 (第121図4～7)

4は、底面が右回転糸切りのままの土師器高台付埴である。5は灰軸陶器埴で、底面は回転ヘラ削りされ、高台外面の稜は丸い大原2号窯式のものである。6は体部が丸みを帯びる黒色土器埴で、底部内面に円と十字の暗文がある。7は土師器羽釜小片であるが、本遺跡での出土数は極めて少ない。10世紀前半頃のものとして推測する。

SB05 (第121図8～14、PL20)

8は、底面が右回転糸切りのままの須恵器環であるが、焼きが軟らかく摩滅して、砂粒や滓分が浮き出ている。9・10は黒色土器高台付埴で、底面は回転糸切りのまま、内面はまばらな放射状のミガキが見られる。11は土師器高台付埴で、底部内面は煤けて、燈明皿に使われた可能性がある。12・13は胴部が回転ナデ調整される甕で、13は胴中位以下を斜めにヘラ削りする。14は中型の須恵器甕で、口縁部と肩部への降灰が著しいが、回転ナデ調整される。9世紀前半頃のものとして推測する。

SB08 (第121図17～21、PL20)

17・18は黒色土器環で、17は底面が手持ちヘラ削りされるが、18は右回転糸切りのままである。17は4方向、18は3方向に2本1組の放射状の暗文が見られる。19は土師器環であるが、焼きが非常に硬く、底部と体部の境、体部と口縁部の間の稜線が明確なところが他の土師器環とは全く異なり、酸化焰焼成の須恵器環と判断に迷うものである。20は回転ナデ調整の小形の土師器甕である。21は須恵器大甕の口縁部であるが、通常外面に付される櫛描波状文が、内面にも付されている。9世紀前半頃と推測する。

SB12 (第121図15・16)

15は黒色土器環で、8方向に放射状暗文が付される。16は黒色土器高台付埴で、同じく8方向に放射状暗文が付される。9世紀後半頃のものとして推測する。

SB19 (第121図22～31、PL20)

22は底面を手持ちヘラ削りする須恵器環である。酸化焰焼成であるが焼きが硬く、底部の一部が還元されているため、須恵器とした。18は黒色土器環で、底面が手持ちヘラ削り内面は放射状にミガいた後黒色処理される。24・25は、黒色土器高台付埴で、24は10方向、25は6方向の放射状に暗文がある。底面は高台貼り付け時にナデ消されている。26・27は底面が右回転糸切りのままの土師器環であるが、焼きが硬く酸化焰焼成の須恵器環とすべきかもしれない。特に27はロクロ目が強く、底部に焼成時の亀裂があり、須恵器に似る。28は灰軸陶器輪花皿、29は灰軸陶器埴で、ともに灰軸漬け掛け、高台外面の稜はなく、大原2号様式のものである。30は土師器埴で、僅かに残る底面はヘラ削りで、内面は赤彩される。ロクロ目が

強く、器形も須恵器に似る。31は、回転ナデ調整される土師器甕であるが、焼きが硬く、ロクロ目が強く、須恵器的な特徴を持つ。9世紀後半頃と推測する。

SB21 (第122図32~34, PL20)

32・33は、底面が右回転糸切りの須恵器坏である。焼きが軟らかく淡赤色～灰白色を呈する。34は、小形の土師器甕で、胴部外面が横にヘラ削りされる。口縁内側に粘土を張り付けて、口縁を延長している。9世紀前半頃と推測する。

SB22 (第122図35)

34は灰軸陶器の皿である、灰軸漬け掛けで、高台外面は丸く、大原2号様式のものである。底部内面が平滑になって、朱墨が極僅か付着することから、朱墨硯に転用されたものとする。9世紀後半から10世紀前半と推測する。

SB29 (第122図36~41, PL20)

34は底面が右回転糸切りのままの須恵器坏である。底面に浅い「一」の字のヘラ書きがあり、口縁部の一部が酸化気味となっている。37は黒色土器高台付皿で、底面は右回転糸切りのまま、内面は放射状にミガカれる。38・39は黒色土器碗で、38は底面が右回転糸切りのままだが、39は手持ちヘラ削りされる。

40は土師器甕で、口縁部内面に巻き上げ痕があるが、回転ナデ調整した後、胴部外面を縦にヘラ削りする。41は、無底の須恵器甕で胴部、鐙部、口縁部の小破片を図上で復元している。口縁部は還元されて灰色であるが、底部付近は酸化されて明赤褐色、鐙部は中間の暗赤褐色となっている。巻き上げ成形、回転ナデ調整の後、軽く叩き調整される。底部の突起は欠失して幅19mm、高さ11mmの基部が残るだけであるが、残存部からは、約20mmの間隔の2個1対の突起が、対角の4か所についていたと推定する。対の内側の間隙は縦に削られ、対同士の間は横にヘラ削りされている。同様の器形は、中部横断自動車道の佐久穂地区の小山寺窪遺跡で、土師器と黒色土器のものが出土しているが(埋分センター2020)、全国的に出土例が少なく(外山1987、古川2014)、この地域に集中して出土することは注目される。9世紀前半頃と推測する。

SB30 (第122図42~47)

42・43は黒色土器坏で、42は底面が手持ちヘラ削りされるが、43は右回転糸切りのままである。44は黒色土器碗で、底面は手持ちヘラ削りされる。44は、底面は手持ちヘラ削りされる須恵器碗である。酸化焙焼成であるが、体部外面のロクロ目が強く、内面が僅かに還元気味で須恵器と判断した。46・47は土師器甕で、小形の46は回転ナデ調整されるが、大型の47は横ナデ調整である。8世紀末～9世紀初めと推測する。

SB31 (第122図48~51)

48は須恵器蓋で、口縁端部の屈曲部が非常に短い。内外面に火漶が残る。49・50は須恵器坏で、49は焼きが軟らかく内外面摩擦しているが、底面は右回転糸切りのままである。50は焼きが硬いが体部の一部が酸化気味、底面は左回転糸切りで、内外面に火漶が残る。51は黒色土器坏で、内面は放射状ミガキ、底面が手持ちヘラ削りされる。8世紀後半と推測する。

SB32 (第122図52~54, PL20)

52は、底面が右回転糸切りのままの須恵器碗で、焼きが軟らかく内外面摩擦する。53は黒色土器坏、54は黒色土器碗で、ともに内面は放射状ミガキ、底面は右回転糸切りのままである。9世紀前半と推測する。

SB33 (第122図55~64, PL20)

55・56は須恵器坏で、底面が右回転糸切りのままである。8世紀後半と推測する。57は黒色土器碗で、底部内面中央に直径2cm程の窪みがあり、そこから7方向に2・3本1組の暗文が放射状に延びる。底面

は静止糸切りで「一」ヘラ書きがある。底部と体部下半の厚さが8～9mmと非常に厚く、体部上半が屈曲する特異な器形を呈する。58・59は黒色土器坏で内面を放射状にミガキ、底面は右回転糸切りのままである。60は土師器坏で、内面に放射状のミガキを施すが黒色処理の痕跡はない。底面は右回転糸切りのままである。61・62は灰軸陶器皿で、底面は回転ヘラ削り、灰軸は漬け掛けで大原2号様式のものである。63・64は土師器甕で、63は回転ナデ調整の後、胴中部以下を縦ヘラ削りする。64の残存部分はすべて回転ナデ調整である。9世紀後半と推測する。

SB40 (第123図66・67)

66は須恵器坏で、底面が右回転糸切りのままである。67は土師器坏で、底部と体部外面下端を回転ヘラ削りし、内面を縦横にミガいた後、赤彩される。9世紀前半と推測する。

SB44 (第123図69・70)

69は、底面が右回転糸切りのまま、内面が放射状にミガかれる黒色土器坏である。70は土師器甕で、回転ナデ調整の後、胴中部以下を縦にヘラ削りし、胴部内面はハケ調整される。9世紀前半と推測する。

SK98 (第123図71)

71は、底面が右回転糸切りのままのかわらけである。焼きが悪くて黒灰色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。中世に下るものと推測する。

SK107 (第123図72)

72は、底面が右回転糸切りのままの土師器坏で、底部内面と体部内面の下端が食い違い、段となっている。10世紀前半と推測する。

SK761 (第123図73)

73は、底面が右回転糸切りのままの土師器坏で、内外面煤けているが、黒色土器B類とまで言えないものである。10世紀前半と推測する。

SK762 (第123図74、PL20)

74は、底面がナデ消されている黒色土器高台付坏で、高台が剥落している。底面に「太」の墨書があり、欠けているが、体部にも正位で「太」の字が墨書されている。9世紀前半と推測する。

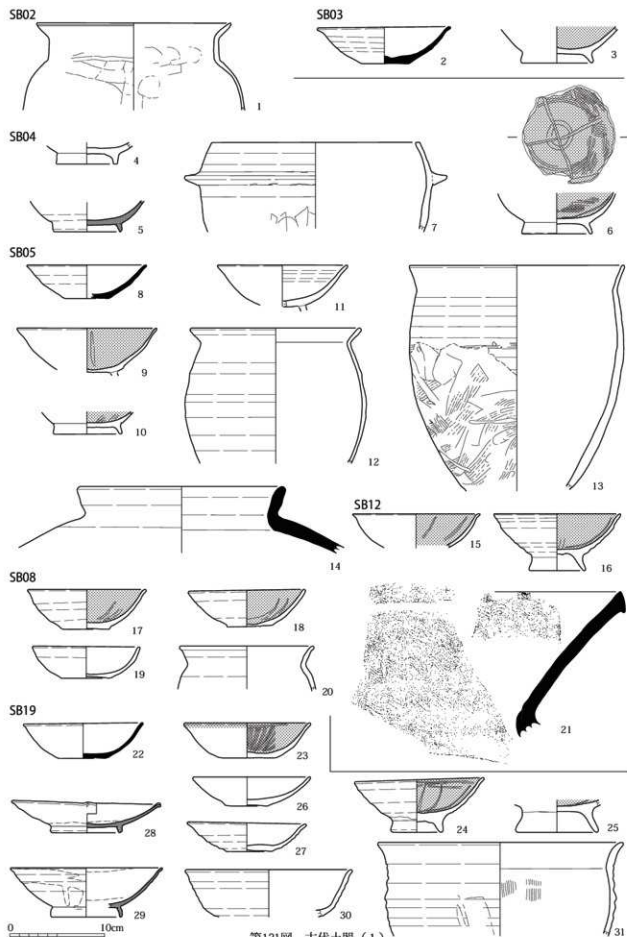
SM06 (第123図75、PL20)

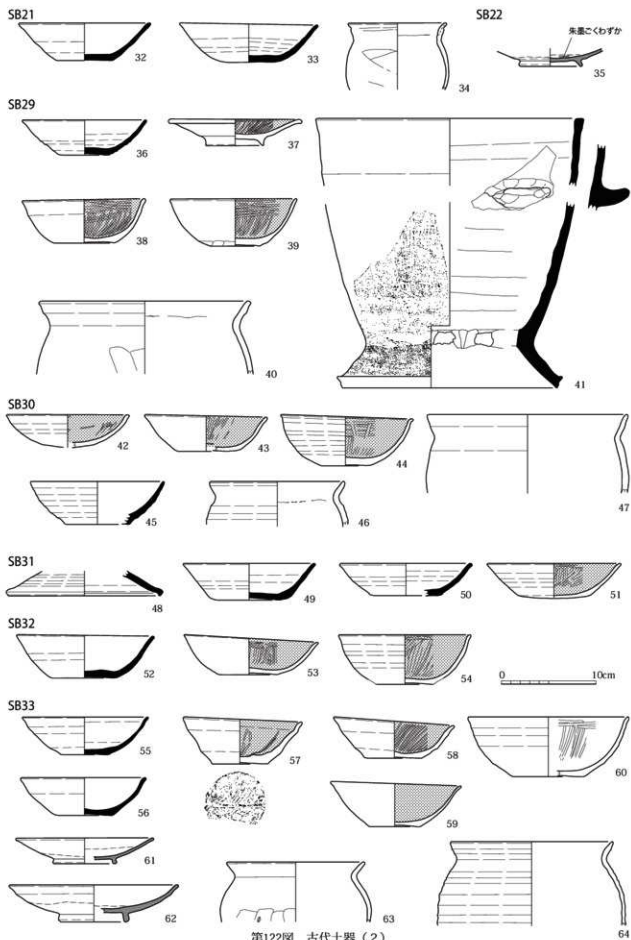
75は、外面格子叩き調整の須恵器甕の胴部破片の周囲を草履形にミガいて成形した転用硯である。内面が図の上下方向にすり減って平滑となり、内面の図上部にかすかに墨痕が見られる。SM06に混入したもので、周囲の遺構から9世紀頃と推測する。

(2) 金属製品 (第123図76)

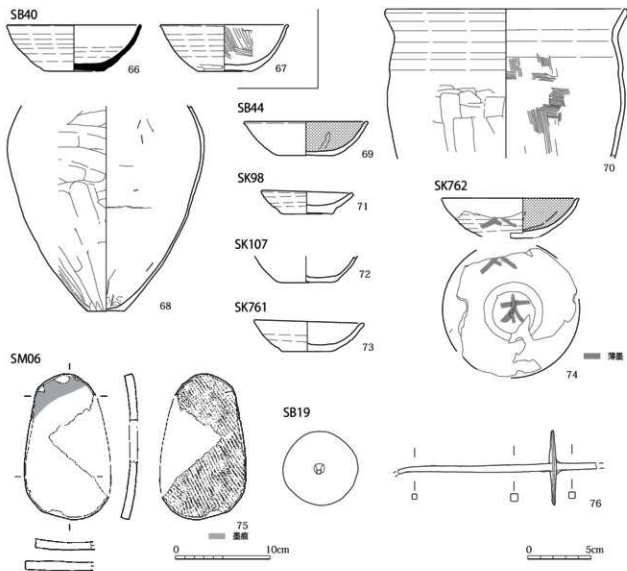
76はSB19出土の、鉄製の紡錘車である。紡輪はやや隅丸方形気味に角ばった円形で直径は5.9cm、厚さは中央で5mm、先端近くで3mmである。軸は、紡輪近くが1辺6mm、先端近くで1辺4mmの断面方形で、前後が折損しているが、一方は折損が少なく紡輪から12.1cm、他方は3.3cmで、紡輪の厚さを含めた現長は15.9cmである。

銭貨には、SK487から北宋銭の政和通寶(初鑄1111)、遺構外の3区VI A 23グリッドの検出面で北宋銭の真書の皇宋通寶(初鑄1038)が各1点出土している。





第122図 古代土器(2)



第123図 古代土器(3)・土製品・金属製品

引用・参考文献

- 外山政子1987「甗について—平安時代の甗を中心に—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』4
 古川一明2014「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について」『東北歴史博物館 研究紀要』15
 埋文センター2020「中部横断自動車道建設に埋蔵文化財発掘調査報告書10—佐久穂町内—」

4 石器・石製品

本遺跡では、剥片・破片類を含めて遺構から11,284点、遺構外から4,542点、合計15,826点の石器・石製品が出土した。時期は弥生時代中～後期、古代・中世の遺構が存在し、遺構外からは縄文時代早期末葉～後期前葉の土器が出土しているため、そうした時期の石器・石製品と推測する。

出土した石器・石製品の器種は槍先形尖頭器、有舌尖頭器、打製石鏃、磨製石鏃、石錐、スクレイパー、石匙、微細な剝離がある剥片、石包丁、擦切具、二次加工のある剥片、両極石器、打製石斧、石鏃、磨製石斧、石槌、みがき石、敲き石、磨石、特殊磨石、凹石、搦き臼、用途不明品、礫器、砥石、石皿・台石、石臼、球状耳飾、玉、石核、原石、剥片・破片類である。

石器・石製品は出土点数が多いので、特徴を良好に備えているものを抽出し、器種別に一括して報告する。石器・石製品個別の詳細は、観察表をDVDに収録した。

槍先形尖頭器・有舌尖頭器 (第124図1～4, PL21)

槍先形尖頭器は3点、有舌尖頭器は1点が出土した。旧石器時代末から縄文時代草創期に属するものである。1～3は槍先形尖頭器で柳葉形を呈し、両側縁部から深い剝離を施す。1・2は小形で、3はそれよりもやや大形である。石材は1・3が珪質頁岩、2がチャートである。4は有舌尖頭器で、基部に返しがなく太めの舌が付く。石材は黒色安山岩と推測する。

打製石鏃・未製品 (第124図5～15, PL21)

製品が326点、未製品と推測するものが149点、合計で475点が出土し、製品11点を掲載した。5～9は凹基無茎鏃で、基部を挟り込む深度と側縁部の形状に違いがある。8は表裏両面の中央に、付着物が観察される。10～15は凹基有茎鏃で、形状が正三角形に近いものと二等辺三角形を呈するものが存在する。15は側縁部が鋸歯状を呈する。石材は8が頁岩、13がチャート、それ以外は全て黒曜石である。石鏃および未製品は、全体的に黒曜石が圧倒的に多く459点を占め、それ以外は全てチャート、安山岩、無斑晶質安山岩、頁岩、石英と推測するものが認められるが、全て10点以下である。

磨製石鏃・未製品 (第124・125図16～27, PL21)

製品が16点、未製品と推測するものが13点、合計で29点が出土し、製品5点および未製品と推測するものの7点を掲載した。今回の整理作業では、剥片類に対して十分な検討ができず、特に泥岩の剥片類については未製品関連資料をさらに含む可能性がある。16～20は磨製石鏃の製品で、基部を挟り込む深度と側縁部の形状に違いがある。未製品と異なる点は、形状が整い薄く、両側縁部に鋭利な刃部が付く、基部上端に穿孔を施す点などが挙げられる。また、打製石鏃よりも概して大形である。21～27は、磨製石鏃の未製品と推測する。21・22は表裏両面および両側縁部に研磨を施し、21はさらに基部を挟り込むための研磨を行う。21・22ともに、両側縁部の刃部はまだ作出されていない。23～27は横長剥片を素材とし、両側縁部から粗い調整剝離を施し、おおよその形状を作出する。石材は、20は不明だが、それ以外は非掲載資料を含めて泥岩と推測する。以上の資料から、大雑把だが本遺跡で製作された磨製石鏃の工程を、次のように推測することができる。

1. 素材の剥片に両側縁部から粗い調整剝離を施し、おおよその形状を整える段階 (23～27)。
2. 1に対して、表裏両面・両側縁部および基部を挟り込むための研磨を施す段階。さらに、形状・厚さを整える (21・22)。
3. 両側縁部に研磨を施し、刃部を作出するとともに、基部上端を穿孔して完成させる (16～20)。

なお、中部横断道に伴う埋文センターの発掘調査では、佐久市森平遺跡 (埋文センター2014) で磨製石鏃とその未製品が出土しており、1～3の各資料が確認できる。

石錐 (第125図28~33, PL21)

70点が出土し6点を掲載した。28・29は小形の縦長剥片を素材とし、下端部に短い錐部を作出する。30・31はつまみ部をもたず棒状を呈し、上下両端に錐部をもつ。32・33はつまみ部をもつ石錐で、細かな加工剥離を施し、棒状の錐部を作出する。33のつまみ部は、素材剥片の形状を活かし、加工剥離を施す範囲が少ない。石材は30が黒色安山岩と推測するもので、それ以外は黒曜石である。全体では、黒曜石が圧倒的に多く62点を数え、そのほかにチャートが7点、黒色安山岩と推測するものが1点ある。

スクレイパー (第125~127図34~41・50, PL21・22)

32点が出土し9点を掲載した。34・36は小形の剥片、35は薄い板状の原石に対して細かな加工剥離を施し、掻器的な急角度の刃部を形成する。37~41は剥片の縁辺部に加工剥離を施し、削器的な刃部を形成する。39は裏面に曇りが観察できる。50は両面からの加工剥離で形状を整え、刃部を作出する。形状および大きさから、打製石包丁と評価した方が適切かもしれない。石材は34~36・39が黒曜石、37・40がチャート、38が無斑品質安山岩、41が泥岩、50が黒色安山岩である。全体では、黒曜石が最も多く20点を数え、以下、チャートと無斑品質安山岩が4点、黒色安山岩が3点、泥岩が1点ある。掻器的な刃部のものは全て黒曜石で、削器的な刃部のものは黒曜石のほか、様々な石材が認められる。

石匙 (第126図42~47, PL21)

26点が出土し6点を掲載した。42~46は小形の石匙で、刃部を片面からの加工剥離で作出する42・45・46と、両面からの加工剥離で作出する43・44が認められる。47は大形の粗製石匙で、つまみ部付近のみが残存する。風化が著しく不明確な点はあるが、両面からの加工剥離でつまみ部を作出する。石材は42がチャート、43・44が黒曜石、45が無斑品質安山岩、46が泥岩で、47は不明確だが凝灰岩と推測する。全体ではチャートが8点、黒色安山岩が5点、黒曜石が5点、無斑品質安山岩が3点、泥岩が3点、珪質頁岩が1点、砂岩の可能性のあるものが1点ある。

微細な剥離がある剥片 (第127図48・49)

92点が出土し2点を掲載した。48・49は剥片の縁辺部に、使用痕の可能性が高い微細な剥離が連続して認められる。石材は、48・49ともに黒色安山岩である。全体では黒曜石が70点、泥岩が11点、黒色安山岩が8点、珪質頁岩が1点、チャート1点、凝灰岩の可能性のあるものが1点ある。

石包丁 (第127図51, PL22)

1点が出土した。剥離痕が部分的に認められるものの、全体にわたって丁寧な研磨を施す。上端には孔があり、刃部は片刃である。石材は不明確だが、硬質砂岩と推測する。

擦切具・擦切痕が残る剥片 (第127図52~55, PL22)

擦切具は4点、擦切痕が残る剥片は1点が出土し、擦切具3点と擦切痕が残る剥片を掲載した。擦切具は、縁辺部などに擦切りによると推測する摩耗痕が観察され、擦切痕が残る剥片は、擦切具による溝状の擦切痕(摩耗痕)が残る。52は横長剥片の縁辺部に、横位方向の摩耗痕が残る。53は表裏両面が剥離し、不明確な点が多いが、下端に横位方向の摩耗痕が残る。54は全体に研磨を施す点から、他器種の未製品の可能性もある。横長剥片を素材とし、上・下端に横位方向の摩耗痕が残るが、下端の方がやや鋭利である。55は、薄い板状を呈する素材の表裏両面を研磨し、片面に幅6mm前後で、断面がV字形を呈する溝状の擦切痕(摩耗痕)が残る。擦切技法による切断途中のもので、何かの未製品と考えるが器種は不明である。石材は52・54・55が泥岩で、53は片麻岩と推測する。また、未掲載の1点も泥岩である。

二次加工がある剥片 (第127図56~60, PL22)

様々な大きさ・部位に様々な二次加工が認められる剥片と、二次加工により何らかの形状を作出する不定形石器と呼称されるものを一括した。器種判別ができなかった製品や未製品など、様々な性格のものを

含むと考える。196点が出土し、形状を作出するもの5点を掲載した。56は両側縁部から加工剝離を施し、扁平で細長い形状を作出する。棒状を呈する石錐の錐部とは形状が異なる。57～60は、表裏両面の全体に細かな加工剝離を施し57は弧状、58は円形、59・60は三叉状を呈する。58は平面・断面形からみて、小形搔器の可能性もあろう。59は先端付近に、つまみ部のような若干の括れをもつ。石材は56～59が黒曜石、60が無斑品質安山岩である。全体では黒曜石が149点と最も多く、そのほかに泥岩が23点、黒色安山岩が9点、チャートが8点、無斑品質安山岩が3点、珪質頁岩が2点、砂岩が1点、緑色片岩が1点ある。様々な石材が認められるのは、二次加工がある剥片に分類したものが、様々な性格の石器を含むことを示唆しているのであろう。

両極石器 (第128図61～65、PL22)

106点が出土し5点を掲載した。61～63は板状を呈し、61・62は上下方向および向きを90度変えた方向に、63～65は上下方向に両極打法の剝離が残る。石材は61～63が黒曜石、64・65が緑色岩で、前者は石鏃製作、後者は玉類の製作に関わる資料の可能性がある。全体では黒曜石が103点と圧倒的に多く、それ以外は緑色岩が2点、黒色安山岩が1点である。

打製石斧 (第128図66～70、PL22)

60点が出土し5点を掲載した。平面形は66～68が短冊形、69・70が楕形を呈し、69は両側縁部に若干の括れをもつ。66～69は刃部などに、使用痕の可能性が高い摩耗痕が残る。石材は66・67が泥岩、68～70が黒色安山岩である。全体では泥岩が39点、黒色安山岩が21点である。

石鏃 (第128・129図71～73、PL22)

77点が出土し3点を掲載した。打製石斧と同様に、縁辺部に対して階段状の剝離を施すが、打製石斧よりも大形である。平面形は71・73が短冊形、72は楕形に近いが、全て刃部の方が幅広である。71・72は刃部を中心に、使用痕の可能性が高い摩耗痕が残る。石材は全て黒色安山岩である。全体では黒色安山岩が73点と圧倒的に多く、そのほか泥岩と推測するものが4点みられる。

磨製石斧 (第129・130図74～81、PL22)

23点が出土し8点を掲載した。74・75は小形の磨製石斧である。74は片刃で、刃部と胴部を主体に研磨を施し、両側縁部には剝離痕が多く残る。75は両刃で、全体に研磨を施す。76は扁平片刃石斧である。77～79は両刃で全体に研磨を施し、77・78の刃部先端には使用によると推測する潰れが認められる。79は基部に若干の敲打痕が残る。80は乳棒状石斧の基部である。81は大形の磨製石斧の刃部で、全体に研磨を施すが、若干の敲打痕が残る。石材は74が泥岩、75・77が透閃石岩、76・79・81が輝緑岩、78・80が黒色安山岩と推測する。

石槌 (第130図82、PL22)

2点が出土し1点を掲載した。82は磨製石斧の転用品と考えるもので、磨製石斧の欠損面に著しい使用痕が残る。石材は輝緑岩であり、未掲載の1点は泥岩である。

みがき石 (第130図84・85)

可能性があるものを含めて6点が出土し、2点を掲載した。小形の円盤や楕円形状の礫に、使用痕と推測する摩耗痕や光沢痕が残るものを一括したが、自然礫を含む可能性もある。石材は84が不明で、85は泥岩と推測する。全体では泥岩が2点、チャートが1点、不明なのが3点ある。

敲き石 (第130図86～88)

可能性があるものを含めて12点が出土し、3点を掲載した。楕円形を呈する礫の端部に、敲打痕が観察されるもので、素材となる礫の大きさに違いがある。86・87は礫の下端、88は礫の両端および側面に敲打痕が観察できる。石材は86が泥岩、87・88は砂岩である。全体では、砂岩もしくは砂岩と推測するものが

7点、泥岩が3点、安山岩もしくは安山岩と推測するものが2点ある。

特殊磨石 (第130図83、PL22)

2点が出土し1点を掲載した。83は風化が著しく不明確な点もあるが、断面が台形を呈する棒状礫の下端面と一側面に磨面が残る。石材は、83および非掲載資料ともに不明である。

磨石 (第130図89)

24点が出土し1点を掲載した。89は扁平礫の表裏両面に磨面をもち、側縁部の1か所に敲打痕が残る。石材は安山岩である。全体では、安山岩が19点、砂岩および砂岩の可能性のあるものが4点、凝灰岩の可能性のあるものが1点ある。

凹石 (第131図91～94)

31点が出土し4点を掲載した。円形・楕円形を呈する扁平の礫を素材とし、表裏両面もしくは片面に凹痕が残るもので、表裏両面に磨面、側面に敲打痕を併せ持つものが多い。91は片面に、92～94は表裏両面に凹痕をもち、表裏両面に磨面、側面および両端部に敲打痕が残る。石材は全て安山岩である。

搦き臼 (第131図90・96・96)

搦き臼と推測するものが3点出土した。90は搦き臼としてよいか不明確だが、楕円形を呈する礫の表面に楕円形の凹痕があり、内部のほぼ全体が摩耗する。また、下端部には敲打痕が残る。95・96は円形を呈する礫の片面に円形の広い凹痕があり、内部が摩耗する。裏面はともに磨面が認められ、96はさらに敲打痕が残る。石材は全て安山岩である。

用途不明品 (第132図97・98)

楕円形を呈し扁平で、用途の推定が困難なものを一括した。97は横長剥片が素材となり、両側面から表裏両面に対して加工剥離を施し、さらに両側面と下端部に研磨を施す。上端部は加工剥離が残るものの、先端は欠損の可能性が高い。先端は胴部よりもやや細身で、残存していればそのまま尖頭状を呈する可能性もある。石材は泥岩と推測する。当該資料の器種は不明だが、先端部が尖頭状を呈するのであれば、候補の1つとして石剣の握り部と推測したい⁶。石剣であれば、両側面からの加工剥離は形状を整えるもので、両側面と下端部への研磨は、握り部の刃潰し加工であろう。近隣における類似は、群馬県甘楽町駒形遺跡で、弥生時代後期の11号堅穴建物跡から石剣1点が出土している(甘楽町教委2004)。北裏遺跡群では、市教委が発掘調査を実施した地点で近畿型の石剣が出土しており(佐久市教委2008)、当該資料もそうした資料との関連性を考え注意しておきたい。98は表裏両面および上下端部に研磨を施し、形状を整え、両側面には刃部のような稜を作出する。石材は片麻岩と推測する。

砥石 (第132・133図99～109、PL23)

32点が出土し11点を掲載した。小形の持ち砥石と大形の置き砥石が存在する。99・100は、断面が整った長方形を呈する小形の砥石である。99は使用面が平坦で、4面および下端面が使われている。100は使用面が平坦な3面と、凹面を形成する1面が使われ、平坦な両側面に細かな線状痕が付く。101～103は、厚さ1～2cmの小形の砥石である。101は使用面が平坦で、表裏面が使われ、表面には細かな線状痕が付く。裏面は使用頻度が低いためか、素材となる礫表面の凹凸が目立つ。また、側面には刻みを入れたような、連続する凹凸状の痕跡が認められる。102は使用面が平坦で、表裏両面・1側面・上下端面が使われているが、表裏面と1側面の使用が特に顕著である。表裏両面と側面には幅1mmほどの浅い線状痕が付く。裏面は広い範囲が剥離する。103は使用面が浅い凹面を形成するもので、表面が使われ、細かな線状痕が付く。104は使用面が平坦で、表面・1側面が使われている。この2面には、細かな線状痕と幅1mm

6 大阪府立弥生文化博物館の福原佳博氏に、石剣の可能性あることをご教示いただいた。また、石器全般にわたりご指導を賜った。

ほどの線状痕が付き、特に側面は幅1mmほどの深く鋭利な線状痕が多く認められる。105・106は、使用面が凹面を形成する大形の砥石である。105は表面・1側面が使われ、表面には細かな線状痕や幅1cmほどの浅い帯状の痕跡が残る。裏面およびもう一方の側面は、剝離した部分が多く不明である。106は表裏2面が使われ、両面に線状痕や幅1cmほどの浅い帯状の痕跡が残る。107～109は、使用面が平坦な大形の砥石である。107は表面・両側面が使われ、表面には細かな線状痕が幅1.3cm前後の単位で付く。108は表裏両面が使われ、表面は極めて浅い凹面を形成する。表面は細かな線状痕と、幅0.8cmほどの帯状の痕跡が残る。裏面は細かな線状痕と、幅0.5mmほどの溝状の痕跡が残る。当該資料は破損した状態で出土し、壊された可能性もあるため剝離面を記録した。109は表裏両面・1側面が使われ、表裏両面には細かな線状痕と帯状の痕跡が付く。石材は99・100が凝灰岩、101～106・108・109が砂岩、107が安山岩である。全体では砂岩が最も多く21点で、そのほかに凝灰岩が6点、安山岩が3点、泥岩としたものが2点ある。

石皿・台石 (第133図110～114, PL23)

21点が出土し5点を掲載した。大形礫の表面に摩耗痕が顕著なものを石皿、敲打痕が顕著なものを台石とした。石皿は摩耗痕の範囲が皿状に窪み縁をもつものと、窪みをもたず盤状を呈するものが存在する。110～113は石皿で、110は摩耗痕の範囲が皿状に窪み、111～113は盤状を呈する。盤状のものは表裏両面に摩耗痕が広がり、113には赤色顔料が付着する。114は台石で、表面に顕著な敲打痕が認められ、併せて表裏両面に摩耗痕が残る。石材は全て安山岩である。全体では、安山岩が最も多く19点で、そのほかに砂岩および緑色片岩と推測するものが各1点ある。

球状耳飾・玉 (第133図115・116)

各1点が出土した。115は球状耳飾で全体の1/2ほどが欠損するが、平面形は隅丸方形を呈し、中央よりやや上部を穿孔する。石材は不明である。116は楕円形の玉で、幅の1/2以上を欠損するが、幅の長軸は推定で2.6cm、短軸は推定で2.0cmを測る。全体に線状痕が認められる。石材は滑石と推測する。

その他の石器

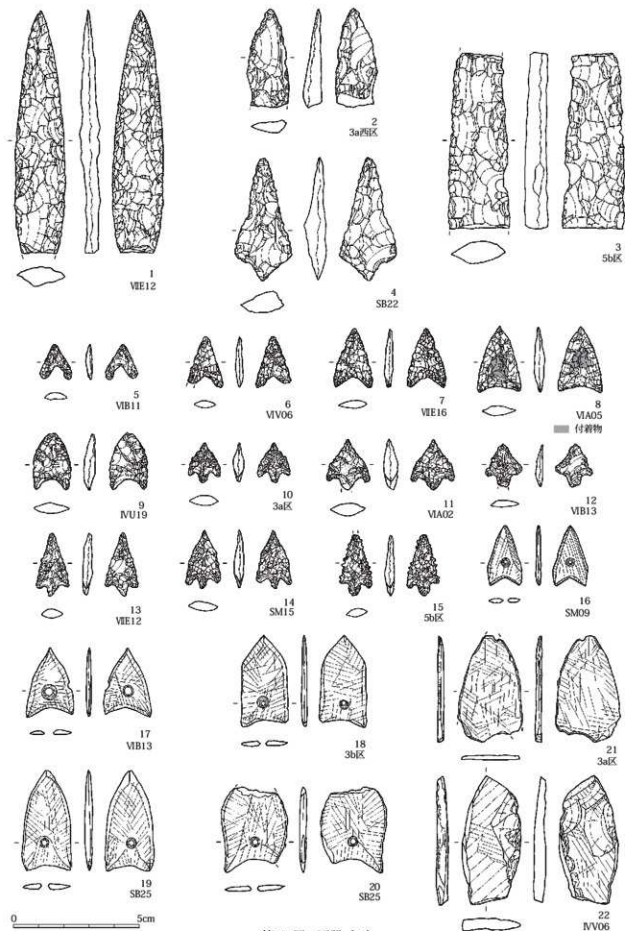
図示していないが石臼3点、礫器3点、用途不明石製品2点、石核179点(黒曜石170点、泥岩3点、チャート2点、黒色安山岩2点、珪質頁岩1点、石英?1点)、原石110点(黒曜石101点、チャート9点)、剝片・砕片14,195点が出土している。

引用・参考文献

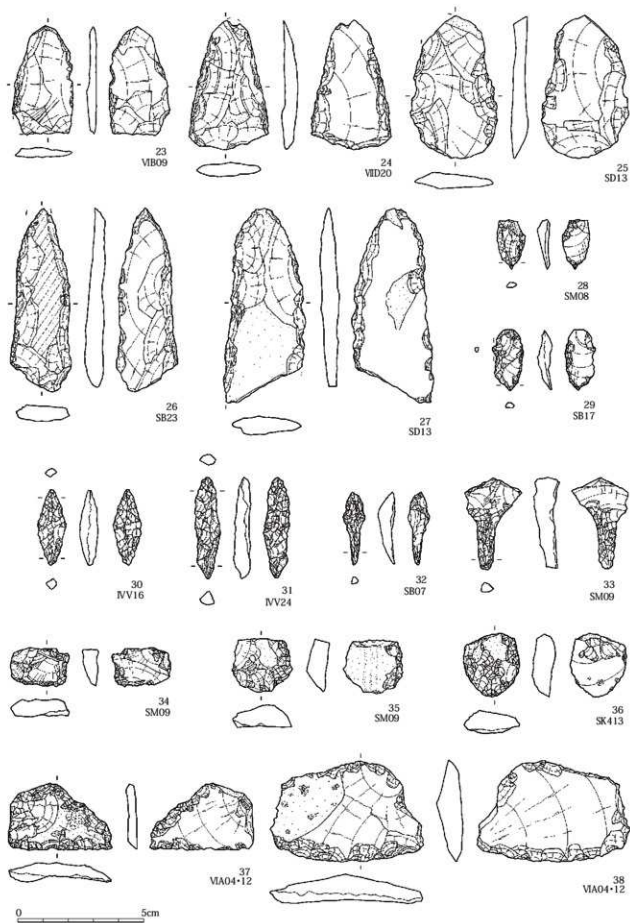
甘楽町教委2004「駒形遺跡」

佐久市教委2008「北畑遺跡群北畑遺跡Ⅰ・Ⅱ 北裏遺跡群北裏遺跡Ⅰ」

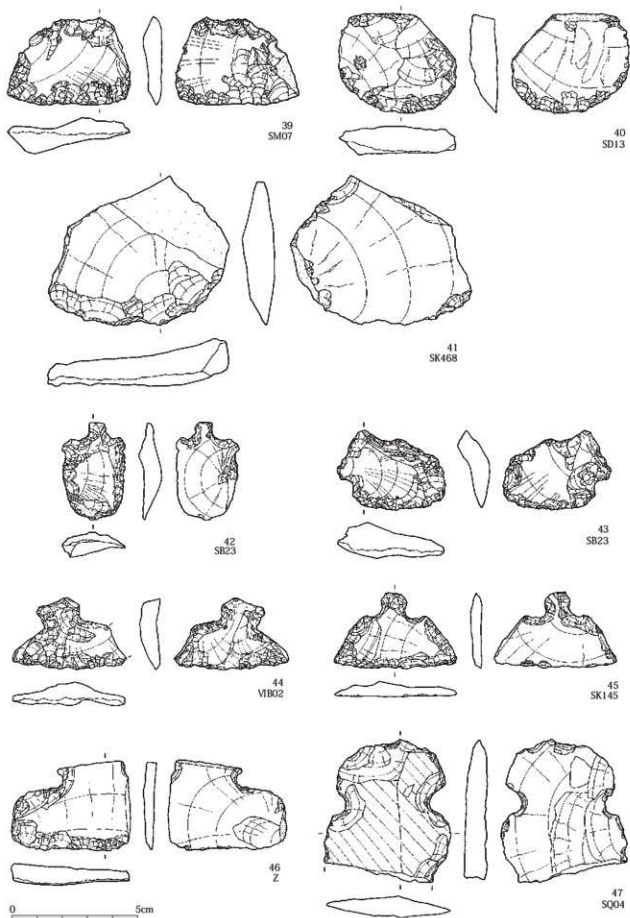
埋文センター2014「森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」



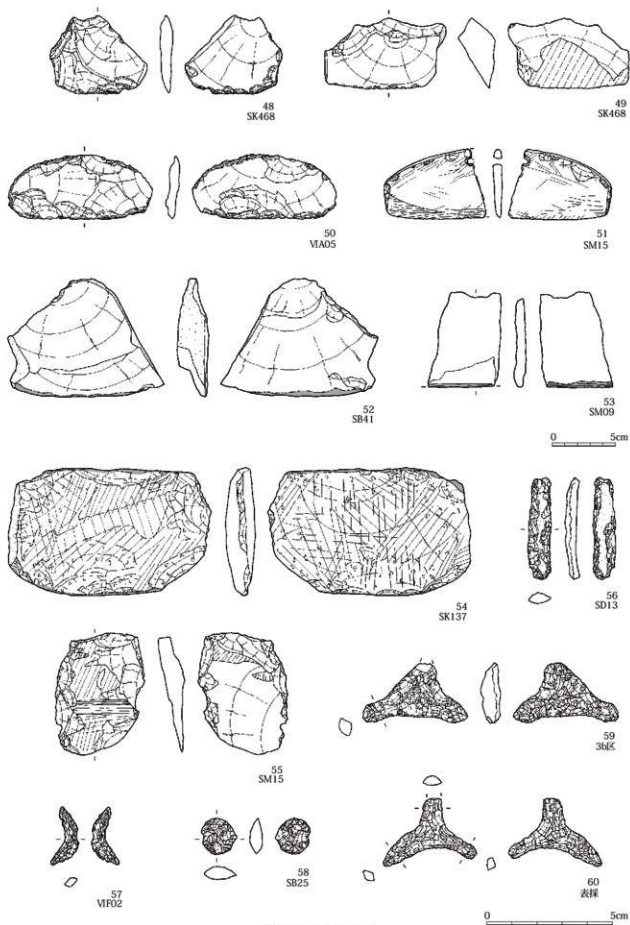
第124图 石器(1)



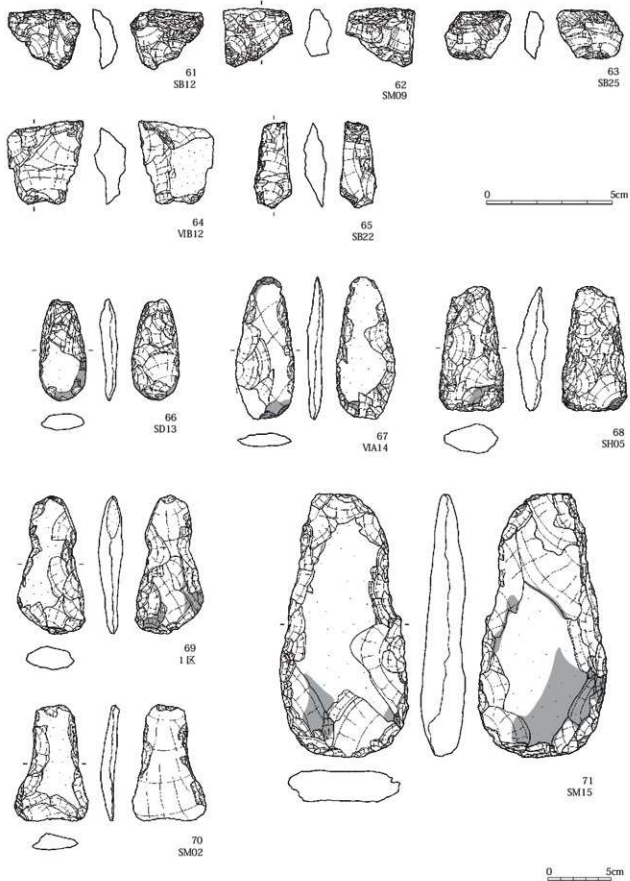
第125図 石器(2)



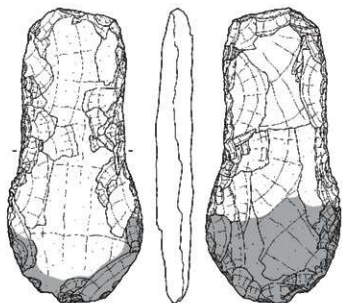
第126圖 石器(3)



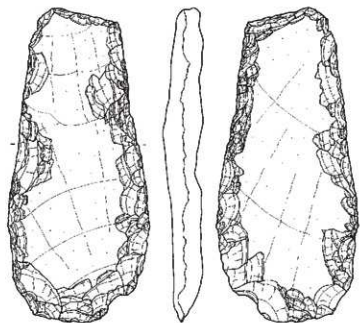
第127図 石器(4)



第128圖 石器(5)



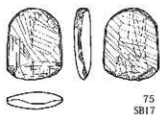
72
SH04



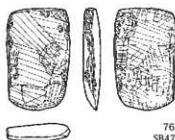
73
SB22



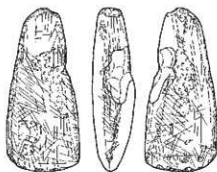
74
MB11



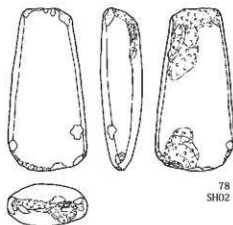
75
SB17



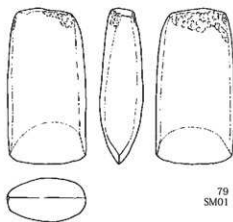
76
SB47



77
SB25



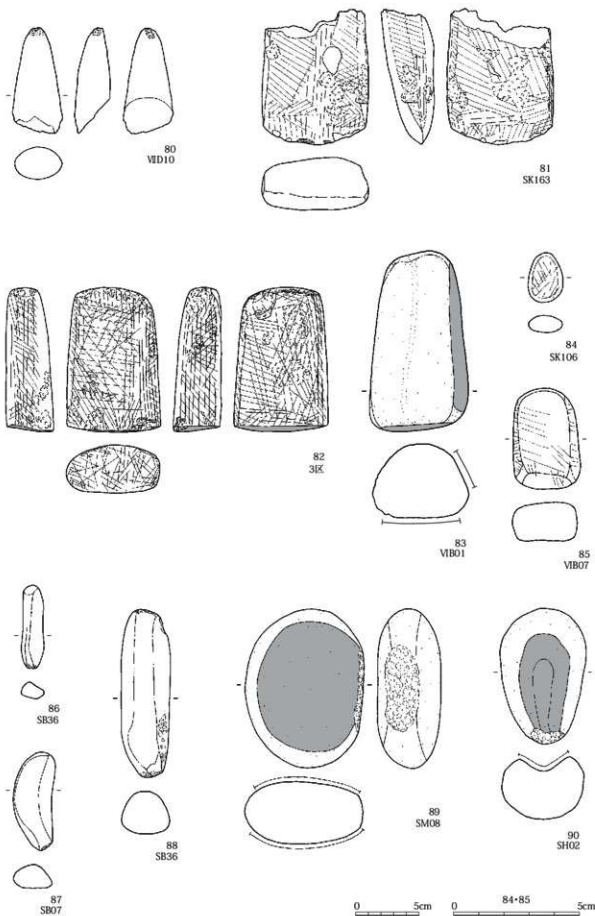
78
SH02



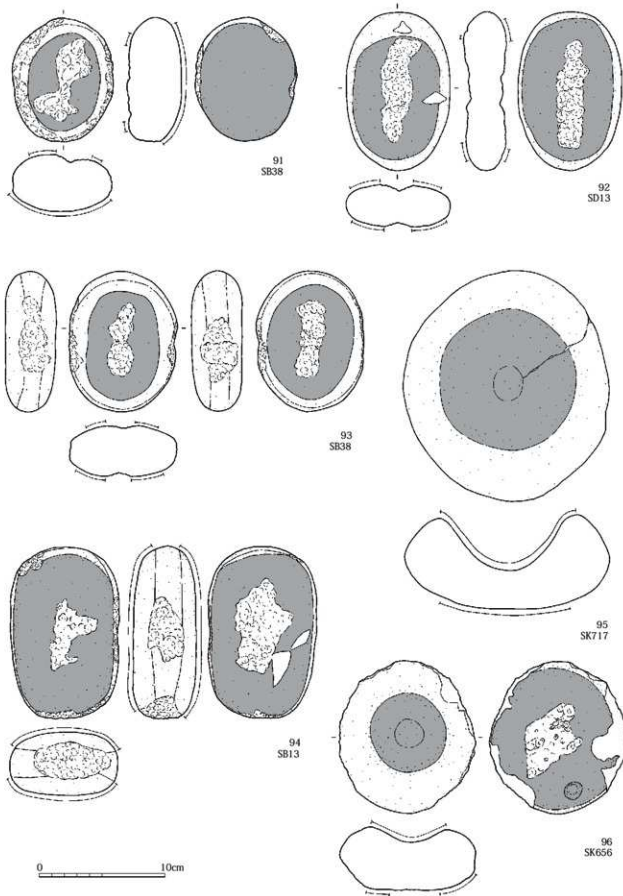
79
SM01

0 5cm

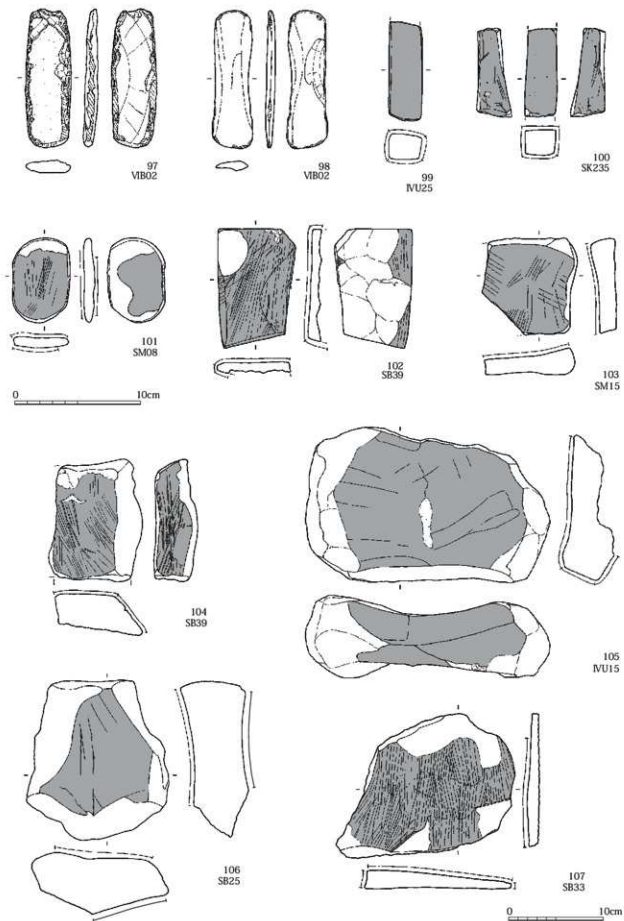
第129図 石器 (6)



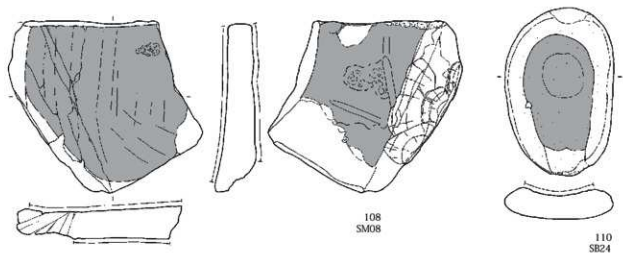
第130圖 石器(7)



第131圖 石器(8)

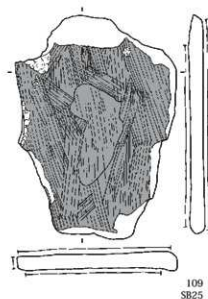


第132圖 石器(9)

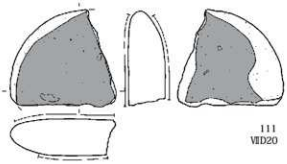


108
SM08

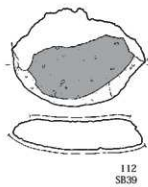
110
SB24



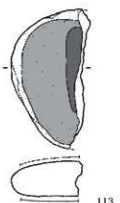
109
SB25



111
VD20

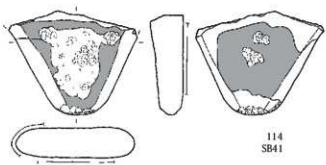


112
SB39



113
SB38

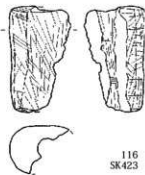
■ 赤色顔料



114
SB41



115
A15



116
SK423

0 20cm

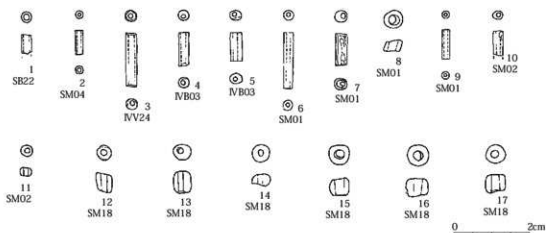
0 108・109 10cm

0 115・116 5cm

第133图 石器 (10)

5 玉類

管玉が弥生時代の1・2号礫床木棺墓や4号土壙墓のほか22号竪穴建物跡で、ガラス小玉が2号礫床木棺墓や18号木棺墓で出土している。



第134図 玉類

第7表 玉類計測表

番号	種類	出土遺構	厚さ	長さ	長径	短径	重量	色	材質
1	管玉	SB22		4.8	2.8	2.6	0.08	緑	グリーンタフ
2	管玉	SM04		6.1	2.2	2.1	0.04	赤	グリーンタフ
3	管玉	遺構外IVV24		13.9		2.8	0.19	緑	グリーンタフ
4	管玉	遺構外VIB03		8.9	2.8	2.7	0.11	緑	グリーンタフ
5	管玉	遺構外VIB03		7.6	2.7	2.3	0.10	緑	グリーンタフ
6	管玉	SM01		14.8	3.1	2.5	0.17	緑	グリーンタフ
7	管玉	SM01		8.4	2.7	3.0	0.09	緑	グリーンタフ
8	白玉	SM01	3.0		5.0	4.8	0.08	灰	グリーンタフ
9	管玉	SM01		7.6	2.1	2.1	0.04	緑	グリーンタフ
10	管玉	SM02		6.8	2.4	2.1	0.04	緑	グリーンタフ
11	ガラス小玉	SM02	2.3		3.1	3.0	0.04	黒	ガラス
12	ガラス小玉	SM18	4.3		4.0	3/7	0.11	コバルト青	ガラス
13	ガラス小玉	SM18	5.5		4.7	4/1	0.16	コバルト青	ガラス
14	ガラス小玉	SM18	2.8		4.9	4.7	0.08	スカイ青	ガラス
15	ガラス小玉	SM18	4.4		5.7	5.3	0.19	コバルト青	ガラス
16	ガラス小玉	SM18	4.7		5.7	5.6	0.16	コバルト青	ガラス
17	ガラス小玉	SM18	4.5		5.3	4.9	0.16	コバルト青	ガラス

第4節 小 結

(1) 弥生・古墳時代土器について

最初に、弥生時代中期から古墳時代前期の土器群についてまとめ、集落の変遷を明らかにするための土器編年軸を示したい。本遺跡で最も古い弥生土器は、中期中葉である。第118図187、第119図200、第120図227・228など、少数である。松節並行期に該当しよう(石川2002)。

これに続くのが、佐久盆地1期(馬場2006、以下同じ)(栗林1式期、石川2002、以下同じ)の土器である。第113図67、第115図99・100、第119図209～第120図219などの壺が該当する。すべて破片資料であり、共存する甕は判然としない。佐久盆地2期(栗林2式古段階)には資料が増える。これまで図版番号を示したものの以外、大部分はこの時期に帰属する土器と考える。佐久盆地3期(栗林2式新段階)、佐久盆地4・5期(栗林3式期)、後期の吉田式に該当する土器は、指摘できない。

弥生後期土器については、3区の集落域は小山岳氏が佐久地方の弥生時代後期を6期細分した編年研究の、後期Ⅲ期古段階に限定される(小山2016)。型的には、箱清水式前半期の古段階である。SB17を代表例として、堅穴建物跡から多数の復元個体が出土している。土器編年上の同一段階中での2小期程度の時間幅と推定する⁷。

弥生時代後期における長野盆地の箱清水式土器は、壺は頸部に横溝T字文、甕は口縁部から胴部に横溝波状文を施す。これに対して佐久盆地の東部、すなわち千曲川右岸側の土器は、壺は金属状のヘラ描矢羽状文、甕は横溝横羽状文に置き換わっている。このような特徴をもつ土器に「佐久系箱清水式」の呼称を与え、昭和初期に提唱された「岩村田式」を復活させる意見も出されている(小山1999・2016・2020)。一方、本遺跡がある佐久盆地の西部、千曲川左岸側は長野盆地の箱清水式土器と共通の様相である。

佐久地方の弥生時代後期Ⅲ期古段階の拠点集落としては、千曲川右岸の支流濁川・湯川流域に立地する、周防畑B遺跡、円正坊遺跡、西近津遺跡などがあり、佐久盆地北部に偏在する(小山2016)。代表例となる周防畑B遺跡の土器は、前段階の吉田式の文様を継承した、「佐久系箱清水式」の特徴をもつ土器である。本遺跡では、壺は頸部に横溝直線文と幅の狭いT字文を配し、甕は横溝波状文を描いている。これまで佐久地方では、千曲川左岸側で弥生後期3期古段階の拠点集落は未調査であり、千曲川右岸・左岸地域で趣の異なる二つの土器文化が展開した、この時期の状況が明らかになった。

3区の弥生後期Ⅲ期古段階に続くのが、1区の木棺墓SM18(第117図153～163)と、遺物集中SQ01～04(第118図164～180・182～184)のⅢ期新段階、すなわち箱清水式前半期の新段階に属する土器群である。壺頸部のT字文は幅広となり、4単位に固定され、甕の簾状文は2連続または3連続止めとなる。甕が少なく赤彩小型器種が多いのは、墓と隣接の遺物集中という遺構の性格によるものであろう。この時期の堅穴建物跡は、3区・5区とも確認されていない。20mの比高をもって南側の丘陵上に立地する、西東山遺跡が同時期の集落として注目される。

これに続くのが、弥生時代後期終末期から古墳時代前期前半の空白期を挟んだ、3区出土の古墳時代前期後半の土器群である。堅穴建物跡SB47(第114図91～93)、周溝墓SM09・15(第116図131～133・151・152)などから出土している。小山氏編年の古墳時代前期Ⅲ期に属する(小山2016)。

弥生時代中・後期を通じて、他地域からの搬入・模倣土器少ない。中期後半期では、第115図101、第118図191、第119図201は、長野県には分布しない型式であるが、比定できる型式を明らかにできなかった。第119図202は、北陸地方の小松式土器の模倣品である。佐久市北西の久保遺跡Y78号住居跡に類例が

7 小山岳氏の御教示。これ以降の記述も、同氏の御教示によるところが大きい。

ある(市教委1987)。

(2) 弥生・古墳時代集落の変遷

前述の土器編年に基づいて、集落の変遷を見通す。弥生時代中期中葉の土器は少なく、遺構も確認されていない。佐久盆地1期についても、同様の状況である。佐久盆地2期には遺物量が増加する。隣接して分布する、小形の竪穴建物跡SB34・35・38からは、同式の破片が出土している。磯床木棺墓SM01・02は弥生時代中期後半に属することが判明している。遺存状態不良のSM03も同時期の可能性がある。弥生時代後期以降の遺構に切られて不明確ではあるが、これらの竪穴建物跡と墓跡は東西20m程の範囲内に分布している。

長野盆地では、弥生時代の竪穴建物跡の平面形は、中期は円形、後期は隅丸長方形へ変化することが明らかにされているが、佐久地方では隅丸方形か隅丸長方形で、大きな形態の変化が見られないことが指摘されている(小山他1995・2006)。時期を推定すると、SB02・07・09・11・16・17・20・22・23・24・25・36・39・41・42からは、小山氏編年の弥生時代後期Ⅲ期古段階の土器が出土している。建物跡同士が隣接する例はあるが、切り合う事例は認められない。長軸方向は、北北東—南南西方向が最も多く、SB26・36この軸から外れる。長軸の規模は、隅丸方形に近いSB41の4.2mが最小、SB17の8.4mが最大であり、6m前後が多い。遺存状態が良いSB02・07・23・24・39・41等を見ると、4本主柱で、北側2本の柱間に地床炉を備える竪穴建物である。炉形態について、千曲川左岸は地床炉主体、右岸は地床炉のほか石囲い炉、土器敷き炉など多様であることが指摘されている(小山1995・2017)。遺存状態不良のSB11が土器敷き炉の可能性のあるほか、地床炉だけが確認されており、千曲川左岸の地域色を示す。出入り口施設と棟持柱は、明確な例が認められなかった。その他に、SB09・16・26には貯蔵穴の可能性をもつピットがある。

弥生・古墳時代の竪穴建物跡と方形周溝墓が切り合う事例として、(古)SM13→(新)SB26、SB09→SM06、SB17→SM07、SB42→SM08、SB25→SM09、SB11→SM11、SB47→SM15がある。弥生時代で細別時期不詳のSB26に切られるSM13以外、いずれも弥生時代後期の竪穴建物跡SB09・11・17・25・42、古墳時代前期のSB47が先行し、方形周溝墓が後出である。これらの事例から、共存する遺物がない方形周溝墓の上限時期が推定できる。方形・円形周溝墓は、これらの遺構の切り合いと先行研究から、変遷をたどることができる(小山他1995)。

弥生時代後期中葉に出現したのが、ⅤB区に分布する四隅が切れる小形方形周溝墓SM10・13である。続いて居住域としての利用が途絶える後期後半、隣接して小形の円形周溝墓SM12が現れる。この後、古墳時代前期に至り、10mを超え一隅が切れる方形周溝墓SM15がⅤA区に築造される。それほど大きな時間差を經ず、古墳時代前期後半には、前方後方形の大形方形周溝墓SM08・09が築かれる。同形態で軸がそろうSM06・07も、弥生時代後期後半から同時期の時間幅に構築されたと推定する。小形のSM11も同様の可能性が高い。古墳時代前期に属す竪穴建物跡はSB47のみであり、本遺跡は墳丘墓が連なる墓域となったことと推定する。

5区のSM18は、木棺上に多数の土器を供献し、火をかけられた木棺墓である。類例として、1985年調査された、佐久市上直路遺跡1号住居址屋内埋葬墓がある(市教委2007)。被葬者は、銅鋼14個以上を腕に着けた成人である。墓の上部や周囲には多数の土器が供えられ、多量の炭の出土から、葬送儀礼に伴い家に火をかけた痕跡と推定されている。佐久地方だけに見られる、地域色の強い葬制と考えられている(小山2008)。

(3) 石器群について

本遺跡の石器群は、縄文時代に帰属するものと混在し、時期が特定困難の資料が多い。弥生時代に帰属

する可能性が高い器種を選ぶと、有茎石鉢、磨製石鉢及び未製品、石包丁、擦切具・擦切痕が残る剃片、石鉢、磨製石斧の一部、砥石であろう。長野県は弥生時代後期に至っても石器が残存する地域である（福正田2002）。鉄器の普及が進行することを考慮しても、かなりの石器が弥生時代後期集落で使用されたものと考えられる。石鉢は77点の多数に上り、主に集落内での畑作物を対象とした農具と推定する。段丘下の沖積地に立地する北畑遺跡でも、本遺跡で堅穴建物跡が残された佐久盆地2期の土器とともに集中出土しており、生産域と集落域との関連性が注目される。磨製石鉢の製作は、弥生時代後期においても継続することが知られている。本遺跡では3段階の製作工程が復元された。敲打具と砥石の一部が工具として関わることは確実である。石剣の可能性のある用途不明品は希少例であり、類例を追求したい。

(4) 古代の集落について

古代の堅穴建物跡は、13軒検出した。時期は8世紀後葉から10世紀前半に及ぶ。時期別に列挙すると、8世紀後葉：SB31、8世紀末～9世紀初頭：SB30、9世紀前半：SB05・08・21・29・32・40・44、9世紀後半：SB19・33、9世紀代：SB12、10世紀前半：SB04である。集落の変遷は、8世紀末前後にVI B01区南東隅に堅穴建物が現れ、9世紀前半には同地点と北側のIV V01区、西側のIV U05区まで、7軒が東西・南北約50mの範囲に拡大する。9世紀後半には2軒がVI A05区に散在し、10世紀前半にIV V01区に1軒となって終息する。SB29・32が隣接するため、9世紀前半に2小期を想定すれば、1時期1軒から最大4軒程度の集落と推定できる。

堅穴建物跡の規模は、カマド・ピットがないSB40の2.6m×2.6mが最小、SB21の5.0m×5.0m、SB33の4.8×5.1mが最大で、おおむね長径4m弱の規模にまとまる。カマドが2か所あるSB04は、新カマドを計数すると、カマドの位置は北壁が9軒、東壁が2軒である。柱穴は確認できない建物跡や、複数検出できても配置が不規則のため、4本の主柱穴が認定できる例がなかった。その他の屋内施設としては、SB32・33に貯蔵穴の可能性のあるピットがある。

出土した土器、陶器としては、供膳形態には土師器、黒色土器坏・塊、須恵器坏、灰軸陶器坏・皿があり、灰軸陶器は大原2号窯式である。煮沸形態には土師器甕、貯蔵形態には須恵器甕がある。いずれも全器形がわかる資料はないが、土師器甕は回転ナデを施すものが主体的で、胴部をヘラケズリして薄手に仕上げる甕が伴う。須恵器甕（第122図41）は希少な器種である。小規模な集落ながら、灰軸陶器坏（第121図5、第122図35）、須恵器甕（第123図75）を用いた転用観3点は注目される。その他、9世紀後半のSB19から鉄製紡錘車が出土し、本集落における生業の一端を伝える。

引用・参考文献

- 石川日出志2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』
 小松市教育委員会2003「八日市地方道跡1—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」
 小山岳夫・羽田卓也・花岡 弘1995「第3章 佐久の弥生時代」『佐久市志 歴史編（1）原始古代』佐久市
 小山岳夫1999「佐久地方の弥生土器—中期後半から後期の変遷—」99シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨 長野県考古学会弥生部会
 小山岳夫2006「第3章 高冷地の稲作に挑む」『考古学が語る佐久の古代史』ほおずき書籍
 小山岳夫2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落—佐久盆地の集落分布の変遷を中心に—」『専修考古学』15専修大学考古学会
 小山岳夫2017「弥生時代の炉 再々考」『長野県考古学会誌』155
 小山岳夫2020「『岩村田式』と『佐久系箱清水式』」『信濃考古』193
 市教委1987「北西の久保遺跡—南部台地上の調査—」

- 瀬田田佳男2002「石器組成」『考古資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
- 馬場伸一郎2006「佐久盆地における栗林式土器の編年と弥生中期集落」『長野県考古学会誌』112
- 原田 幹2002「中部地方の土器」『考古資料大観2 弥生・古墳時代土器Ⅱ』小学館

第7章 西東山遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

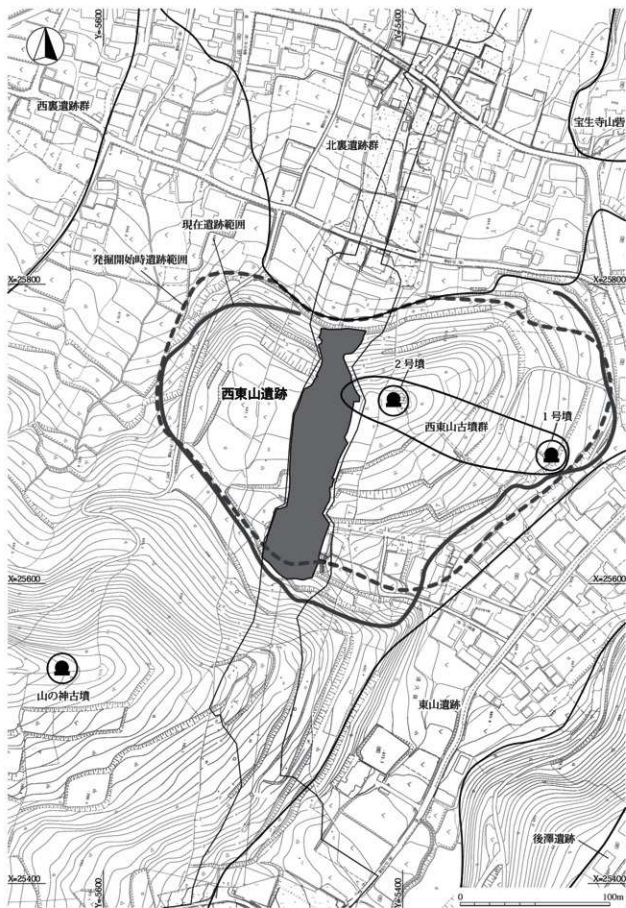
西東山遺跡は、佐久平西部の佐久市伴野字西東山に所在する。八ヶ岳東縁の山地と佐久盆地が接するところで、山地は千曲川支流の中小河川によって鬚状に開析されている。西東山遺跡が立地するのは、このような山地末端の台地上の平坦部から斜面部である。遺跡の北側には20m近くの比高がある崖を挟んで、今回の調査で弥生時代の集落跡と墓城、平安時代の集落跡などを検出した北裏遺跡群が接している。遺跡内東部には西東山古墳群があり、南西方には山の神古墳がある。南東谷部には今回調査・報告した東山遺跡があり、その谷を挟んだ台地上には弥生時代の集落と墓城として著名な後沢遺跡がある。このほか、周辺には虚空蔵山狼煙台や宝生寺山砦など中世の遺跡も点在する(第135図)。

2 調査の経過

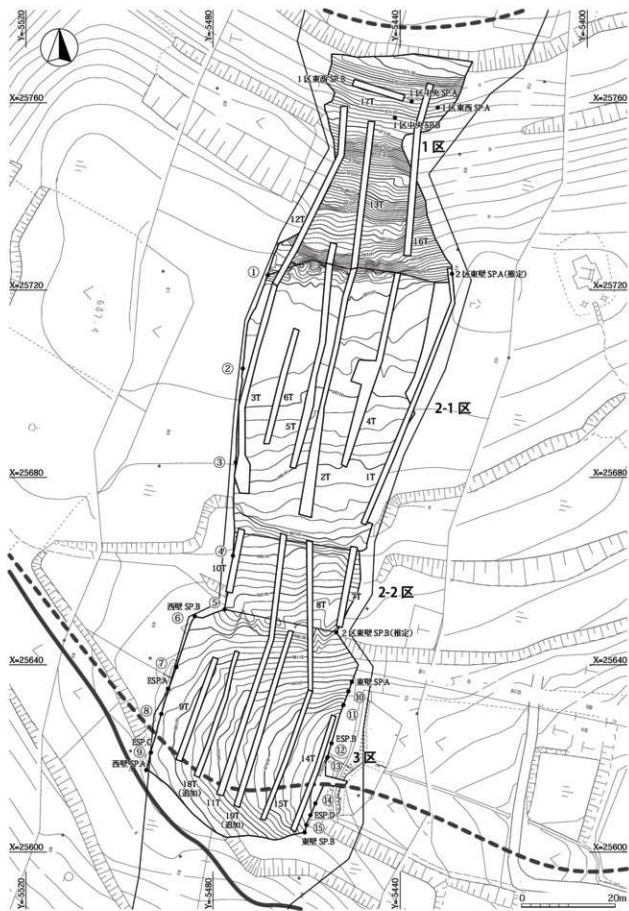
調査対象地は、遺跡範囲の中央部で現況は畑および雑木林となっている。調査区は南北に細長いため、調査区を北側の斜面部(1区)、中央の台地部(2区)、南側の谷部(3区)の3地区に区分した。また、本遺跡は過去の調査歴がないため、対象範囲全域にトレンチを入れて確認調査を行った(第136図)。その結果、台地部の2区は近年の重機による削平が岩盤層まで及んでいたものの、堅穴建物跡とみられる落ち込みが確認できた。1・3区でも弥生時代後期の遺物包含層を検出した。このため、全面調査を行うこととし、排土の搬出ができなため、調査区内で排土の移動を繰り返しながら全面調査を行った。調査の結果、2区では弥生時代中・後期の堅穴建物跡9軒、掘立柱建物3棟、焼土跡7基と土坑多数を検出した。1・3区では遺構は検出できなかったものの、多量の弥生時代後期の土器片が出土した(第137図)。

3 基本土層

1区は、急斜面で褐色砂岩の岩盤の上に暗褐色土の表土が浅く覆っているだけである。岩盤は水平に割れやすく、階段状になっている部分もあるが、風化が著しく人工的なものかどうかは不明である。2区台地部は、過去に重機により削平されており、15~30cmの黒褐色土の表土の直下が褐色砂岩の岩盤層となっており、これを検出面とした。3区谷部は褐色~黒褐色のシルトが堆積する。Ⅲ層の黒褐色土で弥生時代後期の遺物が多量に出土するものの、Ⅳ層の暗褐色~黒褐色シルト層以下は遺物の出土がなく、包含層の遺物を採集しただけで、Ⅴ層上面で調査を打ち切った(第138図)。



第135図 遺跡範囲・調査位置図



第136図 トレンチ・調査区配置図



X=25760

X=25720

X=25680

X=25640

X=25600

Y=5480

Y=5440

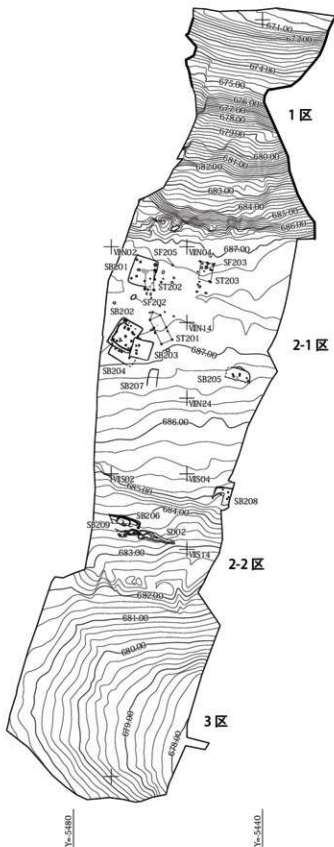
X=25760

X=25720

X=25680

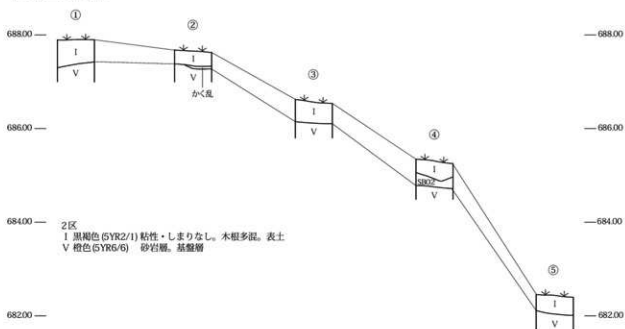
X=25640

X=25600

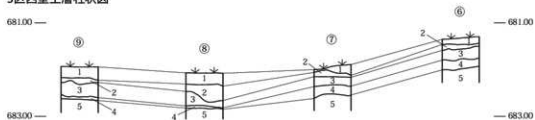


第137図 遺構全体図

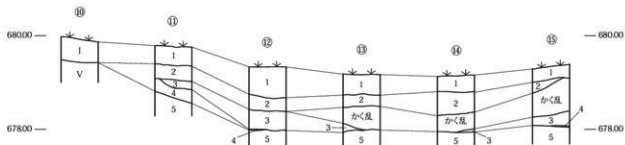
2区西壁土層柱状図



3区西壁土層柱状図



3区東壁土層柱状図



0 2m

第138図 土層柱状図

第2節 遺構と遺物

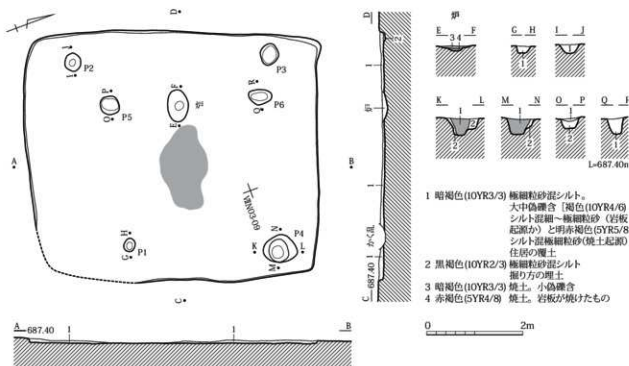
1 竪穴建物跡

201号竪穴建物跡 (SB201, 第139図, PL24)

位置：2区MN02・03 検出：V層上面で暗褐色土のプランを検出した。形状：長方形 規模：東西5.2m、南北6.0m、検出面からの深さは0～10cm 主軸方位：W-22°-N 遺構の重複：ST202を切る。堆積状況：暗褐色シルトの単層 住居内施設：炉とピット6個を検出した。炉は地床炉で西側のP5・6間に位置し、焼土を検出した。4隅のP1～P4が主柱穴と推測するが、南東のP1が大きく北側にずれている。西側のP5・6は桁を支える支柱穴であったと推測する。遺物出土状況：埋土中から弥生土器壺・甕計90gが出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

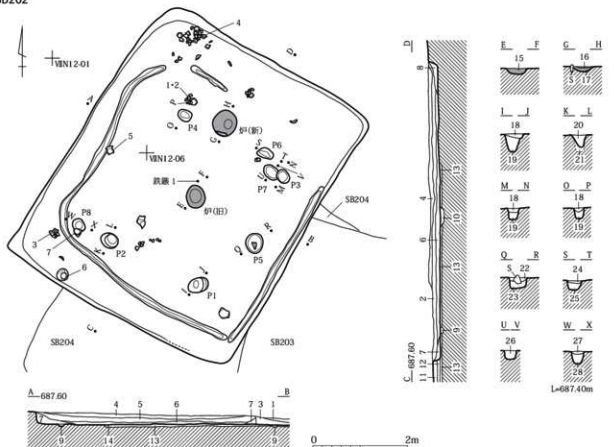
202号竪穴建物跡 (SB202, 第140図, PL24)

位置：2区MN07・11・12 検出：V層上面で褐色土のプランを検出した。形状：長方形 規模：東西5.2m、南北6.4m、検出面からの深さは25cm 主軸方位：N-31°-E 遺構の重複：SB203に切られSB204とSD02を切る。堆積状況：黒褐色、褐色、暗褐色のシルトがレンズ状に堆積する。住居内施設：炉2基とピット8個、周溝を検出した。周溝は東側に壁際なのに対して、北・西・南側に壁から25～75cm離れ、周溝に伴う建物跡が、北・西・南側に拡張されたと考えられる。これに伴って南側の炉(Ⅱ)が北側の炉(Ⅰ)に、柱がP2からP8に、P7からP3またはP6に移設されたと考えられる。遺物出土状況：図示した弥生土器鉢、甕、壺等(第153図1～7)のほか、多量の弥生土器が埋土、床面から出土しているほか、鉄鏃1点(第155図1)が炉(Ⅱ)北側の床面で出土している。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。



第139図 SB201 遺構図

SB202



- | | |
|--|---|
| 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混り極細～細粒砂
1mmスコリア・小偽礫混。SB203埋土 | 11 暗褐色(10YR3/3)極細～細粒砂質シルト。小～大偽礫多混。SB204埋土 |
| 2 黒褐色(10YR3/2)極細～細粒砂混りシルト。小～大偽礫混
1mmスコリア・焼土多混。土器・炭化物混 | 12 褐色(7.5YR4/4)細粒砂混りシルト。粘性やや強。小～中偽礫多混
SB204埋土 |
| 3 褐色(10YR4/4)シルト混り極細～細粒砂。小偽礫混。SB203壁面埋土 | 13 暗褐色(10YR3/4)極細砂混りシルト。小偽礫多混。焼土混 |
| 4 褐色(10YR4/4)微細軽石粒・小偽礫・土器混 | 14 暗褐色(10YR3/4)極細～細粒砂混りシルト
1～2mmスコリア・小偽礫混。SB204壁面埋土 |
| 5 暗褐色(10YR3/3)極細～細粒砂混りシルト
1～3mmスコリア・微細軽石粒混。小～大偽礫混 | 15 明赤褐色(5YR3/4)極細～細粒砂混りシルト。小偽礫混。焼土 |
| 6 褐色(10YR4/4)微細～細粒砂質シルト
微細軽石粒・3～5mmスコリア・小偽礫混 | 16 暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト。焼土・小偽礫・土器混 |
| 7 暗褐色(10YR3/4)炭化物・土器混 | 17 赤褐色(5YR4/6)極細～細粒砂混りシルト。小偽礫混。伊(新)焼土 |
| 8 暗褐色(10YR3/4)極細砂混りシルト | 18 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト |
| 9 暗褐色(10YR3/4)極細～細粒砂質シルト
炭化物・土器混 | 19 暗褐色(10YR3/4)極細～細粒砂粘土質シルト。小偽礫混 |
| 10 暗赤褐色(5YR3/4)極細～細粒砂混りシルト。小偽礫多混
(II)伊焼土 | 20 暗褐色(10YR3/4)極細～細粒砂粘土質シルト。小偽礫混 |
| | 21 褐色(7.5YR4/3)極細～中粒砂粘土質シルト。小偽礫多混。掘り方シルト混り極細～細粒砂。小偽礫・炭化物混 |
| | 22 黒褐色(10YR3/2)シルト。小偽礫混 |
| | 23 暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト。小偽礫混 |
| | 24 暗褐色(10YR3/4)細粒砂混り粘土 |
| | 25 暗褐色(10YR3/4)極細～細粒砂粘土質シルト |
| | 26 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト |
| | 27 暗褐色(10YR3/3)細粒砂混り粘土質シルト |
| | 28 暗褐色(10YR3/3)極細～細粒砂粘土質シルト |

第140図 SB202 遺構図

203号竪穴建物跡 (SB203、第141図、PL24)

位置：2区VIN12 検出：V層上面でにぶい黄褐色土または黒褐色土のプランを検出した。形状：方形
規模：東西4.2m、南北4.0m、検出面からの深さは0～10cm 主軸方位：N-17°-E 遺構の重複：SB
202とSB204を切る。堆積状況：にぶい黄褐色砂、黒褐色シルト等がレンズ状に堆積する。住居内施
設：ピット4個を検出した。P2・3は主柱穴と考えられるが、これに対応する東側のピットは検出でき
なかつた。遺物出土状況：埋土から弥生土器壺・甕等少量が出土しているが、いずれも小片で図示でき

なかった。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

204号竪穴建物跡 (SB204, 第142図, PL24)

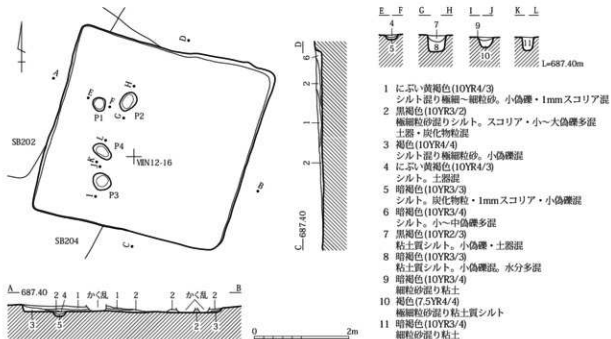
位置：2区ⅧN11・12 検出：V層上面で褐色または黒褐色土のプランを検出した。形状：長方形 規模：東西5.2m、南北6.2m、検出面からの深さは0～10cm 主軸方位：N-32°-E 遺構の重複：SB202とSB203に切られる。堆積状況：褐色土、黒褐色土等がレンズ状に堆積する。住居内施設：炉とピット12個を検出した。炉は地床炉で西側のP7・10間に位置し、焼土を検出した。4隅のP2・4・8・9が支柱穴であったと推測するが、近辺にほかのピットもあり、建て替えがあったかもしれない。P3・4・5・7・8は長方形や楕円形をしており、柱が板材であった可能性もある。西壁際のP6は貯蔵穴と推測する。遺物出土状況：埋土や床面から弥生土器壺・甕・鉢等が少量出土しているが図示した弥生土器甕(8)も含めていずれも小片である。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

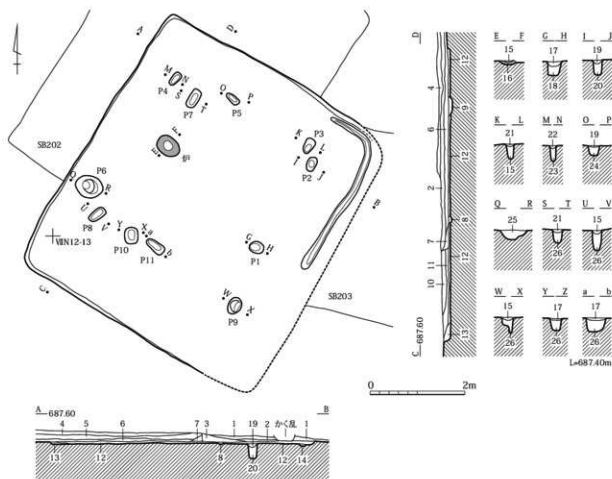
205号竪穴建物跡 (SB205, 第143図, PL24)

位置：2区ⅧN19 検出：V層上面で暗褐色土のプランを検出した。形状：南部を削平されて全形不明 規模：東西5.3m、南北2.4m以上、検出面からの深さは0～10cm 主軸方位：不明 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色土の単層 住居内施設：炉とピット6個を検出した。炉は地床炉で北側のP4・6間に位置し、焼土を検出した。ピット6個は位置が悪く、本建物跡に伴うかどうか不明である。遺物出土状況：P1で図示した高坏脚部(第153図9)ほか、床面、埋土、P6から弥生土器壺・甕・高坏等が出土している。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

206号竪穴建物跡 (SB201, 第144図, PL25)

位置：2区ⅧS07 検出：V層上面で黒褐色土のプランを検出した。形状：南部を削平されて全形不明 規模：東西5.0m、南北1.9m以上、検出面からの深さは0～20cm 主軸方位：不明 遺構の重複：SB209を切る。堆積状況：黒褐色土やにぶい赤褐色土がレンズ状に堆積する。住居内施設：ピット2個と周溝を検出しているが、P1は本建物跡の壁を切っており本建物跡には伴わない。P2は支柱穴と推測する。遺物出土状況：図示した甕(第153図10)ほか埋土中から弥生土器壺・甕・鉢が少量出土している。時





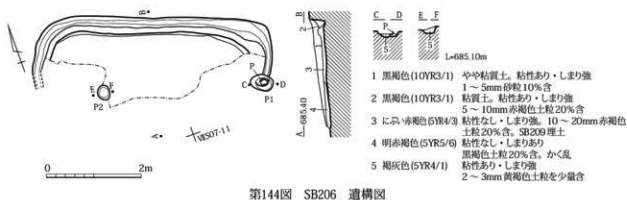
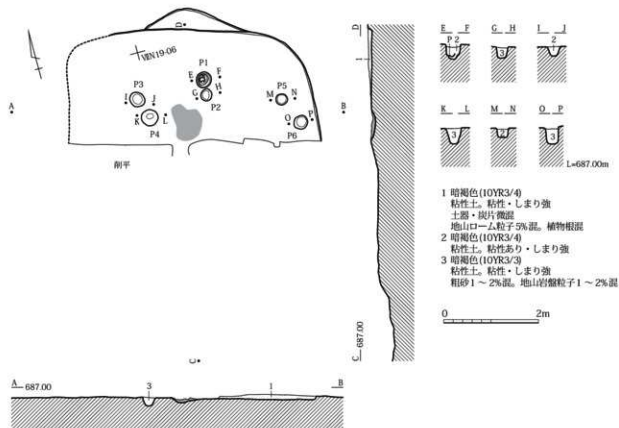
- | | | | |
|-------------------|--|--------------------|---------------------------------|
| 1 に近い黄褐色(10YR4/3) | シルト混り極細～細粒砂
1mmスコリア・小偽礫混。SB203埋土 | 10 暗褐色(10YR3/3) | 極細～細粒砂質シルト。小～大偽礫多混 |
| 2 黒褐色(10YR3/2) | 極細～細粒砂混りシルト。小～大偽礫混
1mmスコリア・焼土多混。土器・炭化物混
SB203埋土最下部 | 11 褐色(7.5YR4/4) | 極細砂混りシルト。粘性やや強
小～中偽礫多混 |
| 3 褐色(10YR4/4) | シルト混り極細～細粒砂 | 12 暗褐色(10YR3/4) | 極細粒砂混りシルト。小偽礫多混。焼土混 |
| 4 褐色(10YR4/4) | 微細粒石粒・小偽礫・土器混 | 13 暗褐色(10YR3/4) | 極細粒砂混りシルト～シルト
1～2mmスコリア・小偽礫混 |
| 5 暗褐色(10YR3/3) | 極細粒砂混りシルト。1～3mmスコリア・
微細粒石粒混。小～大偽礫混。SB202埋土 | 14 明赤褐色(5YR3/4) | 極細～細粒砂混りシルト。小偽礫混。焼土
灰(II)埋土 |
| 6 褐色(10YR4/4) | 極細～細粒砂質シルト | 15 暗褐色(10YR3/3) | シルト |
| 7 暗褐色(10YR3/4) | 微細粒石粒・3～5mmスコリア・小偽礫混
炭化物・土器混。SB202埋土最下部 | 16 赤褐色(5YR4/6) | 極細～細粒砂シルト。中偽礫混。砂焼土 |
| 8 暗褐色(10YR3/4) | 極細粒砂混りシルト | 17 暗褐色(10YR3/4) | 粘土 |
| 9 暗赤褐色(5YR3/4) | 微細粒石粒・1～2mmスコリア混。砂質やや強
SB202埋土 | 18 黒褐色(7.5YR3/2) | 粘土質シルト |
| | 極細砂混りシルト。1mm以下スコリア・小偽礫・
炭化物混。SB202埋土埋土 | 19 暗褐色(10YR3/3) | 極細粒砂混りシルト |
| | 極細～細粒砂混りシルト。小偽礫多混
SB202(II) 砂焼土広がり埋土 | 20 暗褐色(10YR3/4) | 極細粒砂混り粘土
シルト |
| | | 21 暗褐色(10YR3/4) | 粘土質シルト |
| | | 22 暗褐色(10YR3/3) | 極細粒砂混り粘土
シルト。土器・炭化物混 |
| | | 23 暗褐色(10YR3/3) | 極細粒砂混り粘土質シルト |
| | | 24 に近い黄褐色(10YR4/3) | 極細粒砂混り粘土質シルト |
| | | 25 暗褐色(10YR3/3) | 極細粒砂混り粘土質シルト |
| | | 26 暗褐色(10YR3/4) | 極細粒砂混り粘土質シルト |

第142図 SB204 遺構図

期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

207号竪穴建物跡 (SB207、第145図、PL25)

位置：2区ⅧN17・18 検出：V層上面で暗褐色土のプランを検出した。形状：東部と南部を削平されて全形不明 規模：東西1.8m以上、南北3.6m以上、検出面からの深さは0～10cm 主軸方位：不明 遺構の重複：なし 堆積状況：黒褐色土と暗褐色土の上下2層 住居内施設：なし 遺物出土状況：埋土中から弥生土器壺・甕少量が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

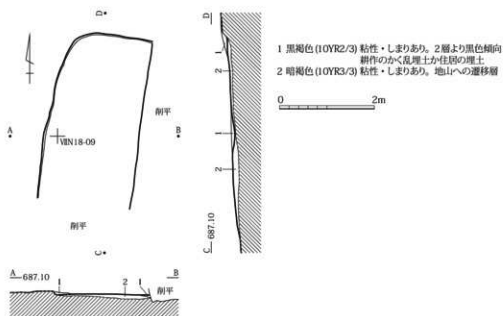


208号竪穴建物跡 (SB208、第146図、PL25)

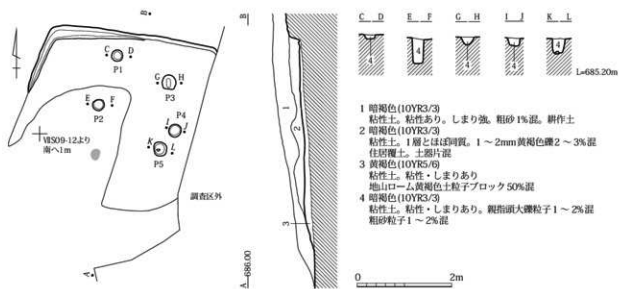
位置：2区ⅧS08・09 検出：V層上面で暗褐色土のプランを検出した。形状：東部が調査区外、南部が削平されて全形不明 規模：東西3.6m以上、南北3.6m以上、検出面からの深さは0~30cm 主軸方位：不明 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色土の単層 住居内施設：ピット6個検出と周溝を検出した。P2は主柱穴と考えられるが、そのほかのピットは性格不明である。遺物出土状況：図示した弥生土器高環(第153図I1)ほか埋土から弥生土器壺・甕・鉢が少量出土している。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。

209号竪穴建物跡 (SB209、第147図)

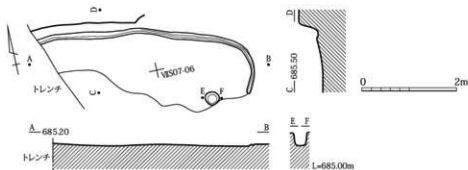
位置：2区ⅧS07 検出：SB206床面でプランを検出した。形状：西部を確認トレンチに切れ、南部を削平されて全形不明 規模：東西4.6m以上、南北1.8m以上、検出面からの深さは1cm未満 主軸方位：



第145図 SB207 遺構図



第146図 SB208 遺構図



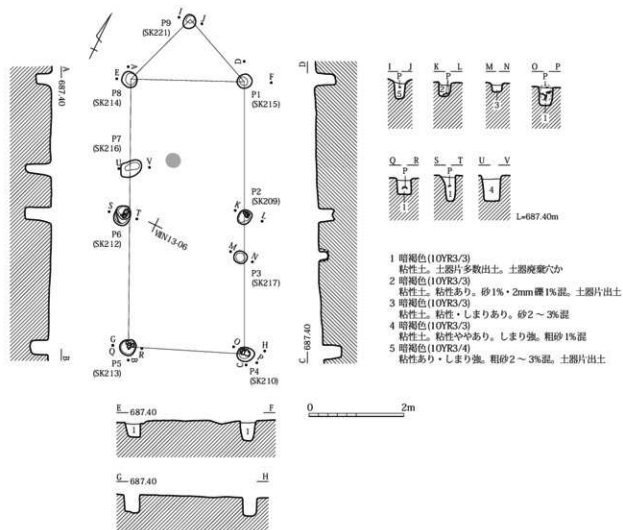
第147図 SB209 遺構図

不明 遺構の重複：SB206に切られる。堆積状況：黒褐色土が僅かに残る。住居内施設：ピット1個を検出した。主柱穴であったと推測する。遺物出土状況：黒曜石の原石が周溝でまともって5点、埋土で1点のほか弥生土器極少量が出土している。時期：SB206に切られることから弥生時代後期以前と推測する。

2 掘立柱建物跡

201号掘立柱建物跡 (ST201、第148図、PL25)

位置：2区WN 8・13 検出：V層上面で個々に検出された土坑を並びから掘立柱建物跡と想定した。形状：桁行2間、梁間1間の長方形で北側の梁間より外のP9は独立棟持柱の可能性もあるが南側ではこれに対応する柱は検出されていない。規模：東西2.4m、南北5.8m、ピットは直径30～35cmのほぼ円形で、検出面からの深さは20～60cm 主軸方位：N-26°-W 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色土の単層 施設：本建物跡範囲内北部に焼土跡SF206があるが、本建物跡との関係は不明。遺物出土状況：P5から図示した弥生土器高坏（第153図12）、P4から弥生土器壺（第153図13）が出土しているほか、P2・4～6から弥生土器壺、甕等が少量出土している。時期：出土遺物から、弥生時代後期と推測する。



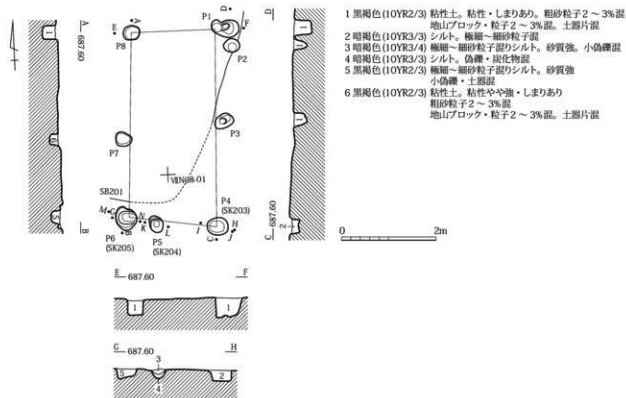
第148図 ST201 遺構図

202号掘立柱建物跡 (ST202, 第149回, PL25)

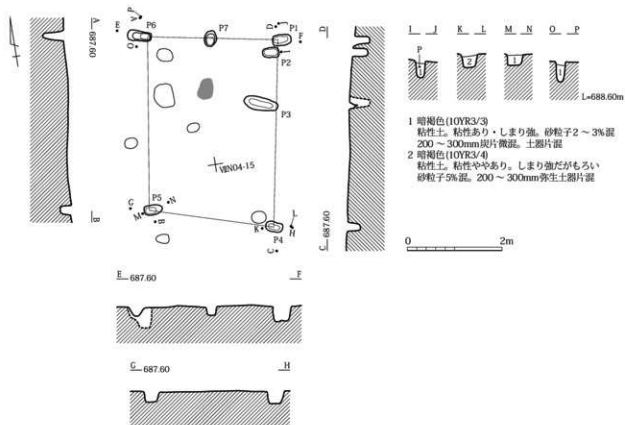
位置：2区ⅦN02・03・07・08 検出：V層上面で個々に検出された土坑を並びから掘立柱建物跡と想定したが、一直線上に並ばなかったり、柱間がまちまちであったりして、並びはそれほどよくはない。形状：桁行2間、梁間1間の台形 規模：東西1.8m、南北4.2m、ピットは直径または長径35～55cmの円形または楕円形で、検出面からの深さは20～35cm 主軸方位：N-6°-E 遺構の重複：SB201に切られる。堆積状況：黒褐色土の単層 施設：ピット8個を検出した 遺物出土状況：P3から弥生土甕片が1片出土しているが、小片で図示できなかった。時期：出土遺物と周辺の遺構から、弥生時代後期と推測する。

203号掘立柱建物跡 (ST202, 第150回)

位置：2区ⅦN04 検出：V層上面で個々に検出された土坑を並びから掘立柱建物跡と想定したが、北半中央部に竪跡とも考えられるS F 203があり、床面が削平された住居跡のピットの残りである可能性が高いが、遺構番号の付け替えは混乱を生じるため、掘立柱建物として報告する。形状：桁行1間、梁間1間の台形で北側P1・P6間には棟持柱と考えられるP7があるが、南側には対応するピットがない。規模：東西2.6m、南北3.6m、ピットはP7が長径35cmの楕円形で、それ以外は長径35～50cm、短径20cmの長円形で、柱が板材であった可能性もある。検出面からの深さは20～40cm。主軸方位：N-8°-E 遺構の重複：なし 堆積状況：暗褐色土の単層 施設：ピット7個を検出した 遺物出土状況：P3・4から弥生土器甕片が出土しているが、小片で図示できなかった。時期：出土遺物と周辺の遺構から、弥生時代後期と推測する。



第149回 ST202 遺構図



3 焼土跡

2区で7基の焼土跡が確認されているが、多くは床面が削平された竪穴建物跡の炉の被熱面が残ったものと考えられる。ここではそのうちのいくつかの提示にとどめる。

202号焼土跡 (SF202、第151図)

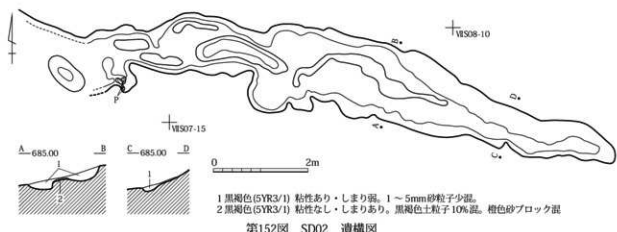
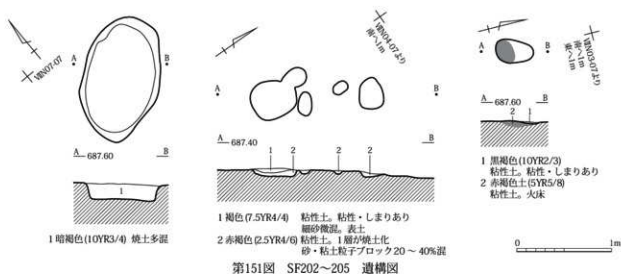
位置：2区VN07 検出：V層上面で暗褐色土のプランを検出した。形状：楕円形で壁が垂直、底が平らなたらい形 規模：長径135cm、短径80cm、検出面からの深さ15cm 主軸方位：N-42°-E 遺構の重複：なし 堆積状況：焼土が多量に混じる暗褐色土の単層 施設：なし 遺物出土状況：出土していない。時期：不明

203号焼土跡 (SF203、第151図)

位置：2区VN04 検出：V層上面で褐色～赤褐色土のプランを検出した。形状：円形～楕円形の焼土が5基、1×1.5mの範囲に散在する。規模：直径15～50cmの円形で、確認面からの深さ1～4cm 遺構の重複：なし 堆積状況：赤褐色焼土で褐色土が載るものもある。施設：なし 遺物出土状況：出土していない。時期：不明

205号焼土跡 (SF205、第151図)

位置：2区VN03 検出：V層上面で黒褐色～赤褐色土のプランを検出した。形状：卵形 規模：長径40cm、短径25cm、確認面からの深さ8cm 遺構の重複：なし 堆積状況：赤褐色焼土の北側に黒褐色土が載る。施設：なし 遺物出土状況：出土していない。時期：不明



4 溝跡

2号溝跡 (SD02、第152図)

位置：2区VWS07・08 検出：V層上面で褐色または黒褐色土のプランを検出した。形状：直線的だが、出入りがある幅が一定せず、底も凹凸がある溝 規模：西部が削平されて全長不明だが、現長11.6m、幅70~190m、検出面からの深さは10~50cm 主軸方位：E-15°-S 遺構の重複：SB202とSB203に切られる。堆積状況：黒褐色土の単層 施設：なし 時期：不明

5 遺物

(1) 土器

集落があった2区が基盤砂岩層まで削平されて、多くの竪穴建物跡が床面や床面近くまで削平されており、遺構内で出土した遺物は極めて少ない。また、1区や3区で流れこんだとみられる弥生土器片が大量に出土するものの、多くが摩滅を受けた小片であり、図示できたものはほとんどなかった。SB204出土の8と遺構外出土の20~23が弥生時代中期、遺構外出土の24が縄文時代後期、25が時期不明であるほかは、すべて弥生時代後期の土器である。多くは千曲川左岸の弥生土器に共通する特徴であるが、胎土が軟質で表面・断面とも摩滅が著しく、それも図示できた遺物が少ない要因である。

SB202 (第153図1～7, PL26)

1・2は内外面を縦横のミガキ後後赤彩する鉢であるが、2は摩滅して外面の赤彩はほとんど残っていない。3～5は頸部に簾状文、口縁部と胴部に櫛波状文を施す甕である。6・7は口縁部内外面を赤彩する壺であるが、7は頸部にヘラ描きの羽状沈線が施されるのに対して、6は櫛描きのT字文が施される。

SB204 (第153図8)

櫛描き波状文の甕胴部である。

SB205 (第153図9)

外面を縦にヘラミガキした後赤彩する高坏脚部であるが、摩滅が著しく、赤彩の痕はほとんど残っていない。内面には巻き上げの痕が残る。

SB206 (第153図10)

口縁部に短沈線の刻みを入れる甕である。

SB208 (第153図11)

外面を縦にヘラミガキした後赤彩する高坏脚部である。

ST201 (第153図12・13, PL26)

12はP5から出土した高坏の底部～脚部で外面と底部内面をミガキ後赤彩し、脚部内面は横ハケ調整される。13はP3出土で、頸部にT字文が施され、口縁部内外面がミガキ語赤彩される壺であるが口縁部が内側に折り返される特異な壺である。

SK (第153図14～18)

14はSK227出土で外面を縦にヘラ削りする台付甕脚部、15はSK103出土で頸部に櫛描蓮状文か横走文、口縁部に櫛波状文を施す甕である。SK103出土の16、SK234出土の17、SK237出土の18はともに口縁が大きく外反し、先端に突起が付される赤彩の高坏坏部ある。

遺構外 (第153図19～23, PL26)

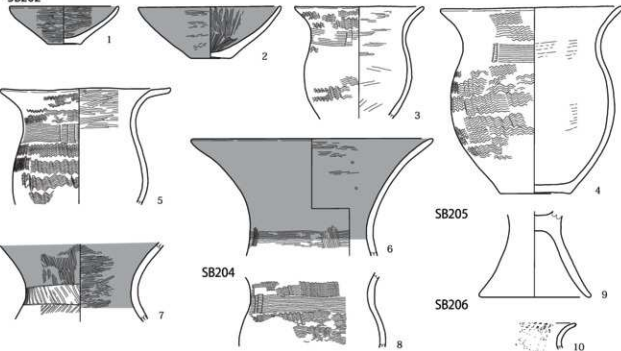
19は外面と底部内面が赤彩される高坏の坏部と脚部の接合部で2条の凹線で区画される。20は櫛描羽状文、21は楕円文に直線をふかした文様、22は舌状垂下文を描く壺、23は櫛描横走文と列点が施される甕胴部で、ともに弥生時代中期のものである。24は縄文時代後期前葉堀之内1式土器の波状口縁頂部の環状突起である。25は球状の部分に突起がつく不明土製品である。球状の部分の中実で、指頭抑えて成形されるが、縦の凹線が付された中に沈線や貼付があり、髯面のようにも見える。突起の部分は押さえ後一部ヘラ削りされ、黒くすすけていることから別土製品に挿入して焼成されたものが抜け落ちたと推測する。胎土はほかの弥生土器と違って硬く、帰属時期・性格とも不明である。

(2) 石器

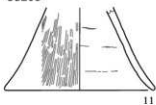
遺構から171点、遺構外から161点、合計332点が出土した。遺構の石器は堅穴建物跡、溝跡、土坑、焼土跡、掘立柱建物跡の柱穴などから出土し、時期は遺構の時期により弥生時代中期～後期と考える。遺構外の石器は、遺構の時期に加え、縄文時代後期の土器が出土しているので、その時期のものを含むと推測する。石器の器種と出土点数は322点中、石鎌および石鎌未製品が11点、石錐が2点、二次加工がある剥片が6点、微細な剝離がある剥片が1点、スクレイパーが4点、両極石器が4点、打製石斧が2点、石鎌が2点、磨製石斧が1点、石槌が1点、凹石が3点、敲き石が2点、台石が1点、砥石が1点、石核が8点、原石が13点、剥片が270点である。

本稿では石器を器種単位で一括し、実測図の掲載については遺構出土のものや、各器種の完形品もしくは器種の特徴を備えているものを抽出した。二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片など、器種によっては実測図や写真を掲載せず、添付DVD中の表のみに示したものがあ。各器種の法量等、石材と

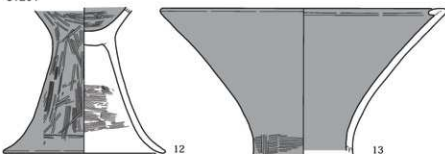
SB202



SB208



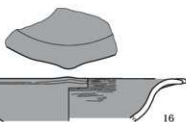
ST201



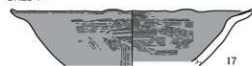
SK227



SK103



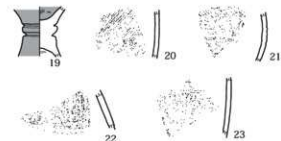
SK234



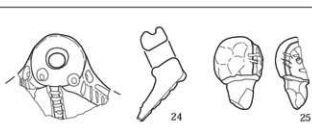
SK237



遺構外



0 10cm



0 5cm

第153図 土器・土製品

の関係も添付DVD中の表にそれぞれ示した。なお、器種分類に際しては、「佐久市森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」(埋文センター2014)などを参考にした。

石鏃・石鏃未製品 (第154図1～5、PL26)

石鏃は出土した9点中、4点を掲載した。1～4は凹基有基鏃で、平面形が三角形に近いものと、二等辺三角形に近くやや長身のものが存在する。また、非掲載だが無基の石鏃が2点存在する。石材は、非掲載のものを含めて全て黒曜石である。

石鏃未製品は出土した2点中、1点を掲載した。5は石鏃未製品と考えるもので、製品よりも厚く尖端部や基部の作りが完全ではない。全体的に粗い加工剝離を施していることから、大まかな形状を整えている段階の未製品と推測する。石材は全て黒曜石である。

石錐 (第154図6・7、PL26)

出土した2点を掲載した。6・7はつまみ部がなく棒状を呈する石錐で、一端に錐部を作出する。石材は全て黒曜石である。

スクレイパー (第154図8～11、PL26)

出土した4点を掲載した。8は搔器状の刃部を作出するもので、石材は黒曜石である。9～11は削器状の刃部を作出するもので、様々な形状・大きさを呈する剥片の縁辺部に、刃部を作出するための加工剝離を施す。石材は9が珪質頁岩、10・11が泥岩である。

打製石斧 (第154図12・13、PL26)

出土した2点を掲載した。12・13は先端部の破片だが、表裏面に使用痕の可能性が高い摩耗痕が残る。石材は泥岩である。

磨製石斧 (第154図14、PL26)

出土した1点を掲載した。14は刃部付近のみが残存するもので、表裏面および側面の全体に研磨調整を施し丁寧仕上げている。石材は緑色岩である。

石鏃 (第154図15、PL26)

出土した2点中、1点を掲載した。15は大形剥片の縁辺部に、打製石斧と同様の連続的な階段状剝離を施すが、打製石斧よりも大形である。基部と先端部が欠損するので不明確だが、先端部に向かって幅が徐々に広がる形状を呈する。石材は安山岩である。

石槌 (第154図16、PL26)

出土した1点を掲載した。16は上面と下面の一部が欠損するが、右側面と下面には使用痕の可能性が高い摩耗痕(実測図トーン部分)が観察できる。石材は砂岩である。

凹石 (第155図17～19)

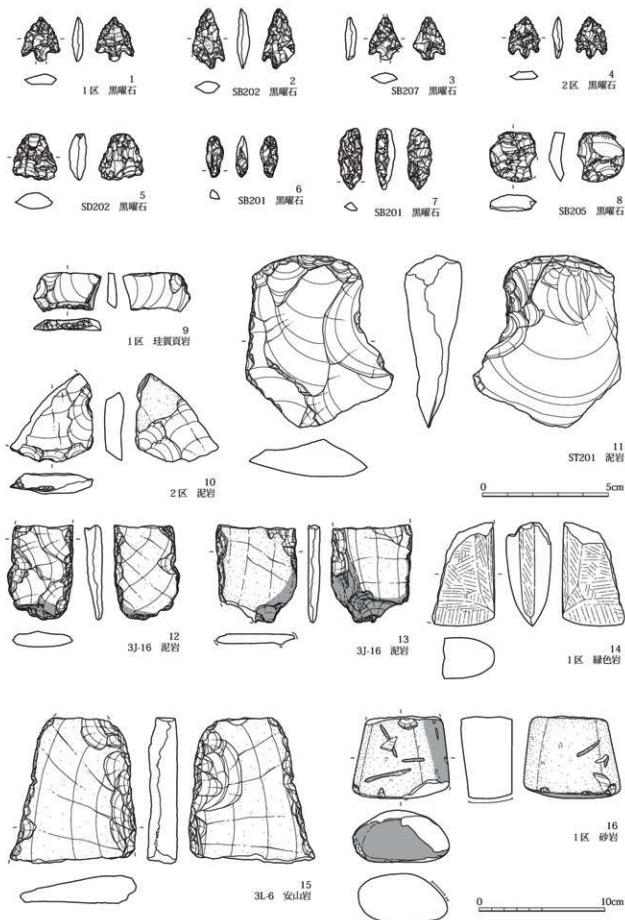
出土した3点を掲載した。17・18は円形もしくは楕円形状の礫を素材とし、両面の中央付近に凹痕をもつ。18は両端部に敲打痕が残る。19は楕円形状の礫を素材とするが、17・18よりも大形で凹部が深い。石材は全て安山岩である。

砥石 (第155図20)

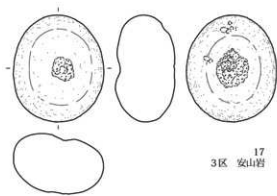
出土した1点を掲載した。20は両側面部に使用痕が観察できる。石材は砂岩である。

(3) 金属製品 (第155図1、PL26)

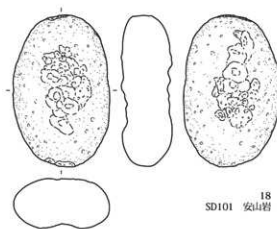
竪穴建物跡SB202の炉(Ⅲ)の北側で、床面から鉄鏃1点が出土した。基部が欠損しており、長さは残存部で3.1cm、最大幅1.4cm、厚さ2.7mmを測る。時期は伴出した土器により、弥生時代後期と考える。



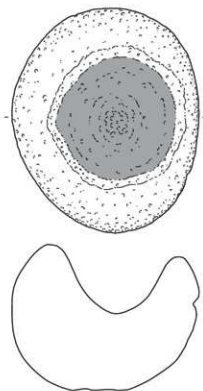
第154図 石器(1)



17
3区 安山岩

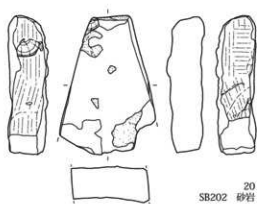


18
SD101 安山岩



19
1区 安山岩

0 10cm



20
SB202 砂岩

金属製品



0 5cm

第155図 石器(2)・金属製品

第3節 小 結

本遺跡の特徴は、標高687mの丘陵上に展開する弥生時代集落である。弥生時代でもっとも古い遺物は中期後半の栗林2式古段階であり、北方約300mに位置する北裏遺跡3区に集落が現れる時期である。同地区で堅穴建物跡がなくなる、後期の箱清水式前半期の新段階「後期Ⅲ期新段階」(小山2016)になって、本遺跡に集落が現れる。多くの遺構が床面付近まで削平されながら、堅穴建物跡9軒、掘立柱建物跡3棟、灰跡・柱穴の可能性ある焼土跡7基、土坑多数を検出した。堅穴建物跡は、2-1区平坦面から2-2区斜面部まで分布する。土器編年上はほぼ同一段階と考える時期の中で、SB201・202・203の3軒と、SB206・209の2軒が切り合う。

佐久地域では、弥生時代中期後半から後期終末の間、連続と継続した集落はなく必ず断絶期を介し、拠点集落が移動していることがわかっている(小山他1995)。本遺跡と北裏遺跡群のあり方も、佐久地域の弥生時代集落の動きと同じ歩みを示していると思われる。また、掘立柱建物跡ST201のピットからは箱清水式土器が出土し、ST202は堅穴建物跡S B201に切られ、弥生時代の遺構として疑問の余地はなかろう。佐久地域では弥生時代の掘立柱建物跡は少なく、注目される事例となろう。

北裏遺跡群3区の集落が空白となる弥生後期Ⅲ期新段階、5区には多数の土器を供献し火をかけた木棺墓SM18と、遺物集中SQ01~04が残された。この地区は本遺跡1区から約20m下る、北方の山裾に位置する。北裏遺跡群が広がる段丘面において、最寄りの当該期集落が存在しないなら、本遺跡の居住者がSM18等の遺構群を形成した可能性が高い。SM18の被葬者を、佐久市上直路遺跡1号住居址屋内埋葬の被葬者のように、司祭者的な人物と想定すれば、集落の眼下に統率者の墓を営んだことになる。墓域と居住域の位置関係を考える上で、興味深い事例である。

弥生時代の遺物として、SB202出土の赤彩壺第153図7は、頸部にヘラ描矢羽状文を施した、千曲川右岸に特徴的な土器である。北裏遺跡群には認められなかった土器である。SB202からは鉄鏃も出土している。この時期の佐久地域では、環濠集落や高地性集落は確認されておらず、殺戮武器も欠如し、千曲川右岸と左岸二つの土器文化圏は、対峙的な緊張関係にあったとは考え難いとされる(小山他1995)。本遺跡は、新たな土地を開発して集落をつくり、有茎石鏃や石鏃が物語るように、狩猟や雑穀栽培を生業の一つとして、比較的短い期間に営まれた弥生時代後期集落の一つであろう。

引用・参考文献

- 小山岳夫・羽毛田卓也・花岡 弘1995「第3章 佐久の弥生時代」『佐久市志 歴史編(1) 原始古代』佐久市
 小山岳夫2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落—佐久盆地の集落分布の変遷を中心として—」『専修考古学』15 専修大学考古学会

第8章 東山遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

東山遺跡は佐久市南部、千曲川左岸地域の伴野地区に所在する(第156図)。千曲川左岸地域には、八ヶ岳山麓からの丘陵が幾重にも張り出し、丘陵に挟まれた谷状地形の1つに東山遺跡は立地する。これまでの調査履歴はなく、縄文・古墳～平安時代の包蔵地として登録されていた。

周辺遺跡の状況は、東山遺跡の南東側にある丘陵上に後沢遺跡が所在し、市教委による1976(昭和51)年・1977年の発掘調査では、縄文時代前期から平安時代までの遺構が調査された。特に、弥生時代後期の遺構は竪穴建物跡32軒、方形周溝墓3基が検出され、佐久地方を代表する弥生時代後期集落の1つと評価された。また、北側には西東山遺跡が近接し、中部横断道建設に伴う埋文センターの調査では弥生時代後期の遺構などを検出した(第7章参照)。

2 調査の概要と経過

東山遺跡では、2008・2009・2012・2013年度に発掘調査を実施した(第156図)。調査面積の合計は21,910㎡である。

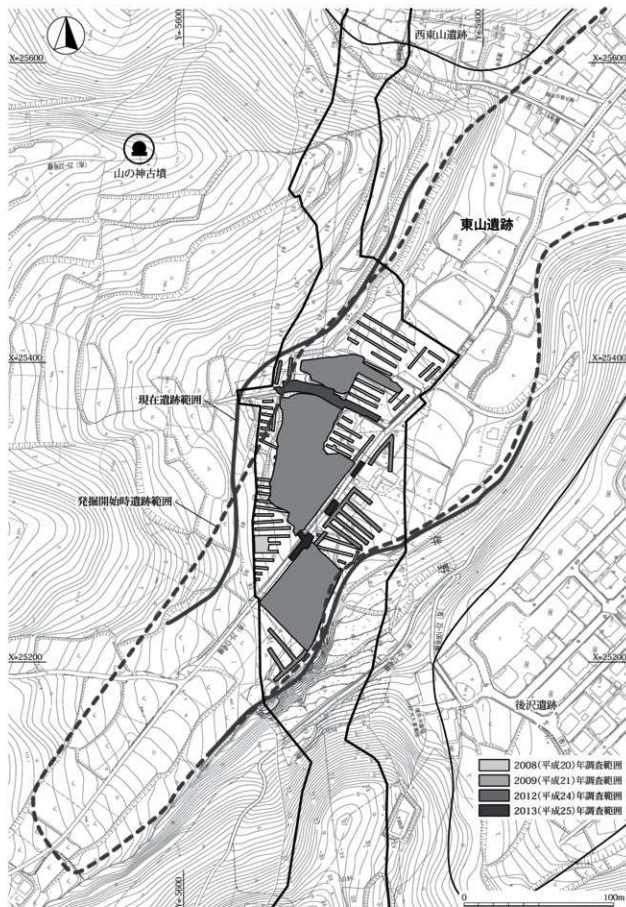
2008年度は、遺構と遺物の密度・分布状況を確認するため、重機により1～51トレンチを掘削した(第157図)。その結果、1～15トレンチと25～51トレンチでは遺構が検出できず、遺物も少量の出土にとどまったことから、これらの範囲については本調査の必要はないと判断した。一方、16～22トレンチでは溝跡1条(SD01)を検出し、部分的に遺物包含層が残存していたことから、本格調査が必要と判断した。

2009年度は、前年度に溝跡1条(SD01)を検出した16～24トレンチ付近を1区とし、溝跡が続くと予想された北側の2・3区と南側の4区で面的調査、5区でトレンチ調査を実施した。その結果、溝跡は1・2区を北東～南西方向へ直線的に延び、3区で東側へと屈曲することが判明した。溝跡から青磁・銭貨・羽口・鉄滓が出土し、時期を中世と推測した。1～3区には、溝跡の西側に時期不明の土坑が多数分布しており、2区では炭窯の可能性がある土坑1基(SK191)を検出した。4区は、溝跡が続くと予想されたが、検出できなかった。5区のトレンチ調査では、遺構が検出できず、遺物の出土量も少量であったことから面的調査は行わず、調査を終了した。当該年度の調査では、炭窯の可能性がある土坑を検出し、溝跡の埋土や遺構外で羽口・鉄滓が出土したので、製鉄・鍛冶関連遺構の存在が示唆された。

2012年度は6区で面的調査を実施し、前年度までに調査した溝跡(SD01)の端部と土坑を検出した。

2013年度は7・8・9区で面的調査を実施した。7区では溝跡(SD01)の続きを確認し、端部が南東方向へ曲がることを確認した。8区では縄文時代の遺物が少量出土し、9区は遺構・遺物ともになかった。

なお、2009年度の調査で予想した製鉄・鍛冶関連遺構は、今回の一連の調査では検出することはできなかった。



第156図 遺跡範囲・調査位置図

3 基本層序

基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる(第158図)。第Ⅰ層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は黒色土で、下部に遺物を含む。第Ⅲ層の黒褐色土は遺物包含層で、縄文時代～中世の遺物を含む。1～3区を主体に堆積する。第Ⅳ層は、遺跡全体の基盤を成す褐色・灰黄褐色土である。高位部に当たる⑧～⑩地点では、第Ⅰ層直下で本層が露出する。遺構検出面は、本層上面である。

参考・引用文献

佐久市志編纂委員会1995『佐久市志 歴史編(一) 原始・古代』

林 幸彦1982「後沢遺跡」[長野県史 考古資料編全一巻(二) 主要遺跡(北・東信)]長野県史刊行会

第2節 遺構

今回の調査で検出した遺構は溝跡5条、土坑270基である(第159図)。以下、遺構別に報告する。

1 溝跡

SD01 (第160図、PL27)

位置：1・2・3・6・7区。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。重複関係：SK03・27と重複するが、新旧関係は不明。埋土：3区のC-D断面では4層堆積で、そのほかは1～2層が堆積する。形状・規模：平面形は北東-南西方向へ直線的に伸び、北側の3区では南東方向へ直角に曲がる。南側の7区では、緩やかな弧を描いて南東方向へ曲がる。断面形はU字状もしくはV字状を呈する。規模は長さ156m、幅0.75～2.0m、深さ10～55cmを測る。遺物：埋土から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰軸陶器、青磁の小破片および羽口、銭貨(元龜通寶・政和通寶)、鉄釘が出土した。時期：不明だが、出土した遺物の新しい時期をもって中世と推測したい。

SD02 (第159図、PL27)

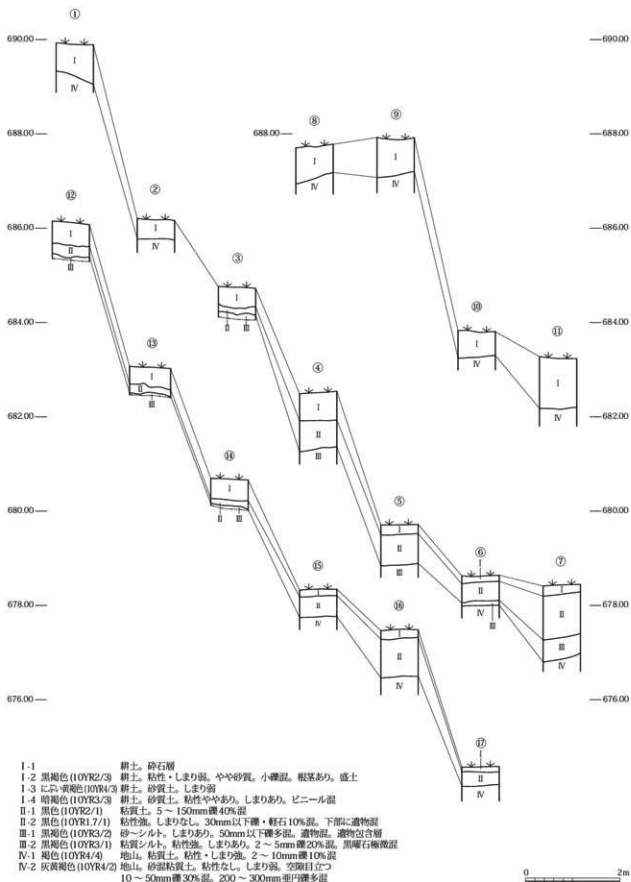
位置：3区。ⅢC02～04グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：平面形は不整形でほぼ東西方向に伸びるが、東側はプランが不明確となる。断面形は底部が平坦ではなく、一定の形状を示さない。規模は長さ21m以上、幅1.4～4.7m、深さ10～35cmを測る。自然流路の可能性が高いと推測する。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明。

SD03 (第161図、PL27)

位置：1区。ⅡL04・09グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。重複関係：SK19と重複するが、新旧関係は不明。埋土：単層だが詳細は不明。形状・規模：平面形はL字形で、南北方向に伸びる。断面形はU字形を呈する。規模は長さ4.1m、幅20～35cm、深さ15～20cmを測る。遺物：土師器の小破片が出土した。時期：時期決定の根拠がなく不明。

SD04 (第161図)

位置：4区。ⅡV09・14グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：平面形は南北方向に伸びる直線的な溝跡で、北側は暗渠に壊され、南側は調査区外へと至る。断面形は、浅いU字状を呈する。規模は長さ9.8m以上、幅1.6～2.0m、深さ35～40cmを測る。遺物：埋土から縄文時代前期土器と灰軸陶器の小破片が出土した。時期：時期決定の根拠がなく不明。



第158図 土層柱状図

SD05 (第161図、PL27)

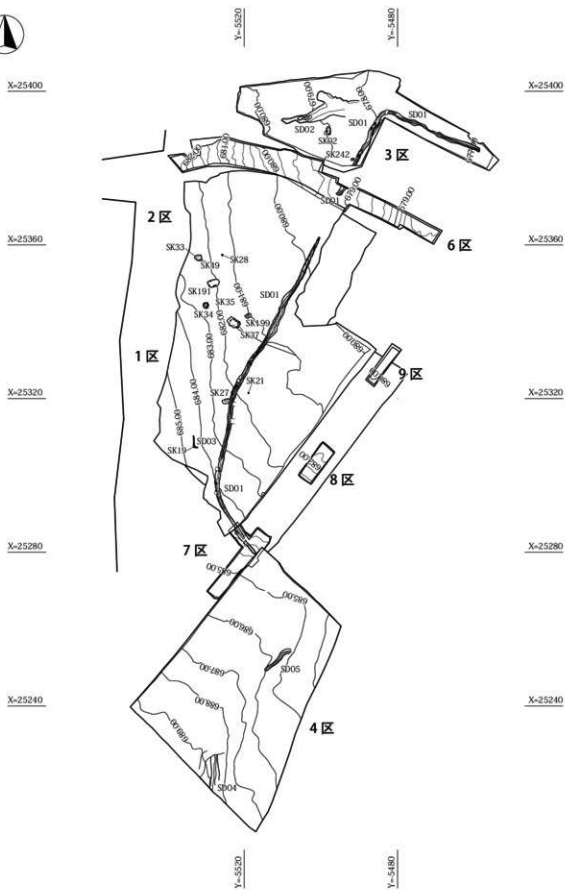
位置：4区。ⅡR17グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：平面形は北東-南西方向に延びる直線的な溝跡で、北東側はプランが不明確となる。断面形はU字状を呈する。規模は長さ8.6m以上、幅0.8~1.2m、深さ56cmを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明。

2 土坑

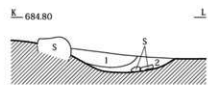
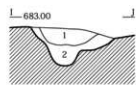
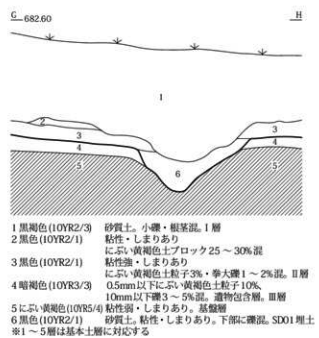
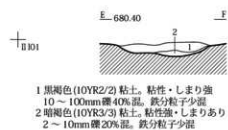
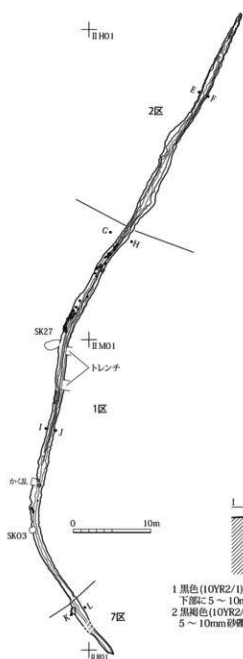
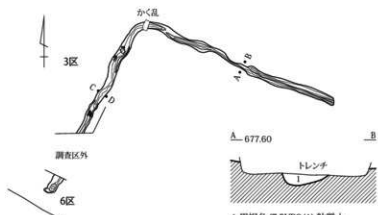
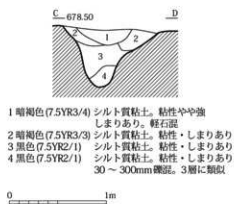
検出した250基のうち、特徴的なものを抽出して報告する(第8表)。土坑の時期・性格は不明だが、SK191は大形で底面から炭化材が出土し、炭窯の可能性はある。なお、SK191の東側に位置するSD01の埋土や遺構外では、少量だが羽口と鉄滓が出土している。今回の調査では検出されていないが、製鉄・鍛冶関連遺構の存在が近隣に予想される。

第8表 土坑一覧表

SK	位置		平面形	規模 (cm)			出土遺物	重複関係	備考
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			
002	3	ⅡC08	楕円形	200	110	36			
021	1	ⅡH21	楕円形	36	28	40			
027	1	ⅡL05	楕円形	208	112	52			
028	2	ⅡG05	円形	44	36	28			
033	2	ⅡG04	不整楕円形	190	160	28	縄文土器・弥生後期土器の小破片が出土、混入か	SK49と重複するが新旧関係は不明	
034	2	ⅡG09	楕円形	154	120	36			北側を礫で囲う
037	2	ⅡG15	不整楕円形	340	224	32			
049	2	ⅡG04	楕円形	44	30	—		SK33と重複するが新旧関係は不明	
191	2	ⅡG09	楕円形	300	180	25	縄文土器の小破片が出土、混入か		底面から炭化材が出土、炭窯の可能性有
199	2	ⅡH11	不整楕円形	164	116	44	縄文土器の小破片が出土、混入か		
242	3	ⅡC14	楕円形	84	56	15			

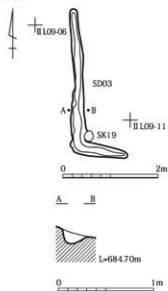


第159図 遺構分布全体図

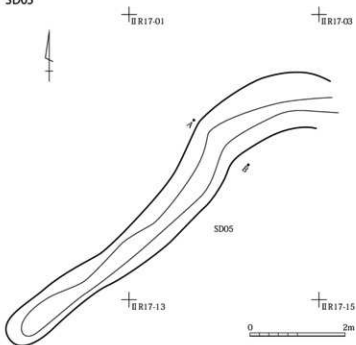


第160図 SD01 遺構図

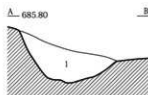
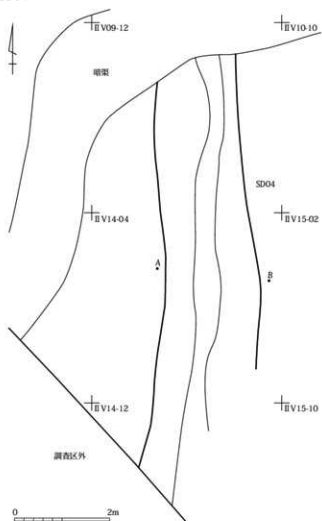
SD03



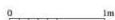
SD05



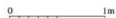
SD04



1 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土
粘性普通・しまり強
50～100mm礫20%
10m赤褐色土粒10%混

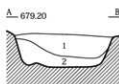
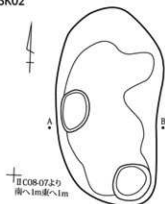


1 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土。粘性普通・しまり強
10～100mm礫10%混



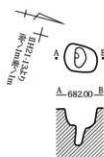
第161図 SD03・04・05 遺構図

SK02



- 1 黒褐色(7.5YR2/1)
粘性・しまり強
10～20mm赤色土粒子微混
- 2 黒褐色(7.5YR3/1)
粘性強・しまり普通
50～100mm礫20%混

SK21

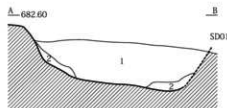
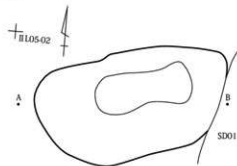


SK28



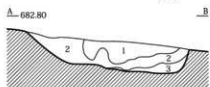
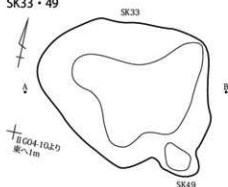
- 1 黒褐色(10YR3/2)
シルト質粘土。粘性・しまり強
2～10mm礫20%混、鉄分混
- 2 暗褐色(10YR3/3)
シルト質粘土。粘性・しまり強
2～10mm礫40%混
2層に類似

SK27



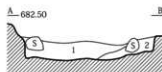
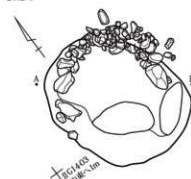
- 1 黒褐色(10YR2/3)
粘性・しまりあり
10mm以下にふい黄褐色土粒子10%混
- 2 暗褐色(10YR3/3)
粘性・しまりあり
にふい黄褐色土ブロック30%混

SK33・49



- 1 黒褐色(10YR2/2)粘土。粘性強・しまり極強
2～20mm礫20%混
- 2 黒褐色(10YR3/2)粘土。粘性強・しまり極強
2～5mm礫10%混
- 3 暗褐色(10YR3/4)粘土。粘性あり・しまり強
30mm礫混

SK34

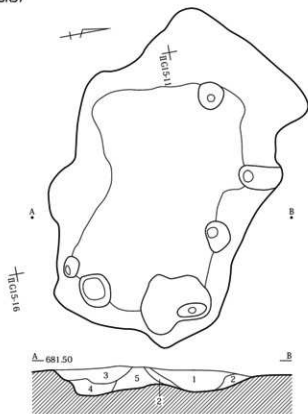


- 1 褐灰色(7.5YR4/1)
粘性普通・しまり弱。5mm黄褐色土粒少混
- 2 褐灰色(7.5YR4/1)
粘性・しまり普通
10～20mm黄褐色土ブロック40%混



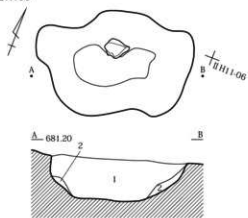
第162図 SK02・21・27・28・33・34・49 遺構図

SK37



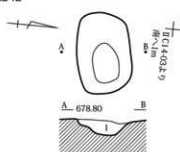
- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘土。粘性強・しまりあり。2～20mm礫40%混
 2 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土。粘性・しまり強。2～5mm礫40%混。地山に類似
 3 暗褐色(10YR3/3) 粘土。粘性・しまり強。2～50mm礫40%混
 4 におい黄褐色(10Y5/3) 粘土。粘性ややあり・しまり強。100mm礫混
 5 におい黄褐色(10Y5/4) 粘土。粘性ややあり。しまり強。地山に類似

SK199



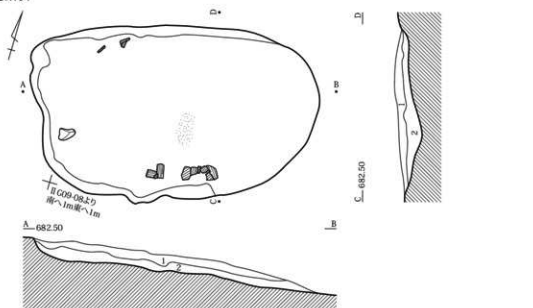
- 1 黒褐色
 2 黄褐色

SK242



- 1 黒色(10YR2/1) 粘土。粘性強・しまり極強
 上部に10～50mm礫30%混

SK191



- 1 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土。粘性あり・しまり極強。炭化物10%。50～150mm礫混
 2 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土。粘性あり・しまり極強。炭化物20%。2～10mm礫3%混

第163図 SK37・191・199・242 遺構図

第3節 遺物

1 土器・陶磁器・製鉄関連遺物

(1) 遺構出土

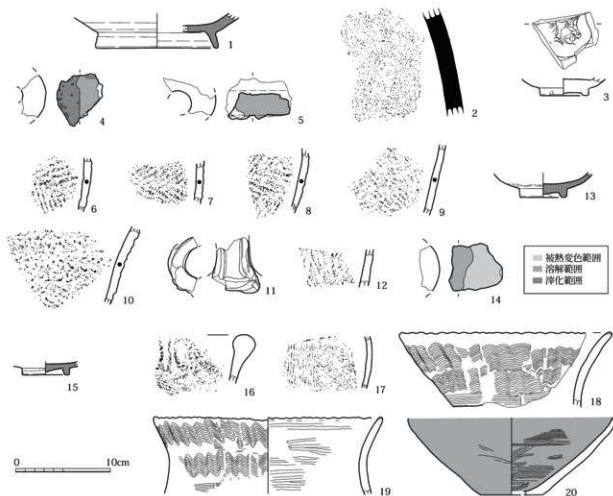
SD01 (第164図1~5)

1は灰釉陶器瓶類の底部小破片で、回転ヘラ削りされて平坦な底部の端近くに、先端がわずかに丸みを帯びる高台が貼り付けられている。内面は滑らかで、転用碗として用いられた可能性もある。2は大型の須恵器甕胴部破片で、外面は平行叩き、内面は横ナデ後、横方向のハケ調整を施す。3は青磁鉢の厚手の底部で、内面に細線で草花のようなものを描いた刺花文がみられる。4・5は羽口で、小破片であるが外側面と孔の一部が残存しており、羽口であることがわかる。4は先端部が熱で溶けて滓化している。

(2) 遺構外出土

1区 (第164図6~14)

6~10は縄文時代前期前葉の土器で、6~9は単節原体による横位羽状構成の縄文を、10は多段ループ文を施文する。11・12は中期末葉の土器で、11は両耳壺の把手の可能性がある。12は単沈線で文様を描く。13は18世紀後半頃の前山焼の丸碗で、体部内外面と内面にやや緑がかった灰釉が厚く施釉されており、一部に貫入がみられる。14は羽口で、外側面のみが残存する。



第164図 土器、土製品

3区 (第164図15)

15は近世陶磁器の碗で、青磁釉が体部内外面と底部内面に施釉されている。突出底を削り出して高台は方形、底面は尖底を呈する。

5区 (第164図16~20)

16は縄文時代中期初頭の土器で、口縁部に把手を貼付し、平行沈線と刺突で文様を構成する。17~19は弥生時代後期の甕である。17は、胴部外面に疎らな横位方向の櫛描波状文の後に、縦位の櫛描直線文を施文する。18・19は頸部に簾状文、口縁部に櫛描波状文を描き、口唇部には刻みを施す。20は大形の鉢で、内外面に横位方向のミガキ後、赤色塗彩されるが、外面は広く剝落している。

2 石器

石器は遺構外出土のものが大半で、遺構出土のものであっても混入の可能性が高く、出土状況からは時期を特定できない。ただし、縄文時代前期前葉、中期初頭・末葉の土器が出土したので、その時期のものを含む可能性がある。以下、器種別に報告するが、石器個別の詳細は観察表をDVDに収録した。

槍先形尖頭器 (第165図1~3、PL28)

1~3は旧石器時代末から縄文時代草創期の柳葉形を呈する槍先形尖頭器で、両縁部から深い剝離が入る。小形の1・3と比較的大形の2があり、1・2は先端部に衝撃剝離が観察できる。石材は1・3が頁岩、2は無斑晶質安山岩である。

石鏃・石鏃未製品 (第165図4~11、PL28)

4~8は凹基無茎鏃で、基部を挟り込む深度と側縁部の形状に違いがある。6・7は、先端部が短く突出する。9は凹基有茎鏃で基部が欠損する。10は凹基鏃であろう。11は全体的に加工剝離が粗く、厚手で形状が整わないことから、未製品の可能性が高い。石材は7がチャート、それ以外は黒曜石である。

石鏃 (第165図12・13、PL28)

12は鏃部で上端が欠損する。全体に細かな加工剝離を施し、棒状の鏃部を作出する。13はつまみ部をもつ石鏃で、つまみ部にはほとんど加工剝離がなく、鏃部を細かな加工剝離で作出する。石材はともに黒曜石である。

スクレイパー (第165図14~17、PL28)

14は両面加工、15~17は片面加工のスクレイパーである。14は片面に広く自然面が残り、反対側の面よりも細かな加工剝離を施す。反対側の面は、主に上下端からの加工剝離が多い。15~17は縦長剥片の1縁辺部に加工剝離を施し、削器状の刃部を作出する。16は、裏面に細かな剝離が連続して認められる部分がある。石材は14・17が黒曜石、15がチャート、16が珪質頁岩である。

両極石器 (第166図18)

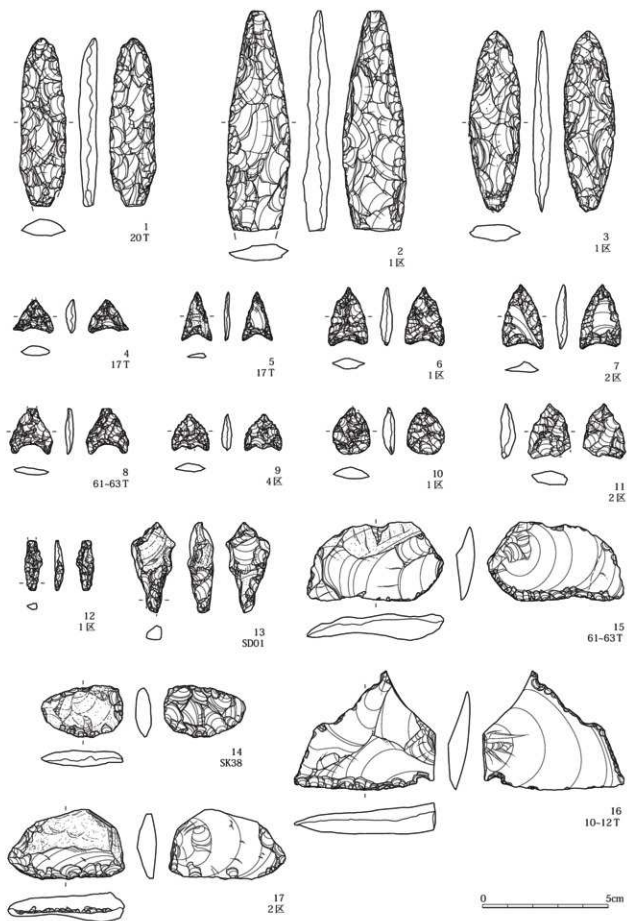
18は両極打法による剝離が両端部に残り、石材は黒曜石である。

微細な剝離がある剥片 (第166図19・20、PL28)

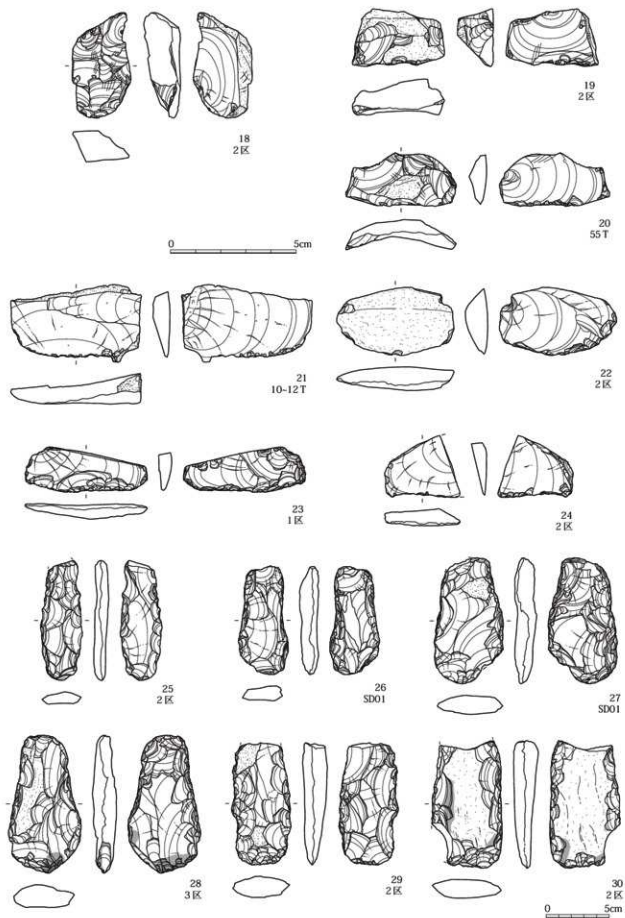
19・20は剥片の縁辺部に使用痕の可能性が高い微細な剝離が連続する。石材はともに黒曜石である。

横刃形石器 (第166図21~24、PL28)

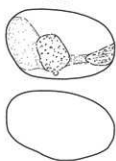
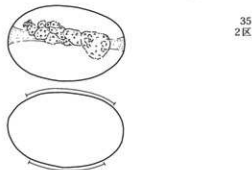
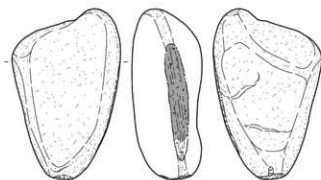
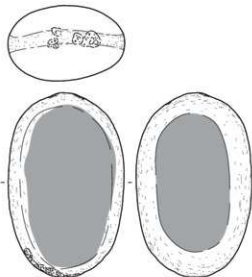
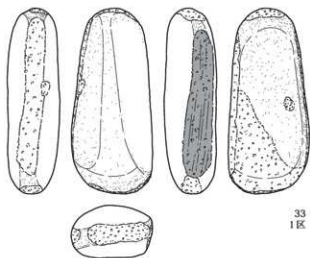
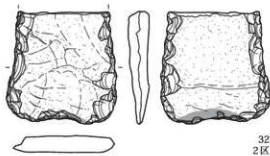
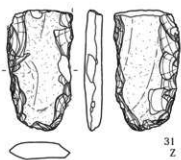
21~24は大形剥片を素材とし、長軸に対して平行方向の縁辺部に調整もしくは使用痕の可能性が高い微細な剝離が連続する。23は調整剝離を表裏両面に施すものである。21・23は上端の縁辺部に自然面が残り、22は片面が自然面である。石材は21が無斑晶質安山岩、22・23が泥岩、24が黒色安山岩である。



第165図 石器(1)

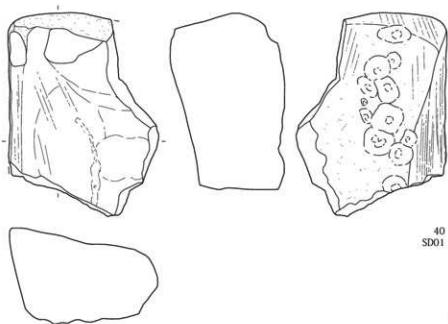
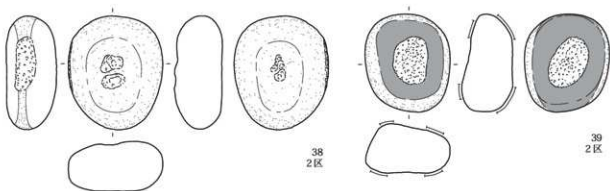
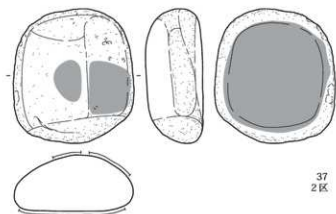


第166図 石器(2)



0 10cm

第167図 石器(3)



0 10cm

第168図 石器(4)

打製石斧 (第166・167図25～31、PL28)

25・29・30・31は短冊形、26～28は撥形を呈しており、28・30には刃部および刃部と近い側縁部に、使用痕の可能性が高い摩耗痕が観察できる。30・31は、風化が著しく不明確だが、自然面と推測する範囲が表裏両面に広く残ることから、礫素材の可能性はある。石材は25～29が泥岩、30・31が黒色安山岩である。

石鍬 (第167図32、PL28)

32は打製石斧と同様に、縁部へ階段状の剥離を連続的に施し形状を整えているが、打製石斧よりも幅が広く大形であることから石鍬とした。刃部付近の破片で、先端には使用痕の可能性が高い摩耗痕が観察できる。形状は不明確だが、先端に向かって徐々に幅が広がるため、撥形と推測する。石材は黒色安山岩である。

特殊磨石 (第167図33・34、PL28)

楕円形を呈する礫素材の1側縁部に、幅の狭い機能面(磨面)をもつものを特殊磨石とした。機能面は平坦で、機能面以外との境界に稜を形成する。また、機能面と併せて敲打痕が残る点も特徴である。33は長楕円形の礫を素材としており、両端部や機能面以外の側縁部および裏面の一部に敲打痕が認められる。34は不定形の礫が素材で、先端部に敲打痕が認められる。石材は33が安山岩、34が砂岩である。

磨石 (第167・168図35～37)

円形もしくは楕円形を呈する礫の片面、あるいは両面に磨面が残るものを磨石とした。35・37は両面、36は片面に磨面が残る。35・36の端部には敲打痕が観察できる。石材は全て安山岩である。

凹石 (第168図38～40、PL28)

礫素材で、両面もしくは片面に凹痕が残るものを凹石とした。38・39は楕円形を呈する礫の両面中央に凹痕が残る。38は1側縁部に敲打痕を、39は両面に磨面を併せ持つ。40はいわゆる多孔石で、欠損のため全体形状は不明だが、片面に多数の凹痕が残る。石材は全て安山岩である。

第4節 小 結

今回の調査では、検出した遺構が少なく性格も不明なうえ、遺物も断片的なものばかりで、遺跡の性格を把握することはできなかったが、遺構を中心に若干のまとめを行うことで小結としたい。

溝跡SD01は、1～3・6・7区に跨る全長150m以上の溝跡で、時期は中世と推測する。溝跡の南北端に当たる3・7区において南東側へと曲がり、東側の空間を囲うような様相を呈するが、土坑を主体とする遺構密度は圧倒的に西側の方が高く、囲郭用の溝跡とは考えにくい。当地は山水の出る場所であることを考慮すれば、排水用の溝跡とすることができるかもしれない。

また、炭窯と推測するSK191が存在し、SD01の埋土や遺構外で羽口・鉄滓が出土した点から、付近に製鉄・鍛冶関連の遺構が存在した可能性がある。ただし、羽口・鉄滓は出土量が少なく、遺構も検出されなかったことから、製鉄・鍛冶関連の遺構が存在したとしても、その場所は今回の調査区外となろう。

このほか、旧石器時代末から縄文時代草創期、縄文時代前期・中期、弥生時代後期などの遺物が出土しており、今回の調査区周辺には、そうした時期の遺構が存在するものと予想される。

第9章 自然科学分析

第1節 北畑遺跡群の自然科学分析

北畑遺跡群では自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・灰像分析、樹種同定を実施した。目的は、稲作の可能性とその消長、本遺跡における古環境変遷（堆積環境・古植生）、堆積物の年代観（特に、水田層）について、検討する手掛かりを得ることにある。

以下、分析結果の概略を報告する。分析の詳細については、DVD収録の分析報告書を参照された。なお、分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

1 放射性炭素年代測定（AMS測定）

分析試料はE区東西土層断面IV-2層で採取した土壌ブロックから抽出した植物遺体（ヨシの地下茎）1点である。

測定の結果は、暦年代範囲（1 σ ）でcalBC90-calBC75（15.5%）とcalBC60-calAD22（84.5%）である。紀元前後に相当する測定値が得られた。水田跡第1面を形成するのがⅢ層であり、IV-2層がその下層にあたるため、水田跡は弥生時代中期以降につくられたと評価できよう。

2 珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・灰像分析

分析試料は珪藻分析17点、花粉分析21点、植物珪酸体分析11点、灰像分析1点で、採取地点がE区SL01・02土層断面、E区東西土層断面、M区東西土層断面からである。

珪藻分析結果は、すべての資料で珪藻化石が豊富に産出し、完形殻の出現率が70%前後の資料が多い。化石の保存状況は良好で産出分類群数は、合計で30属211種類であった。E区Ⅵ-2層から中～下流性河川指標群種を含む流水性種、流水不定性種が多産したことから、河川の影響を頻繁に受ける環境が推測された。一方、その上位のIV-3層及びIV-1層では、流水性種が減少し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が増加することから、河川の影響が弱まり、流水の影響を受ける沼沢地のような環境に変化したとされる。また、地点により堆積環境が異なっていた可能性も指摘している。遺跡の立地環境と自然流路の検出といった調査成果とは整合する結果である。

花粉分析結果は、花粉化石がほとんど検出されなかった地点と比較的多く産出した地点がわかった。花粉化石の保存状態が悪く、個体数や種類数の少ない理由を一時的に乾燥した可能性、人為的な環境の変化に伴う可能性を指摘している。

植物珪酸体分析・灰像分析結果は、各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であった。

畦畔状遺構が検出されたE区ではIV-2層以下ではイネ属の植物珪酸体含量は少なく、イネ属の単細胞・機動細胞珪酸体は1,000個/g未満であった。IV-1層の植物珪酸体量はイネ属の機動細胞珪酸体含量はE区SL01・02土層断面のIV-3・IV-1層では、2,000個/g前後のイネ属機動細胞珪酸体がされるものの、Ⅲ-5層で約6,000個/gと増加する。また、M区ではIV-1層でイネ属機動細胞珪酸体が40,000個/gを超える結果となった。

このことから、E区のIV-1層で検出された畦畔状遺構が水田に伴う施設であるかは断定できないが、

M区のⅣ-1層のイネ属機動細胞珪酸体の含量を考慮すると、この時期に遺跡内や周辺で稲作を行っていたと推定され、この分析結果は調査所見と整合的といえる。今後、本遺跡の立地する千曲川沿いの低地部分の土地利用を検討するうえで、貴重な成果と考える。

3 樹種同定

分析試料は、SK12から出土した炭化材1点である。同定の結果は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節である。報告では、コナラあるいはミズナラを推定し、本地域の落葉広葉樹林に比較的普通に見られることから、遺跡周辺にコナラ亜属が生育していた可能性があり、これらを利用したと推測している。

第2節 北裏遺跡群の自然科学分析

北裏遺跡群では自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、火山灰分析、種実同定、樹種同定、リン・カルシウム分析を実施した。分析の詳細については、DVD収録の分析報告書を参照された。なお、分析は、放射性炭素年代測定（AMS測定）を株式会社加速器分析研究所、リン・カルシウム分析を株式会社古環境研究所、その他をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

1 放射性炭素年代測定（AMS測定）

分析試料は方形周溝墓、円形周溝墓、堅穴建物跡、柱穴、井戸跡、木棺墓から採取された炭化物・土壌等の31点と燻木棺墓SM01・02出土炭化物（炭化種子）の10点である。目的は各試料が採取された遺構の時期、数値年代を得て、遺構の時期決定を行うための手掛かりとすることと、炭化種子が弥生時代に入れられたものか、現代の混入かの判断材料とすることにある。

測定の結果は各試料の遺構ごとの暦年代範囲（1σ）における最小値と最大値はSM07で138calAD-529calAD、SM08で1686calBC-1677calBC、SM09で978calBC-224calAD、SM10で292calBC-57calBC、SM12で1890calBC-1775calBC、SM15で899calBC-387calBC、SM18で50calBC-387calAD、SB15で21calAD-78calAD、SB17で147calBC-40calBC、SB20で155calBC-47calBC、SB24で161calBC-54calBC、SB25で366calBC-18calAD、SK396で1405calAD-1430calAD、SK437で1164calAD-1263calAD、SK163で1028calAD-1284calADであった。

出土土器等から推定される時期に対して、概ね調和的な試料が多いものの、古い炭化物が混入した可能性や土壌が古い年代を示す傾向が見られると報告されている。堅穴建物跡は弥生時代後期とする調査所見とは整合的であった。中世の遺構と考えた各SK試料からは、11-15世紀の幅があることが分かった。

一方、炭化種実は、SM01出土イネ4点・コムギ3点、SM02出土イネ2点・コムギ1点を分析試料とした。測定の結果は、暦年代範囲（1σ）でSM01出土の1（イネ）が353calBC-198calBC、2（コムギ）が1696calAD-1917calAD、3（イネ）が1514calAD-1634calAD、4（コムギ）が1697calAD-1917calAD、5（イネ）が354calBC-203calBC、6（コムギ）が1691calAD-1925calAD、7（イネ）が149calBC-50calBCであった。同様にSM02出土の8（イネ）が385calBC-202calBC、9（コムギ）が1683calAD-1935calAD、10（イネ）が1695calAD-1917calADであった。イネ1・5・7・8は弥生時代中期に相当する年代値で、調査所見と整合する。イネ3・10とコムギ2・4・6・9は極端に新しく、後世の混入が指摘されている。またコムギは似通った年代値を示していた。

2 火山灰分析

分析試料は方形周溝墓、円形周溝墓の周溝埋土から採取された土壌（黒ボク土）11点である。目的は遺構の埋没年代および堆積層（ローム層）の形成に関わる対比指標を得るためである。

分析の結果、火山ガラスはSM07の試料に少量、他の試料には微量が含まれていた。一方で、いずれの周溝埋土試料からも少量の軽石が検出された。この軽石は比較的新鮮であること、その粒径や色調、発砲度、包含される斑晶鉱物が両輝石であることに加えて、遺跡の地理的位置を考慮し、浅間火山を供給源とするテフラに由来する可能性が高いとされた。今回の分析で検出されたテフラは、周溝に埋設している時期に降下堆積したものでなく、周囲の黒ボク土中に既に含まれ、遺構に埋設したと考えられた。このため、遺構の時期を検討する指標とはならない結果であった。

3 種実同定

分析試料は隠床木棺墓（SM01、02）、木棺墓（SM18）から水洗選別により回収・抽出された試料101点である。目的は種実遺体の同定により、当該期の植物利用を検討する手掛かりを得ることである。

分析の結果、種実遺体では炭化した栽培種のイネの胚乳（67個）、オオムギの胚乳（3個）、コムギの胚乳（17個）、豆類の種子（3個）と、炭化していない草本のエノキグサの種子（1個）が同定された。このほか炭化材（6個）、不明の炭化物（1個）、不明の地下茎（1個）、不明（1個）、金属物質（1個）が確認された。遺構別にみると、SM01ではイネが最も多く、次いでコムギ、マメ類、オオムギとなる。SM02ではイネとコムギ、SM18がイネ、オオムギ、コムギを確認したがSM01と比べ種類、個数ともに少ない。

これらのことから、当該期の植物利用が推測されるが、先述した放射性炭素年代測定の結果から後世の混入の可能性も十分考慮しておく必要があろう。

4 樹種同定

分析試料は中世の井戸跡（SK163、SK437）の井戸枠材7点と、木棺墓（SM18）の棺材と推定される炭化物6点の計13点である。

分析の結果、SK163の井戸枠材すべてが針葉樹のサワラで、SK437ではヒノキとヒノキ科と異なる木材の利用が窺える。佐久市域における中世の井戸枠材にはサワラが多く利用されるという特徴があり、今回の結果は地域のありようと調和する。SM18の炭化物からは本来の形状および木取が推測できなかったが、サワラ、ヒノキ科との同定結果となった。棺材に由来する試料であれば、板状加工の容易な木材であるサワラやヒノキ科が利用されたことを推定している。

5 リン・カルシウム分析

分析試料は木棺墓の遺構内外の土壌8点である。内訳は木棺内4点（No.1、No.3～5）、掘方内2点（No.2、6）、周囲の地山2点（No.7、8）である。

分析の結果、リンの含有量がNo.1（リン最大2.41%）とNo.4（リン最大3.35%）、その他の試料では1%未満であった。No.1とNo.4はいずれも木棺内の土壌であり、木棺内に骨の存在を示唆するものとなった。また、No.1とNo.4は遺構の中心線に近い箇所から採取された試料で、埋葬に由来する可能性が高いことを裏付ける結果と指摘している。

第3節 北裏遺跡群出土の人骨と動物骨

北裏遺跡群は長野県佐久市にある遺跡で、平成19年・21～23年・27年に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。本報告はその際出土した焼人骨および動物骨についてのものである。

1 北裏遺跡群出土の焼人骨

茂原信生・櫻井秀雄・本郷一美

出土した人骨は細片化しており、出土したものはすべて焼骨である。この遺跡から出土したウマだけが焼骨ではない。焼骨では、シカなどの動物骨とヒトの骨が混在している。ヒトの焼骨の方が量的にはずっと多い。

出土した人骨の量は少なく、不明の骨片を含めても、全体でヒト1人分の火葬骨にも足りない。骨は白く灰化するまで焼かれており、低い温度で焼かれたことを示す黒化した骨の割合は非常に少ない。頭蓋骨片が多いが、同定しやすいため頭蓋骨片が多い印象であるが、からなずしもそうではなく、四肢骨片もいろいろな部位があり、部位が選択的に埋葬されたのではないであろう。

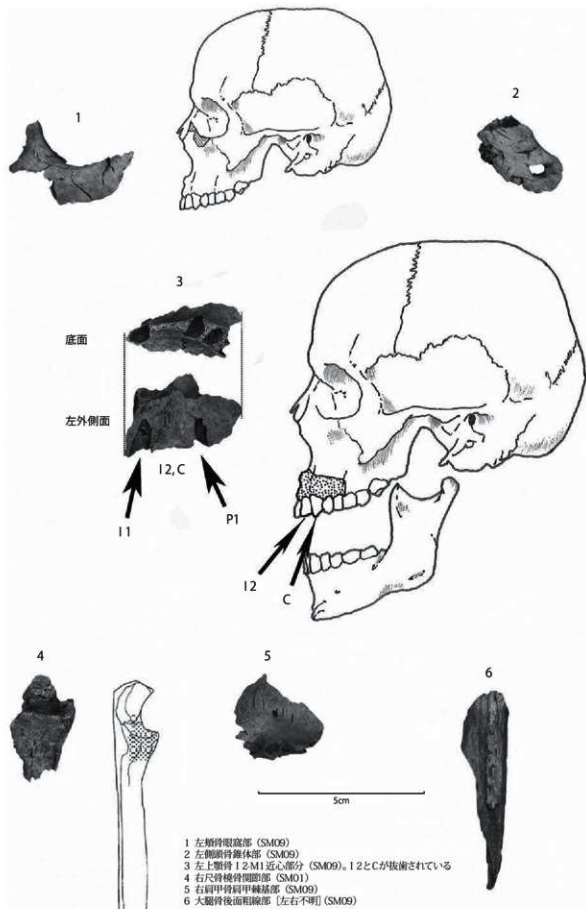
焼骨なので形態的な観察はほとんど出来ない。細片化しており、大きな骨片はない。頭蓋では、頭蓋冠の破片や側頭骨錐体部、頬骨などがあり、四肢骨では大腿骨の後面の粗線部、等が出土している。大腿骨の粗線に加齢変化が見られるので、高齢の個体も含まれていたであろう。一方、子供の骨と認められるようなものはなかった。歯の出土がないので年齢に関しては分からないことが多い。

古墳時代前期の方形周溝墓SM09の周溝埋土中から出土した左上顎骨には、上顎左のI2、Cの抜歯痕がある（第169図3。骨番号126）。発掘所見では、この左上顎骨は磯床木棺墓由来と推測されている。当地方では弥生時代中期になっても抜歯の風習が継続していたことを示している。

第8表 北裏遺跡群出土の人骨一覧

骨番号	出土遺構・地点	取上番号 ほか	遺構時期	重量 g	生骨/ 焼骨	部位など	写真 番号
2	SB24	骨1	弥生後期	1.98	焼骨	頭蓋骨片	
3	SB24	骨2	弥生後期	3.20	焼骨	頭蓋骨片	
5	SB24	骨4	弥生後期	2.99	焼骨	頭蓋骨片	
6	SB24 P3		弥生後期	0.90	焼骨	頭蓋骨片	
7	SB24	覆土内	弥生後期	6.97	焼骨	頭蓋骨片	
10	SB25	No24	弥生後期	3.85	焼骨	大腿骨後面骨幹部粗線部 不明骨2点	
11	SB25	床面	弥生後期	0.64	焼骨	椎骨片	
12	SB39	No22	弥生後期	2.76	焼骨	肋骨片	
15	SB39	No25	弥生後期	2.73	焼骨	頭蓋骨片	
18	SB39	No28	弥生後期	4.84	焼骨	頭蓋骨片	
19	SB39	No29	弥生後期	4.43	焼骨	左脛骨後面骨幹部	
20	SB39	No30	弥生後期	4.06	焼骨	頭蓋骨片	
22	SB39	No32	弥生後期	4.03	焼骨	大腿骨 骨幹部後面 粗線 左右不明	
24	SB39	No34	弥生後期	0.22	焼骨	大腿骨後面骨幹部粗線部	
25	SB39	No35	弥生後期	1.10	焼骨	肋骨片	
27	SB39	No37	弥生後期	4.64	焼骨	右尺骨遠位骨幹	

28	SB39	No38	弥生後期	1.46	烧骨	頭蓋骨片	
30	SB39	No40	弥生後期	1.22	烧骨	頭蓋骨片	
39	SB39	No52	弥生後期	3.28	烧骨	頭蓋骨片	
42	SB39 NE		弥生後期	7.92	烧骨	椎骨、頭蓋骨片、不明骨片多数	
44	SB39 SW		弥生後期	0.74	烧骨	頭蓋骨細片	
48				7.84	烧骨	肋骨片2点 椎骨片4点 不明骨片多数	
66	SM01 西	No131	弥生中期?	3.01	烧骨	尺骨 燒骨 関節部	4
71	SM01 南	No136	弥生中期?	0.97	烧骨	頭蓋骨片	
77	SM01 東	No299	弥生中期?	1.42	烧骨	頭蓋骨片	
84	SM04 北区中央	礫層内	近世以降	4.67	烧骨	大腿骨 骨幹部後面	
93	SM09 周溝 礫集中2	No 1	古墳前期	15.79	烧骨	頭蓋冠片1点、前頭骨頰骨突起部1点、四肢骨片5点	
94	SM09 周溝 礫集中2	No.2	古墳前期	9.38	烧骨	大腿骨後面粗線部?	
95	SM09 周溝 礫集中2	No.3	古墳前期	9.07	烧骨	左上腕骨遠位内側部、細い上腕骨である。	
96	SM09 周溝 礫集中2	No.4	古墳前期	9.94	烧骨	左上腕骨遠位外側部	
98	SM09 周溝 礫集中2	No.6	古墳前期	17.15	烧骨	左寛骨坐骨結節部?不明四肢骨片14点	
100	SM09 周溝 礫集中2	No.8	古墳前期	0.31	烧骨	頭蓋骨細片1点	
101	SM09 周溝 礫集中2	No.9	古墳前期	1.30	烧骨	肋骨片1点、不明細片1点	
102	SM09 周溝 礫集中2	No.10	古墳前期	1.77	烧骨	左頰骨前頭突起部(115と接合)	1
104	SM09 周溝 礫集中2	No.12	古墳前期	3.95	烧骨	右肩甲骨肩甲棘基部	5
105	SM09 周溝 礫集中2	No.13	古墳前期	3.18	烧骨	頭蓋骨片(頭蓋冠)	
106	SM09 周溝 礫集中2	No.14	古墳前期	1.98	烧骨	四肢骨片1点	
111	SM09 周溝 礫集中2	No.24	古墳前期	2.69	烧骨	四肢骨片(胫骨?と不明1点)	
115	SM09 周溝 礫集中2	No.28	古墳前期	0.97	烧骨	左頰骨眼窩部(102と接合)	1
117	SM09 周溝 礫集中2		古墳前期	16.90	烧骨	四肢骨片7点(胫骨片?もある)、不明骨片8点	
118	SM09 周溝 礫集中2		古墳前期	1.16	烧骨	歯根1点、他不明細片8点	
121	SM09 周溝 Wトレンチ内		古墳前期	3.26	烧骨	頭蓋骨片1点	
124	SM09 周溝 VB1(A-B)		古墳前期	4.53	烧骨	大腿骨粗線片1点(発達している)	
125	SM09 周溝 南-南東トレンチ		古墳前期	20.01	烧骨	不明四肢骨細片が25点ほど。胫骨の栄養孔と思われるものがある。	
126	SM09 周溝 南-南東トレンチ		古墳前期	41.02	烧骨	左側頭骨錐体、右側頭骨後部、外耳道下部、頭蓋冠片4点、左上顎骨でI2・Cが抜歯されている。大腿骨粗線②は加齢変化が見られる。他四肢骨片12点。	2・3・6
127	SM15 周溝 遺物集中1	No.1	古墳前期	2.35	烧骨	頭蓋骨片	
129	SM15 周溝 遺物集中1	No.3	古墳前期	0.57	烧骨	指骨	
134	SM15 周溝 南-南西トレンチ	上層	古墳前期	6.05	烧骨	頭蓋骨片 不明骨1点	
152	SM01 北区		弥生中期?	10.76	烧骨	大白歯歯根、不明細片	
153	SM01		弥生中期?	2.25	烧骨	頭蓋冠片2点、不明細片	
155	SM01 東区		弥生中期?	11.79	烧骨	頭蓋冠片、不明細片	
156	SM01 西区		弥生中期?	24.67	烧骨	右尺骨頭、不明細片	



- 1 左頬骨粗面部 (SM09)
- 2 左側頭骨錐体部 (SM09)
- 3 左上顎骨I2M1近心部分 (SM09)。I2とCが抜歯されている
- 4 右尺骨橈骨関節部 (SM01)
- 5 右肩甲骨肩甲棘基部 (SM09)
- 6 大腿骨後面粗線部 [左右不明] (SM09)

図のアミ掛部分が出土部位を示す

第169図 北裏道跡群出土人骨

2 北裏遺跡群出土の動物骨

本郷一美・櫻井秀雄

動物骨は、イノシシ2点(重量4.44g)、シカ6点(27.74g)、ウマは同一個体由来と考えられる歯と四肢骨(計289.82g)のほか1点(330.9g)が出土した。

イノシシは2点の歯が出土した。1点はSK489から出土し、焼けている。この土坑は北側を古墳時代前期のSM15北周溝に切られる、楕円形と思われる遺構で、残存部長110幅150深25cmである。もう1点の歯は古墳時代前期の方形周溝墓SM09周溝埋土から出土し、火を受けていない。

シカは弥生時代後期の竪穴建物から出土し、すべて焼骨である。2点の角のうち1点には等間隔の切痕がつけられている(第171図9)。

出土したイノシシ、シカの大部分が焼骨であるのに対し、ウマの骨は火を受けていない状態で出土した。

馬埋葬坑SM05からウマの歯、部位不明の四肢骨破片、橈骨手根骨の破片が出土した。SM05は長190幅80深28cmの長方形土坑である。歯は埋葬坑西側で出土した人頭大の礫3点の下から出土した。歯のエナメル質部分の保存状態はよいが、象牙質部分の残りは悪い(第171図1・2・3・4)。上下顎の歯に重複するものがなく、左右の歯のサイズと咬耗状態を比較した結果、1個体由来する歯が散乱して出土したものと考えられる。右上顎の前臼歯、臼歯列は完全に残存するが、切歯は残っていない。右下顎も第3前臼歯(P3)以外残存する。左歯列は下顎第2前臼歯-第1大臼歯(P2-M1)、上顎第3大臼歯(M3)が失われている。他にも部位不明の歯の破片が出土しており、もともとは頭部が完全な状態で存在したと考えられる。四肢骨の一部が北壁、東壁付近で出土したが、風化が著しく、湿った状態で、破片のみが採取された。

埋葬されたウマの年齢は、切歯と前臼歯、臼歯の歯冠高さから13-14才と推定された(Habermehl, 1961:図2の下顎切歯の咬耗による年齢推定、西中川編, 1991にもとづき松井, 2008:表1にもとづき推定)。犬歯は出土していないので、メスと仮定すれば繁殖年齢を過ぎた年齢といえる。上顎第2前臼歯(P2)の近心側のエナメルが高く残り、不自然な咬耗が認められる。金属製の銜にあたって欠けたり磨耗した痕は上顎P2には認められず、下顎P2がないので確実には言えないが、銜を使ったことがないウマである可能性がある。歯の計測法は第170図に、計測値は第10表に示した(Eisenmann他1988の計測法による)。

この他に、SH03からウマの右脛骨破片1点が出土した。SH03は一辺130深16cmの隅丸方形土坑で、底部に扁平礫を敷いている。このウマ右脛骨破片は扁平礫の下から出土した。

参考文献

- Eisenmann, V., Alberdi M. D., De Giuli, C. & Staesche, U. (1988) Vol1 Methodology. In Woodburne, M & Soondar, P. (eds) *Studying Fossil Horses: Collected Papers after New York International Hipparion Conference 1981*. Leiden: E. J. Brill.
- Habermehl, K.-H. (1961) *Die Altersbestimmung bei Haustieren, Pelztieren und beim jagdbaren Wild*. Berlin-Hamburg: Paul Parey.
- 松井章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会。
- 西中川駿・松元光春 1991『遺跡出土骨同定のための基礎的研究』西中川駿(編)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究(平成2年度文部科学省科学研究費補助金 一般B 成果報告書)」。pp.164-188。

第9表 北真道跡群出土の動物骨一覧

骨番号	出土遺構	取上番号ほか	遺構時期	重量 g	生骨/焼骨	種	部位	部位詳細	左右	備考	写真番号
4	SB24	骨3	弥生後期	0.88	焼骨	シカ	角	破片			
8	SB25		弥生後期	3.97	焼骨	シカ	角	加工品			9
9	SB25	No23	弥生後期	3.72	焼骨	シカ	脛骨	近位骨幹部後面	左		10
21	SB39	No31	弥生後期	6.94	焼骨	シカ	大腸骨	骨幹部			
36	SB39	No46	弥生後期	9.37	焼骨	シカ	脛骨		右		
37	SB39	No47	弥生後期	2.86	焼骨	シカ	肩甲骨	腹側縁	右		
51	SK489	No 1	古墳前期以前	0.44	焼骨	イノシシ	歯	破片			
86	SM05	No 1	平安以降	14.25	生骨	ウマ	四肢骨	破片			
87	SM05	No 2	平安以降	26.00	生骨	ウマ	歯	下顎歯 M2-3	右		5・6
87	SM05	No 2	平安以降	20.00	生骨	ウマ	歯	上顎歯 M1-2	右		1・3
88-1	SM05		平安以降	19.00	生骨	ウマ	歯	上顎歯 M 3	右		1・3
88-1	SM05		平安以降	17.00	生骨	ウマ	歯	下顎歯 M2-3	左	M3 hypococonulid 破損	7
88-2-1	SM05		平安以降	75.72	生骨	ウマ	歯	上顎歯 P2-M2	左	P2咬耗異常あり。近心部が高く斜めに磨耗。	2・4
88-2-2	SM05		平安以降	8.61	生骨	ウマ	歯	上顎切歯3本	左		
88-2-3	SM05		平安以降	6.30	生骨	ウマ	歯	下顎切歯3本	右		
88-2-4	SM05		平安以降	2.64	生骨	ウマ	歯	下顎歯 P 破片	左		
88-2-5	SM05		平安以降	9.17	生骨	ウマ	歯	上顎切歯3本	右		
88-2-5	SM05		平安以降	10.88	生骨	ウマ	歯	切歯, 臼歯, 破片			
88-2-6	SM05		平安以降	4.24	生骨	ウマ	歯	下顎歯 P 2破片	右		
88-2-7	SM05		平安以降	1.03	生骨	ウマ	歯	上顎切歯	左		
88-2-8	SM05		平安以降	10.26	生骨	ウマ	歯	下顎歯 P4-M1	右		5・6
88-2-9	SM05		平安以降	2.69	生骨	ウマ	腕骨 橈骨 手根骨	破片	左		
88-2-10	SM05		平安以降	51.50	生骨	ウマ	歯	上顎歯 P2-4	右	P2咬耗異常あり。近心部が高く斜めに磨耗。	1・3
88-2-11	SM05		平安以降	10.53	生骨	ウマ	歯	切歯を含む破片			
123	SM09 周溝 東-南東 トレンチ	黒褐色層	古墳前期	4.00	生骨	イノシシ	歯片1点			他に焼骨の細片24点	
136	SH03	No 2	不明	30.90	生骨	ウマ	脛骨	近位骨幹 前面	右		8

第10表 北裏道跡群SM05出土の馬歯計測値

上顎歯

骨番号	歯	左右	H	L	B
88-1	M3	右	(36.7)	28.9	22.5
87	M2	右	27.4	23.2	23.1
87	M1	右	24	22.8	25.6
88-2-10	P4	右	29	25.4	24.2
88-2-10	P3	右	32.2	27.2	26.2
88-2-10	P2	右	31.5	33.9	22

87	M2	左	26.4	22.8	23.2
87	M1	左	20.8	—	25.6
88-2-10	P4	左	26.4	25.7	25.3
88-2-10	P3	左	31	26.5	26.9
88-2-4	P2	左	31.8	33.5	23.4

M：大白歯、P：前臼歯

H：歯冠高（Eisenmann 1988の計測法による（第170図）） L：最大長 B：頬舌径

（ ）は概測値、LとBはエナメルの縁で計測

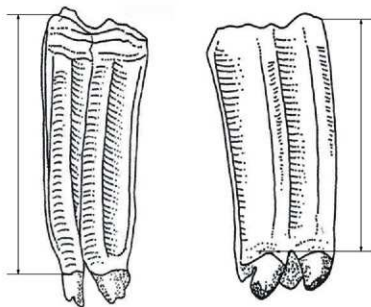
注：Eisenmannの計測法による歯冠高は、最大高に近い。歯根の間から咬合面中心までの高さを計測する西中川（1991）による計測法より、1-2ミリ高い数値になる

下顎歯

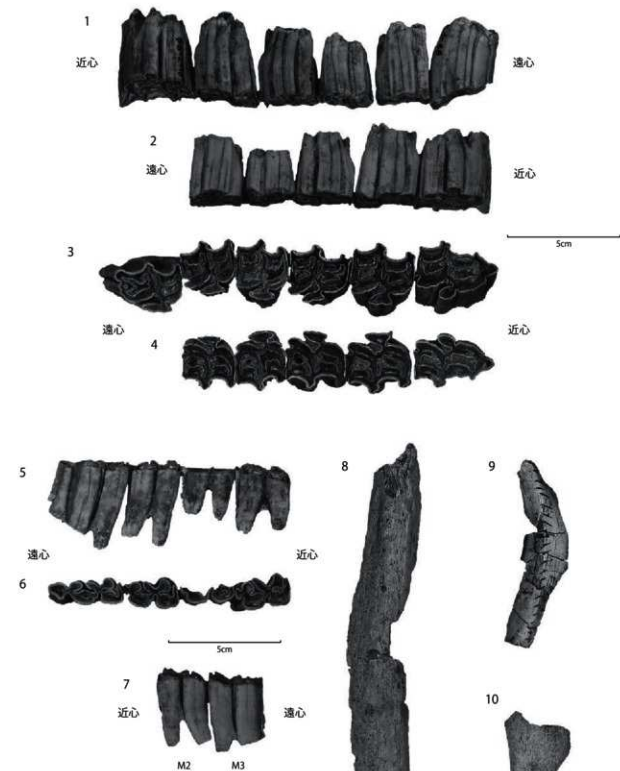
骨番号	歯	左右	H	L	B
87	M3	右	34.9	32.1	11.6
87	M2	右	32.7	23.6	13.4
88-2-8	M1	右	(18.6)	22.8	
88-2-8	P4	右	21	24.5	14.6

88-1	M3	左	30.8	—	11.7
88-1	M2	左	28	23.5	12.9

左：下顎歯、右：上顎歯
(Eisenmann 1988, p.23, p.29)



第170図 歯冠高の計測法



- 1～7はSM05から出土したもの
 1 ウマ右上顎歯 (舌側面) P2-M3 (骨番号 87・88-1・88-2-10)
 2 ウマ左上顎歯 (舌側面) P2-M2 (骨番号 88-2-1)
 3 ウマ右上顎歯 (咬合面) P2-M3
 4 ウマ左上顎歯 (咬合面) P2-M2
 ※ 1・3、および 2・4 は同じ歯である。
 5 ウマ右下顎歯 (頬側面) P4-M3 (骨番号 87・88-2-8)
 6 ウマ右下顎歯 (咬合面) P4-M3
 ※ 5・6 は同一歯
 7 ウマ左下顎歯 (頬側面) M2・M3。M3の遠心部分は欠損 (骨番号 88-1)
 8 ウマ右脛骨骨幹前面 (SR23) (骨番号 130)
 9 シカ角 (加工した切痕が多数みられる) (SR25) (骨番号 8)
 10 シカ左脛骨近位骨幹後面 (SR25) (骨番号 9)

第171図 北東遺跡群出土動物骨

第10章 総括

本報告では佐久市内、千曲川左岸の旧南佐久郡域の北端に位置する、桜井・伴野地区の範囲にある5遺跡の発掘調査記録を収録した。土地の削平により成果が乏しかった仁東餅遺跡を除き、報告した4遺跡は縄文時代から中近世にわたり、特に弥生時代について多くの成果があった。ここでは時代順にまとめる。

縄文時代

旧石器時代末期から縄文草創期に属する尖頭器が、北裏遺跡群と東山遺跡で出土した。北裏遺跡群では前期初頭から中期初頭まで、ほぼ継続的な土器が出土した。釈迦堂Z3式土器が含まれ、千曲川最上流部が甲信交流の幹線であった可能性を見出した。東山・北畑・西東山遺跡でも前期～後期土器を出土した。

弥生・古墳時代

北裏遺跡群では、弥生時代中期中葉松節並行期、栗林1式期から活動の痕跡が残り、栗林2式古段階には数軒の堅穴建物と礎床木棺墓が築造された。石鍬などの弥生石器は、この時期から使われたのであろう。北側の沖積地に広がる北畑遺跡群では、同時期の土器とともに石鍬が集中して出土し、生産域と推定する。これ以後、弥生時代後期前葉まで空白期を経て、弥生後期Ⅲ期古段階、すなわち箱清水式古段階の短時期に属す、20軒近い堅穴建物からなる集落が営まれた。

佐久地方の同時期の拠点集落としては、千曲川右岸の周防畑B遺跡が代表的である。土器は吉田式の特徴を継承し、壺の頸部にはへら描き斜状文・横羽状文を多用し、甕は櫛描波状文と横羽状文が伯仲する。この特徴は以後も継承され、佐久地方箱清水式の顕著な地域色として知られる。北裏遺跡群では、壺は頸部に櫛描直線文とT字文、甕は櫛描波状文を描き、長野盆地の同時期土器と共通する。佐久地方の千曲川左岸側で、箱清水式古段階の拠点集落は初めての調査事例であり、兩岸の土器の差異が明瞭になった。

3区の弥生時代後期集落に続くのが、5区の木棺墓SM18と遺物集中SQ01～04で、Ⅲ期新段階に属す土器群を出土した。木棺上に多数の土器を供献し火をかけた事例は、著名な上直路遺跡と共通する、佐久地方独特の儀礼である。南側20mの高所に立地する、西東山遺跡が同時期的小集落で、関連が注目される。

3区が居住域としての利用が途絶える頃、四隅が切れる小形方形周溝墓が築かれ、後期後半には隣接して小形の円形周溝墓が現れる。古墳時代前期に至り、10mを超え一隅が切れる方形周溝墓が、さらに前期後半には前方後方形の大形周溝墓が築かれる。時期不詳の方形周溝墓も、規模・形状と分布から同じ歩みをたどったと推定する。古墳前期には、3区は墳丘墓が並ぶ墓域へ変貌したものと推定する。

古代

北裏遺跡群で、9世紀前半を最多に、8世紀後葉から10世紀前半の堅穴建物跡13軒を検出した。転用硯と鉄製紡錘車が、集落の活動の一端を物語る。北畑遺跡群では8世紀代の水路を伴う水田跡を検出した。

中近世

北裏遺跡群で建物跡、堅穴状遺構、掘立柱建物跡、井戸跡とピット群の集中箇所を検出した。集落の規模・構造、予想された古道との関係は明らかにはならなかった。

以上のとおり、今回の調査によって、地域の歴史を物語る埋もれた資料を記録保存できたが、残された課題も多い。今後の地域の歴史研究に、この調査成果が活用されることを願うものである。

拙筆するにあたり、発掘調査に御理解、御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、この場を借りて深く感謝申し上げます。



遠景（東から）



SD02（北から）



SD01・02 断面（南から）



SD03・04 完掘（北から）



SD03 遺物出土状況（東から）



SD06 (北東から)



SK05 完掘 (東から)



水田跡第1面 (南東から)



水田跡第2面全景 (東から)



遠景 (南から)



NR01 完掘 (西から)



NR01 遺物出土状況 (西から)



NR02 黒色土上面 (北から)



石器 (1)



出土遺物 (1)





遠景（南から）



トレンチ3（南から）



トレンチ6（西から）



トレンチ4（西から）



トレンチ8（西から）



遠景（西から）



発掘調査状況（南から）



3a区全景（東から）



中世遺構群検出状況（北から）



5区 弥生後期面検出状況（南から）



SM07・08（南から）



SB02 (南から)



SB04 (南から)



SB05 (南から)



SB05 (南から)



SB08 (南から)



SB09 (南から)



SB12 (南から)



SB17 (南から)



SB19 (南から)



SB21 (北から)



SB23 (北から)



SB24 (南から)



SB25 (南から)



SB25 (南から)



SB26 (北から)



SB29 (南から)



SB30 (北から)



SB31 (南から)



SB34 (南から)



SB35 (南から)



SB37 (南から)



SB38 (南から)



SB39 (南から)



SB39 ピット1 (南から)



SB46 (南から)



SB48 (北から)



SD13 (東から)



SD14 (北から)



SD17 (南から)



SH02 (東から)



SH03 (北から)



SK323 (南から)



SK421 (北から)



SM01 (南から)



SM02 (西から)



SM02 人面付土器出土状況



SM04 (東から)



SM05 (南から)



SM06 (南から)



SM07 (南から)



SM09 (南から)



SM10 (西から)



SM12 (南から)



SM13 (西から)



SM16・17 (北から)



SM18 (南から)



SM18 (東から)



SQ01 (北から)



繩文土器



弥生土器(1)

SB25



SB36



SB41



SB39



SB39



SB42



SM08





弥生土器（3）、古墳時代土器



SM02



人面付土器（表）



人面付土器（裏）



管玉（上）、ガラス小玉（下）

1 : SB22 6~9 : SM11 10・11 : SM2 2 : SM4 12~17 : SM18
3 : IV24 4・5 : IVB3

SB05



SB08



SB19



SB19



SB21



SB29



SB32



SB33



SK762



SB04

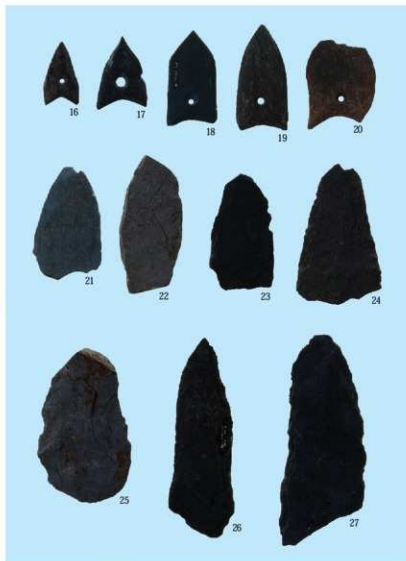


SB26



遺構外





石器 (1)





石器 (3)、石製品



遠景（北から）



遠景（北から）



2・3区 調査前風景（南から）



SB201 完掘（東から）



SB202・203 完掘（北東から）



SB203 完掘（東から）



SB204 完掘（北から）



SB205 完掘（北から）



SB206・209 掘り方完掘 (南から)



SB207 完掘 (北から)



SB208 完掘 (北から)



SD101 完掘 (南西から)



ST201 完掘 (北西から)



ST201 P3 遺物出土状況 (西から)



ST202 完掘 (南から)



SK103 遺物出土状況 (東から)



石器 (1)



金属製品





4区 調査前風景 (北から)



SD01 (南から)



SD01 断面 (東から)



SD02 完掘 (東南から)



1区 SK・SD03 全景 (北から)



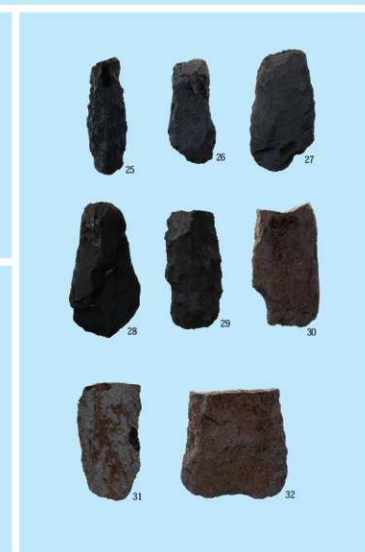
SD05 完掘 (西から)



SK34 石積み出土状況 (南から)



SK191 完掘 (北東から)



報告書抄録

ふりがな	きたはたいせきぐん にそくもちいせき きたうらいせきぐん にしひがしやまいせき ひがしやまいせき							
書名	北畑道跡群 仁東餅道跡 北裏道跡群 西東山道跡 東山道跡							
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 一佐久市6—							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	121							
著者名	平林 彰、岡村秀雄、綿田弘実、上田 真、費田 明							
編集機関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL. 026-293-5926							
発行年月日	2020年3月19日							
所収道跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	道跡番号					
北畑道跡群	長野県佐久市 桜井	20217	321	36° 14' 31"	138° 33' 03"	2003.04.25～2003.11.28 2007.04.12～2007.06.08	4,340 5,030	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
仁東餅道跡	長野県佐久市 伴野		325	36° 14' 27"	138° 33' 15"	2007.05.16～2007.07.13 (確認調査)	21,530	
北裏道跡群	長野県佐久市 伴野		318	36° 14' 15"	138° 33' 23"	2007.05.29～2007.09.21 (確認調査) 2009.04.15～2009.05.11 (確認調査) 2010.04.12～2010.12.27 2011.07.07～2011.08.03 2015.06.29～2015.07.22	9,840 300 8,245 1,900 35	
西東山道跡	長野県佐久市 伴野		319	36° 14' 05"	138° 33' 27"	2010.08.20～2010.12.16	7,040	
東山道跡	長野県佐久市 伴野		320	36° 13' 54"	138° 33' 28"	2008.10.06～2008.11.19 (確認調査) 2009.04.13～2009.10.02 (確認調査) 2012.10.22～2012.11.06 2013.04.15～2013.04.30	7,000 13,820 450 640	
所在道跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北畑道跡群	水田跡	弥生中期 古代 中世	古代水田跡、溝跡、自然流路跡、土坑		縄文前～後期土器、弥生中期土器・石器、古代土器、中世磁器		古代と推定する水田跡2面、および弥生中期遺物が集中する自然流路跡を検出。	
仁東餅道跡	遺物散布地		なし		中世以降陶磁器		昭和40年代のは場整備により削平される。	
北裏道跡群	集落跡 墓跡	縄文前期 弥生中・後期 古墳前期 古代 中近世	弥生中期～古墳前期竪穴建物跡22、方形周溝墓9、円形周溝墓1、礎床木棺墓3、木棺墓1 古代：竪穴建物跡13 中世以降：竪穴状遺構、掘立柱建物跡、墓跡1、井戸跡2		縄文早期～後期土器・石器、弥生中期～古墳前期土器・石器・玉類、古代土器・鉄製品、中近世土器・陶磁器		千曲川左岸における弥生後期中葉の拠点集落跡。右岸との土器の地域差が顕著。弥生中期後半から古墳前期まで、各種の木棺墓・周溝墓が変遷する。	
西東山道跡	集落跡	弥生後期	弥生中・後期：竪穴建物跡9、掘立柱建物跡3、焼土跡、土坑		縄文後期土器、石器、弥生後期土器・石器、古代土器、中世磁器		北裏道跡群に後続する、弥生後期中葉の山間地集落跡。	
東山道跡	生産域?	中世	溝跡、炭窯?、土坑		旧石器、縄文前・中期土器、石器、弥生中・後期土器、古代土器、中近世陶磁器、土製品		周辺に中世の製鉄遺構の存在が推定される。	

令和2（2020）年3月19日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 121

**北畑遺跡群 仁東餅遺跡
北裏遺跡群 西東山遺跡 東山遺跡**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 佐久市内6 -

発行者 国土交通省 関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 第一企画株式会社
〒380-0803 長野県長野市三輪一丁目16-17
Tel 026-256-6360 Fax 026-256-6385